

閻が幼弱を利とせしを戒めんことを」と。冀從はず、太后と與に策を禁中に定め、丙辰、冀、節を持し、王の青蓋車を以て、纒を迎へて南宮に入れ、丁巳、封じて建平侯と爲し、其の日、皇帝の位に即く。年八歳。蒜罷めて國に歸る。

將に山陵をトせんとするや、李固曰はく、『今、處處に寇賊あり、軍興り費廣く、新に憲陵を創め、賦發、一に非ず。帝は尙ほ幼小なり。陵を憲陵の塋内に起し。』康陵の制度に依る可し」と。太后、之に従ふ。己未、孝冲皇帝を懷陵に葬る。

太后、政を宰輔に委ね、李固の言ふ所は、太后多く之に従ひ、宦官の惡を爲す者をは、一に皆斥遣す。天下、咸、治平を望む。而るに梁冀深く之を忌疾す。初め順帝の時、除する所の官、多くは次を以てせず。固が事に在るに及びて、奏して百餘人を免す。此等、既に怨み、又、冀の旨を希望し、遂に共に飛章を作り、固を誣奏して曰はく、『太尉李固は、公に因りて私を假し、正に依りて邪を行ひ、近戚を離間し、自ら支黨を隆にす。大行、殯に在り、路人、涕を掩ふに、固、獨り、胡粉して貌を飾り、頭を搔き姿を弄び、旋偃仰し、從容として、歩を治め、曾て慘怛傷悴の心無し。山陵未だ成らざるに、舊政に違矯し、善は則ち己を稱し、過は則ち君に歸し、近臣を斥逐し、侍送するを得ざらしむ。威を作し福を作す』

【一〇】康陵。殯帝の陵。亦、懷陵の塋内に在り。

【二〇】涕を掩ふ。面を掩うて泣く也。

【三〇】胡粉。おしろい。

【四〇】頭を搔く。簪を以て頭を搔く也。

【五〇】槃旋。めぐり、めぐる。盤旋と同じ。

【六〇】歩を治む。容儀を脩治して、行歩、規矩に中るを言ふ。

【七〇】頭を搔き姿を弄び。頭を搔き、髪を弄ぶ也。

こと、固の甚だしきは莫し。夫れ子の罪は、父を累はすよりも大なるは莫く、臣の惡は、君を毀るよりも深きは莫し。固の過覺は、事合に誅辟すべし」と。書・奏す。冀、以て太后に白し、其の書を下さしむ。太后聽かず。

廣陵の賊張嬰、復た衆數千人を聚めて反し、廣陵に據る。二月乙酉、天下に赦す。

西羌の叛亂、年を積み、費用八十餘億。諸將、多く牢粟を斷盜し、私に自ら潤入し、皆、珍寶を以て、左右に貨賂し、上下放縱にして、軍事を恤へず、士卒、其の死を得ざる者、白骨、野に相望む。左馮翊梁竝、恩信を以て、叛羌を招誘す。離滿・狐奴等、五萬餘戸、皆、竝に詣りて降る。隴右復た平ぐ。

【六〇】牢粟云云。牢粟は給與せらるる糧食扶持米のこと。斷は割くこと。諸將、粟米を減割竊盜するをいふ。

【七〇】離滿・狐奴。共に羌種の名。

【八〇】賞募。懸賞して募る也。

【九〇】錢邑。賜錢と封邑。功の高下を以て差を爲すなり。

【一〇〇】東城縣。九江郡に屬す。故城は今の安徽省淮泗道定遠縣の東南に在り。

太后、徐・揚の盜賊益熾なるを以て、博く將帥を求む。三公、『涿の令北海の滕撫、文武の才有り』と擧ぐ。詔して、撫を九江の都尉に拜し、中郎將趙序と與に、馮緄を助け、州郡の兵數萬人を合はせて、共に之を討たしむ。又、廣く賞募を開き、錢邑各、差有り。又、議して太尉李固を遣はす。未だ行くに及ばず。三月、撫等進みて衆賊を撃ち、大に之を破り、馬勉・范容・周生等、千五百級を斬る。徐鳳、餘衆を以て東城縣を燒く。

夏五月、下邳の人謝安、募に應じ、其の宗親を率ゐ、伏を設けて鳳を撃ち、之を斬る。安を封じて平郷侯と爲す。滕撫を中郎將に拜し、揚・徐二州の事を督せしむ。

丙辰、詔して曰はく、「孝殤皇帝は、位に即きて年を踰え、君臣の禮成る。孝安皇帝は、統業を承襲す。而るに前世、遂に 恭陵をして康陵の上にならしむ。先後相踰え、其の次序を失す。今、其れ之を正す」と。

六月、鮮卑、代郡に寇す。

秋、廬江の盜賊、尋陽を攻め、又、盱台を攻む。滕撫、司馬王章を遣はし、撃ちて之を破る。

九月庚戌、太傅趙岐、薨す。

滕撫、進みて張嬰を撃つ。冬十一月丙午、嬰を破る。斬獲千餘人。丁未、中郎將趙序、畏懦にして詐りて首級を増すに坐し、棄市せらる。

歴陽の賊華孟、自ら黒帝と稱し、攻めて九江の太守揚岑を殺す。滕撫進み撃ちて之を破り、孟等三千八百級を斬り、七百餘人を虜獲す。是に於て、東南悉く平ぎ、振旅して還る。撫を以て左馮翊と爲す。

永昌の太守劉君世、黄金を鑄て文蛇を爲り、以て大將軍冀に獻す。益州の刺史种嵩、糾發して逮捕

【一】 恭陵。安帝の陵。

【二】 尋陽。縣の名、廬江郡に屬す。故城は今の湖北省江漢道黄梅縣の境に在り。

【三】 盱台。縣の名、下邳國に屬す。故城は今の安徽省淮河道盱眙縣の東北に在り。

し、傳を馳せて上言す。冀、是に由りて嵩を恨む。會、巴郡の人服直、黨數百人を聚め、自ら天王と稱す。嵩、太守應承と與に、討ちて捕へんとす。克たず。吏民多く傷害を被る。冀、此に因りて之を陥れ、嵩・承を 傳逮す。李固・上疏して曰はく、「臣伏して聞く、討捕せんとして傷つくる所は、本、嵩・承の意に非ず。實に縣吏が法を懼れ罪を畏れ、迫逐深苦し。此を致すこと詳かならざるに由る。此、盜賊羣

がり起り、處處未だ絶えず。嵩・承、首として大姦を擧するを以てして、相隨つて罪を受けば、臣恐る、州縣の糾發の意を沮傷し、更に共に 飾匿

し、復た心を盡すもの莫からんことを」と。太后、奏を省し、乃ち嵩・承の罪を赦し、官を免するのみ。金蛇は司農に輸さる。冀、大司農杜喬より、之を借觀せんとす。喬、與ふるを肯せず。冀の少女死す。公卿をして喪に會せしむ。喬獨り往かず。冀是に由りて之を銜む。

【四】 傳逮。逮捕して京師に傳送する也。

【五】 此を云云。審かに賊勢を知る能はずして、民を驅りて敵に赴かしめ、以て死傷を致せるをいふ。

【六】 飾匿。偽辭を飾りて眞狀を隠匿する也。

【七】 大司農は諸の錢穀金帛を掌る。故に金蛇、司農に輸さるるなり。

卷の第五十三

漢紀四十五

孝質皇帝

本初元年、夏四月庚辰、郡國に令して、明經を擧げ、太學に詣らしめ、
を遣はして業を受けしめ、歲滿ちて課試し、官に拜すること差有り。又、
千石・六百石・四府の掾屬、〔三〕三署郎、〔四〕四姓の小侯の、先づ能く經に通ずる
者は、各、家法に隨はしめ、其の高第なる者は、名牒を上り、當に次
を以て賞進すべからしむ。是より遊學増盛にして、三萬餘生に至る。

五月庚寅、樂安王鴻を徙して勃海王と爲す。
海水溢れ、民居を漂没す。

六月丁巳、天下に赦す。
帝、少くして聰慧なり。嘗て朝會に因りて梁冀を目して曰はく、「此れ

漢孝質皇帝本初元年

大將軍より以下、皆、子

- 【一】 孝質皇帝。諱は續。章帝の玄孫勃海の孝王鴻の子。
- 【二】 本初元年。西紀一四六年なり。
- 【三】 三署郎。五官署郎及び左右署郎。光祿勳に屬す。
- 【四】 四姓。諸后の族。
- 【五】 家法。家學なり。
- 【六】 名牒。名を牒に書するなり。

跋扈將軍なり」と。冀聞き、深く之を惡む。閏月甲申、冀、左右をして毒を羹餅に置きて之を進めしむ。帝、苦煩すること盛なり。促して太尉李固を召さしむ。固入り、前みて帝に患を得るの由る所を問ふ。帝、尙ほ能く言ふ。曰はく、「羹餅を食へり。今、腹中悶ゆ。水を得ば尙ほ活く可からん」と。時に冀も亦側在り、曰はく、「恐らくは吐きて水を飲む可からざらん」と。語未だ絶えずして崩す。(年九) 固、尸に伏して號哭し、侍醫を推舉す。冀、其の事の泄れんことを慮り、大に之を惡む。將に嗣を立てるを議せんとするや、固、司徒胡廣・司空趙戒と與に、先づ冀に書を與へて曰はく、「天下、不幸にして、頻年の間に、國祚三たび絶ゆ。今、當に帝を立つべし。天下は重器なり。誠に知る、太后、心を垂れ、將軍、慮を勞し、詳かに其の人を擇び、務めて聖明を存することを。然れども愚情眷眷として、竊に獨り懷有り。遠く先世の廢立の舊儀を尋ね、近く國家の踐祚の前事を見るに、未だ嘗て公卿に詢訪し、廣く羣議を求め、上は天心に應じ下は衆望に合はしめずんばあらず。(二) 傳に曰はく、「天下を以て人に與ふるは易く、天下を爲めに人を得るは難し」と。昔、昌邑の立ち、昏亂日に滋すや、霍光、憂愧して憤を發し、之を悔いて骨を折る。博陸の忠勇・延年の奮發に非ざるよりは、大漢の祀、幾ど將に傾かんとせり。

- 【七】跋扈。彊梁といふが如きなり。
- 【八】吐。嘔く也。
- 【九】推舉。其の疾に侍すること無狀なるを効舉し、而して其の姦を推究する也。
- 【一〇】三たび絶ゆ。順帝崩じ、冲帝立ち、一年にして崩じ、質帝立ち、一年にして崩す。
- 【一一】傳云云。孟子滕文公篇の語。
- 【一二】昌邑云云。二十四卷昭帝元平元年に見ゆ。

至憂至重、熟慮せざる可けんや。(三) 悠悠たる萬事、唯だ此を大と爲す。國の興衰、此の一舉に在り」と。冀、書を得、乃ち三公・中二千石・列侯を召し、大に立つる所を議す。固・廣・戒及び大鴻臚杜喬、皆、以爲はく、「清河王蒜は、明德著れ聞え、又、屬最も尊親なり。宜しく立てて嗣と爲すべし」と。朝廷、心を歸せざるもの莫し。而るに中常侍曹騰、嘗て蒜に謁せしが、蒜、禮を爲さず。宦者、此に由りて之を惡む。初め、平原王翼、既に貶せられて河間に歸る。(二) 其の父、蠡吾縣を分ちて以て之を侯とせんと請ふ。順帝、之を許す。翼、卒し、子志嗣ぐ。梁太后、女弟を以て志に妻せんと欲し、徵して夏門亭に到らしむ。會、帝崩す。梁冀、志を立てんと欲す。衆論既に異なり、憤憤として意を得ず、而れども未だ以て相奪ふ有らず。曹騰等、之を開き、夜往きて冀に説きて曰はく、「將軍、累世、椒房の親有り、萬機を秉攝し、賓客縱横し、多く過差有り。清河王は嚴明なり。若し果して立たば、則ち將軍、禍を受けんこと久しからじ。蠡吾侯を立てるに如かず。富貴、長く保つ可きなり」と。冀、其の言を然りとす。明日、重ねて公卿を會す。冀、意氣凶凶として、言辭激切なり。胡廣・趙戒より以下、懾憚せざるもの莫し。皆曰はく、

- 【一】悠悠。衆多なる貌。
- 【二】蒜、質帝に於て見たるは、尊なり。同じく樂安王龍に出づるは、親なり。
- 【三】平原王云云。五十卷安帝建光元年に見ゆ。
- 【四】翼の父は河間の孝王開なり。
- 【五】蠡吾縣。時に河間國に屬す。故城は今の直隸省保定道博野縣に在り。
- 【六】未だ衆論を奪ふべき尤もらしき理由有らず。
- 【七】椒房の親。椒房は皇后の居る宮。恭懷皇后及び太后をいふ。椒房の親とは外戚の關係あるをいふ。
- 【八】凶凶。意氣惡暴なるをいふ。

「惟だ大將軍の令のままなり」と。獨り李固・杜喬、堅く本議を守る。冀、聲を厲まして曰はく、「會を罷めよ」と。固、猶ほ衆心の立つ可きを望み、復た書を以て冀に勸む。冀、愈々激怒す。丁亥、冀、太后に説き、先づ固を策免す。戊子、司徒胡廣を以て太尉と爲し、司空趙戒を司徒と爲し、大將軍冀と與に尙書の事を參録せしめ、太僕袁湯を司空と爲す。湯は安の孫なり。庚寅、大將軍冀をして節を持ち、王の青蓋車を以て、蠡吾侯志を迎へて南宮に入れしむ。其の日、皇帝の位に即く。時に年十五、太后、猶ほ朝政に臨む。

秋七月乙卯、孝質皇帝を 靜陵に葬る。

大將軍の掾朱穆、奏記して梁冀に勸戒して曰はく、「明年、丁亥の歳は、刑徳、乾位に合し、易經の 龍戰の會にして、陽道將に勝たんとし、陰道將に負けんとす。願はくは將軍、心を公朝に専らにし、私欲を割除し、廣く賢能を求め、佞惡を斥遠し、皇帝の爲めに師傅を置き、小心忠篤敦禮の士を得、將軍、之と俱に入り、參勸して講授し、賢を師とし、古に法れよ。此れ猶ほ 南山に倚り平原に坐するごときなり。誰か能く之を傾けん。議郎・大夫の位は、本、以て儒術高行の士を 式序す。今、多く其

【二】 猶ほ云云。衆心の清河王に屬するを以て、猶ほ立つ可きを望む也。

【三】 靜陵。雒陽の東南三十里に在り。

【三】 刑徳云云。曆法に、太歳、丁壬に在るときは、歳徳、北宮に在り。太歳、亥卯に在るときは、歳刑、亦、北宮に在り。故に刑徳、乾位に合すと曰ふ。

【四】 龍戰。易の坤卦の上六に曰はく、龍、野に戰ふ、其の血玄黄なりと。陽に疑はるるほど勢盛なる陰、敗れて血を流す也。

【五】 南山云云。安くして煩無きに喩ふ。

【六】 式序。式は用ふる也。用ひて敘任する也。

の人には非ず。九卿の中にも、亦、其の任に乖く者有り。惟だ將軍、これを察せよ」と。又、种嵩・樂巴等を薦む。冀、用ふる能はず。穆は 暉の孫なり。

九月戊戌、河間の孝王を追尊して孝穆皇と爲し、夫人趙氏を孝穆后と曰ひ、廟を清廟と曰ひ、陵を樂成陵と曰ふ。蠡吾の先侯を孝崇皇と曰ひ、廟を烈廟と曰ひ、陵を博陵と曰ふ。皆、令丞を置き、司徒をして節を持ち、策書璽綬を奉じ、祠るに太牢を以てせしむ。

冬十月甲午、帝の母匡氏を尊びて博園貴人と爲す。

膝撫、性方正にして、權勢に交はらず、宦官に惡まる。賊を討つ功を論ずれば、當に封せらるべし。太尉胡廣、旨を承け、奏して之を黜く。家に卒す。

孝桓皇帝の上

建和元年、春正月辛亥朔、日、之を食する有り。

戊午、天下に赦す。

三月、龍、譙に見はる。

夏四月庚寅、京師、地震ふ。

漢孝桓皇帝建和元年

【一】 孝桓皇帝。諱は志、蠡吾侯翠の子なり。

【二】 建和元年。西紀一四七年なり。

【三】 譙。縣の名、沛國に屬す、故城は今の安徽省淮泗道毫縣に在り。

阜陵王代の兄勃道亭侯便を立てて阜陵王と爲す。

六月、太尉胡廣罷む。光祿勳杜喬を太尉と爲す。李固の廢せられしより、朝野、氣を喪ひ、羣臣、足を側て立つ。唯だ喬のみ色を正しうし、回撓する所無し。是に由りて、朝野皆倚望す。

秋七月、渤海の孝王鴻薨す。子無し。太后、帝の弟蠡吾侯悝を立てて渤海王と爲し、以て鴻の祀を奉せしむ。

詔して、定策の功を以て、梁冀に萬三千戸を益し封じ、冀の弟不疑を封じて潁陽侯と爲し、蒙を西平侯と爲し、冀の子胤を襄邑侯と爲し、胡廣を安樂侯と爲し、趙戒を廚亭侯と爲し、袁湯を安國侯と爲し、又、中常侍劉廣等を封じて、皆、列侯と爲す。杜喬諫めて曰はく、『古の明君は、皆、賢を用ふると賞罰とを以て務と爲す。國を失ふの主も、其の朝に、豈に貞幹の臣・典誥の篇無からんや。賢を得れども其の謀を用ひず。書を韜めども其の教を施さず。善を聞けども其の義を信せず。讒を聴けども其の理を審かにせざるを患ふるなり。陛下、藩臣より位に即き、天人、心を屬す。忠賢の禮を急にせずして、左右の封を先にし、梁氏の一門、宦者の微孽、竝に無功の紱を帯び、勞臣の土を裂く。其の乖濫たる、胡ぞ勝げて言ふ可けんや。夫れ功有れども賞せざれば、善を爲すもの其の望を失ひ、姦回を詰

- 【四】阜陵王延、國を傳ふるこ
と五世にして代に至る。代薨
じて子無く、國絶ゆ。今、便
を以て封を紹がしむ。
- 【五】劉廣・曹騰及び州輔等七
人、皆、亭侯に封ぜらる。
- 【六】貞幹、楨幹なり。垣牆を
築くに用ふる兩端の柱。國を
立つるには必ず賢才を須ふる
に喩ふ。
- 【七】典誥の篇。封爵の典策詔
語の故事を輯めたる書篇。

めざれば、惡を爲すもの其の凶を肆にす。故に資斧を陳ぬれども人畏るる靡く、爵位を班てども物勸むる無し。苟くも斯の道を遂げば、豈に伊れ政を傷ひ亂を爲すのみならんや。身を喪ひ國を亡ぼさん。慎まざる可けんや』と。書奏す。省せられず。

八月乙未、皇后梁氏を立つ。梁冀、厚禮を以て之を迎へんことを欲す。杜喬、舊典を據執して、聽かず。冀、喬に屬し、汜宮を擧げて尙書と爲さしむ。喬、宮が臧罪を爲せるを以て、用ひず。是に由りて、日に冀に忤ふ。九月丁卯、京師、地震ふ。喬、災異を以て策免せらる。冬十月、司徒趙戒を以て太尉と爲し、司空袁湯を司徒と爲し、前の太尉胡廣を司空と爲す。

- 【八】資斧。斧なり、刑器なり。
- 【九】桂陽。縣の名、今の湖南
省衡陽道桂陽縣の地。

宦者唐衡・左悺、共に杜喬を帝に譖して曰はく、『陛下、前に當に位に即くべきとき、喬、李固と與に抗議して以爲へらく、漢の宗祀を奉ずるに堪へざらんと。』帝も亦之を怨む。十一月、清河の劉文、南郡の妖賊劉鮪と交通し、妄言す、『清河王、當に天下を統ぶべし』と。共に蒜を立てんと欲す。事覺はる。文等遂に清河の相謝嵩を劫して曰はく、『當に王を立てて天子と爲すべし。嵩を以て公と爲さん』と。嵩、之を罵る。文、嵩を刺殺す。是に於て、文、鮪を捕へて之を誅す。有司、蒜を劾奏す。坐して爵を貶して尉氏侯と爲し、桂陽に徙さる。自殺す。梁冀、因つて李固・杜喬を誣ひて云はく、『文・鮪と交通せり。請ふ逮して罪を按せん』と。太后索より喬の忠を知り、許さず。冀遂に固を收へて獄に下す。門生渤海

海の王調、械を貫き、上書し、固の枉を證す。河内の趙承等數十人、亦、鉄鎖を要にし、闕に詣りて、通訴す。太后詔して之を赦す。獄を出づるに及びて、京師の市里、皆、萬歳と稱す。冀、之を聞き、大に驚き、固の名徳の終に己の害を爲さんことを畏れ、乃ち更に前事を據奏す。大將軍の長史吳祐、固の枉を傷み、冀と之を争ふ。冀怒り、從事中郎馬融、冀の爲めに章表を作るを主る。融時に坐に在り。祐、融に謂つて曰はく、「李公の罪は、卿の手に成れり。李公若し誅せられなば、卿、何の面目ありて、天下の人を視んや」と。冀怒り、起ちて室に入る。祐も亦徑に去る。固遂に獄中に死す。命に臨みて、胡廣・趙戒に書を與へて曰はく、「固、國の厚恩を受く。是を以て、其の股肱を竭し、死亡を顧みず。志、王室を扶持し、隆を文。宣に比せんと欲せり。何ぞ圖らんや、一朝、梁氏迷謬し、公等曲從し、吉を以て凶と爲し、成事を敗と爲さんとは。漢家の衰微、此より始まらん。公等、主の厚祿を受け、頼すれども扶けず、大事を傾覆す。後の良史豈に私する所らんや。固の身は已みぬ。義に於ては得たり。夫れ復た何をか言はん」と。廣・戒、書を得て悲慙し、皆、長歎流涕するのみ。冀、人をして杜喬を脅さしめて曰はく、「早く宜しきに從へ。妻子は全きを得可し」と。喬、肯せず。明日、冀、騎を遣はして其の門に至らしむるに、哭する者

- 【一〇】 械。手かせ足かせ。
- 【一一】 枉。冤罪なり。
- 【一二】 鉄鎖。鉄は斧なり。鎖は首斬り臺なり。
- 【一三】 要。腰に通す。
- 【一四】 通訴。與に訴ふる也。
- 【一五】 前事。文節の事。
- 【一六】 文宣。文帝、宣帝。
- 【一七】 宜しきに從へ。自殺せよとの意。

を聞かず。遂に太后に白し、之を收繫す。亦、獄中に死す。冀、固・喬の尸を城北の四衢に暴し、
 『敢て臨する者有らば、其に罪を加へん』と令す。固の弟子汝南の郭亮尙ほ未だ冠せず、左に
 章・鉞を提げ、右に鉄鎖を乗り、闕に詣りて上書し、固の尸を收めんと乞ふ。報せられず。南陽の董班と俱に往きて臨哭し、喪を守りて去らず。
 門の亭長、之を呵して曰はく、『卿が曹は何等の腐生ぞ、公に詔書を犯し、有司を干し試みんと欲するか』と。亮曰はく、『義の動かす所は、豈に性命を知らんや。何爲れぞ死を以て相懼すや』と。太后、之を聞き、皆、赦して誅せず。杜喬の故の掾陳留の楊匡、號泣して星行し、雒陽に到り、故の赤幘を著け、託して夏門の亭吏と爲り、尸喪を守護し、十二日を積む。都官從事、之を執へ以て聞す。太后、之を赦す。匡因つて闕に詣りて上書し、并せて『李杜二公の骸骨、歸葬するを得しめよ』と乞ふ。太后、之を許す。匡、喬の喪を送りて家に還り、葬り訖りて服を行ひ、遂に郭亮・董班と、皆、隱匿し、終身仕へず。梁冀、吳祐を出して河間の相と爲す。祐自ら免じて歸り、家に卒す。冀、劉鮪の亂を以て、朱穆の言を思ひ、是に於て、種高を請うて從事中郎と爲し、欒巴を薦めて議郎と爲し、穆を高第に擧げ、侍御史と爲す。

- 【一八】 四衢。四達の路。
- 【一九】 臨。哭する也。
- 【二〇】 章鉞云云。章は上る所の文章。鉞は斧なり。
- 【二一】 夏門。都城の北にあり。
- 【二二】 腐生。腐れ儒者。
- 【二三】 星行。星を戴きて行き、夜も息ふに違あらざる也。
- 【二四】 赤幘。亭吏は赤幘を著くるなり。
- 【二五】 都官從事。司隸校尉の屬官。
- 【二六】 家。喬の家は、河内に在り。
- 【二七】 穆を大將軍府に於て高第と爲すなり。

是の歲、南單于兜樓儲・死す。伊陵戸逐就單于車兒立つ。

二年、春正月甲子、帝、元服を加ふ。庚午、天下に赦す。

三月戊辰、帝、皇太后に從ひて、大將軍冀の府に幸す。

白馬の羌、廣漢屬國に寇し、長吏を殺す。益州の刺史、板楯蠻を率ゐ、討ちて之を破る。

夏四月丙子、帝の弟願を封じて平原王と爲し、孝崇皇の祀を奉せしめ、

孝崇皇夫人を尊びて、孝崇園貴人と爲す。

五月癸丑、北宮の掖庭の中、德陽殿及び左掖門、火あり。車駕移りて南宮に幸す。

六月、清河を改めて甘陵と爲す。安平の孝王得の子經侯理を立てて甘陵王と爲し、孝德皇の祀を奉せしむ。

秋七月、京師、大水あり。

三年、夏四月丁卯晦、日、之を食する有り。

秋八月乙丑、星有り。天市に幸す。

京師、大水あり。
九月己卯、地震ふ。庚寅、地又震ふ。
郡國五、山崩る。

冬十月、太尉趙戒・免せらる。司徒袁湯を以て太尉と爲し、大司農河内の張歆を司徒と爲す。

是の歲、前の朗陵侯の相荀淑・卒す。淑、少くして博く學び、高行有り。當世の名賢・李固・李膺、皆、之を師宗とす。朗陵に在るや、事に泄みて明かに治まる。稱して神君と爲す。子八人有り、儉・緄・靖・熹・汪・爽・肅・專、竝に名稱有り。時の人、之を八龍と謂ふ。居る所の里は、舊、西豪と名づく。潁陰の令渤海の苑康、以爲へらく、昔、高陽氏、才子八人有り(今ノ荀氏モ亦八子アリ)と。更めて其の里を名づけて高陽里と曰ふ。膺は性、簡亢にして、交接する所無し。唯だ淑を以て師と爲し、同郡の陳寔を以て友と爲す。荀爽、嘗て就きて膺に謁し、因つて其の御と爲る。既に還り、喜びて曰はく、『今日、乃ち李君に御たるを得たり』と。其の慕るること此の如し。陳寔は、單微より出で、郡の西門の亭長と爲る。同郡の鍾皓は、篤行を以て稱せられ、前後九たび公府に辟せられ、年輩遠く寔の前に在り。引きて與に友と爲る。皓、郡の功曹たり。司徒府に辟せられ、辭するに臨みて、太守問ふ、『誰か卿に代る可き者ぞ。』皓曰はく、『明府必ず其の人を得んと欲せば、西門の

漢孝桓皇帝建和二年——三年

【一】 安帝、蜀郡北部都尉を以て廣漢屬國都尉と爲す。故城は今の四川省西川道新津縣に在り。

【二】 板楯。西南蠻の號。

【三】 孝德皇の陵を以て國名と爲す。

【四】 天市。星座の名。

【一】 左傳に曰はく、昔、高陽氏、才子八人有り、蒼舒、陸棼、橋斂、大臨、扈降、庭堅、仲容、叔達と。

【二】 簡亢、簡約亢高なり。

【三】 單微、單獨微賤なり。

亭長陳寔、可なり」と。寔、之を聞きて曰はく、「鍾君は人を察せざるに似たり。知らず何ぞ獨り我を識るや」と。太守遂に寔を以て功曹と爲す。時に中常侍侯覽、太守高倫に託して吏を用ひしむ。倫、教署して文學掾と爲す。寔、其の人に非ざるを知り、檄を懷にして見えんことを請ひ、言つて曰はく、「此の人は宜しく用ふべからず。而れども侯常侍には違ふ可からず。寔、乞ふ外より署せん。以て明德を塵すに足らじ」と。倫、之に従ふ。是に於て、郷論、其の擧に非ざるを怪しむ。寔、終に言ふ所無し。倫、後、徵せられて尙書と爲る。郡中の士大夫、送りて綸氏に至る。倫、衆人に謂つて曰はく、「吾、前に侯常侍の爲めに吏を用ふ。陳君、密に教を持して還し、而して外に於て白して署す。比聞、議者、此を以て之を少とすと。此の咎は、故人が彊禦を畏憚せるに由る。陳君は、善は則ち君を稱し過は則ち己を稱する者と謂ふ可きなり」と。寔固に自ら愆を引く。聞く者方に歎息す。是に由りて、天下、其の徳に服す。後、太丘の長と爲る。徳を修めて清静なり。百姓以て安し。鄰縣の民歸附する者は、寔輒ち訓導し、譬解し、發遣し、各本に還らしむ。司官、部を行る。吏、民に訟ふる者有らんことを慮り、白して、之を禁せんと欲す。寔曰はく、「訟ふるは以て直を求むるなり。之を禁せば、理將た何ぞ申びん。其れ拘する所有る勿かれ」と。司官聞きて歎息して曰はく、「陳君の言ふ所是の若し。豈に人に冤有らんや」と。亦、竟に訟ふる者無し。沛の相の賦斂すること法に違ふを以て、印綬を解きて去る。吏民、之を追思す。鍾皓は素より荀淑と名を齊しくす。李膺常に歎じて曰はく、「荀君の清識は尙へ難し。鍾君の至徳は師とす可し」と。皓の兄の子瑾の母は、膺の姑なり。瑾、學を好み古を慕ひ、退讓の風有り。膺と年を同じうし、俱に聲名有り。膺の祖太尉脩常に言はく、「瑾は我が家の性に似たり。(一) 邦、道有れば、廢てられず、邦、道無ければ、刑戮に免る」と。復た膺の妹を以て之に妻す。膺、瑾に謂つて曰はく、「孟子以爲はく、「人、是非の心無きは、人に非ざるなり」と。弟、是に於て何ぞ太だ。皁白無きや」と。瑾嘗て膺の言を以て皓に白す。皓曰はく、「元禮は、祖父、位に在り、諸宗竝に盛なり。故に然るを得るか。昔、(二) 國

【五】 教署。郡守の出す所の命を教と曰ふ。教を以て官に任する也。百官志注に、郡に文學守助掾六十人有り」と。
 【六】 檄を懷にするは、事の漏洩せんことを懼るる也。
 【七】 寔云云。功曹は選署を主る。寔、乞うて、外より自らこれを署用し、倫の意に出でざる者の如くせんとする也。又、倫をして請託を受けたり

との罪に陥らざらしめんとする也。
 【八】 擧に非ず。擧用する所其の人を得ざる也。
 【九】 綸氏。縣の名、今の河南省河洛道登封縣の地。
 【一〇】 故人。倫自ら謂ふ也。漢人、門生故吏の前に於て、自ら故人と稱す。
 【一一】 太丘。縣の名、沛國に屬す。故城は今の河南省開封道永城縣の西北に在り。

漢孝桓皇帝建和三年

【一】 司官。主司の官。
 【二】 拘。拘束する也。
 【三】 瑾は李氏の出にして、退讓す、故に脩、然云ふ。
 【四】 邦云云。論語公冶長篇に見ゆ。孔子の南容を稱する言。君子上にありて國よく治れる時は、任用せらるべく、小人はびこりて亂るる時は、其の才能を藏して世に忤ふことなれば、刑戮にかかるが如きことなしとの意。
 【五】 皁白は黒白。皁白無しとは、分別すること無きなり。
 【六】 元禮。李膺の字。
 【七】 祖父云云。膺の祖脩は太尉たり、父益は趙の相たり。
 【八】 國武子云云。齊の國佐、單襄公に見え、其の語盡せり。單子曰はく、淫亂の國に立ちて、言を盡すを好み、以て人の過を招くるは、怨の本なりと。其の後、齊、國武子を殺す。國語に見ゆ。

武帝、好みて人の過を招げ、以て怨惡を致せり。今、豈に其の時ならんか。心、身を保ち家を全くせんと欲すれば、爾の道を貴しと爲す」と。

〔一〕 和平元年、春正月甲子、天下に赦す。改元す。

〔二〕 順烈皇后。梁太后の諡。

〔三〕 襄城、陽翟。二縣は皆潁川郡に屬す。

〔四〕 漢の制、公主の儀服は、公侯に同じく、紫紱、長公主の儀服は、諸王に同じく、赤紱四采、赤黃纁紺、長さ二丈一尺、三百首。

〔五〕 妖態。後漢書梁冀傳に云はく、壽善く愁眉・啼粧・墮馬髻・折腰步・顰齒笑を作すと。

〔六〕 太倉令。大司農の屬官。秩六百石、郡國の傳漕する穀を受くるを主る。

甲寅、太后梁氏崩す。

三月、車駕移りて北宮に幸す。

甲午、順烈皇后を葬る。

大將軍冀に萬戸を増し封す。前を并せて、合せて三萬戸。冀の妻孫壽を封じて、襄城君と爲し、陽翟の租を兼ね食まほむ。歲入五千萬。赤紱を加賜し、長公主に比す。壽、善く妖態を爲し、以て冀を盡惑す。冀甚だ之を寵憚す。冀、監奴秦宮を愛し、官、太倉令に至り、壽の所に出入するを得、威權大に震ふ。刺史二千石、皆、之に謁辭す。冀、壽と、街を對して宅を爲り、土木を殫極し、互に相誇競す。金玉珍怪、藏室に充積す。又、廣く園圃を開き、土を採り山を築き、十里に九阪あり、深林絶澗、自然なるが若き有り、奇禽馴獸、其の間に飛走す。冀、壽共に輦車に乗り、第内を遊觀し、多く倡伎を從へ、酣謳して路を竟へ、或は日を連ね夜を繼ぎ、以て嬉態を騁す。客、門に到れども通ずるを得ず、皆、門者に請謝す。門者、千金を累ぬ。又、多く林苑を拓き、近縣に周遍す。免苑を河南の城西に起し、經互數十里。檄を所在に移し、生兔を調發し、其の毛を刻して以て識と爲す。人、犯す者有れば、罪、死刑に至る。嘗て西域の賈胡有り、禁忌を知らず、誤りて一兔を殺す。轉た相告言し、坐して死する者十餘人。又、別第を城西に起し、以て姦亡を納る。或は良人を取り、悉く奴婢と爲すこと、數千口に至る。名づけて自賣人と曰ふ。冀、壽の言を用ひ、多く諸梁の位に在る者を斥奪し、外には以て謙讓を示し、而して實は孫氏を崇くす。孫氏の宗親、名を冒して侍中・卿校・郡守・長吏と爲る者十餘人あり。皆、貪饕凶淫にして、各私私客をして屬縣の富人を籍せしめ、被らすに他の罪を以てし、獄を閉ぢて掠拷し、錢を出して自ら贖はしむ。賫物少き者は、死徒に至る。扶風の人、士孫奮、富に居りて性吝なり。冀、馬乘を以て之に遺り、從つて錢五千萬を貸らんとす。奮、三千萬を以て之に與ふ。冀大に怒り、乃ち郡縣に告げ、奮の母を認め、其の守藏の婢と爲し、『白珠十斛。紫金千斤を盗みて以て叛けり』と云ひ、遂に收へて奮兄弟を考し、獄中に死せしめ、悉く其の貲財億七千餘萬を沒す。冀、又、客を遣はし、四方に周流し、

- 〔一〕 和平元年。西紀一五〇年なり。
- 〔二〕 順烈皇后。梁太后の諡。
- 〔三〕 襄城、陽翟。二縣は皆潁川郡に屬す。
- 〔四〕 漢の制、公主の儀服は、公侯に同じく、紫紱、長公主の儀服は、諸王に同じく、赤紱四采、赤黃纁紺、長さ二丈一尺、三百首。
- 〔五〕 妖態。後漢書梁冀傳に云はく、壽善く愁眉・啼粧・墮馬髻・折腰步・顰齒笑を作すと。
- 〔六〕 太倉令。大司農の屬官。秩六百石、郡國の傳漕する穀を受くるを主る。

遠く塞外に至り、廣く異物を求めしむ。而して使人、復た裁に乗じて横暴し、婦女を妻略し、吏卒を毆撃す。所在怨毒す。侍御史朱穆、自ら冀の故の吏なるを以て、奏記して諫めて曰はく、『明將軍、地は申伯の尊有り、位は羣公の首たり。一日、善を行へば、天下、仁に歸し、終朝、惡を爲せば、四海傾覆す。頃者、官民俱に置しく、加以水蟲、害を爲し、京師の諸官、費用増多し、詔書發調すること、或は十倍に至る。各言はく、『官に見財無し。皆當に民より出すべし』と。撈掠して割剝し、彊ひて充足せしむ。公賦既に重く、私斂又深し。牧守長吏、多く德選に非ず、貪聚すること厭く無く、民を遇すること虜の如く、(民)或は命を箠楚の下に絶ち、或は自ら迫切の求に賊す。又、百姓を掠奪するに、皆之を尊府に託し、遂に將軍をして怨を天下に結ばしむ。吏民酸毒し、道路歎嗟す。昔、永和の末、綱紀少しく弛み、頗る人望を失ふこと、四五歳のみ。而るに財空しく戸散じ、下、離心有り。(三)馬勉の徒、敵に乗じて起り、荆、揚の間、幾ど大患を成せり。幸に順烈皇后の、初政清靜にして、内外、心を同じくするに頼りて、僅に乃ち討定せり。今、百姓戚戚として、永和よりも困しむ。内は仁愛の心の容忍するを得可きに非ず、外は守國の計の宜しく久安なるべき所に非ざるなり。夫れ將相大臣は、體を元首に均しくし、輿を共にして馳せ、舟を

- 【四】妻略。他人の妻を略奪して己の妻の如くする也。
- 【五】怨毒。甚だしく怨む也。
- 【六】地とは門地の意。申伯は中國の伯、周の宣王の元舅。
- 【七】水蟲。水災及び蝗蟲。
- 【八】賊。殺す也。
- 【九】尊府。大將軍府をいふ。
- 【一〇】馬勉云云。前卷に見ゆ。

同じくして濟る。輿傾き舟覆れば、患實に之を共にす。豈に以て明を去りて昧に即き、危きを履みて自ら安しとし、主孤に時困しめるに、而も之を郵ふる莫かる可けんや。宜しく時に宰守の其の人に非ざる者を易へ、第宅園池の費を減省し、郡國の諸の奉送する所を拒絶し、内は以て自ら明かにし、外は人の惑を解き、姦を挾むの吏をして依託する所無く、司察の臣をして耳目を盡すを得しむべし。憲度既に張り、遠邇清壹ならば、則ち將軍、身尊く事顯れ、德耀窮り無からん』と。冀納れず。冀、朝を専らにして縦横なりと雖も、而も猶ほ左右の宦官に交結し、其の子弟賓客を任じて、州郡の要職と爲し、以て自ら恩寵を固くせんと欲す。穆、又、奏記して極諫す。冀、終に悟らず。報書して云はく、『此の如くなれども、僕も亦一可無からんや』と。然れども素より穆を重んじ、亦、甚だ罪せざるなり。冀、書を遣はし、樂安の太守陳蕃に詣り、請託する所有らしむ。通するを得ず。使者、詐りて他の客と稱し、蕃に謁するを求む。蕃、怒りて之を笞殺す。坐して脩武の令に左轉せらる。時に皇子、疾有り。郡縣に下して珍藥を市はしむ。而して冀、客を遣はし、書を齎して京兆に詣り、并に牛黄を貨らしむ。京兆の尹南陽の延篤、書を發き客を收へて曰はく、『大將軍は、椒房の外家にして、皇子、疾有れば、必ず應に醫方を陳進すべし。豈に當に客をして千里に利を求めしむべけんや』と。遂に之を殺す。冀慙ぢて、

- 【一】昧。暗きなり。
- 【二】脩武。縣の名、河内郡に屬す。今の河南省河北道獲嘉縣。
- 【三】左轉。左遷なり。
- 【四】牛黄。藥の名、牛の體中より取るといふ。

言ふを得ず。有司、旨を承けて、其の事を求む。篤、病を以て免す。

夏五月庚辰、博園の医貴人を尊びて孝崇后と曰ひ、宮を永樂と曰ひ、太僕・少府以下を置くこと、皆、長樂宮の故事の如くし、鉅鹿の九縣を分ちて、後の湯沐の邑と爲す。

秋七月、梓潼、山崩る。

○元嘉元年、春正月朔、羣臣朝會す。大將軍冀、劍を帯びて省に入る。

尚書蜀郡の張陵、呵叱して出でしめ、虎賁・羽林に救して劍を奪はしむ。

冀跪きて謝す。陵、應へず、即ち冀を劾奏し、廷尉をして罪を論せしめんと請ふ。詔、有り、一歳の俸を以て贖はしむ。百僚肅然たり。河南の尹不

疑、嘗て陵を孝廉に擧ぐ。乃ち陵に謂つて曰はく、「昔、君を擧げたるは、

適、自ら罰する所以なり」と。陵曰はく、「明府、陵の不肖を以てせず、誤りて擢序せらる。今、公

憲を申べ、以て私恩に報ゆ」と。不疑、愧づる色有り。

癸酉、天下に赦す。改元す。

梁不疑、經書を好み、喜みて士を待つ。梁冀、之を疾み、不疑を轉じて光祿勳と爲し、其の子胤を

以て河南の尹と爲す。胤、年十六、容貌甚だ陋にして、冠帯に勝へず。道路見る者、嗤笑せざるは莫

し。不疑、自ら兄弟・陳有るを恥ぢ、遂に位を讓りて第に歸り、弟・蒙と、

門を閉ちて自ら守る。冀、賓客と交通せしむるを欲せず、陰に人をして服

を變じて門に至り、往來する者を記せしむ。南郡の太守馬融・江夏の太守

田明、初めて除せらるるや、過りて不疑に謁す。冀、有司に諷し、「融、郡

に在りて貪濁なり」と奏せしめ、及び他事を以て明を陷る。皆、髡笞して

朔方に徙さる。融は自ら刺せども、殊せず、明は遂に路に死す。

夏四月己丑、上、微行して、河南の尹梁胤の府舎に幸す。是の日、大風、

樹を抜き、晝昏し。尚書楊秉・上疏して曰はく、「臣聞く、天は言語せず、

災異を以て譴告すと。王者は至尊にして、出入、常有り、警蹕して行き、

靜室して止まり、郊廟の事に非ざるよりは、則ち、鑾旗、駕せず。故に

諸侯、諸臣の家に入るすら、春秋には尚ほ其の誠を列す。況んや先王の

法服を以てして、私に出でて、槃游し、尊卑を降亂し、等威、序無く、侍

衛、空宮を守り、璽紱をば女妾に委ぬるに於てをや。設し非常の變、任

章の謀有らば、上は先帝に負き、下は悔ゆとも及ぶ靡からん」と。帝、

納れず。秉は震の子なり。

漢孝桓皇帝元嘉元年

- 【三】 梓潼。縣の名、廣漢郡に屬す。今の四川省西川道梓潼縣の地。
- 【一】 元嘉元年。西紀一五一年なり。
- 【二】 省。禁中なり。

- 【三】 殊せず。死せざるなり。
- 【四】 靜室。先づ宮を清めしむる也。
- 【五】 鑾旗云云。行幸せざるをいふ。行幸の先驅には雲罕・皮軒・鑾旗車あり。
- 【六】 春秋云云。左傳に、陳の靈公、夏徵舒の家に往き、徵舒に弑せられ、齊の莊公、崔杼の家に往き、亦、杼に弑せられしことを載す。
- 【七】 槃游。たのしみ、あそぶ。
- 【八】 等威。威儀の等差。
- 【九】 任章云云。宣帝の時、任宣、謀反に坐して誅せらるるや、宣の子章、亡げて涓城の界中に在り、夜、玄服して廟に入り、廊間に居り、戟を執りて廟門に立ち、上の至るを待ち、弑逆を爲さんと欲す。發覺して誅に伏せり。

京師、早す。(一〇)任城・梁國饑、民相食む。

司徒張歆罷む。光祿勳吳雄を以て司徒と爲す。

北匈奴の呼衍王、伊吾に寇し、伊吾の司馬毛愷を敗り、伊吾の屯城を攻む。敦煌の太守馬達に詔して、兵を將ゐて之を救はしむ。(達)蒲類海に至る。呼衍王引き去る。

秋七月、武陵の蠻・反す。

冬十月、司空胡廣・致仕す。

十一月辛巳、京師、地震ふ。百官に詔して、獨行の士を擧げしむ。涿郡、崔寔を擧ぐ。(寔)公車に詣り、病と稱し、對策せず、退きて世事を論じ、名づけて政論と曰ふ。其の辭に曰はく、『凡そ天下の治まらざる所以は、常に人主に由る。承平日久しく、俗漸く敝れて而も悟らず、政寢く衰へて而も改めず、亂に習ひ危きを安しとし、(三)怏として自ら觀ず、或は著欲に荒耽し、萬機を恤へず、或は(四)耳、箴誨に蔽ひ、(四)偽に厭き眞を忽せにし、或は(五)岐路に猶豫し、適きて從ふ所莫く、或は信せらるるの佐は、(六)囊を括りて祿を守り、或は疎遠の臣は、言へども賤しきを以て廢せらるる。是を以て、王綱、

【一〇】任城。今の山東省濟寧道濟寧縣の地。

【一一】蒲類海。新疆省の巴爾庫勒諾爾なり。

【一二】怏。忽ち忘るる貌。羣書治要には逸に作る。

【一三】耳云云。箴誨を聞き入れざるをいふ。

【一四】偽云云。姦偽に厭厭し、至眞を輕忽にす。

【一五】岐路云云。岐路はわかれ路。人主、人の邪正・事の是非に明かならず、適從する所を知らざるをいふ。

【一六】囊云云。囊の口をくくるが如く、沈黙して言はず、祿を失はざらんと心掛くる也。

上に縱弛し、智士、下に(七)鬱伊す。悲しいかな。漢興りてより以來、二百五十餘歳、政令(八)垢翫せられ、上下怠懈し、百姓囂然として、咸復た中興の救を思ふ。且つ時を濟ひ世を拯ふの術は、決壊を(九)補葺し、邪傾を枝拄し、形に隨つて裁割し、斯の世を安寧の域に措かんことを要するに在るのみ。故に、聖人は(一〇)權を執り、時に遭うて制を定む。(一一)步驟の差、各(一二)云に設くる有り、人に彊ふるに能くせざる(事)を以てし。(一三)急切に背きて聞く所を慕はざるなり。蓋し孔子、葉公に對ふるに、遠きを來すを以てし、(魯)哀公には人に臨むを以てし、(齊)景公には禮を節するを以てす。其の同じからざるに非ず、急にする所、務を異にするなり。俗人は、文に拘り、古を牽き、權制に達せず、聞く所を奇偉とし、見る所を(一四)簡忽にす。烏んぞ與に國家の大事を論ず可けんや。故に事を言ふ者は、聖聽に合ふと雖も、(一五)掎奪せらる。何となれば、其の頑士は、時の權に闇く、見る所に安習し、成を樂しむを知らず。況や始を慮る可けんや。苟くも「舊章に率由す」と云ふのみ。其の達者は、或は名に矜り能を妬み、策の己に非ざるを恥ぢ、筆を舞はし辭を奮ひ、以て其の義を破る。寡は衆に勝たず、遂に擯棄せらる。稷・契復た存すと雖も、猶

【一七】鬱伊。伸びざる貌。

【一八】垢翫。けがし、もてあそぶ。

【一九】補葺。補ひ綴る。

【二〇】權云云。權は、秤の錘なり。物の輕重に隨つて、權の進退を爲して、以て平を取ることが如く、其の時勢に遭遇して制度を定むるなり。

【二一】步驟の差。歩は歩むこと、驟は小走ること。時と處との宜しきに應じて、或は歩み或は趨るの制を設くるなり。

【二二】急切云云。當時の急切なる事に背きて、聞く所の事九慕ふを爲さざる也。

【二三】簡忽。かるんじ、ゆるがせにする也。

【二四】掎。後より牽く也。

は將に困しまんとす。斯れ賢智の論の、常に憤鬱して伸びざる所以の者なり。凡そ天下を爲むるには、上徳に非ざるよりは、之を嚴にすれば則ち治まり、之を寬にすれば則ち亂る。何を以て其の然るを明かにするや。近くは、孝宣皇帝、人に君たるの道に明かに、政を爲すの理に審かなり。故に刑を嚴にし法を峻にし、姦軌の膽を破り、海内清肅に、天下密如たり。見效を算計するに、孝文よりも優れり。元帝位に即くに及び、多く寛政を行ひ、卒に以て墮損し、威權始めて奪はれ、遂に漢室の禍を基するの主と爲れり。政道の得失、斯に於て鑒みる可し。昔孔子、春秋を作り、齊桓を褒し、晉文を懿とし、管仲の功を歎す。夫れ豈に文・武の道を美とせざらんや。誠に權に達し敵を救ふの理なり。聖人は能く世と推移す。而るに俗士は變を知らざるに苦しみ、以爲へらく、
 (一) 結繩の約は、復た亂秦の緒を治む可く、干戚の舞は、以て平城の圍を解くに足ると。夫れ熊經鳥伸は、延歴の術なりと雖も、傷寒の理に非ず、呼吸吐納は、度紀の道なりと雖も、骨を續ぐの膏に非ず。蓋し國を爲むるの法は、身を理むるに似たる有り。平かなれば則ち養を致し、疾めば則ちこれを攻む。夫れ刑罰は、亂を治むるの藥石なり。德教

【一】 姦軌。亂、外に在るを姦と爲し、内に在るを軌と爲す。
 【二】 密如。靜穩なる貌。
 【三】 懿。美なり。
 【四】 結繩。上古は文字なく、繩を結びて約束の證となしたりと傳ふ。
 【五】 干戚の舞。干は盾、戚は鉞なり。朱干玉戚を持ち冕を冠りて大武を舞ふ也。
 【六】 平城の圍。高祖、匈奴の爲めに平城に圍まる。
 【七】 熊經鳥伸。莊子に曰く、吹呼吸吸し、故を吐き新を納れ、熊經鳥伸するは、此れ道引の士、形を養ふの人なりと。熊經鳥伸とは、熊の木に懸りて自ら經し、鳥の空を

は、平を興すの梁肉なり。夫れ德教を以て殘を除かんとするは、是れ梁肉を以て疾を養ふなり。刑罰を以て平を治めんとするは、是れ藥石を以て供養するなり。方今、百王の敵を受け、厄運の會に値ひ、數世より以來、政、恩貸多く、馭するに其の轡を委て、馬、其の銜を駘け、四牡横に犇り、皇路險傾なり。方に將に勒を拏ませ轡を鞅ねて以て之を救はんとす。
 (二) 豈に和鑾を鳴らし節奏を調ふるに暇あらんや。昔文帝、肉刑を除くと雖も、當に右趾を斬るべき者は棄市し、咎うたる者は往往にして死に至れり。是れ文帝、嚴を以て平を致せるなり、寬を以て平を致せるに非ざるなり」と。寔は、瑗の子なり。山陽の仲長統、嘗て其の書を見、歎じて曰はく、『凡そ人主たるもの、宜しく一通を寫し、之を坐側に置くべし』と。

飛びて足を伸ばすが如くする也。道家の養生の術。
 【一】 延歴。延年、長壽。
 【二】 傷寒の理。寒に傷はれて熱を生じたるときの療治法。
 【三】 度紀。延年、長壽。
 【四】 駘。脱する也。
 【五】 皇路。大路なり。
 【六】 和鑾。竝に鈴なり。鑾は鑣に設け、和は軾に設く。馬動けば鑾鳴り、鑾鳴れば和、節に應ずる也。
 【七】 文帝云云。十五卷文帝十三年、景帝元年に見ゆ。
 【八】 瑗。五十一卷安帝延光四年に見ゆ。
 【九】 姑息。ただ目前の安きを圖る也。

臣光曰はく、漢家の法は已に嚴なり。而るに崔寔、猶ほ其の寬なるを病むは、何ぞや。蓋し衰世の君は、率ね柔懦多く、凡愚の佐は、唯だ姑息を知るのみ。是を以て、權幸の臣は、罪有れども坐せず、豪猾の民は、法を犯せども誅せられず、仁恩の施す所、目前に止まり、姦宄、志を得、紀綱立たず。故に崔寔の論は、以て一時の枉

れるを矯むるなり、百世の通義に非ざるなり。孔子曰はく、『政寛なれば則ち民慢なり。慢なれば則ち之を糾むるに猛を以てす。猛なれば則ち民残はる。残はるれば則ち之に施すに寛を以てす。寛以て猛を濟ひ、猛以て寛を濟ふ。是を以て和す』と。斯れ不易の常道なり。

閏月庚午、任城の節王崇・薨す。子無し。國絶ゆ。

太常黄瓊を以て司空と爲す。

帝、梁冀を褒崇せんと欲し、中朝の二千石以上をして、會して其の禮を議せしむ。特進胡廣・太常羊溥・司隸校尉祝恬・太中大夫邊韶等、咸冀の勳德を稱す、『宜しく周公に比し、之に山川・土田・附庸を錫ふべし』と。黄瓊獨り曰はく、『冀、前に親迎の勞を以て、邑萬三千戸を増し、又、其の子胤も亦封賞を加へらる。今、諸侯、戸邑を以て制と爲し、里數を以て限と爲さず。冀は、鄧禹に比して四縣を合はせ食ましむ可し』と。朝廷、之に従ふ。是に於て、有司、冀を奏す、『入朝して趨らず、劍履して殿に上り、謁讀するに名いはず、禮儀、蕭何に比し、悉く定陶・陽成の餘戸を以て、増封して四縣と爲して、鄧禹に比し、金錢・奴婢・綵帛・車馬・衣服・甲第を賞賜して、霍光に比し、以て元勳に殊にし、朝會する毎に三公と席を絶ち、十日に一たび入り、尙書の事を平かにせしめん。天下に宣布し、萬世の法と爲さん』と。冀猶ほ奏する所の禮薄きを以て、意悦ばず。

【四二】孔子云。左傳に見ゆ。孔子、子太叔を善みするの辭なり。

【四三】糾。攝むる也。

【四四】閏月。閏十二月なり。

【四五】章帝の元和元年、東平國を分ちて任城國と爲し、以て東平王蒼の少子尙を封す。崇は尙の姪なり。

【四六】中朝は朝廷をいふ。前漢にては中世以後、三公九卿を以て外朝官と爲す。後漢にはこの中外朝の別無し。

【四七】冀、始め襄邑縣に封ぜられ、乘氏を襲封し、更に増すに定陶・陽成を以てす。これを四縣と爲す。陽成は當に成陽に作るべし。定陶・乘氏と、皆、濟陰郡に屬す。

二年、春正月、西域の長史王敬、于寘に殺さる。初め西域の長史趙評、于寘に在り、癰を病みて死す。評の子、喪を迎ふ。道、拘彌を經。拘彌王成國、于寘王建と、素より隙有り、評の子に謂つて曰はく、『于寘王、胡醫をして毒藥を持して創中に著けしむ。故に死を致せるのみ』と。評の子、之を信じ、還り、以て敦煌の太守馬達に告ぐ。會、敬代りて長史と爲る。馬達、敬をして于寘の事を隱蔽せしむ。敬先づ拘彌に過る。成國復た説きて云はく、『于寘の國人、我を以て王と爲さんと欲す。今、此の罪に因りて建を誅す可し。于寘必ず服せん』と。敬、功名を立つるを貪り、前みて于寘に到り、供具を設け、建を請ひ、而して陰に之を圖る。或るひと敬の謀を以て建に告ぐ。建、信せずして曰はく、『我、罪無し。王・長史、何爲れぞ我を殺さんと欲せん』と。旦日、建、官屬數十人を從へて敬に詣る。坐定まり、建起ちて酒を行ふ。敬、左右を叱して之を執へしむ。吏士、竝に、建を殺す意無し。官屬悉く突走するを得たり。時に成國の主簿秦牧、敬に隨つて會に在り、刀を持して出でて曰はく、『大事已

し、以て元勳に殊にし、朝會する毎に三公と席を絶ち、十日に一たび入り、尙書の事を平かにせしめん。天下に宣布し、萬世の法と爲さん』と。冀猶ほ奏する所の禮薄きを以て、意悦ばず。

二年、春正月、西域の長史王敬、于寘に殺さる。初め西域の長史趙評、于寘に在り、癰を病みて死す。評の子、喪を迎ふ。道、拘彌を經。拘彌王成國、于寘王建と、素より隙有り、評の子に謂つて曰はく、『于寘王、胡醫をして毒藥を持して創中に著けしむ。故に死を致せるのみ』と。評の子、之を信じ、還り、以て敦煌の太守馬達に告ぐ。會、敬代りて長史と爲る。馬達、敬をして于寘の事を隱蔽せしむ。敬先づ拘彌に過る。成國復た説きて云はく、『于寘の國人、我を以て王と爲さんと欲す。今、此の罪に因りて建を誅す可し。于寘必ず服せん』と。敬、功名を立つるを貪り、前みて于寘に到り、供具を設け、建を請ひ、而して陰に之を圖る。或るひと敬の謀を以て建に告ぐ。建、信せずして曰はく、『我、罪無し。王・長史、何爲れぞ我を殺さんと欲せん』と。旦日、建、官屬數十人を從へて敬に詣る。坐定まり、建起ちて酒を行ふ。敬、左右を叱して之を執へしむ。吏士、竝に、建を殺す意無し。官屬悉く突走するを得たり。時に成國の主簿秦牧、敬に隨つて會に在り、刀を持して出でて曰はく、『大事已

【四七】席を絶つ。席を別にする也。

【一】西域傳によれば、評は元嘉元年に死す。

【二】隱蔽。事實を取り調ぶる也。隠は度る也。

【三】此の罪。評の死せしを以て建の罪と爲す也。

【四】供具。宴饗の具。

に定まれり。何爲れぞ復た疑はん」と。即ち前みて建を斬る。于竇の侯將輸熒等、遂に兵を會して敬を攻む。敬、建の頭を持して樓に上り、宣告して曰はく、「天子、我をして建を誅せしむるのみ」と。輸熒聽かず、樓に上りて敬を斬り、首を市に懸く。輸熒自立して王と爲る。國人、之を殺し、而して建の子安國を立つ。馬達、王敬死せりと聞き、諸郡の兵を將ゐて塞を出で、于竇を撃たんと欲す。帝、聽かず、達を徵して還らしめ、而して宋亮を以て代りて敦煌の太守と爲す。亮到り、于竇を開募し、自ら輸熒を斬らしむ。時に輸熒死して已に月を経たり。乃ち死人の頭を斷ちて敦煌に送り、而して其の狀を言はず。亮、後に其の詐なるを知る。而も竟に討つ能はざるなり。

丙辰、京師、地震ふ。

夏四月甲辰、孝崇皇后閔氏崩す。帝の弟平原王石を以て喪主と爲し、斂送の制度、恭懷皇后に比す。五月辛卯、博陵に葬る。

秋七月庚辰、日、之を食する有り。

冬十月乙亥、京師、地震ふ。

十一月、司空黃瓊、免せらる。十二月、特進趙戒を以て司空と爲す。

永興元年、春二月丁亥、帝、鴻池に幸す。

夏四月丙申、天下に赦す。改元す。

丁酉、濟南の悼王廣、薨す。子無し。國除かる。

秋七月、郡國三十二、蝗あり、河水溢る。百姓饑窮し、流冗する者數十萬戸。冀州尤も甚だし。詔して、侍御史朱穆を以て冀州の刺史と爲す。

冀部の令長、穆が河を濟ると聞き、印綬を解きて去る者、四十餘人。到るに及びて、諸郡の貪汙なる者を奏劾す。自殺するに至る有り、或は獄中に死す。宦者趙忠、父を喪ひ、歸りて安平に葬り、僭して玉匣を爲る。穆、郡に下して案驗せしむ。吏、其の嚴を畏れ、遂に墓を發きて棺を剖き、尸を連ねて之を出す。帝聞き、大に怒り、穆を徵して廷尉に詣らしめ、左校に輪作せしむ。太學の書生潁川の劉陶等數千人、闕に詣りて上書し、穆(冤)を訟へて曰はく、「伏して見るに、弛刑徒朱穆、公に處り國を憂へ、州に拜せらるるの日、志、姦惡を清めんとす。誠に、常侍が貴寵せられ、父子兄弟、布きて州郡に在り、競うて虎狼と爲り、小民を噬食するを以て、故に穆、天綱を張理し、漏目を補綴し、殘禍を羅取し、以て天意を塞ぐ。是に由りて、内官咸共に患疾し、謗讟煩はしく興り、譏隙仍に作り、其の

- 【一】永興元年。西紀一五三年なり。
- 【二】鴻池。池の名、雒陽の東二十里に在り。
- 【三】廣。濟南王顯の子なり。
- 【四】流冗。流散する也。綱目には冗は亡に作る。紀事本末同じ。
- 【五】安平國は冀州に屬す。今の直隸省保定道安平縣。
- 【六】左校。署の官、將作に屬し、左工徒を掌る。
- 【七】殘。害する也。
- 【八】内官。中官即ち宦官。

刑譴を極め、左校に輪作せしむ。天下の有識、皆以へらく、穆、勤を禹、稷に同じくし、而して、共・鯨の辰を被ると。若し死者知る有らば、則ち唐帝、(一〇)崇山に怒り、(一一)重華、(一二)蒼墓に忿らん。當今、中官近習、竊に國柄を持し、手に王爵を握り、(一三)口に天憲を銜み、賞を運らせば、則ち餓隸をして、(一四)季孫よりも富ましめ、(一五)呼喚すれば、則ち伊・顔をして化して、(一六)桀・跖と爲らしむ。而るに穆獨り亢然として、身の害を顧みず。榮を惡みて辱を好み、生を惡みて死を好むに非ざるなり。徒に王綱の(一七)攝はざるを感じ、天網の久しく失せるを懼る。故に心を竭し憂を懷き、上の深計を爲す。臣、願はくは首に跣し趾を繋ぎ、穆に代りて輪作せんことを』と。帝、其の奏を覽、乃ち之を赦す。

冬十月、太尉袁湯・免せらる。太常胡廣を以て太尉と爲す。司徒吳雄・司空趙戒・免せらる。太僕黃瓊を以て司徒と爲し、光祿勳房植を司空と爲す。武陵の蠻詹山等反す。武陵の太守汝南の應奉、招きて之を降す。

車師後部の王阿羅多、(一八)戊部の候嚴皓と(一九)相得ず、忿戾して反し、屯田を攻圍し、吏士を殺傷す。後部の侯炭遮、餘民を領し、阿羅多に畔き、

- 【九】唐帝。堯なり。
- 【一〇】崇山。堯にに葬らると云ふ。
- 【一一】重華。舜なり。
- 【一二】蒼墓。舜は蒼梧の野に葬らる。蒼墓は蒼梧の墓の意。
- 【一三】口云云。天憲は、王法なり。刑戮、其の口より出づるをいふ。
- 【一四】季孫。魯の季孫氏。論語先進篇に曰はく、季氏は周公よりも富むと。
- 【一五】呼喚。呼吸なり。
- 【一六】伊・顔。伊尹、顔回。賢人の代表者。
- 【一七】桀・跖。夏桀、盜跖。悪人の代表者。
- 【一八】攝。整ふ也。
- 【一九】戊部の候。戊己の兩部に、各々校尉を置き、各々部候あり。
- 【二〇】相得ず。仲悪しき也。

漢の吏に詣りて降る。阿羅多、迫急し、百餘騎を從へ、亡げて北匈奴に入る。敦煌の太守宋亮、(二一)上して、(二二)後の故の王軍就の質子卑君を立てて王と爲す。後、阿羅多、復た匈奴の中より還り、卑君と國を争ひ、頗る其の國人を收む。戊校尉嚴詳、其の北虜を招引して將に西域を亂さんとするを慮り、乃ち信を開きて告示し、復た王と爲さんことを許す。阿羅多、乃ち詳に詣りて降る。是に於て、更に阿羅多を立てて王と爲し、卑君を將りて敦煌に還り、後部の人(二三)三百帳を以て之に與ふ。

二年、春正月甲午、天下に赦す。

二月辛丑、復た(二四)刺史二千石が三年の喪を行ふを聽す。

癸卯、京師、地震ふ。

夏、蝗あり。

東海の(二五)胸山崩る。

乙卯、乳母馬惠の子初を封じて列侯と爲す。

秋九月丁卯朔、日、之を食する有り。

太尉胡廣・免せらる。司徒黃瓊を以て太尉と爲す。閏月、光祿勳尹頌を以て司徒と爲す。

- 【二一】上。上奏する也。
- 【二二】後。後部なり。安帝の延光四年、班勇、後部王軍就を斬る、其の質子、敦煌に在り。
- 【二三】三百帳。猶ほ中國の三百戸といふがごとし。帳はテントなり。テントに住へるによりて斯くいふなり。
- 【二四】刺史云云。安帝の建光元年、三年の喪を行ふを斷つこと、四十九卷に見ゆ。
- 【二五】胸山。山の名、今の江蘇省徐海道東海縣の南四里に在り。

冬十一月甲辰、帝、上林苑に校獵し、遂に函谷關に至る。
泰山・琅邪の賊公孫舉・東郭寶等、反し、長吏を殺す。

永壽元年、春正月戊申、天下に赦し、改元す。

二月、司隸、冀州饑る。人相食む。

太學生劉陶、上疏して事を陳じて曰はく、『夫れ天の帝に與ける、帝の民に與けるは、猶ほ頭の・足に與けるがごとく、相須ちて行くなり。陛下、目に、鳴條の事を視ず、耳に、檀車の聲を聞かず、天災は肌膚に痛む有らず、(四)震食は即きて聖體に損せず。故に三光の謬へるを蔑にし、上天の怒を輕んず。伏して念ふに高祖の起るや、始め布衣よりし、散せるを合せ傷つけるを扶け、克く帝業を成す。勤むること亦至れり。福を流し祚を遺し、陛下に至る。陛下、既に烈考の軌を増し明かにする能はず、而して高祖の勤を忽せにし、妄に利器を假し、國柄を委ね授け、羣醜刑隸をして小民を芟刈せしむ。(譬へ)虎豹、(云)鹿場に窟し、豺狼、春圃に乳するなり。貨殖する者は、窮鬼の窟と爲り、貧賤する者は、饑寒の鬼と作り、死者は(云)棺に悲み、生者は朝野に戚ふ。是れ愚臣が、爲めに咨嗟し長く歎息を懐く所の者なり。且つ秦の將に亡びんとするや、正諫する者は誅せられ、諛進する者は賞せられ、嘉言は忠舌に結ばれ、國命は讒口より出で、(二)閹樂を咸陽に擅にし、(二)趙高に授くるに車府を以てし、權、己を去れども知らず、威、身を離るれども顧みざりき。古今、揆を一にし、成敗、執を同じくす。願はくは陛下、遠くは彊秦の傾けるを覽、近くは哀平の變を察せよ。得失昭然として、禍福見る可し。臣又聞く、「危きは仁に非ざれば扶けられず、亂るるは智に非ざれば救はれず」と。竊に見るに、(三)故の冀州の刺史南陽の朱穆・前の烏桓校尉臣が同郡の李膺は、皆、正を履みて清平に、貞高、俗に絶る。斯れ實に中興の良佐、國家の柱臣なり。宜しく本朝に還し、王室を夾輔せしむべし。臣、敢て(三)不時の義を諱言の朝に吐くは、猶ほ冰霜の・日を見れば、必ず消滅するに至るがごとし。臣、始め天下の悲む可きを悲む。今、天下、亦、臣の愚惑を悲まん』と。書・奏す。省せられず。

夏、南陽、大水あり。
司空房植・免せらる。太常韓續を以て司空と爲す。
巴郡・益州郡、山崩る。

漢孝桓皇帝永壽元年

【三】校獵。校は關校なり。校獵とは、獸を遮りてこれを獵取する也。
【一】永壽元年。西紀一五五年なり。

【二】鳴條云云。鳴條は地名。湯、桀と鳴條の野に戰ふ。

【三】檀車。兵車。詩經大雅大明の詩に曰はく、牧野洋洋たり、檀車煌煌たり云云と。此の詩は武王の紂を伐ちしことを詠むる也。

【四】震食。地震、日食。

【五】刑隸。宦官をいふ。

【六】鹿の子。鹿の子。

【七】貨殖云云。貧富と無く、皆、其の死を得ざるをいふ。

【八】寤夢。長夜。寤は厚き也。夢は夜なり。

【九】嘉言云云。忠臣も諫諍せざるをいふ。

【一〇】閹樂。咸陽の令たり。

【一一】趙高。中車府の令たり。

【一二】前年。朱穆は罪を得、李膺は時に亦免せられて綸氏に居る。

【一三】不時。時に合はざる也。

秋、南匈奴の左莫鞬臺耆且渠伯德等反し、美稷に寇す。東羌、復た種を擧げて之に應ず。(四)安定屬國都尉敦煌の張奐、初めて職に到るや、壁中、唯だ二百許人有り、之を聞き、即ち兵を勸して出づ。軍吏以爲へらく、力、敵せずと、叩頭して争うて之を止む。奐聽かず、遂に進みて、長城に屯し、兵士を收集し、將王衛を遣はして東羌を招誘せしめ、因つて、龜茲縣に據り、南匈奴をして交通するを得ざらしむ。東羌の諸豪、遂に相率ゐて、奐と共に莫鞬等を撃ち、之を破る。伯德、惶恐し、其の衆を將ゐて降る。郡界以て寧し。羌豪、奐に馬二十四、金鑊八枚を遺る。奐、諸羌の前に於て、酒を以て地に、酌して曰はく、『馬をして羊の如くならしむとも、以て廄に入れじ。金をして粟の如くならしむとも、以て懷に入れじ』と。悉く以て之に還す。此より前の八都尉は、率ね財貨を好み、羌の患苦する所と爲る。奐に及びて、身を正しくし己を潔くす。悦服せざる無し。威化大に行はる。

二年、春三月、蜀郡屬國の夷反す。

初め鮮卑の檀石槐、勇健にして智略有り。部落畏服す。乃ち法禁を施し、曲直を平かにす。敢て犯

- 【一】 安定は今の甘肅省舊平涼府及び固原州・涇州の地、臨涇に治す。故城は今の涇原道鎮原縣の西に在り。
- 【二】 長城。即ち秦の蒙恬の築く所の長城。
- 【三】 龜茲縣。上都に在り、上郡屬國都尉の治所。今の陝西省榆林道榆林縣の北に在り。龜茲國人の來りて降附する者を處らしむ、故に以て名づく。
- 【四】 金鑊。金の食器の名。
- 【五】 酌。酒を地に沃ぎて神を祭る也。
- 【六】 延光元年、蜀郡西部都尉を以て屬國都尉と爲す。

す者無し。遂に推して以て大人と爲す。檀石槐、庭を、彈汗山鬱仇水上に立つ。高柳の北を去ること三百餘里、兵馬甚だ盛なり。東西部の大人、皆これに歸す。因つて南は緣邊を抄し、北は丁零を拒ぎ、東は夫餘を卻け、西は烏孫を撃ち、盡く匈奴の故地に據る。東西萬四千餘里。秋七月、檀石槐、雲中に寇す。故の烏桓校尉李膺を以て度遼將軍と爲す。膺、邊に到る。羌胡、皆、風を望みて畏服し、先に掠むる所の男女を、悉く塞下に詣りて、之を送還す。

公孫舉、東郭寶等、衆を聚めて三萬人に至り、青・兗・徐の三州に寇し、郡縣を破壊す。連年、之を討てども、克つ能はず。尙書、能く劇を治むる者を選び、司徒の掾潁川の韓詔を以て、羸の長と爲す。賊、其の賢を聞き、相戒めて、羸の境に入らず。餘縣の流民萬餘戶、縣の界に入る。詔、倉を開きて之を賑す。主者、争うて不可と謂ふ。詔曰はく、『溝壑(ニ陥ラン)の人を長活し、而して此を以て罪に伏せば、笑を含みて地に入らん』と。太守、素より詔の名徳を知る。竟に坐する所無し。詔、同郡の荀淑・鍾皓・陳寔と、皆、嘗て縣長と爲り、至る所、徳政を以て稱せらる。時の人、之を潁川の四長と謂ふ。

- 【一】 高柳の北を去ること。高柳の北を去ること。高柳の北を去ること。
- 【二】 彈汗山。又、彈汗山に作る。今の察哈爾特別區域興和道張北縣の附近に在り。彈汗は蒙古語にて白の意ある。滿洲語の Manchu の對音にて白山の意ならんかとの説あり。然らば彈汗は彈汗の誤ならんか。
- 【三】 高柳。縣の名、故城は、今の山西省雁門道陽高縣に在り。
- 【四】 羸。縣の名、泰山郡に屬す。今の山東省濟南道萊蕪縣の西北四十里に在り。
- 【五】 餘縣。他縣。
- 【六】 主者。倉粟を主るの吏。
- 【七】 荀淑云云。荀淑は當塗の長となり、陳寔は太丘の長となり、皓は林慮の長となる。

初め鮮卑、遼東に寇するや、屬國都尉段熲、領する所を率ゐ、馳せて之に赴く。既にして、賊の驚き去らんことを恐れ、乃ち驛騎をして詐りて璽書を齎して熲を召さしむ。熲、道に於て偽り退き、潛に還路に於て伏を設く。虜以て信に然りと爲し、乃ち入りて熲を追ふ。熲因つて大に兵を縦ち、悉く之を斬獲す。詐りて璽書を爲るに坐し、當に重刑に伏すべきを、功有るを以て、(八)司寇の刑に論せられ、竟りて議郎に拜せらる。是に至りて、詔して、

東方の盜賊昌熾なるを以て、公卿をして、將帥の文武の材有る者を選ばしむ。司徒尹頌、熲を薦む。中郎將に拜し、舉・寶等を撃たしむ。大に破りて之を斬る。首萬餘級を獲たり。餘黨降り散ず。熲を封じて列侯と爲す。

冬十二月、地震ふ。

梁不疑の子馬を封じて潁陰侯と爲し、梁胤の子桃を城父侯と爲す。

卷の第五十四

漢紀四十六

孝桓皇帝上の下

(一) 永壽三年、春正月己未、天下に赦す。

(二) 居風の令、貪暴にして度無し。縣人朱達等、蠻夷と同一に反し、攻めて令を殺し、衆を聚めて四五千人に至る。夏四月、進みて九眞を攻む。九眞の太守兒式・戰死す。九眞の都尉魏朗に詔し、討ちて之を破る。

(三) 閏月庚辰晦、日、之を食する有り。

京師、蝗あり。

或るひと上言す、「民の貧困なるは、貨輕く錢薄きを以てなり。宜しく改めて大錢を鑄るべし」と。事、四府・羣僚及び太學の能言の士に下し、之を議せしむ。太學生劉陶、議を上りて曰はく、「當今の憂は、貨に在らず、民の饑うるに在り。竊に

【一】 永壽三年。西紀一五七年なり。

【二】 居風。縣の名、九眞郡に屬す。今の佛領印度支那の北部。

【三】 閏月。當に閏五月に作るべし。

【四】 四府。三公府及び大將軍府。

見るに、比年已來、良苗は蝗螟の口に盡き、杼軸は公私の求に空し。民の患ふる所は、豈に錢貨の厚薄・鉄兩の輕重を謂はんや。就ひ當今の沙磧をして化して、南金と爲り、瓦石をして變じて、和玉と爲らしむとも、百姓をして渴して飲む所無く、饑えて食ふ所無からしめば、

皇羲の純徳・唐虞の文明と雖も、猶ほ以て、蕭牆の内を保する能はざらん。蓋し民は、百年も貨無る可し、一朝も饑有る可からず。故に食を至急と爲すなり。議者、農殖の本に達せず、多く鑄冶の便を言ふ。蓋し萬人、之を鑄、一人、之を奪ふすら、猶ほ給する能はず。況んや今、一人、之を鑄、則ち萬人、之を奪ふをや。陰陽を以て炭と爲し、萬物を銅と爲し、食はざるの民を役し、饑ゑざるの士を使ふと雖も、猶ほ厭く無きの求を足らす能はざるなり。夫れ民殷に財阜なるを欲せば、要は、役を止め奪を禁ずるに在り、則ち百姓、勞せずして足らん。陛下、海内の憂戚を感み、錢を鑄貨を齊しくして以て其の弊を救はんと欲するは、猶ほ魚を沸鼎の中に養ひ、鳥を烈火の上に棲ますがごとし。水木は本魚鳥の生ずる所なれども、之を用ふること時ならざれば、必ず焦爛するに至る。願はくは陛下、【一】鉄薄の禁を寛くし、冶鑄の議を後にし、民庶の謠吟を聽き、【二】路叟の憂ふる所を問ひ、【三】三光の文耀を暇ひ、山河の【四】分流を視んこと

- 【五】 杼軸。杼は機の緯絲を巻ける筭を入れて行るもの。軸は機の經絲を巻くもの。
- 【六】 南金。南方に産する貴き黄金。
- 【七】 和玉。卞和の玉。
- 【八】 皇羲。天皇氏及び伏羲氏なり。
- 【九】 唐虞。堯舜なり。
- 【一〇】 蕭牆。屏牆なり。
- 【一一】 鑿薄。削り薄くする也。
- 【一二】 路叟。道路の老人。
- 【一三】 三光。日月星をいふ。
- 【一四】 分流。分は山を謂ひ、流は河を謂ふ。

を。天下の心、國家の大事、粲然として皆見はれ、惑を遺す者有る無からん。伏して念ふに、當今、地廣けれども耕すを得ず、民衆けれども食ふ所無く、羣小競ひ進み、國の位を乗り、天下に鷹揚し、【一】鳥鈔して、飽くを求め、肌を呑み骨に及び、竝に噬みて厭く無し。誠に恐る、卒に役夫・窮匠有り、板築の間に起り、【二】斤を投じ臂を攘ひ、高きに登りて遠く呼び、愁怨の民をして響應雲合せしめんことを。【三】方尺の錢と雖も、何ぞ能く其の危きを救ふ有らんや」と。遂に錢を改めず。

冬十一月、司徒尹頌・薨す。
長沙の蠻・反し、益陽に寇す。
司空韓續を以て司徒と爲し、太常北海の孫朗を以て司空と爲す。

延熹元年、夏五月甲戌晦、日、之を食する有り。太史令陳授、小黄門徐璜に因りて、『日食の變は、咎、大將軍冀に在り』と陳ぶ。冀、之を聞き、雒陽(令)に諷して、授を收考せしむ。獄に死す。帝、是に由りて、冀を怒る。

京師、蝗あり。
六月戊寅、天下に赦す。改元す。

漢孝桓皇帝延熹元年

- 【一】 伏して念ふに、當今、地廣けれども耕すを得ず、民衆けれども食ふ所無く、羣小競ひ進み、國の位を乗り、天下に鷹揚し、卒に役夫・窮匠有り、板築の間に起り、斤を投じ臂を攘ひ、高きに登りて遠く呼び、愁怨の民をして響應雲合せしめんことを。
- 【二】 鳥鈔。鳥の如く鈔掠する也。
- 【三】 斤。斧の類をいふ。
- 【四】 益陽。縣の名、長沙郡に屬す。故城は今の湖南省湘江道益陽縣の西に在り。
- 【五】 延熹元年。西紀一五八年なり。

大雩す。

秋七月甲子、太尉黃瓊、免せらる。太常胡廣を以て太尉と爲す。

冬十月、帝、廣成に校獵し、遂に 上林苑に幸す。

十二月、南匈奴の諸部、竝に叛し、烏桓、鮮卑と與に、緣邊の九郡に寇す。

帝、京兆の尹陳龜を以て度遼將軍と爲す。龜、行に臨みて上疏して曰はく、

『臣聞く、(一)三辰、(二)軌ならざれば、士を擢でて相と爲す。蠻夷、恭ならず

れば、卒を抜きて將と爲す』と。臣、文武の材無くして、(三)鷹揚の任を忝

うす。軀體を歿すと雖も、云に補ふ所無からん。今、西州の邊鄙は、土地

(四)瘠瘠にして、民、數、寇虜を更、室家、殘破し、生氣を含むと雖も、實に

枯朽に同じ。往歲、并州は水雨あり、災螟互に生じ、稼穡荒耗し、租、更

空闕す。陛下、百姓を以て子と爲す。焉んぞ撫循の恩を垂れざる可けんや。

(五)古公、(六)西伯は、天下、仁に歸す。豈に復た (七)金を輿にし寶を輦にし、

以て民の惠と爲さんや。陛下、中興の統を繼ぎ、光武の業を承け、朝に臨

み政を聽き、而も未だ聖意を留めず。且つ牧守良からず、或は (八)中官に

出で、上旨に逆ふを懼れ、(九)目前を過ごすを取る。(一〇)呼嗟の聲、災害を

招致し、胡虜凶悍にして、(一一)義に因り隙に緣り、而して倉庫をして豺狼の口

に單き、功業をして鉄兩の効無からしむ。皆、將帥の忠ならず。聚姦の致す

所に由る。前の涼州の刺史祝良、初めて除せられて州に到るや、糾罰する

所多く、太守令長、貶黜せらるること將に半ならんとせり。政未だ時を

踰えずして、功効卓然たりき。實に應に賞異し、以て功能を勸め、牧守を

改任し、姦殘を去斥すべし。又宜しく更に (一二)匈奴、烏桓、護羌の

校尉を選び、文武を簡練し、之に法令を授け、并、涼二州の今年の租更を除

き、罪隸を寬赦し、掃除更始すべし。則ち善吏は公に奉ずるの祐を知り、

惡者は私を營むの禍を覺り、胡馬は長城を窺はざる可く、塞下は侯望の

患無からん』と。帝乃ち更に幽、并の刺史を選び、(一三)營、郡の太守、都尉より

以下、革易する所多し。詔を下して、陳將軍の爲めに、并、涼の一年の租

賦を除き、以て吏民に賜ふ。龜、職に到るや、州郡、足を重ねて震栗す。

(一四)經用を省息すること、歲に億を以て計ふ。詔して、安定屬國都尉張奐

を拜して、(一五)北中郎將と爲し、以て匈奴、烏桓等を討たしむ。匈奴、烏桓、

きて赤阬に屯し、煙火相望む。兵衆大に恐れ、各、亡げ去らんと欲す。奐、

帷中に安坐し、弟子と與

漢孝桓皇帝延熹元年

【二】大雩。旱の時、雨を禱る祭。

【三】廣成。苑の名。

【四】この上林苑は雒陽の西に在り。

【五】三辰。日月星。

【六】軌ならず。運行の軌道に順はざる也。

【七】鷹揚の任。將軍の任をいふ。詩に曰はく、維れ師尙父、時れ維れ鷹のごとく揚ると。

【八】瘠瘠。地味の瘠せたるなり。

【九】殘破。そこなばれ、破る。

【一〇】更。率更錢なり。

【一一】古公。周の先祖古公亶父なり。

【一二】西伯。周の文王なり。

【一三】金云云。金錢財寶を民に給與するを以て恩惠と爲さざる也。

【一四】中官に出づ。牧守は中官(宦官)の推舉する所なるをいふ。

【一五】目前云云。一時しのぎの計を爲す也。

【一六】護匈奴中郎將・護烏桓校尉・護羌校尉をいふ。

【一七】京兆の虎牙營、扶風の雍營は皆都尉これを領し、諸郡には各、太守・都尉あり。

【一八】經用は經費。省息は節減する也。

【一九】北中郎將。後漢書の張奐傳には護匈奴中郎將に作る。

【二〇】度遼將軍は時に五原に屯す。

に講誦して自若たり。軍士稍安んず。乃ち潛に烏桓を誘ひ、陰に與に和通し、遂に匈奴の屠各の渠帥を斬らしめ、其の衆を襲ひ破る。諸胡悉く降る。奂、南單于車兒が國事を統理する能はざるを以て、乃ち之を拘し、「左谷蠡王を立てて單于と爲さん」と奏す。詔して曰はく、「春秋ノ義は正に居るを大とす。車兒は一心に化に向ふ。何の罪ありて黜くるや。其れ遣りて庭に還らしめよ」と。大將軍冀、陳龜と、素より隙有り、其の國威を沮毀し、功譽を挑取し、胡虜の畏るる所と爲らざるを諧す。坐して徵還せらる。種暲を以て度遼將軍と爲す。龜遂に骸骨を乞ひ、田里に歸る。復た徵せられて尙書と爲る。冀、暴虐日に甚だし。龜・上疏して其の罪狀を言ひ、之を誅せんと請ふ。帝、省せず。龜、自ら、必ず冀に害せられんことを知り、食はざること七日にして死す。種暲、營所に到るや、先づ恩信を宣べ、諸胡を誘ひ降す。其の服せざる有れば、然る後討を加ふ。羌虜、先時、生きながら獲られて郡縣に質たる者有り。暲悉く之を遣り還し、誠心懷撫し、信賞分明なり。是に由りて、羌胡、皆、來りて順服す。暲乃ち烽燧を去り、候望を除く。邊方、晏然として警無し。入りて大司農と爲る。

- 【一】屠各。匈奴の別種。
- 【二】車兒は桓帝の建和元年立ち、立ちてより以來、一心に化に向へり、宜しくこれを寬宥すべしとの意。
- 【三】挑取。挑は取る也。獨り其の功業名譽を取らんとするをいふ。

二年、春二月、鮮卑、鴈門に寇す。

蜀郡の夷、蠶陵に寇す。

三月、復た刺史・二千石が三年の喪を行ふを斷つ。

夏、京師、大水あり。

六月、鮮卑、遼東に寇す。

梁皇后、姉兄の蔭執を恃み、奢靡を恣極すること、前世に兼倍し、寵を専らにして妬忌し、六宮、進見するを得る莫し。太后崩するに及びて、恩寵頓に衰ふ。后既に嗣無く、宮人の孕育する毎に、全きを得る者鮮し。帝、梁冀を迫畏し、敢て譴怒せずと雖も、然れども進御すること轉た希なり。后益憂患す。秋七月、丙午、皇后梁氏崩す。乙丑、懿獻皇后を懿陵に葬る。梁冀の一門、前後七侯、三皇后、六貴人、二大將軍、夫人・女の・邑を食み君と稱する者七人、公主に尙する者三人、其餘、卿・將・尹・校、五十七人あり。冀、専ら威柄を擅にし、凶恣なること日に積り、宮衛・近侍には、竝に親しむ所を樹る、禁省の起居、纖微までも必ず知る。其の四方

- 【一】蠶陵。縣の名、蜀郡に屬す。今の四川省西川道松潘縣疊溪營の西に在り。
- 【二】永興二年、三年の喪を行ふを聽せり。
- 【三】姉兄。姉は順烈皇后、兄は梁冀。
- 【四】蔭執。蔭はおほひ、かばふ也。執は勢力。
- 【五】六宮。宮中の奥むきをいふ。ここに於ては六宮の女官を指す。
- 【六】懿獻皇后。梁皇后の諡。
- 【七】冀の祖雍、乘氏侯に封ぜられ、冀、襄邑侯に封ぜられ、及び乘氏侯を嗣ぎ、又、其の子胤を襄邑侯に封じ、弟不疑、潁陽侯たり、蒙、西平侯たり、不疑の子馬、潁陰侯たり、胤の子挑、城父侯たり。是れ七侯なり。三皇后とは恭懷・順烈・懿獻の三を云ふ。
- 【八】卿將尹校。卿は九卿、將は中郎將、尹は河南・京兆の尹、校は諸校尉。

の調發、歲時の貢獻は、皆、先づ上第を冀に輸し、乘輿は乃ち其の次なり。吏民、貨を齎して、官を求め罪を(貶セン)請ふ者、道路に相望む。百官の遷召せらるるや、皆、先づ冀の門に到り、(一〇)棧檄して恩を謝し、然る後敢て尙書に詣る。下邳の吳樹、宛の令と爲り、官に之かんとし、冀に(一一)辭す。冀の賓客、布きて縣界に在り。(一二)情を以て樹に託す。樹曰はく、「小人姦蠹をば、比屋、誅す可し。明將軍、上將の位に處る。宜しく賢善を崇び、以て(一三)朝闕を補ふべし。侍坐してより以來、未だ一の長者を稱するを聞かず。而して多く人に非ざるを託するは、誠に(一四)敢て聞くとところに非ず」と。冀、默然として、悦ばず。樹、縣に到り、遂に冀の客の・人の害を爲す者數十人を誅殺す。樹、後に荊州の刺史と爲り、冀に辭す。冀、之を煬す。(一五)出でて車上に死す。遼東の太守侯猛、初め拜せらるるや、冀に謁せず。冀、託するに他事を以てし、之を腰斬す。郎中汝南の袁著、年十九、闕に詣りて上書して曰はく、「夫れ四時の運、功成れば則ち退く。高爵厚寵は、災を致さざること鮮し。今、大將軍は、位極まり功成る。至戒と爲す可し。宜しく(一六)縣車の禮に遵ひ、枕を高くして神を頤ふべし。(一七)傳に曰はく、「木實繁き者は、枝を披り心を害す」と。若し盛權を抑損せずんば、將に以て其の身を全うする無からんとす」と。冀聞きて、密に(一八)掩捕せしめんとす。著乃ち姓名を變易し、病に

- 【九】上第。第一等のもの。
- 【一〇】棧檄。書面を差出す也。紙書を用ふるを檄と曰ひ、木書を用ふるを檄と曰ふ。
- 【一一】辭す。挨拶をすること。
- 【一二】朝闕。朝政の闕失。
- 【一三】縣車。車を懸くる也。退隱するをいふ。
- 【一四】傳に曰はく云云。范曄の言。

託して偽り死し、蒲を結びて人(形)を爲り、棺を市うて殯送す。冀、其の詐なるを知り、求め得て之を答殺す。太原の郝黎・胡武、(一五)危言高論を好み、著と友とし善し。黎・武、嘗て名を連ねて、三府に奏記し、海内の高士を進め、而して冀に詣らす。冀、之を追怒し、中都官に敕し、檄を移して禽捕せしめ、遂に武の家を誅す。死者六十餘人。黎初め逃亡せしが、免れざるを知り、因つて櫬を輿せ、書を冀の門に奏す。書入るや、藥を仰ぎて死す。家乃ち全きを得たり。安帝、嫡母耿貴人・薨するや、冀、貴人の從子林慮侯承に從つて、貴人の珍玩を求めしが、得る能はず。冀怒り、并せて其の家十餘人を族す。涿郡の崔琦、文章を以て、冀の善みする所と爲る。琦、外戚の箴・白鶴の賦を作り、以て(一六)風す。冀怒る。琦曰はく、「昔、管仲、齊に相たるや、讒諫の言を聞くを樂しむ。蕭何、漢を佐くるや、乃ち過を書するの吏を設く。今、將軍、屢、台輔を世にし、任、伊・周に齊し。而るに德政未だ聞えず、黎元塗炭す。貞良に結納して以て禍敗を救ふ能はず、反つて士の口を鉗塞し。主の聽を杜蔽せんと欲す。將に(一七)玄黄をして色を改め、(一八)鹿馬をして形を易へしめんとするか」と。冀、以て對ふる無し。因つて琦を遣りて歸らしむ。琦懼れて亡匿す。冀捕へ得て之を殺す。(一九)冀、政を乗ること、幾ど二十年、威、内外に行はる。天子、手を拱き、親ら與る所有るを得ず。帝既に之に

- 【一五】危言。高峻なる言説。
- 【一六】風。諷する也。
- 【一七】伊・周。伊尹、周公。
- 【一八】玄黄云云。玄は天の色、黄は地の色なり。天地をして顛倒せしめんとするをいふ。
- 【一九】鹿馬。趙高と秦の二世との故事。
- 【二〇】順帝の永和六年、冀、大將軍と爲る。是の歲に至るまで凡そ十九年。

平かならず。陳授死するに及びて、帝愈々怒る。和熹皇后の從兄の子郎中鄧香の妻宣、女猛を生む。香・卒し、宣更に梁紀に適く。紀は孫壽の舅なり。壽、猛が色美なるを以て、引きて掖庭に入れ、貴人と爲す。冀、猛を認めて其の女と爲さんと欲し、猛の姓を易へて梁と爲す。冀、猛の姉壻議郎（三）、尊が宣の意を沮敗せんことを恐れ、客を遣はして之を刺殺せしむ。又、宣を殺さんと欲す。宣の家は、中常侍袁赦と（三）、相比す。冀の客、赦の屋に登り、宣の家に入らんと欲す。赦、之を覺り、鼓を鳴らし衆を會し、以て宣に告ぐ。宣馳せ入りて帝に白す。帝大に怒り、因つて厠に如き、獨り（三）、小黄門史唐衡を呼びて問ふ、（四）、左右の（三）、外舍と相得ざる者は、誰ぞや」と。衡對ふ、（三）、中常侍單超・小黄門史左愴、梁不疑と隙有り。中常侍徐璜・黃門令具瑗、常に私に外舍の放横なるを忿疾すれども、口、敢て道はず」と。是に於て、帝、超、愴を呼びて室に入れ、謂つて曰はく、（三）、梁將軍兄弟、朝を専らにし、内外を迫脅し、公卿以下、其の風旨に従ふ。今、之を誅せん」と欲す。常侍の意に於て如何」と。超等對へて曰はく、（三）、誠に國の姦賊なり。當に誅すべきこと日久し。臣等、弱劣にして、未だ聖意の如何を知らざりしのみ」と。帝曰はく、（三）、審し然らば、常侍、密に之を圖れ」と。對へて曰はく、（三）、之を圖ること難からず。但だ恐る、陛下、腹中狐疑せんことを」と。帝曰はく、（三）、姦臣、國を脅す。當に其の罪に伏すべし。何

- 【一】 鄧尊云云。尊が宣の意を沮み敗りて、宣をして猛を梁姓に改むることに同意せざらしめんことを恐るる也。
- 【二】 相比す。相隣する也。
- 【三】 小黄門史。小黄門の書記役。
- 【四】 左右。宦官をいふ。
- 【五】 外舍。皇后の家をいふ。

を疑はんや」と。是に於て、冀、媛を召し、五人共に其の議を定む。帝、超の臂を齧み、血を出して盟を爲す。超等曰はく、（三）、陛下、今、計已に決せり。復た更に言ふ勿かれ。恐らくは人に疑はれん」と。冀、心に超等を疑ふ。八月丁丑、中黃門張憚をして、省に入りて宿し、以て其の變を防がしむ。具瑗、吏に敕して憚を收へしめ、以はく、（三）、慚ち外より入り、不軌を圖らんと欲す」と。帝、前殿に御し、諸尙書を召して入らしめ、其の事を發し、尙書令尹勳をして、節を持って、丞郎以下を勅し、皆、兵を操りて省閣を守らしめ、諸の符節を斂めて省中に送り、具瑗をして（三）、左右廐騶・虎賁・羽林・都候の劍戟の士を將ゐ、合はせて千餘人、司隸校尉張彪と共に冀の第を圍ましめ、光祿勳袁盱をして節を持って冀の大將軍の印綬を收め、徙して比景都郷侯に封せしむ。冀及び妻壽、即日、皆、自殺す。不疑・蒙は先に卒す。悉く梁氏・孫氏の中外の宗親を收へて、詔獄に送り、少長と無く、皆、棄市す。他、連及する所の、公卿・列校・刺史・二千石、死する者數十人。太尉胡廣・司徒韓續・司空孫期は、皆、梁冀に阿附し、宮を衛らさず。長壽亭に止まるに坐し、死一等を減じ、免じて庶人と爲す。故吏・賓客の免黜せらるる者、三百餘人。朝廷爲めに空し。是の時、事猝に中より發し、使者交馳せ、公卿、其の度を失ひ、官府・市里鼎のごとく沸く。數日にして乃ち定まる。百姓、慶を稱せざるもの莫し。冀の財貨を收め、縣官斥賣す。合はせて三千餘萬萬。以て王府の用に充て、天下の稅租の半を減す。

- 【六】 丞郎。尙書左右丞及び尙書郎。
- 【七】 左右廐騶。左右の廐に屬する騎士。左右都候。各一人、秩六百石、劍戟の士を掌り、宮中を徵循す。

其の苑囿を散じ、以て窮民に業す。

壬午、梁貴人を立てて皇后と爲す。懿陵を追廢して貴人家と爲す。帝、梁氏を惡み、皇后の姓を改

めて薄氏と爲す。之を久しうして、鄧香の女たるを知り、乃ち姓を鄧氏

に復す。

詔して、梁冀を誅するの功を賞し、單超・徐璜・具瑗・左悺・唐衡を封

じて、皆、縣侯と爲す。超は二萬戸を食み、璜等は各、萬餘戸。世に之を

五侯と謂ふ。仍て悺・衡を以て中常侍と爲す。又、尙書令尹勳等、七人を

封じ、皆、亭侯と爲す。

大司農黃瓊を以て太尉と爲し、光祿大夫中山の祝恬を司徒と爲し、大鴻

臚梁國の盛允を司空と爲す。是の時、新に梁冀を誅し、天下、異政を想望す。

黃瓊、首として公位に居り、乃ち州郡の素行暴汗なるものを舉奏し、死徒

に至る者十餘人あり。海内翕然として之を稱す。瓊、汝南の范滂を辟す。

滂、少きとき清節を厲まし、州里の服する所と爲る。嘗て清詔使と爲

り、冀州を案察す。滂、車に登り轡を攬り、慨然として、天下を澄清するの志有り。守令の臧汙

なる者、皆、風を望みて印綬を解きて去る。其の舉奏する所、衆議を厭塞せざるもの莫し。會、三府

の掾屬に詔して、謠言を擧げしむ。滂、刺史二千石・權豪の黨二十餘人を奏す。尙書、滂の劾

する所、狼に多きを責め、私故有らんと疑ふ。滂對へて曰はく、「臣の擧する所は、叨穢姦暴にして深

く民の害を爲すに非ざるよりは、豈に以て簡札を汗さんや。問、會日迫促せるを以て、故に先づ急

なる所を擧ぐ。其の未だ審かならざる者は、方に更に參實せんとす。

臣聞く、「農夫、草を去れば、嘉穀必ず茂り、忠臣、姦を除けば、王道以て

清し」と。若し臣の言に貳有らば、甘んじて顯戮を受けん」と。尙書、詰

る能はず。

尙書令陳蕃、上疏して五處士(即ち豫章の徐穉・彭城の姜肱・汝南の袁閔・

京兆の韋著・潁川の李曇)を薦む。帝、悉く安車玄纁を以て、禮を備へて之

を徵す。皆、至らず。穉は家貧しくして、常に自ら耕稼し、其の力に非ざ

れば食はず、恭謙義讓にして、居る所其の徳に服す。屢、公府に辟せらる

れども起たず。陳蕃、豫章の太守と爲り、禮を以て請うて功曹に署す、穉、之を

て退く。蕃、性方峻にして、(郡ニ在)賓客に接せず。唯だ穉來るときは、特に一榻を設く。去れば則

ち之を縣く。(穉)後、有道に擧げられ、太原の太守に家拜せらる。皆、就かず。穉、諸公の辟に

應せずと雖も、然れども其の死喪を聞けば、輒ち笈を負うて赴き弔す。常に家に於て、豫め雞一

- 【二八】業。生業を與ふる也。
- 【二九】薄氏と爲す。文帝の薄太后の家の謹良なりしを以てなり。
- 【三〇】單超は新豐侯、徐璜は武原侯、具瑗は東武陽侯、左悺は上蔡侯、唐衡は汝陽侯に封ぜらる。
- 【三一】七人。尹勳、霍詡、張敬、歐陽參、李璋、虞放、周永。
- 【三二】清詔使。官名。
- 【三三】案察。按行視察なり。
- 【三四】謠言を擧ぐ。長吏の良否、及び民の疾苦する所を條奏せしむる也。

- 【三五】會日。三府の掾屬、朝堂に會する期日。
- 【三六】參實。參考して以て其の實を究むる也。
- 【三七】免せず。辭免せざる也。
- 【三八】一榻。榻は坐榻。腰かけ。
- 【三九】有道。五十卷安帝建光二年に見ゆ。
- 【四〇】家拜。家に就きてこれを拜する也。

雙を炙り、一兩の綿絮を以て、酒中に漬し、暴乾し、以て雞を裹み、徑に赴く所の家隧の外に到り、水を以て綿を漬し、酒氣有らしめ、斗米飯、白茅を藉と爲し、雞を以て前に置き、酒を酸ぎ畢り、謁を留めて則ち去り、喪主を見ず。肱は、二弟仲海・季江と俱に、孝友を以て著聞し、常に被を同じうして寝ね、徵聘に應せず。肱嘗て弟季江と俱に郡に詣る。夜、道に於て盜に劫さる。(盜)之を殺さんと欲す。肱曰はく、『弟は年幼にして、父母の憐む所、又、未だ聘娶せず。願はくは身を殺して弟を濟はん』と。季江曰はく、『兄は年徳前に在り、家の珍寶、國の英俊なり。乞ふ自ら戮を受け、以て兄の命に代らん』と。盜遂に兩りながら釋し、但だ衣資を掠奪するのみ。既に郡中に至る。肱が衣服無きを見、怪しみて其の故を問ふ。肱、託するに他辭を以てし、終に盜を言はず。盜聞きて感悔し、精廬に就き、徵君に見ゆるを求め、叩頭して罪を謝し、略する所の物を還す。肱、受けず、勞するに酒食を以てして之を遣る。帝既に肱を徵すれども至らず。乃ち彭城に詔下し、畫工をして其の形狀を圖かしむ。肱、幽闇に臥し、被を以て面を蔽みて言はく、『眩疾を患へ、出でて風するを欲せず』と。工竟に之を見るを得ず。闕は、(五〇)安の玄孫なり。身を苦しめ節を脩め、辟石に應せず。

- 【四一】 暴乾。日に曬して乾かす也。
- 【四二】 家隧。墓道なり。
- 【四三】 藉。しきもの也。
- 【四四】 酸。酒を地に沃ぎて祭る也。
- 【四五】 謁。名刺。
- 【四六】 年徳。年齢・道徳。
- 【四七】 精廬。精舎なり。
- 【四八】 徵君。稱が嘗て徵聘を蒙りたるを以て、故に徵君と稱す。
- 【四九】 風。風にあたる也。
- 【五〇】 袁安は明帝・章帝・和帝に歴事す。

著は、隱居して講授し、世務を脩めず。曇は(少卿)繼母苦烈なり。曇、之に奉すること逾謹み、四時の珍玩を得れば、未だ嘗て先づ拜して後に進めずんばあらず。郷里、以て法と爲す。帝、又、安陽の魏桓を徵す。其の郷人、之に行かんことを勸む。桓曰はく、『夫れ祿を干め進を求むるは、其の志を行ふ所以なり。今、後宮千數あり、其れ損す可きか。廐馬萬匹あり、其れ減す可きか。左右に權豪あり、其れ去る可きか』と。皆對へて曰はく、『不可なり』と。桓乃ち慨然として歎じて曰はく、『桓をして生きて行き、死して歸らしむとも、諸子に於て何か有らんや』と。遂に身を隠して出でず。

- 【五一】 桓云云。若し時に忤うて強諫し、死して後歸らば、諸君に於て何の益あらんや。
- 【五二】 列校郎將。列校は北軍の五校尉を謂ふ。郎將は即ち三署中郎將なり。
- 【五三】 白馬。縣の名、東郡に屬す。今の河南省河北道滑縣の東北に在り。
- 【五四】 露布。その書を封ぜざるをいふ。
- 【五五】 副云云。副本を三公の府に上る也。

帝既に梁冀を誅し、故舊恩私、多く封爵を受く。皇后の父鄧香に追贈して、車騎將軍と爲し、安陽侯に封じ、更に後の母宣を封じて昆陽君と爲す。兄の子康・秉、皆、列侯と爲り、宗族、皆、列校郎將たり。賞賜、巨萬を以て計る。中常侍侯覽、縑五千匹を上る。帝、爵關内侯を賜ふ。又、託するに議に與り冀を誅するを以てし、進めて高郷侯に封ず。又、小黃門劉普・趙忠等八人を封じて郷侯と爲す。是より權執専ら宦官に歸す。五侯尤も貪縱にして、内外を傾動す。時に災異數見はる。(五三)白馬の令甘陵の李雲、露布して上書し、副を三府に移して曰はく、『梁冀、權を恃みて專擅し、

唐・天下に流ると雖も、今罪を以て誅を行ふは、猶ほ家臣を召して之を【五六】搤殺するがごときのみ。而るに狼に【五七】謀臣を萬戸以上に封ず。高祖、之を聞かば、非とせらるる無きを得んや。【五八】西北の列將、解體する無きを得んや。孔子曰はく、「帝は諱なり」と。今、官位錯亂し、小人【五九】諂ひ進み、【六〇】財

貨公行し、政化日に損じ、【六一】尺一の拜用、【六二】御省を経ず。是れ帝、諱ならざんと欲するか」と。

帝、奏を得て震怒し、有司に下して雲を逮せしめ、尙書・都護の劍戟【六三】に詔して、黄

門の北寺の獄に送らしめ、中常侍管霸をして御史・廷尉と與に之を雜考せしむ。時に弘農

の五官掾杜衆、雲が忠諫を以て罪を獲たるを傷み、上書す、「願はくは雲と同日に死せん」と。帝愈々怒り、遂に并せて廷尉に下す。大鴻

臚陳蕃・上疏して曰はく、「李雲が言ふ所は、禁忌を識らず・上を干し旨に逆ふと雖も、其の意は國に忠なるに歸するのみ。昔、高祖は周昌の不諱の諫を忍び、成帝は朱雲の腰領の誅を赦せり。今日、雲を殺さば、臣恐らくは心を剖くの讖、復た世に議せられん」と。太常楊秉・雒陽の市長

- 【五六】 搤殺。つかみ、ころす。
- 【五七】 謀臣。單超等五侯をいふ。
- 【五八】 西北の列將。皇甫規・段熲等をいふ。
- 【五九】 孔子云。春秋運斗樞の語。諱は審諱なり。
- 【六〇】 詔。一本に詭に作る。
- 【六一】 財貨。賄賂をいふ。
- 【六二】 尺一は長さ尺一寸の板。詔策をいふ。拜用は官に拜し人を用ふる也。
- 【六三】 御省。陛下の御省察。
- 【六四】 都護。一説に當に都候に作るべしといふ。左右都候の劍戟の士を謂ふ。
- 【六五】 北寺の獄。即ち若盧獄。
- 【六六】 五官掾。郡の屬官。
- 【六七】 周昌云。周昌が高祖を桀紂に比せしをいふ。
- 【六八】 朱雲云。三十二卷成帝元延元年に見ゆ。
- 【六九】 心を剖く。股の封王が比干の心を剖きしをいふ。
- 【七〇】 雒陽の市長。秩四百石、大司農に屬す。

沐茂・郎中上官套、竝に上疏して雲を請ふ。帝患ること甚だし。有司奏し、以て大不敬と爲す。【七一】詔して、蕃・秉を切責し、免じて田里に歸らしめ、茂・資は、秩二等を貶す。時に帝、濯龍池に在り。管霸、雲等の事を奏す。霸、跪きて言つて曰はく、「李雲は草澤の愚儒、杜衆は郡中の小吏にして、狂慝に出づ。罪を加ふるに足らず」と。帝、霸に謂つて曰はく、「帝、諱ならざらんと欲すとは、是れ何等の語ぞや、而るに常侍は之を原さんと欲するか」と。顧みて小黃門をして【七二】其の奏を可さしむ。雲・衆、皆獄中に死す。是に於て、嬖寵益々横なり。太尉瓊、自ら力の制する能はざるを度り、乃ち疾と稱して起たず、上疏して曰はく、「陛下、位に即きて以來、未だ勝政有らず。諸梁、權を秉り、豎宦、朝に充ち、李固・杜喬、既に忠言を以て、横しまに殘滅せられ、而して李雲・杜衆、復た直道を以て、踵を繼ぎて誅を受く。海内傷懼し、益々以て怨結し、朝野の人、忠を以て諱と爲す。尙書周永は、素、梁冀に事へ、其の威勢を假る。冀が將に衰へんとするを見、乃ち陽に【七三】毀りて忠を【七四】示す。遂に姦計に因りて、亦、封侯を取れり、又、黃門は邪を挾み、羣輩相黨し、冀が興盛なりしより、腹背相親し、朝夕圖謀し、共に姦軌を構ふ。冀が當に誅せらるべきに臨みて、巧を設く可き無く、復た其の惡に託し、以て爵賞を要む。陛下、【七五】清

- 【七一】 蓋し三公及び尙書の奏なり。
- 【七二】 濯龍池。洛陽宮中の濯龍園の中に在り。
- 【七三】 其の奏。霸が跪きて奏せるは、雲等の爲めに言ふが如くなれども、其の奏上せる獄辭は、これを死に致さんとする也。
- 【七四】 勝政。前朝よりも勝れる政事。
- 【七五】 清徵。明察なり。

徴を加へ眞僞を審別せず。復た忠臣と、時を並べて顯封す。粉墨雜糅す。謂はゆる金玉を砂礫に抵ち、珪璧を泥塗に碎くなり。四方、之を聞き、憤歎せざるもの莫し。臣、世國恩を荷ひ、身軽く位重し。敢て・絶ゆるに垂なんとするの日を以て、不諱の言を陳ぶ」と。書・奏す。納れられず。

冬十月壬申、上、長安に行幸す。

中常侍單超、疾病なり。壬寅、超を以て車騎將軍と爲す。

十二月己巳、上、長安より還る。

燒當・燒何・當煎・勒姐等の八種の羌、隴西の金城の塞に寇す。護羌校尉段熲、撃ちて之を破り、追うて羅亭に至り、其の酋豪以下二千級を斬り、生口萬餘人を獲たり。

詔して、復た陳蕃を以て光祿勳と爲し、楊秉を河南の尹と爲す。(是ヨリ先)

單超の兄の子匡、濟陰の太守と爲り、執を負みて貪放なり。兗州の刺史第五種、從事衛羽をして之を案せしむ。臧五六千萬を得たり。種、即ち匡を奏し、并せて以て超を劾す。匡、窘迫し、客任方に賂うて羽を刺さしむ。羽、其の姦を覺り、方を捕へ、雒陽に囚繫す。匡、楊秉が其の事を窮竟せんことを慮り、密に方等をして獄を突きて亡げ走らしむ。尙書、秉を召して詰責す。秉對へて曰はく、「一方等の無狀なるは、覺、單匡に由る。乞ふ檻車をもて匡を徵し、其の事を考覈せん。則ち姦慝の蹤緒、

【七〇】粉墨。白粉と黒き墨。異本には此の句の上に「朱紫共色」(朱紫、色を共にし)の四字あり。勝れりと爲す。
【七一】羅亭。今の甘肅省西寧道碾伯縣の近傍に在り。

必ず・立ちどころに得可し」と。秉、竟に坐して論せられて左校に作す。時に泰山の賊叔孫無忌、徐兗に寇暴し、州郡、討つ能はず。單超、是を以て、第五種を陷る。坐して朔方に徙さる。超の外孫董援、朔方の太守たり、怒を種へて以て之を待つ。種の故の吏孫斌、種の必ず死せんことを知り、客を結びて種を追ひ、太原に及び、之を劫して以て歸る。亡命すること數年、赦に會うて・免るを得たり。種は、倫の曾孫なり。是の時、封賞、制に踰え、内寵、狼に盛なり。陳蕃・上疏して曰はく、「夫れ諸侯は、上は、四七に象り、上國に藩屏たり。高祖の約に、「功臣に非ざれば侯とせず」と。而るに聞く、(一)河南の尹鄧萬世の父遵の微功を追録し、更に尙書令黃雋の先人の絶封を爵す」と。近習は義に非ざるを以て邑を授けられ、左右は功無きを以て賞を傳へられ、乃ち一門の内に侯たる者數人あるに至る。故に(二)緯象、度を失ひ、陰陽、序を謬る。臣知る、(三)封事の已に行はれたるは、之を言ふとも及ぶ無きを。誠に・陛下の是よりして止めんことを欲す。又、采女數千、肉を食ひ綺を衣、脂油粉黛、(四)費計す可からず。鄙諺に言はく、(五)盜は五女の門に過らず」と。帝頗る其の言を采り、爲を貧しくするを以てなり。今、後宮の女、豈に國を貧しくせざらんや」と。

【七六】論云云。後漢書楊震傳には「左校に輪作す」に作る。
【七九】稽。著と同じ。
【八〇】倫。第五倫。光武・明帝に歷事す。
【八一】四七。二十八宿。
【八二】帝。鄧后の故を以つて、遵が羌を破るの功を録し、萬世を封じて南郷侯と爲す。
【八三】緯象。天象なり。
【八四】封事。封爵の事。
【八五】費計。量計なり。
【八六】五女の門は五人の女ある家。五人も女あれば、其の費用のために其の家貧しくなるべし。故に盜もこれを竊はずといふなり。

めに宮女五百餘人を出す。但だ雋に爵關内侯を賜ひ、而して萬世を南郷侯に封ず。(一)帝、從容として侍中陳留の爰延に問ふ、「朕は何如なる主ぞや」と。對へて曰はく、「陛下は漢の(二)中主たり」と。帝曰はく、「何を以てか之を言ふ」と。對へて曰はく、「尚書令陳蕃、事に任ずれば則ち治まり、中常侍・黃門、政に與れば則ち亂る。是を以て、陛下は與に善を爲す可く、與に非を爲す可し」と。帝曰はく、「昔、朱雲、廷にて欄檻を折る。今、侍中は面のあたり朕が違へるを稱す。敬んで闕を聞かん」と。五官中郎將に拜し、大鴻臚に累遷す。會、客星、(三)帝坐を經たり。帝密に以て延に問ふ。延、封事を上りて曰はく、「陛下、河南の尹鄧萬世が(四)龍潛の舊有るを以て、封じて通侯と爲し、恩、公卿よりも重く、惠、宗室よりも豊に加ふるに頃引見して、之と對して(五)博す。上下媿黷し、尊嚴を虧く有り。臣、之を聞く、帝の左右は、政徳を咨る所以なり。善人同に處れば、則ち日に嘉訓を聞き、惡人從つて游べば、則ち日に邪情を生ずと。惟だ陛下、讒諛の人を遠ざけ、審審の士を納れよ。則ち災變除く可からん」と。帝、用ふる能はず。延、病と稱し、免じて歸る。

三年、春、正月丙申、天下に赦す。詔して李固の後嗣を求む。初め(一)固、既に策せられて罷め、

【一】 帝、從容として侍中陳留の爰延に問ふ。
 【二】 中主。中等の主。
 【三】 帝坐。星座の名、太微宮中に在り。
 【四】 龍潛の舊。龍潛は龍の潛伏したる時、即ち天子未だ位に即かざる時をいふ。舊とは舊好なり。
 【五】 通侯。列侯なり。
 【六】 博。博奕の戲。
 【七】 固云云。前卷質帝本初元年に見ゆ。

禍を免れざるを知り、乃ち三子基・茲・變を遣り、皆、郷里に歸らしむ。時に變年十三。姊文姬、同郡の趙伯英の妻たり。二兄の歸るを見、具に事の本を知り、默然として獨り悲みて曰はく、「李氏滅びなん。(三)太公より已來、徳を積み仁を累ねたり。何を以てか此に遇へる」と。密に二兄と謀り、豫め變を藏匿し、託して言はく、「京師に還れり」と。人咸之を信ず。頃く有りて難作。州郡、基・茲を收ふ。皆、獄中に死す。文姬乃ち父の門生王成に告げて曰はく、「君、義を先公に執り、古人の節有り。今、君に委ぬるに(四)六尺の孤を以てす。李氏の存滅は、其れ君に在り」と。成乃ち變を將ひ、江に乗じて東に下り、徐州の界に入り、姓名を變じて酒家の傭と爲し、而して成は市に賣トし、各、異人の爲し、陰に相往來し、十餘年を積む。梁冀既に誅せらるるや、變乃ち本末を以て酒家に告ぐ。酒家、車重を具へて、厚く之を遣る。變、皆、受けず。遂に郷里に還り、喪服を追行す。姊弟相見、悲、傍人を感せしむ。姊、變を戒めて曰はく、「吾が家、血食將に絶えんとし、弟、幸にして・濟はるるを得たるは、豈に天に非ずや。宜しく衆人を杜絶し、妄に往來する勿かるべし。慎んで一言をも梁氏に加ふる無かれ。梁氏に加へば、則ち主上に連なり、禍重ねて至らん。唯だ咎を引かんのみ」と。變謹みて其の誨に従ふ。後、王成卒す。變、禮を以て之を葬り、四節毎に、爲めに上賓の位を設けて祠る。

【一】 固、既に策せられて罷め、
 【二】 太公。祖父李邵をいふ。
 【三】 六尺。年十五以下を謂ふなり。
 【四】 四節。四時なり。

丙午、新豐侯單超卒す。東園の祕器・棺中の玉具を賜ふ。葬るに及びて、五營の騎士を發し、將作大臣、冢塋を起す。其の後、四侯轉た横なり。天下、之が語を爲して曰はく、『左は天を回らし、具は獨坐し、徐は臥虎、唐は雨墮』と。皆競うて第宅を起し、華侈を以て相尙ふ。其の僕從、皆、牛車に乗りて、列騎を從ふ。兄弟姻戚、州に宰とし郡に臨み、百姓を辜較し、盜と異なる無く、唐、天下に徧し。民、命に堪へず、故に多く盜賊を爲す。中常侍侯覽・小黃門段珪、皆、田業有り、濟北の界に近し。僕從賓客、行旅を劫掠す。濟北の相滕延、一切收捕し、數十人を殺し、尸を路衢に陳ぬ。覽・珪、事を以て帝に訴ふ。延、坐して徵せられて廷尉に詣り、免せらる。左愷の兄勝、河東の太守と爲る。皮氏の長京兆の趙岐、之を恥ぢ、即日、官を棄てて西に歸る。唐衡の兄玆、京兆の尹と爲る。素より岐と隙有り、岐の家屬宗親を收へ、陥るるに重法を以てし、盡く之を殺す。岐、難を四方に逃れ、歴ざる所靡く、自ら姓名を匿し、餅を北海の市中に賣る。安丘の孫嵩、見て之を異とし、載せて與に俱に歸り、複壁の中に藏す。諸唐死するに及び、赦に遇うて乃ち敢て出づ。

【五】玉具。玉匣。

【六】左云云。左愷は権力能く天を回らし、具瓊は驕貴なること偶無く、徐璜は臥せる虎の如く、人敢てこれに撓るる無く、唐衡は性急暴にして、雨の墮つるが如く、常處有る無し。

【七】辜較。罪に陥れ、財産を奪ふ也。較は權と通ず。

【八】皮氏。縣の名、河東郡に屬す。故城は今の山西省河東道河津縣の西に在り。

【九】趙岐。今の孟子の古註は岐の註する所なり。

【一〇】安丘。縣の名、北海郡に屬す。今の山東省膠東道安丘縣の地。

【一一】複壁。二重になしたる壁なり。

閏月、西羌の餘衆、復た燒何の大豪と與に、張掖に寇し、晨に校尉段熲の軍に薄る。熲、馬を下りて大に戦ひ、日中に至り、刀折れ矢盡く。虜も亦引き退く。熲、之を追ひ、且つ鬪ひ且つ行き、晝夜相攻め、肉を割き雪を食ひ、四十餘日にして、遂に積石山に至る。塞を出づること二千餘里。燒何の大帥を斬り、其餘衆を降して還る。

夏五月甲戌、漢中、山崩る。

六月辛丑、司徒祝恬薨す。

秋七月、司空盛允を以て司徒と爲し、太常虞放を司空と爲す。

長沙の蠻・反し、益陽に屯す。零陵の蠻、長沙に寇す。

九眞の餘賊、日南に屯據し、衆轉た強盛なり。詔して、復た桂陽の太守夏方を拜して交趾の刺史と爲す。方、威惠素より著はる。冬十一月、日南の賊二萬餘人、相率ひて方に詣りて降る。

勅姐・零吾種の羌、允街を圍む。段熲、撃ちて之を破る。
 泰山の賊叔孫無忌、都尉侯章を攻め殺す。中郎將宗資を遣はし、討ちて之を破る。詔して、皇甫規を徵し、泰山の太守に拜す。規、官に到り、廣く方略を設く。寇虜悉く平ぐ。

【一三】積石山。今の青海の南境に在り。
 【一四】允街。縣の名、故城は今の甘肅省甘涼道平番縣の南に在り。

四年、春正月辛酉、南宮の嘉德殿、火あり。戊子、丙署、火あり。大に疫す。

二月壬辰、武庫、火あり。

司徒盛允・免せらる。大司農種暲を以て司徒と爲す。

三月、太尉黃瓊・免せらる。

夏四月、太常沛國の劉矩を以て太尉と爲す。初め矩、雍丘の令と爲り、禮讓を以て民を化する。訟ふる者有れば、常に之を前に引き、耳を提げて訓告して以て爲はく、『忿恚をば忍ぶ可し。縣官には入る可からず』と。歸りて更に思はしむ。訟ふる者、之に感じ、輒ち各罷め去る。

甲寅、河間の孝王の子參戸亭侯博を封じて任城王と爲し、孝王の後を奉せしむ。

五月辛酉、星有り。心に孛す。

丁卯、原陵の長壽門、火あり。

己卯、京師、雹雨る。

六月、京兆・扶風及び涼州、地震ふ。

庚子、岱山及び博の尤來山、竝に覆裂す。

己酉、天下に赦す。

司空虞放・免せらる。前の太尉黃瓊を以て司空と爲す。

隗爲屬國の夷、百姓を寇鈔す。益州の刺史山昱、撃ちて之を破る。

零吾の羌、先零の諸種と與に反し、三輔に寇す。

秋七月、京師、雩す。公卿已下の奉を減じ、王侯の半租を貢り、關内侯・虎賁・羽林・緹騎・營士・五大夫を占賣すること、錢各差有り。

九月、司空黃瓊・免せらる。大鴻臚東萊の劉寵を以て司空と爲す。寵、嘗て會稽の太守と爲り、煩苛を簡除し、非法を禁察す。郡中大に治まる。徴せられて將作大匠と爲るや、山陰縣に五六の老叟有り、若邪の山谷の間より出で、人ごとに百錢を齎して以て寵を送りて曰はく、『山谷の鄙生、未だ嘗て郡朝を識らず。他の守の時、吏、民間に發求すること、夜に至るまで絶えず、或は狗吠えて夕を竟り、民、安んずるを得ざりき。明府が車を下りてより以來、狗、夜吠えず。民、吏を見ず。年老いて聖明に遭値す。今聞く、當に棄て去らるべしと。故に自ら扶けられて奉送す』と。寵曰はく、『吾が政は、何ぞ能く公の言に及ばんや。父老を勤苦せしむ』と。爲めに人ごとに一大錢を選びて之を受く。

- 【一】 丙署。官署の名、長七人、秩四百石、黃綬の官者これと爲る。中宮の別處を主る。
- 【二】 雍丘。縣の名、陳留郡に屬す。故城は今の河南省開封道杞縣に在り。
- 【三】 心。星座の名、二十八宿の一。
- 【四】 原陵。光武の陵。
- 【五】 博は縣の名。尤來山は一名徂徠山。今の山東省濟南道泰安縣の東南に在り。

- 【六】 永初四年、隗爲南部都尉を以て隗爲屬國都尉と爲し、朱提・漢陽二縣を領せしむ。
- 【七】 雩。雨乞ひの祭。
- 【八】 貢。假借なり。
- 【九】 若邪。山の名、今の浙江省會稽道紹興縣の南に在り。
- 【一〇】 郡朝。郡の政治を爲す所なり。
- 【一一】 父老云云。遠方よりわざわざ此處まで御送り下されて御苦勞なりとの意。

冬(肝)先零沈氏の羌、諸種の羌と與に、并涼二州に寇す。校尉段熲、湟中の義従を將ゐて之を討つ。涼州の刺史郭閼、其の功を共にするを貪り、熲の軍を稽固し、進むを得ざらしむ。義従、役久しくして郷舊を戀ひ、皆悉く叛きて歸る。郭閼、罪を熲に歸す。熲、坐して徵せられて獄に下され、左校に輪作す。濟南の相胡閼を以て代りて校尉と爲す。胡閼、威略無し。羌、遂に陸梁し、營場を覆没し、轉た相招き結び、諸郡を唐突す。寇患轉た盛なり。泰山の太守皇甫規、上疏して曰はく、「今、猾賊、滅に就き、泰山略ぼ平かなり。復た聞く、羣羌竝に皆反逆すと。臣、邠岐に生長し、年五十有九、昔、郡吏と爲り、再び叛羌を更たり。其の事を籌り、誤りて中りたるの言有り。臣素より痼疾有り、恐らくは犬馬の齒窮まり、大恩に報いざらんことを。願はくは冗官を乞ひ、單車一介の使に備はり、三輔を勞來し、國の威澤を宣べ、習ふ所の地形兵執を以て、諸軍を佐助せんことを。臣、孤危の中に窮居し、坐に郡將を觀ること、已に數十年、鳥鼠より東岱に至るまで、其の病一なり。猛敵を求むるを力むるは、清平に如かず。孫吳を明らむるを勤むるは、未だ

- 【一】 義従。湟中に、義従胡あり、即ち小月氏の一部屬なり。
- 【二】 稽固。停留せしむる也。
- 【三】 陸梁。ほしいままに、あばれまはる。
- 【四】 唐突。觸れ犯す也。
- 【五】 豫。豫め云云。馬賢が必ず敗れんことを知りしを云ふ。五十二卷順帝永和五年に見ゆ。
- 【六】 郡將。即ち郡守なり。
- 【七】 鳥鼠。山の名、先零の羌の寇鈔する處。今の甘肅省蘭山道渭源縣の西に在り。
- 【八】 東岱。即ち泰山。
- 【九】 猛敵云云。猛敵を撃破せんとするは、撫するに清平の政を以てするに如かず。兵書を明習するは、郡守が法を奉じてこれをして反する無からしむるに如かず。

法を奉ずるに若かず。前變未だ遠からず、臣誠に之を慮ふ。是を以て職を越えて、其の區區を盡す」と。詔して、規を以て中郎將と爲し、節を持し、關西の兵を監し、零吾等を討たしむ。十一月、規、羌を撃ち、之を破る。斬首八百級。先零諸種の羌、規の威信を慕ひ、相勸めて降る者十餘萬。

五年、春正月壬午、南宮の丙署、火あり。

三月、沈氏の羌、張掖・酒泉に寇す。皇甫規、先零諸種の羌を發し、共に隴右を討つ。而して道路隔絶し、軍中大に疫し、死する者十に三四。規親ら庵廬に入り、將士を巡視す。三軍感悦す。東羌遂に使を遣はして降らんと乞ふ。涼州復た通ず。是より先、安定の太守孫雋、受取して狼藉なり。屬國都尉李翁、督軍御史張稟、多く降羌を殺す。涼州の刺史郭閼、漢陽の太守趙熹、竝に老弱にして、職に任へず、而して皆、權貴に倚恃し、法度に遵はず。規到り、悉く其の罪を條奏し、或は免じ或は誅す。羌人、之を聞き、翕然として善に反り、十餘萬口、復た規に詣りて降る。

- 【一】 庵廬。庵は草屋、廬は寄舎。
- 【二】 督軍御史。御史を以て軍を督する也。
- 【三】 恭陵。安帝の陵。
- 【四】 康陵。廢帝の陵。

夏四月、長沙の賊、桂陽・蒼梧に寇す。乙丑、恭陵の東闕、火あり。戊辰、虎賁の掖門、火あり。五月、康陵の園寢、火あり。

長沙の零陵の賊、桂陽・蒼梧・南海に入る。交趾の刺史及び蒼梧の太守、風を望みて逃げ奔る。御史中丞盛脩を遣はし、州郡の募兵を督し、之を討たしむ。克つ能はず。

乙亥、京師、地震ふ。

甲申、中藏府の丞祿署、火あり。秋七月己未、南宮の承善闈、火あり。

烏吾の羌、漢陽に寇す。隴西・金城諸郡の兵、討ちて之を破る。

艾縣の賊、長沙の郡縣を攻め、益陽の令を殺す。衆、萬餘人に至る。

謁者馬睦、荊州の刺史劉度督して之を撃ち、軍敗れ、睦・度・奔走す。零陵の蠻も亦反す。冬十月、武陵の蠻・反し、江陵に寇す。南郡の太守李肅、

奔走す。主簿胡爽、馬首を叩へて諫めて曰はく、『蠻夷、郡に儆備無きを見る、故に敢て間に乗じて進む。明府、國の大臣と爲り、城を連ぬること千里、旗を擧げ鼓を鳴らさば、聲に應ずるもの十萬あらん。奈何ぞ符守の重きを委てて、逋逃の人と爲るや』と。肅、刃を抜きて爽に向つて曰はく、『掾、促かに去れ。太守、今、急なり。何ぞ此の計に暇あらん』と。爽、馬を抱きて固く諫む。肅遂に爽を殺して走る。帝、之を聞き、肅を徵して棄市し、

度・睦は死一等を減じ、爽の門閭を復し、家一人を拜して郎と爲す。尙書朱穆、右校令山陽の度尙を擧げて荊州の刺史と爲す。辛丑、太常馮緄を以て車騎將軍と爲し、兵十餘萬を將るて、武陵の蠻

を討たしむ。是より先、遣はす所の將帥は、宦官、多く陷るるに軍資を折耗するを以てし、往仕、罪に抵る。緄、中常侍一人を請うて軍の財費を監せしめんことを願ふ。尙書朱穆、奏す、『緄、財を以て自ら嫌ふ。大臣の節を失す』と。詔有り、効する勿からしむ。緄、前の武陵の太守應奉を請うて

與に俱にす。(奉)從事中郎に拜せらる。十一月、緄の軍、長沙に至る。賊、之を聞き、悉く營に詣り、降らんと乞ふ。進みて武陵の蠻夷を討つ。斬首四千餘級、降を受くること十餘萬人。荊州平定す。詔書して錢一億を賜ふ。固く讓りて受けず。振旅して京師に還る。功を應奉に推し、薦めて以て司隸校尉と爲し、而して上書して骸骨を請ふ。朝廷、許さず。

滇那の羌、武威・張掖・酒泉に寇す。太尉劉矩、免せらる。太常楊秉を以て太尉と爲す。

皇甫規、節を持って將と爲り、還りて郷里を督す。既に他の私惠無く、而して擧奏する所多く、又、宦官を惡絶し、與に交通せず。是に於て、中外竝に怨み、遂に共に規を誣ふ、『羣羌に貨賂して、其れをして文降せしむ』と。帝、璽書して誚讓すること相屬く。規、上書して自ら訟へて曰はく、『四年の秋、戎醜、蠢戾し、舊都懼駭し、朝廷西顧す。臣、國の威靈を振ひ、羌戎稽首し、省く所の費、一億以上なり。以爲へらく、忠臣の義は、敢て勞を告げずと。故に片言を以て自ら微効に及ば

【五】 中藏府。宮中の幣帛金銀諸貨物を掌る。

【六】 艾縣。豫章郡に屬す。今の江西省萍陽道修水縣の西。

【七】 復。其の賦役を除く也。

【八】 右校令。右工徒を掌る、秩六百石、將作大匠に屬す。

【九】 惡絶。にくみ、絶つ。

【一〇】 文降。文簿を以て表面だけ降服することにして、眞心より降れるに非ざるをいふ。

【一一】 蠢戾。蠢動乖戾なり。

【一二】 舊都。長安なり。

すを恥づ。然れども (三) 先事に比方するに、庶はくは罪悔を免れんと。前に州界を踐むや、先づ孫雋・李翕・張稟を奏し、師を旋らして南征するや、又、郭闕・趙熹を上し、其の過惡を陳べ、(四) 大辟を (五) 執據す。凡そ此の五臣は、支黨、國に半し、其餘、墨綬より、下は小吏に至るまで、連及する所の者、復た百餘有り。吏は將の怨を報ゆるに託し、子は父の恥を復するを思ひ、贄を載せて車を馳せ、糧を懷きて歩走し、交、豪門に構へ、競うて謗讟を流して云はく、臣私に諸羌に報じ、(六) 讎ふに錢貨を以てすと。若し臣、私財を以てすとならば、則ち家、擔石無し。如し物、官より出づとならば、則ち文簿、考し易し。就ひ臣愚惑にして、信に言者の如くなりとも、前世尙ほ (七) 匈奴に遺るに宮姬を以てし、(八) 烏孫を鎮むるに公主を以てせり。今、臣は但だ千萬を費し、以て叛羌を懷けしとならば、則ち良臣の才略、兵家の貴ぶ所、將た何の罪有りて、義に負き理に違はんや。永初より以來、將出づること少からず、(九) 軍を覆せること五有り、資を動かすこと巨億、(一〇) 車を旋すとき完封し、之を權門に寫す有り、而るに名成り功立ち、厚く爵封を加へらる。今、臣還りて本土を督し、諸郡を糾擧し、

- 【三】 先事。前輩の敗軍をいふなり。
- 【四】 大辟。大法なり。
- 【五】 執據。とり、まもる。
- 【六】 讎。償ふ也。
- 【七】 匈奴云云。元帝、王昭君を以て呼韓邪單子に賜ひしをいふ。
- 【八】 烏孫云云。武帝、江都王建の女細君を以て烏孫王昆莫に妻せしをいふ。
- 【九】 軍云云。鄧鸞、冀西に敗れ、任尙、平襄に敗れ、司馬欽、丁奚城に敗れ、馬賢、射姑山に敗れ、趙冲、鶴陰河に敗る。
- 【一〇】 車云云。師を旋すの日、朝廷の軍に供するの巨額の金幣を以て、封印を發かすしてこれを權門に輸す者有り。

交を絶ち親を離れ、舊故を戮辱す。衆謗陰害あるは、固より其れ宜なり」と。帝乃ち規を徵して還らしめ、議郎に拜す。功を論じて當に封せらるべし。而して中常侍徐璜・左悺、從つて貨を求めんと欲し、數、賓客を遣はし、就きて功状を問ふ。規、終に答へず。璜等忿怒し、陥るるに (三) 前事を以てし、之を吏に下す。官屬、賦斂して請謝せんと欲す。規、誓つて聽かず。遂に餘寇絶えざるを以て、坐して廷尉に繋かれ、論せられて左校に輸す。諸公及び太學生張鳳等、三百餘人、闕に詣りて之を認ふ。赦に會うて家に歸る。

- 【三】 前事。誣毀の事。
- 【一】 平陵。和帝の陵。

六年、春二月戊午、司徒种暠薨す。
三月戊戌、天下に赦す。衛尉潁川の許栩を以て司徒と爲す。
夏四月辛亥、康陵の東署、火あり。
五月、鮮卑、遼東屬國に寇す。
秋七月甲申、(二) 平陵の園寢、火あり。
桂陽の賊李研等、郡界に寇す。武陵の蠻復た反す。太守陳奉、討つて之を平ぐ。宦官、素より馮緄を惡む。八月、緄、軍還りて盜賊復た發するに坐し、免せらる。
冬十月丙辰、上、廣成に校獵し、遂に函谷關・上林苑に幸す。光祿勳陳蕃、上疏して諫めて曰は

く、『安平の時に遊敗は宜しく節有るべし。況んや今三空の尾有るをや。田野空しく、朝廷空しく、倉庫空しく。加之、兵戎未だ戢まらず、四方離散す。是れ陛下、心を焦し、顔を毀ち、坐して以て旦を待つの時なり。豈に宜しく旗を揚げ武を耀かし、心を輿馬の觀に馳すべけんや。又、前秋、雨多く、民始めて麥を種う。今、其の勸種の時を失ひ、而して禽を驅り路を除ふの役に給せしむるは、賢聖の民を恤ふるの意に非ざるなり』と。書奏す。納れられず。

十一月、司空劉寵・免せらる。十二月、衛尉周景を以て司空と爲す。景は榮の孫なり。時に宦官方に熾なり。景、太尉楊秉と與に上言す、『内外の吏職、多く其の人に非ず。舊典には、中臣の子弟は、位に居り、執を秉るを得ず。而るに今、枝葉・賓客、職署に布列し、或は年少の庸人、守宰を典據す。上下忿患し、四方愁毒す。舊章を遵用し、貪殘を退け災謗を塞ぐべし。請ふ、司隸校尉・中二千石・城門・五營の校尉・北軍中候に下し、各所部を實覈して、應に當に斥け罷むべきをば、自ら狀を以て言はしめ、三府・廉察し、遺漏有らば、續いで上さしめん』と。帝、之に従ふ。是に於て、刺史羊亮等五十餘人、或は死し或は免せらる。天下、肅然たらざる莫し。

- 【一】 三空の尾。下文の、田野空しく、朝廷空しく、倉庫空しきをいふ。
- 【二】 顔を毀つ。面に憂色あるをいふ。
- 【三】 坐して以て旦を待つ。孟子離婁篇に見ゆ。周公の故事なり。
- 【四】 司隸校尉は三輔・三河・弘農を部す。中二千石は列卿なり。各其の屬を率ふる。城門校尉は十二城門司馬門候を部す。五營校尉は屯騎・越騎・步兵・長水・射聲なり。各司馬員吏あり。北軍中候は五營を監するを掌る。

詔して、皇甫規を徵して度遼將軍と爲す。初め張奐、梁冀の故吏なるに坐し、官を免じて禁錮せらる。凡そ諸の交舊、敢て爲めに言ふもの莫し。唯だ規、薦擧すること、由りて、武威の太守に拜せらる。規が度遼と爲るに及びて、營に到りて數月、上書して奐を薦む、『才略兼優なり。宜しく、元帥を正し、以て衆望に従ふべし。若し猶ほ愚臣宜しく、事を擧ぐるに充たるべしと謂はば、願はくは冗官を乞ひ、以て奐の副と爲らん』と。朝廷、之に従ひ、奐を以て規に代りて度遼將軍と爲し、規を以て使匈奴中郎將と爲す。

- 【七】 元帥。度遼將軍をいふ。
- 【八】 事を擧ぐるは、後漢書皇甫規傳には、軍事に作る。
- 【九】 中常侍は秦の官なり。漢興りて或は士人を用ひ、銀瑤左貂す。光武以後、専ら宦者を任じ、右貂金瑤す。
- 【一〇】 參選。まじへ、えらぶ。
- 【一一】 貂璫。中常侍の冠の裝飾なり。璫は金を以てこれを爲り、冠の前に當て、附くるに金璫を以てす。
- 【一二】 常伯。侍中なり。

西州の吏民、闕を守り、前の護羌校尉段熲の爲めに冤を訟ふる者、甚だ衆し。會、滇那等の諸種の羌、益熾に、涼州幾ど亡びんとす。乃ち復た熲を以て護羌校尉と爲す。

尚書朱穆、宦官の恣横なるを疾み、上疏して曰はく、『漢の故事を按ずるに、中常侍は、士人を參選す。建武以後は、乃ち悉く宦者を用ふ。延平より以來、浸く益々貴盛にして、貂璫の飾を假り、常伯の任に處り、天朝の政事、一に其の手を更、權、海内を傾け、寵貴、極り無く、子弟・親戚、竝に榮任を荷ひ、放濫驕溢にして、能く禁禦するもの莫く、天下を窮破し、小民を空竭す。愚臣以爲へらく、悉く罷省し、往初に遵復し、更に海内の清淳の士の國體に明達

せる者を選び、以て其の處を補ふ可し。即ち兆庶(二)黎萌、聖化を蒙被せん」と。帝、納れず。後、穆、進見するに因りて、復た口陳して曰く、「臣聞く、漢家の舊典には、侍中・中常侍各一人を置き、尙書の事を(四)省せしめ、黃門侍郎一人、書奏を傳發す。皆、(五)姓族を用ふ。和熹太后が女主を以て制を稱せしより、公卿に接せず、乃ち閹人を以て常侍と爲し、小黃門、命を兩宮に通ず。此より以來、權、人主を傾け、天下を窮困す。宜しく皆罷遣し、博く耆儒宿德を選び、政事に(六)與參せしむべし」と。帝怒りて、應へず。穆、伏して、肯て起たず。左右「出でよ」と傳ふ。良久しくして、乃ち趨りて去る。此より、中官數、事に因りて詔と稱し、之を詆毀す。穆、素より剛にして、意を得ず。居ること幾ばくも無くして、憤懣して疽を發して卒す。

- 【一】 黎萌。黎民なり。
- 【二】 省。省覽する也。
- 【三】 姓族。士人の族望ある者なり。
- 【四】 與參。あづかり、まじはる。

卷の第五十五

漢紀四十七

孝桓皇帝中

延熹七年、春二月丙戌、(一)邠郷の忠侯黃瓊、薨す。將に葬らんとするや、四方の遠近の名士、會する者六七千人。初め瓊が家に教授するや、徐穉、之に従ひ、大義を咨訪す。瓊貴きに及びて、穉絶えて復た交はらず。是に至りて、穉往きて之を弔ひ、進みて、(二)酌し哀哭して去る。人、知る者莫し。諸名士、(三)喪宰に推問す。宰曰はく、「先時、一書生有りて來り、衣麤薄にして、之を哭すること哀し。姓字を記せず」と。衆曰はく、「必ず、(四)徐孺子ならん」と。是に於て、能く言ふ者陳留の茅容を選び、輕騎して之を追はしむ。塗に及ぶ。容、爲めに酒を沽ひ肉を市ふ。穉爲めに飲食す。容、國家の事を問ふ。穉、答へず。乃ち之に答ふ。容還り、以て諸を人に語る。或るひと曰はく、「(五)孔子云はく、(六)與に言ふ可くして與

- 【一】 延熹七年。西紀一六四年なり。
- 【二】 酌。酒を地に沃ぎて祭るなり。
- 【三】 喪宰。喪事を典る者。
- 【四】 徐孺子。徐穉、字は孺子。
- 【五】 孔子云云。論語衛靈公篇に見ゆる語。

に言はざれば、人を失ふ」と。然らば、則ち孺子は其れ人を失へるか」と。太原の郭泰曰はく、「然らず。孺子の人と爲りば、清潔高廉にして、飢うれども食はしむるを得可からず、寒ゆれども衣するを得可からず。而るに季偉の爲めに酒を飲み肉を食ふ。此れ、已に季偉の賢を知るが爲めの故なり。國事を答へざる所以は、是れ其の智は及ぶ可く、其の愚は及ぶ可からざるなり」と。泰は、博學にして、善く談論す。初めて雒陽に遊ぶや、時の人識るもの莫し。陳留の符融、一見して嗟異し、因つて以て河南の尹李膺に介す。膺與に相見て曰はく、「吾、士を見ること多し。未だ郭林宗の如き者有らざるなり。其の聰識通朗、高雅密博なること、今の華夏に、其の儔を見ること鮮し」と。遂に與に友と爲る。是に於て、名京師に震ふ。後、郷里に歸るや、衣冠の諸儒、送りて河上に至る。車數千兩。膺、唯だ泰と舟を同じうして濟る。衆賓、之を望み、以て神仙と爲す。泰、性、人を知るに明かに、好みて士類を獎訓し、郡國に周遊す。茅容、年四十餘にして、野に耕し、等輩と與に雨を樹下に避く。衆、皆、夷踞して相對す。容獨り、危坐して愈々恭し。泰見て之を異とし、因つて請うて寓宿す。旦日、容、雞を殺して饌を爲る。泰謂へらく、「己の爲めに設くと。容、半を分ちて母に食はしめ、餘の半は皮置し、自ら草蔬を以て客

- 【六】 季偉。茅容、字は季偉。
- 【七】 其の智云云。論語公治長篇に見ゆ。孔子、齊武子を評する言。
- 【八】 介。紹介なり。
- 【九】 郭林宗。郭泰、字は林宗。
- 【一〇】 華夏。中國なり。
- 【一一】 獎訓。獎勵訓誨なり。
- 【一二】 夷踞。あぐら。
- 【一三】 危坐。正しく坐する也。
- 【一四】 皮。食物を藏する棚。

と同一に飯す。泰曰はく、「卿は賢なるかな、遠し。郭林宗すら、猶ほ三牲の具を減じ、以て旅に供す。而るに卿は此の如し。乃ち我が友なり」と。起ちて之に對して揖し、勸めて學に從はしむ。〔容〕卒に盛徳と爲る。鉅鹿の孟敏、太原に客居し、甑を荷うて地に墮し、顧みずして去る。泰見て其の意を問ふ。對へて曰はく、「甑已に破れぬ。之を視るとも何の益あらん」と。泰、以て分決有りと爲し、之と言ひ、其の徳性を知り、因つて勸めて遊學せしむ。〔敏〕遂に名を當世に知らる。陳留の申屠蟠、家貧しく、傭はれて漆工と爲る。郾陵の庾乘、少きとき縣廷に給事し、門士と爲る。泰見て之を奇とす。其の後、〔乘〕皆、名士と爲る。自餘或は屠沽・卒伍より出で、泰の獎進するに因りて名を成せる者、甚だ衆し。陳國の童子魏昭、泰に請うて曰はく、「經の師は遇ひ易く、人の師は遭ひ難し。願はくは左右に在りて、灑掃に供給せんことを」と。泰、之を許す。泰嘗て佳ならず、昭に命じて粥を作らしむ。粥成り、泰に進む。泰、之を呵して曰はく、「長者の爲めに粥を作り、意敬を加へず、食ふ可からざらしむ」と。杯を以て地に擲つ。昭更に粥を爲り、重ねて進む。泰復た之を呵す。此の如くすること三たび。昭、姿容、變する無し。泰乃ち曰はく、「吾、始め子の面を見る。而今にして後、

- 【一五】 遠し。常人を去ること遠しとの意。
- 【一六】 三牲の具。親を養ふの料理。孝經に曰はく、「日に三牲の養を用ふ」と。
- 【一七】 賓旅。賓客。
- 【一八】 甑。瓦製の炊ぐ器。
- 【一九】 門士。門番。なり。
- 【二〇】 經の師。經學を教授する師。
- 【二一】 人の師。身を謹み行を修め、以て師範とするに足る者なり。
- 【二二】 佳ならず。微しく疾あるをいふ。

卿の心を知るのみ」と。遂に友として之を善くす。陳留の左原、郡學生たり。法を犯して斥けらる。泰、諸に路に遇ひ、爲めに酒肴を設けて以て之を慰め、謂つて曰はく、「昔、顔涿聚は梁甫の巨盜、

段干木は晉國の 大駟なりしが、卒に齊の忠臣・魏の名賢と爲れり。 顔涿聚は梁甫の巨盜、

過無き能はず。況んや其の餘をや。慎んで、恚恨する勿かれ。躬を責めんのみ」と。原、其の言を納れて去る。或は泰が惡人を絶たざるを譏

る者有り。泰曰はく、「人にして不仁なるを、之を疾むこと已甚しくば、亂せん」と。原後忽ち更に忿を懷き、客を結びて、諸生に報いんと欲す。其の日、泰、學に在り。原、前言に負く

を愧ぢ、因つて遂に罷め去る。後、事露はれ、衆人咸謝服す。或るひと范滂に問うて曰はく、「郭林宗は何如なる人ぞや」と。滂曰はく、「隠るれども親に違はず、貞なれども俗を絶たず、天子

も臣とするを得ず、諸侯も友とするを得ず。吾、其の它を知らず」と。泰嘗て有道に擧げらる。就かす。同郡の宋冲、素より其の徳に服し、以爲へらく。漢元より以來、未だ 其の匹を見ずと。嘗て

【三】 顔涿聚。梁父の大盜なり。孔子に學ぶ。後、齊に事へて大夫となる。

【四】 段干木。魏の文侯に敬重せられたる賢人。

【五】 大駟。わるがしこき仲買人なり。

【六】 蓬瑗。蓬伯玉。論語憲問篇に曰はく、蓬伯玉、人を孔子に使す。孔子、之に問うて曰はく、夫子は何をか爲すと。對へて曰はく、夫子、其の過を寡くせんと欲して、未

だ能はざるなり」と。

【七】 顔回。論語雍也篇に曰はく、顔回といふ者あり。學を好み、怒を遷さず、過を貳たびせず」と。

【八】 人云。論語泰伯篇に見ゆ。孔子の言。不仁の人は、當に風を以てこれを化すべし。これを疾むこと甚だしきときは、是れ益々亂を爲さしむる也。

【九】 漢元。漢初なり。

【一〇】 匹。匹儔。ならび。

之に・仕へんことを勸む。泰曰はく、「吾、夜は 乾象を觀、晝は人事を察するに、天の廢する所は、支ふ可からざるなり。吾、將に優游して歳を卒へんとするのみ」と。然れども猶ほ京師に 周旋し、誨誘して息まず。徐穉、書を以て之を戒めて曰はく、「大木の將に顛れんとするは、一繩の維ぐ所に非ず。何爲れぞ 栖栖として、寧處するに違あらざる」と。泰・感寤して曰はく、「謹んで斯の言を拜し、以て師表と爲さん」と。濟陰の黃允、雋才を以て名を知る。泰見て謂つて曰はく、「卿は高才、人に絶る。偉器を成すに足る。年、四十を過ぎば、聲名著れん。然れども此の際に至りて、當に深く自ら匡持すべし。然らずんば、將に之を失はんとす」と。後、司徒袁隗、從女の爲めに姻を求めんと欲す。允を見

て歎じて曰はく、「婿を得ることは是の如くならば、足りなん」と。允聞きて 其の妻を黜遣す。妻請うて大に宗親を會して別を爲し、因つて衆中に於て、袂を攘げて、允の隱慝十五事を數へて去る。允、此を以て時に廢てらる。初め允、漢中の晉文經と、並に其の才智を恃み、名を遠近に曜かす。徵辟せらるれども就かず。病を京師に療するに託言し、賓客を通せず。公卿大夫、門生を遣はし、旦暮、疾を問ふ。郎吏、其の門に雜坐すれども、猶ほ見るを得ず。三公の辟召する所の者は、輒ち以て之を詢訪し、臧否する所に隨ひ、以て與奪を爲す。符融、李膺に謂つて曰はく、「二子、行業、聞ゆる無く、豪桀を以て自ら置き、

漢孝桓皇帝延熹七年

【一】 乾象。天象なり。

【二】 周旋。周遊なり。

【三】 栖栖。うるつきまばる貌なり。

【四】 從女。めひ。

【五】 其の妻云云。其の妻を黜け、袁に嫁たらんと欲するなり。

漢孝桓皇帝延熹七年

六六五

遂に公卿をして病を問ひ、王臣をして門に坐せしむ。融、恐る、其の小道、義を破り、空譽、實に違はんことを。特に宜しく察すべし」と。膺、之を然りとす。二人、是より、名論漸く衰へ、賓徒稍く省し。旬月の間に、慙歎して逃れ去る。後、竝に罪を以て廢棄せらる。陳留の仇香、至行純嘿なり。郷黨、知る者無し。年四十にして、蒲亭の長と爲る。民に陳元といふもの有り、獨り母と與に居る。母、香に詣り、元の不孝を告ぐ。香驚きて曰はく、「吾、近日、元の舎に過れるに、廬落整頓し、耕耘するに時を以てす。此れ惡人に非ず。當に是れ教化未だ至らざるべきのみ。母、寡を守りて孤を養ひ、身を苦しめて老を投ず。奈何ぞ一旦の忿を以て歴年の勤を棄てんや。且つ、母、人の遺孤を養ひ、成濟する能はずんば、若し死者、知る有らば、百歳の後、當に何を以てか亡者を見るべき」と。母涕泣して起つ。香乃ち親ら元の家に到り、爲めに人倫孝行を陳べ、譬すに禍福の言を以てす。元、感悟し、卒に孝子と爲る。考城の令河内の王奐、香を主簿に署し、之に謂つて曰はく、「聞く、蒲亭に在るとき、陳元をば罰せずして之を化せりと。鷹鷲の志を少く無きを得んや」と。香曰はく、「以爲へらく、鷹鷲は鷹鷲に若かずと。故に爲さざりしなり」と。奐曰はく、「枳棘の林は、鷲鳳の集まる所に非ず。百里は大賢の路に非ず」と。乃ち一月の奉を以て香に資し、太學に入ら

【一】省。減する也。

【二】蒲亭。陳留郡考城縣（今の河南省開封道考城縣）に屬す。

【三】廬落。落は居なり。住居。

【四】鷹鷲。猛鳥、鷲撃を以て事と爲す。無禮なる者を見ればこれを誅するに喩ふ。

【五】百里。時に奐、縣令たり。故に自ら百里と稱す。

【六】奉。俸給なり。

しむ。郭泰、符融、刺を齎して之に謁し、因つて留宿す。明旦、泰起ちて牀を下り、之を拜して曰はく、「君は泰の師なり、泰の友に非ざるなり」と。香、學畢り、郷里に歸る。宴居に在りと雖も、必ず衣服を正しくす。妻子、之に事ふること、嚴君の若し。妻子、過有れば、冠を免じて自ら責む。妻子、庭に謝して過を思ふ。香、冠し、妻子乃ち敢て堂に升る。終に其の喜怒聲色の異なるを見ず。微辟に應せず、家に卒す。

三月癸亥、鄂に隕石あり。
夏五月己丑、京師、雹雨る。
荆州の刺史度尙、諸の蠻夷を募り、艾縣の賊を撃ち、大に之を破る。
降る者數萬人。桂陽の宿賊卜陽・潘鴻等、逃げて深山に入る。尙、窮追すること數百里、其三屯を破り、多く珍寶を獲たり。陽・鴻の黨衆猶は盛なり。尙、之を撃たんと欲す。而るに士卒、富めるに驕り、鬪志有る莫し。尙計るらく、之を緩くせば則ち戦はず、之に逼らば必ず逃亡せんと。乃ち宣言す、「卜陽・潘鴻、賊を作すこと十年、攻守に習へり。今、兵、寡少にして、未だ進む可きこと易からず。當に諸郡の發する所悉く至るを須ちて、乃ち力を并せて之を攻むべし」と。申ねて軍中に令し、射獵するを恣にし聽す。兵士喜悅し、大小皆出づ。尙乃ち密に親しむ所の客をして潛に其の營を焚かしめ、珍積皆盡く。獵者來り還り、泣涕

【一】刺。名刺。

【二】宴居。間暇無事の時。

【三】鄂縣。右扶風に屬す。今、陝西省關中道に屬す。

【四】宿賊。久しく賊を爲す者なり。

漢孝桓皇帝延熹七年

せざるもの莫し。尙、人人慰勞し、(ルチ以テ)深く自ら咎責し、因つて曰はく、『卜陽等の財寶は、數世を富ますに足る。諸卿、但だ力を并せざるのみ。亡ふ所は少少なり。何ぞ意に介するに足らん』と。衆咸憤踊す。尙、敕めて、馬に秣かひ葶食せしめ、明旦、徑に賊屯に赴く。陽・鴻等、自ら、深固なりと以ひ、復た備を設けず。吏士、銳に乘じ、遂に破りて之を平ぐ。尙、兵を出して三年、羣寇悉く定まる。右郷侯に封せらる。

冬十月壬寅、帝、南に巡る。庚申、章陵に幸し、戊辰、雲夢に幸し、漢水に臨み、還りて新野に幸す。時に公卿・貴戚、車騎萬計、徵求の費役、勝げて極む可からず。護駕從事桂陽の胡騰・上言す、『天子は外無し。乘輿の幸する所は、即ち京師と爲す。臣請ふ、荊州の刺史を以て司隸校尉に比し、臣自ら、都官從事に同じくせん』と。帝、之に従ふ。是より、肅然として、敢て妄に郡縣を干擾するもの莫し。帝、南陽に在るとき、左右、竝に姦利を通ず。詔書して、多く人を除して郎と爲す。太尉楊秉・上疏して曰はく、『太微の積星を、名づけて郎位と爲す。(郎)入りては宿衛に奉じ、出でては百姓を牧す。宜しく忍びざるの恩を割き、以て求欲の路を斷つべし』と。是に於て、詔除乃ち止む。

護光校尉段熲、當前の羌を撃ち、之を破る。

十二月辛丑、車駕、宮に還る。

中常侍汝陽侯唐衡・武原侯徐璜、皆卒す。

初め侍中寇榮は、恂の曾孫なり。性矜潔にして、與する所少し。此を以て、權寵の疾む所と爲る。榮の從兄の子、帝の妹益陽長公主に尙し、帝、又、其の從孫女を後宮に入る。左右益々之を忌み、遂に共に陥るるに罪を以てす。宗族と與に、免せられて、故郡に歸る。吏、風旨を承望し、之を持すること浸く急なり。榮、免れざらんことを恐れ、闕に詣りて自ら訟ふ。未だ至らざるに、(五)刺史張敬、榮を追劾するに、擅に邊を去るを以てす。詔有りて之を捕へしむ。榮、逃竄すること數年、赦に會へども、除せらるるを得ず、窮困を積む。乃ち亡命中より上書して曰はく、『陛下、天を統べ物を理め、民の父母と作り、生齒より以上、威德澤を蒙る。而るに臣兄弟、獨り無辜を以て、專權の臣に(五)批抵せられ、青蠅の人に共に構會せられ、陛下をして(五)慈母の仁を忽せにし、投杼の怒を發せしむ。殘詔の吏、機網を張設し、竝に驅りて先を爭ひ、仇敵に赴くが若く、罰、死没に及び、

【四六】護駕從事。蓋し荊州の刺史の派遣する所の、車駕を護る者なるべし。

【四七】荊州云云。荊州の刺史は所部の郡縣を察舉するを得れども、扈從の臣を察舉するを得ず。若し司隸校尉に比するときは、其の姦を察舉するを得。

【四八】都官從事。司隸校尉の屬官。百官の法を犯す者を察舉するを掌る。
【四九】太微の積星。太微宮(星座)の五帝坐の後に蔚然として聚まれる二十五星を郎位と爲す。

【五〇】故郡。寇氏は、本、上谷昌平の人。

【五一】刺史。蓋し幽州の刺史なり。

【五二】生齒。初めて齒の生ずる嬰兒。

【五三】批抵。撃ち、たたく。

【五四】青蠅。時に曰はく、營營たる青蠅、樊に止まる。豈弟の君子、讒言を信する無かれと。能く白を汚して黒からしめ、黒を汚して白からしむ。讒佞の善惡を變亂するに喩ふる也。

【五五】慈母云云。三卷周の赧王七年に見ゆ。

墳墓を髡剔し、嚴朝をして必ず濫罰を加へしめんと欲す。是を以て、敢て天威に觸突せずして、自ら山林に竄れ、以て、陛下の・神聖の聽を發し、獨觀の明を啓き、濟ふ可きの人を救ひ、沒溺の命を援くるを俟てり。意はざりき、滯怒、春夏の爲めに息まず、淹恚、歲時の爲めに怠らざらんとは。遂に使を郵驛に馳せ、遠近に布告し、嚴文の尅剝すること、霜雪よりも痛ましく、臣を逐ふ者は人途を窮め、臣を追ふ者は車軌を極む。楚・伍員を購ひ、漢・季布を求むると雖も、以て過ぐる無きなり。臣、罰に遇ひて以來、三たび赦せられ再び贖ふ。驗無きの罪は、以て蠲除するに足らん。而るに陛下、臣を疾むこと愈、深く、有司、臣を咎むること甫めて力む。止まらば則ち掃滅せられ、行かば則ち虜と爲り、苟くも生きば則ち窮人と爲り、極に死せば則ち冤鬼と爲らん。天廣けれども、以て自ら覆ふ無く、地厚けれども、以て自ら載する無く、陸士を蹈めども、沈淪の憂有り、巖墻に遠ざかれども、鎮壓の患有り。如し臣、元惡、大惡を犯し、以て原野に陳され、刀鋸に備はるに足らば、陛下、當に臣が坐する所(罪)を班布し、以て衆論の疑を解くべし。臣、國門に入り、肺石の上に坐し、三槐・九棘をして

【五六】墳墓云云。墳墓の松柏を剪伐するをいふ。剔は剃に通ず。
 【五七】滯怒云云。積蓄したる怒悲、久しくして而も化せざるをいふ。
 【五八】楚云云。楚人伍奢、平王の太子建の太傅たりしが、費無極、讒してこれを殺す。奢の子員、字は子胥、吳に奔る。楚これを購ひ、伍員を得たる者には粟五萬石爵執珪を與へんといふ。
 【五九】漢云云。十卷高祖五年に見ゆ。
 【六〇】驗無きの罪。案驗す可き罪狀無きをいふ。
 【六一】大惡。大罪なり。
 【六二】肺石云云。肺石とは赤き石なり。周の時、この石を朝

臣の罪を平かにせしめんと思へども、而も、(一) 閹閹九重にして、陷穽、歩ごとに設けられ、趾を擧ぐれば、(二) 采宜に觸れ、動行すれば羅網に絀り、萬乗の前に至るに縁無く、永く信せらるるの期無し。悲しいかな。久しく生くとも亦復た何ぞ聊んせん。蓋し忠臣は身を殺して以て君の怒を解き、孝子は命を殞して以て親の怨を寧んず。故に、(三) 大舜は廩を塗り井を浚ふるの難を避けず、(四) 申生は姫氏の讒邪の謗を辭せず。臣、敢て斯義を忘れて、自ら斃れて以て明朝の忿を解かざらんや。乞ふ身を以て責を塞がんと願はくは陛下、兄弟の死命を、(五) 句へ、臣の一門をして頗る遺類有らしめ、以て陛下の寛饒の恵を崇くせんことを。死に先だちて情を陳し、章に臨みて泣血す」と。帝、章を省て愈、怒り、遂に榮を誅す。寇氏、是に由りて衰廢す。

廷に立て、民の上に告げんとするものある時はこの石の下に坐せしめたり。周禮秋官に曰はく、九棘を左にして孤卿大夫位し、九棘を右にして公侯伯子男位し、三槐に面して三公位し、嘉石を左にして罷民を平かにし、肺石を右にして窮民を達すと。
 【三】閹閹。天門。
 【四】采宜。兔を捕ふる網。
 【五】大舜云云。舜の父瞽叟、舜を殺さんと欲し、舜をして廩を塗らしめ、下より廩を焚く。舜乃ち雨笠を以て自ら扞ぎて下る。又、井を穿たしむ。舜既に入ること深きや、父乃ち土を下してこれを埋む。舜、旁穴より出で去る。
 【六】申生云云。驪姫、晉の獻公に嬖せられ、太子申生を殺さんと欲し、讒して曰はく、太子

八年、春正月、帝、中常侍左悺を遣はして、苦縣に之き、老子を祠らしむ。
 勃海王悝、素行險僻にして、多く僭傲不法なり。北軍の中候陳留の史弼、

封事を上りて曰はく、「臣聞く、「帝王の親戚に於けるや、愛、隆なりと雖も、必ず之に示すに威を以てし、體、貴しと雖も、必ず之を禁するに度を以てす。是の如くなれば、和睦の道興り、骨肉の恩遂ぐ」と。竊に聞く、「勃海王悝、外は剽輕不逞の徒を聚め、内は酒樂に荒みて出入常無く、與に羣居する所は、皆、家の棄子、朝の斥臣なり」と。必ず、羊勝、伍被の變有らん。州司、敢て彈糾せず、傅相、匡輔する能はず。陛下、友于に隆にして、遏絶するに忍びず。恐らくは遂に滋蔓せば、害を爲すこと彌大ならん。乞ふ臣の奏を露して、百僚に宣示し、其の法を平處せんことを。法決し罪定まらば、乃ち忍びざるの詔を下せ。臣下固執し、然る後少しく許す所有れ。是の如くせば、則ち聖朝には親を傷ふの讖無く、勃海には國を享くるの慶有らん。然らずんば、懼らくは大獄將に興らんとせん」と。上聽かず。悝、果して、不道を爲さんことを謀る。有司、之を廢せんと請ふ。詔して、貶して瘞陶王と爲し、一縣を食ましむ。丙申晦、日、之を食する有り。公卿校尉に詔して、賢良方正を擧げしむ。

- 子、公を毒殺せんと欲せりしと。太子、新城に奔る。或るひと太子に謂つて曰はく、「子辨解せよ」と。太子曰はく、「我辨解せば、姫必ず罪せられん」と。遂に縊れて死す。左傳僖公四年に見ゆ。
- 【一】 苦縣。老子は楚の苦縣の人なり。苦縣の故城は今の河南省開封道鹿邑縣に在り。
- 【二】 羊勝。十六卷景帝中二年に見ゆ。
- 【三】 伍被。十九卷武帝元狩元年に見ゆ。
- 【四】 州司。州の刺史の屬をいふ。
- 【五】 友于。兄弟の友愛。尙書に曰はく、惟孝友于兄弟と。

千秋萬歲殿、火あり。

中常侍侯覽の兄參、益州の刺史と爲り、殘暴貪婪にして、威を累ぬること億計。太尉楊秉、奏して檻車をもて參を徵す。參、道に於て自殺す。其の車重三百餘兩を閲するに、皆、金銀錦帛なり。秉因つて奏して曰はく、「臣、舊典を案するに、宦者は、本省闔に給使し、昏を司り夜を守るに在り。而るに今、猥に過寵を受け、政を執り權を操り、附會する者をば、公に因りて褒擧し、違忤する者をば、事を求めて中傷し、居は王公に法り、富は國家に擬し、飲食は肴膳を極め、僕妾は執素を盈たす。中常侍侯覽の弟參、貪殘元惡にして、自ら禍滅を取る。覽、顧みて釁の重きを知り、必ず自ら疑ふの意有らん。臣愚以爲へらく、宜しく復た親近せらるべからずと。昔、懿公、鄆鄆の父を刑し、閭職の妻を奪ひ、而して二人をして參乗せしめ、卒に竹中の難有りき。覽をば宜しく急に屏斥し、有虎に投げ畀ふべし。斯の若き人は、恩の宥むべき所に非ず。請ふ官を免じて本郡に送り歸さん」と。書・奏す。尙書、秉の掾屬を召對し、之を詰りて曰はく、「官を設け職を分ち、各有司存す。三公は外を統べ、御史は内を察す。今、越えて近官を奏するは、經典・漢制に、何の依據する所かある。其れ公に開きて具に對へよ」

- 【六】 懿公云云。齊の懿公の公子たりしとき、鄆鄆の父と田を争ひ、勝たず。位に即くに及びて、乃ち掘りてこれを削り、而して鄆をして僕たらしむ。又閭職の妻を納れ、而して職をして參乗せしむ。鄆・職相謀りて、公を弑し、これを竹中に納る。左傳に見ゆ。
- 【七】 有虎。有は助字。詩に曰はく、彼の讒人を取り、豺虎に投卑すと。
- 【八】 召對。召してこれに問ふ也。

と。乗、對へしめて曰はく、『春秋傳に曰はく、君の惡を除き、唯だ力を是れ視る』と。鄧通、懈慢し、申屠嘉、通を召して詰責し、文帝從つて之を請ふ。漢の世の故事に、三公の職は、統べざる所無し』と。尙書、詰る能はず。帝、已むを得ず、竟に覽の官を免す。司隸校尉韓續、因つて左愾の罪惡及び其の兄太僕南郷侯稱が、州郡に請託し、聚斂して姦を爲し、賓客放縱にして、吏民を侵犯するを奏す。愾、稱、皆自殺す。續、又、中常侍具瑗の兄沛の相恭の臧罪を奏す。徵して廷尉に詣らしむ。瑗、獄に詣りて謝し、東武侯の印綬を上還す。詔して、貶して郷侯と爲す。超及び瑁、衡の、封を襲ぐ者は、竝に降されて郷侯と爲り、子弟の分ち封せらるる者は、悉く爵士を奪はれ、劉普等は貶せられて關内侯と爲り、尹勳等も亦皆爵を奪はる。

帝、内寵多く、宮女、五六千人に至り、及び驅役、從使、復た此に兼倍す。而して鄧后、尊を恃み驕忌にして、帝の幸する所の郭貴人と、更相譖訴す。癸亥、皇后鄧氏を廢して、暴室に送る。憂を以て死す。河南の尹鄧萬世、虎賁中郎將鄧會皆、獄に下して誅せらる。

護羌校尉段熲、罕姐の羌を撃ち、之を破る。

三月辛巳、天下に赦す。

宛陵の大姓羊元羣、北海郡を罷む。臧汚狼籍にして、郡舎の潤軒、奇巧有り、亦、之を載せて

以て歸る。河南の尹李膺、表して其の罪を按ず。元羣、賂を宦官に行ふ。

膺、竟に反つて(罪)坐す。單超の弟遷、山陽の太守と爲り、罪を以て

獄に繋がる。廷尉馮緄、考して其を死に致す。中官相黨し、共に飛章し

て、緄を誣ふるに罪を以てす。中常侍蘇康、管霸、天下の良田美業を固

す。州郡、敢て詰らす。大司農劉祐、書を所在に移し、科品に依りて之を

没入す。帝大に怒り、膺、緄と俱に左校に輪作せしむ。

夏四月甲寅、安陵の園寢、火あり。

丁巳、詔して郡國の諸淫祀を壞つ。特に雒陽の王渙、密縣の卓茂の二

祠を留む。

五月丙戌、太尉楊秉、薨す。秉、人と爲り、清白寡欲なり。嘗て稱す、『我

に三不惑有り、酒・色・財なり』と。秉既に没し、擧ぐる所の賢良廣陵

の劉瑜、乃ち京師に至り、上書して言はく、『中官は、當に肩を比べて土を裂き、競うて胤嗣を立

て、體を繼ぎ爵を傳ふべからず。又、嬖女充積し、空宮に冗食し、生を傷ひ國を費す。又、第舎

漢孝桓皇帝延熹八年

- 【一】 宛陵。縣の名、河南の尹に屬す。河南省開封道新鄭縣の東北に在り。
- 【二】 潤軒。陶屋。
- 【三】 膺、元羣の罪を按じたれども、行ふを得ず、反つて自ら罪に坐す。
- 【四】 考云云。考鞠して遷を死罪に致す也。
- 【五】 固。障固する也。己が有と爲すをいふ。
- 【六】 安陵。惠帝の陵。
- 【七】 順帝の陽嘉四年、中官が養子を以て爵を嗣ぐを聽す。
- 【八】 冗食。事無くして食する也。

增多し、奇巧を窮極し、山を掘り石を攻め、促すに嚴刑を以てす。州郡の官府、各自自ら事を考し、姦情賂賂し、皆吏の餌と爲る。民愁鬱結し、起つて賊黨に入る。官輒ち兵を興し、其の罪を誅討す。貧困の民、或は其の首級を賣り以て酬賞を要むる有り、父兄相代りて身を殘ひ、妻孥相視て分裂す。又、陛下、好みて近習の家に微行し、私に宦者の舍に幸す。賓客市買し、道路を熏灼す。此に因りて、暴縦、容れざる所無し。惟だ陛下、諫道を開廣し、博く前古を觀、佞邪の人を遠ざけ、鄭衛の聲を放たば、則ち政、和平を致し、徳、祥風を感せん」と。詔して、特に瑜を召し、災咎の徴を問ふ。執政者、瑜をして其の辭を依違せしめんと欲し、乃ち更に策するに它事を以てす。瑜復た心を悉して對ふること、八千餘言、前よりも切なる有り。拜して議郎と爲す。

荆州の兵朱蓋等叛し、桂陽の賊胡蘭等と與に、復た桂陽を攻む。太守任胤、城を棄てて走る。賊衆遂に數萬に至る。轉じて零陵を攻む。太守下邳の陳球、固く守りて之を拒ぐ。零陵は下濕にして、木を編みて城と爲す。郡中・惶恐す。掾史、球に白す、「家を遣りて難を避けしめよ」と。球怒りて曰はく、「太守は、國の虎符を分ち、任を一邦に受く。豈に妻孥を顧みて、國威を沮まんや。復た言ふ者は斬らん」と。乃ち大木に弦して弓と爲し、羽矛を矢と爲し、機

- 【一】 熏灼。勢の極めて盛にして、人民を苦しむるをいふ。
- 【二】 諫道。猶ほ言路といふがごとし。
- 【三】 祥風。孝經授神契に曰はく、徳、八方に至れば、則ち祥風至ると。
- 【四】 零陵。郡の名、故城は今の廣西省桂林道全縣の西南七十八里に在り。
- 【五】 家。家族なり。

を引きて之を發し、殺傷する所多し。賊、流を激して城に灌ぐ。球、輒ち内に於て地獄に因り、反つて水を決して賊を淹す。相拒ぐこと十餘日、下す能はず。時に度尙・徵せられて京師に還る。詔して、尙を以て中郎將と爲し、步騎二萬餘人を率ゐて球を救はしむ。諸郡の兵を發し、教を并せて討撃し、大に之を破り、蘭等の首三千餘級を斬る。復た尙を以て荆州の刺史と爲す。胡蘭、蒼梧の太守張敍、賊に執へらる。及び任胤は、皆徵して棄市せらる。餘黨、南して蒼梧に走る。交趾の刺史張磐、撃ちて之を破る。賊、復た還りて荆州の界に入る。度尙、己が負と爲らんことを懼れ、乃ち僞りて上言す、「蒼梧の賊、荆州の界に入る」と。是に於て、磐を徵して廷尉に下す。辭狀、未だ正しからず。赦に會うて、原さる。磐、獄を出づるを肯せず、方に更に牢く械節を持す。獄吏、磐に謂つて曰はく、「天恩曠然たり。而るに君出でざるは、可ならんや」と。磐曰はく、「磐、位に方伯に備はり、尙の枉する所と爲り、罪を牢獄に受く。夫れ事に虚實有り。法に是非有り、磐は實に不辜なり。赦さるるとも除く所(罪)無し。如し忍ぶに苟くも免るるを以てせば、永く侵辱の恥を受け、生きては惡吏と爲り、死しては徹鬼と爲らん。乞ふ尙を傳して廷尉に詣らしめよ。曲直を面對せば、眞僞を明かにするに足らん。尙、徵せられずんば、磐、骨を牢檻

- 【一】 負は罪を負ふ也。盡く羣賊を滅ぼすこと能はざりしを以て罪とせられんことを懼るる也。
- 【二】 辭狀云云。取調べの未だ十分ならざるをいふ。
- 【三】 械節。械の刻約の處。
- 【四】 古は八州に八伯有り、漢の州の刺史は古の方伯の任なり。
- 【五】 枉。冤罪を被らす也。
- 【六】 傳云云。傳車を以て廷尉に召し致す也。

に埋むとも、終に虚しく出でて塵を望み枉を受けじ」と、廷尉、其の状を以て上す。詔書して尙を徵して廷尉に到らしむ。(尙)辭窮して罪を受く。先に功有るを以て、原さるるを得たり。

閏月甲午、南宮の朔平署、火あり。

段頴、西羌を撃破し、兵を進めて窮追し、山谷の間に展轉し、春より秋に及ぶまで、日として戦はざる無し。虜遂に敗散す。凡そ斬首二萬三千級。生口を獲ること數萬人、降る者萬餘落、頴を都郷侯に封す。

秋七月、太中大夫陳蕃を以て太尉と爲す。蕃、太常胡廣・議郎王暢・弛刑徒李膺に讓る。帝、許さず。暢は、龔の子なり。(暢)嘗て南陽の太守と爲り、其の貴戚豪族多きを疾み、車を下りて、威猛を奮厲す。大姓、犯す有れば、或は吏をして屋を發き樹を伐り、井を埋め竈を夷げしむ。功曹張敞・奏記して諫めて曰はく、『文翁・召父・卓茂の徒は、皆、温厚を以て政を爲し、後世に流聞す。屋を發き樹を伐るは、將に嚴烈たらんとす。惡を懲さんと欲すと雖も、以て遠きに聞え難からん。郡は、舊都、侯甸の國たり、(七)園廟、章陵に出で、(八)三后、新野より出で、中興より以來、功臣將相、世を繼ぎて隆なり。愚以爲へらく、懇懇として刑を用ふるは、恩を行ふに如かず。華華として姦を求むるは、未だ賢を禮

するに若かず。(九)舜、皐陶を擧げて、不仁者遠ざかる。人を化するは徳に在り、刑を用ふるに在らず』と。暢深く其の言を納れ、更めて寛政を崇ぶ。教化大に行はる。

八月戊辰、初めて郡國に令して、田を有する者、(四)畝ごとに税錢を斂めしむ。

九月丁未、京師、地震ふ。

冬十月、司空周景、免せらる。太常劉茂を以て司空と爲す。茂は、(四)愷の子なり。

郎中竇武は、融の玄孫なり。女有り貴人と爲る。采女田聖、帝に寵有り。帝將に之を立てて后と爲さんとす。司隸校尉應奉・上書して曰はく、『母后は之れ重く、興廢の因る所なり。(三)漢、飛燕を立てて、胤祀泯絶せり。宜しく、(四)關雎の求むる所を思ひ、五禁の忌む所を遠ざくべし』と。太尉陳蕃も亦以へらく、『田氏は卑微にして、竇族は良家なり』と。之を争ふこと甚だ固し。帝、已むを得ず。辛巳、竇貴人を立てて皇后と爲す。武を拜して特進城門校尉と爲し、槐里侯に封す。

【三】 朔平署。朔平司馬署。朔平司馬は北宮北門を主る。

【四】 王龔は、安帝に事へて公と爲る。

【五】 舊都。光武、南陽より起り、其の後、これを南都と謂ふ。

【六】 侯甸。古、天子の制に、方千里を以て甸服と爲し、其の外五百里を侯服と爲す。南陽は、雒陽より、侯甸の内に在り。

【七】 園廟。南頓君以上の四廟は章陵に在り。

【八】 三后。光烈皇后・和帝の陰后・鄧后は並に新野の人。

【九】 舜云云。魯語凱風篇に見ゆ。子夏の言。

【四〇】 一畝ごとに十錢を税するなり。蓋し漢の田租は三十にして一を税す。而して畝を計りて錢を斂むるは、此れより始まる。

【四一】 愷。劉愷、國を讓りしを以て時に重んぜられ、位、公に至る。

【四二】 漢云云。三十三卷哀帝建平元年に見ゆ。

【四三】 關雎。詩經の篇の名、淑女を得て以て君子に配するを樂しむ。五禁。韓詩外傳曰はく、婦人に五不娶あり、喪婦の長女をば娶らず、世に惡疾有るをば娶らず、世に刑人有るをば娶らず、亂家の女をば娶らず、逆家の女をば娶らずと。

十一月壬子、黃門の北寺、火あり。

陳蕃、數李膺・馮緄・劉祐の枉を言ひ、原宥を加へ、之を爵任に升さんことを請ふ。言、反覆に及び、誠辭懇切にして、以て流涕するに至る。帝、聽かず。應奉・上疏して曰はく、『夫れ忠賢なる武將は、國の心膂なり。竊に見るに、左校の弛刑徒馮緄・劉祐・李膺等は、邪臣を誅擧し、之を肆すに法を以てす。陛下、既に聽察せずして、猥に譴訴を受け、遂に忠臣をして愆を元惡に同じし、春より冬に迄るまで、降恕を蒙らざらしむ。遐邇觀聽し、之が爲めに歎息す。夫れ政を立つるの要は、功を記し失を忘る。是を以て、武帝は安國を徒中に捨し、宣帝は張敞を亡命に徵せり。緄は前に蠻・荆を討ち、吉甫の功に均しく、祐は數・督司に臨み、吐茹せざるの節あり、膺は威を幽・并に著はし、愛を度遠に遺す。今、三垂蠢動し、王旅未だ振せず。乞ふ膺等を原し、以て不虞に備へんことを』と。書奏す。乃ち悉く其の刑を免す。之を久しうして、李膺復た司隸校尉に拜せらる。時に小黃門張讓の弟朔、野王の令と爲り、貪殘無道なり。膺の威嚴を畏れ、逃げて京師に還り、兄の家の合柱の中に

【四四】原宥。宥恕する也。

【四五】肆。陳ぬるなり。

【四六】武帝云云。景帝の時、韓安國、梁の大夫たり、法に坐して罪に抵る。後、梁の内史缺くるや、徒中より起して、二千石と爲す。此に武帝と言ふは、誤なり。

【四七】宣帝云云。二十七卷甘露元年に見ゆ。

【四八】吉甫。尹吉甫、周の宣王の功臣。

【四九】吐茹せず。詩に曰はく、『柔なるをも亦茹はず、剛なるをも亦吐かず』と。劉祐は梁冀の弟曼を奏し、又、司隸校尉と爲り、權豪これを畏れしをいふ。

【五〇】膺云云。李膺、漁陽の太守烏桓校尉となる。皆、幽部なり。度遼將軍は并部に屯す。是れ其の威を著はし愛を遺すの地。

【五一】振。振盪。

【五二】野王縣は河内郡に屬す。

今の河南省河北道沁陽縣の地なり。而して河内郡は司部に屬す。膺が其の罪を發擧するを畏れ、逃げて京師に還りしなり。

【五三】合柱。木を合はせてつくりたる柱。

【五四】頽。くづれ、壞る。

【五五】風裁。見識と言ふが如し。

【五六】容接。容納款接なり。

【五七】登龍門。魚を以て喻と爲したるなり。龍門は河水の下る所の路。三秦記に曰はく、河津は、一に龍門と名づく、水險にして通ぜず、魚鼈の屬能く上るもの莫し。江海の大魚數千、龍門の下に薄り集まり、上るを得ず。上れば則ち龍と爲ると。

【五八】崎。劉崎、順帝に事へて司徒と爲る。

匿る。膺、其の狀を知り、吏卒を率ゐ、柱を破りて朔を取らへ、雒陽の獄に付し、辭を受け畢り、即ち之を殺す。讓、冤を帝に訴ふ。帝、膺を召し、詰るに先づ請はずして便ち誅を加ふるの意を以てす。膺對へて曰はく、『昔、仲尼、魯の司寇と爲り、七日にして少正卯を誅せり。今、臣は、官に到りて已に一句を積む。私に懼る、稽留を以て愆と爲られんことを。意はざりき速疾の罪を獲んとは。誠に自ら知る、責せられ、死すること踵を旋らさざらんことを。特に乞ふ、留まること五日、元惡を尅殄し、退きて鼎鑊に就かんことを。始生の願なり』と。帝、復た言ふ無し、顧みて讓に謂つて曰はく、『此れ汝の弟の罪なり。司隸は何の愆あらん』と。乃ち遣りて出でしむ。此より、諸黃門・常侍、皆、鞠躬して氣を屏め、休沐にも敢て宮省を出でず。帝怪しみて其の故を問ふ。竝に叩頭して泣いて曰はく、『李校尉を畏る』と。時に朝廷日に亂れ、綱紀頽弛す。而して膺獨り風裁を持し、聲名を以て自ら高くす。士、其の容接を被る者有れば、名づけて登龍門と爲すと云ふ。

東海の相劉寬を徵して尙書令と爲す。寬は崎の子なり。三郡を歴典

し、溫仁にして多く恕し、倉卒に在りと雖も、未だ嘗て疾言遽色せず。吏民、過有れば、但だ蒲鞭を用ひて之を罰し、辱を示すのみ、終に苦を加へず。父老を見る毎に、慰むるに農里の言を以てし、少年には、勉むるに孝悌の訓を以てす。人、皆、悦びて之に化す。

九年、春正月辛卯朔、日、之を食する有り。公卿・郡國に詔して、至孝を擧げしむ。太常趙典の擧ぐる所の荀爽・對策して曰はく、「昔者、聖人、天地の中を建てて、之を禮と謂ふ。衆禮の中、昏禮を首と爲す。陽は性純にして能く施し、陰は體順にして能く化す。禮を以て樂を濟し、其の氣を節宣す。故に能く子孫の祥を豊にし、老壽の福を致す。三代の季に及びて、淫にして節無く、陽、上に竭き、陰、下に隔たる。故に周公の戒に曰はく、「時に亦、或は克く壽なる罔し」と。傳に曰はく、「趾を截りて屨に適せしむるを、孰か其を愚と云ふ。斯の人追うて軀を喪ばさんと欲するに何與ぞや」と。誠に痛む可きなり。臣竊に聞く、後宮の采女、五六千人、從官・侍使、復た其の外に在り。空しく不辜の民に賦し、以て無用の女に供す。百姓、外に窮困し、陰陽、内に隔塞す。故に和氣を感動し、災異屢臻る。臣愚以爲へらく、諸の未だ幸御せざる者をば、一に皆遣りて出でし

- 【五九】蒲鞭。蒲の葉の鞭なり。古は鞭は生皮を用つて作る。
- 【一】周公云云。尙書無逸の篇に見ゆ。
- 【二】趾を截りて云云。身を喪ぼすの愚なることは、趾を截りて履物に合はすよりも甚だしきをいふ。
- 【三】從官は、後宮の爵秩ありて常に從ふ者を謂ひ、侍使は后妃貴人の左右に侍して使令に給し未だ爵秩有らざる者を謂ふ。

め、妃合を成さしめば、此れ誠に國家の大福ならん」と。詔して郎中に拜す。

司隸・豫州、饑ゑて死する者、什に四五、戸を滅する者有るに至る。

詔して、張奐を徵して、大司農と爲し、復た皇甫規を以て代りて度遼將軍と爲す。規自ら以爲へらく、連に大位に在りと。退避を求めんと欲し、數、病と上せども聽かれず。會、友人の喪至る。規、界を越えて之を迎ふ。因つて客をして密に并州の刺史胡芳に告げて言はしむ、「規擅に軍營に遠ざかる。當に急に舉奏すべし」と。芳曰はく、「威明、弟の仕塗を避けんと欲す。故に我を激發するのみ。吾、當に朝廷の爲めに才を愛むべし。何ぞ能く此の子の計に由らんや」と。遂に問ふ所無し。

夏四月、濟陰・東郡・濟北・平原、河水清し。

司徒許栩・免せらる。五月、太常胡廣を以て司徒と爲す。

庚午、上、親ら老子を濯龍宮に祠り、文屬を以て壇飾と爲し、淳金の

二〇 鈿器、華蓋の坐を設け、郊天樂を用ふ。

鮮卑、張奐去れりと聞き、南匈奴及び烏桓を招結して、同じく叛す。六月、南匈奴・烏桓・鮮卑、數道より塞に入り、緣邊の九郡を寇掠す。秋七月、鮮卑、復た塞に入り、東羌を誘引し、與に共に盟

- 【四】妃合。配合に同じ。
- 【五】戸を滅す。老弱皆死して、復た遺種無きをいふ。一家全滅するものなり。
- 【六】并州の刺史。度遼將軍は西河の界に屯す。并州の刺史の部する所なり。
- 【七】威明。皇甫規、字は威明。
- 【八】弟云云。弟は弟の誤。弟とは胡芳自ら謂ふ。皇甫規、弟の爲めに仕進の途を開かんと欲するを言ふ。
- 【九】文屬。采文ある毛織物。
- 【一〇】鈿器。金にて器口を飾りたる器物。

詔す。是に於て、上郡の沈氏・安定の先零の諸種、共に武威・張掖に寇す。緣邊、大に其の毒を被る。詔して、復た張奐を以て、護匈奴中郎將と爲し、九卿の秩を以て、幽・并・涼の三州及び度遼・烏桓の二營を督し、兼ねて刺史・二千石の能否を察せしむ。

初め帝、蠡吾侯たりしとき、學を甘陵の周福に受く。位に即くに及びて、福を擢でて尙書と爲す。時に同郡の河南の尹房植、當朝に名有り。郷人之が謠を爲して曰はく、『天下の規矩は、房伯武、師に因りて印を護るは、周仲進』と。二家の賓客、互に相譏揣す。遂に各朋徒を樹て、漸く尤隙を成す。是に由りて、甘陵に南北部有り。黨人の議、此より始まる。汝南の太守宗資、范滂を以て功曹と爲し、南陽の太守成瑨、岑晫を以て功曹と爲し、皆、心を委ねて聽任し、之をして善を褒し、違を糾し、朝府を肅清せしむ。滂、尤も剛勁にして、惡を疾むこと譬の如し。滂の甥李頌、素より行無し。中常侍唐衡、以て資に屬す、資、用ひて吏と爲す。滂、寢めて召さず。資、怒を遷して書佐朱零を捶つ。零仰ぎて曰はく、『范滂は清裁なり、今今日寧の咎を受けて死すとも、滂には違ふ可からず』と。資乃ち止む。郡中、中人以下、之を怨みざる

- 【一】 九卿の秩。護匈奴中郎將の秩は比二千石。九卿の秩は中二千石なり。
- 【二】 度遼烏桓。度遼將軍及び護烏桓校尉。
- 【三】 房伯武。房植、字は伯武。
- 【四】 周仲進。周福、字は仲進。
- 【五】 譏揣。其の輕重長短を度量して、譏議を爲す也。
- 【六】 朝府。朝は郡朝なり。公卿牧守の居る所を、皆、府といふ。
- 【七】 書佐。郡閣下及び諸曹に、各書佐あり、文書を主る。
- 【八】 清裁。行清くして裁制あり。

は莫し。是に於て、二郡、諺を爲して曰はく、『汝南の太守は、范孟博、南陽の宗資は、二の畫諾を主る。南陽の太守は、岑公孝、弘農の成瑨は、但だ坐して嘯く』と。太學の諸生三萬餘人、郭泰及び潁川の賈彪、其の冠たり、李膺・陳蕃・王暢と、更に相褒重す。學中の語に曰はく、『天下の模楷は、李元禮、彊禦を畏れざるは、陳仲舉、天下の俊秀は、王叔茂』と。是に於て、中外、風を承け、競うて臧否を以て相向ふ。公卿より以下、其の貶議を畏れ、屢屢して門に到らざるは莫し。宛に富賈張汎といふ者有り、後宮と親有り、又、雕鏤玩好の物を善くし、頗る以て中宮に賂遺し、此を以て顯位を得、執を用ひて縱横なり。岑晫、賊曹史張牧と與に、成瑨に勸めて、汎等を收捕せしむ。既にして赦に遇ふ。瑨竟に之を誅し、并せて其の宗族・賓客を收へ、二百餘人を殺し、後乃ち奏聞す。小黃門晉陽の趙津、貪暴放恣にして、一縣の巨患と爲る。太原の太守平原の劉瓛、郡吏王允をして討捕せしむ。亦、赦後に於て之を殺す。是に於て、中常侍侯覽、張汎の妻をして上書して冤を訟へしむ。宦者因縁して、瑨・瓛を譖訴す。帝大に怒り、瑨・瓛を徵し、皆獄に下す。有司、旨を承け、『瑨・瓛の罪、棄市に當す』と奏す。山陽の太守翟超、郡人張儉を以て

漢孝桓皇帝延熹九年

- 【一】 范孟博。范滂、字は孟博。
- 【二】 畫諾。言に隨つて應じ、違ふ所無き也。
- 【三】 岑公孝。岑晫、字は公孝。
- 【四】 但だ坐して嘯く。郡事に於て預る所無きを言ふ。
- 【五】 李元禮。李膺、字は元禮。
- 【六】 陳仲舉。陳蕃、字は仲舉。
- 【七】 王叔茂。王暢、字は叔茂。
- 【八】 屢屢。足先のみつめて、跟をつけずして履をばく也。急遽の狀。
- 【九】 賊曹。盜賊の事を主る。
- 【一〇】 東部の督郵。郡に五部の督郵あり、屬縣を監す。

侯覽の家は 防東に在り、百姓を殘暴す。覽、母を喪うて家に還り、大に瑩家を起す。儉、覽の罪を擧奏す。而るに覽、伺候して遮截す。章竟に上られず。儉遂に覽の家宅を破り、資財を籍没し、具に其の狀を奏す。(其ノ)復た御むるを得ず。徐璜の兄の子宣、下邳の令と爲り、暴虐尤も甚だし。嘗て故の汝南の太守李嵩の女を求め、得る能はず。遂に吏卒を將る、嵩の家に至り、其の女を載せて歸り、戯れに射て之を殺す。東海の相汝南の黃浮、之を聞き、宣の家屬を收へ、少長と無く、悉く之を考す。掾史以下固く争ふ。浮曰はく、『徐宣は國賊なり。今日、之を殺し、明日坐して死せば、以て目を瞑するに足りなん』と。即ち宣の罪を案じ、棄市し、其の尸を暴す。是に於て、宦官、冤を帝に訴ふ。帝大に怒り、超・浮、竝に坐して髡鉗せられ、右校に輪作す。太尉陳蕃、司空劉茂共に諫めて璜・瑣・超・浮等の罪を請ふ。帝悦ばず。有司、之を劾奏す。茂、敢て復た言はず。蕃乃ち獨り上疏して曰はく、『今、寇賊外に在るは、四支の疾なり。内政理まらざるは、心腹の患なり。臣、寝ぬれども寐ぬる能はず、食すれども飽く能はず。實に憂ふ、左右日に親しく、忠言日に疎んせられ、内患漸く積り、外難方に深きを。陛下、超えて列侯より、天位を繼承す。小家の畜産、百萬の資すら、子孫尙ほ其の先業を失ふを恥愧す。況んや乃ち産、天下を兼ね、之を先帝に受け、而も懈怠して以て自ら輕忽せんと欲せんや。誠に己を愛せずとも、當に先帝の之を

【二九】 防東縣は山陽郡に屬す。今の山東省濟寧道金鄉縣の南に在り。
【三〇】 超えて云云。帝、蠡吾侯を以て天子の位に即きしをいふ。

勤苦に得たるを念ふべきにあらずや。前に 梁氏の五侯、毒、海内に徧かりしが、天、聖意を啓き、收めて之を戮せり。天下の議、當に小しく平かなるべきを冀はば、明鑑未だ遠からず、覆車、昨の如し。而るに近習の權、復た相扇結し、小黃門趙津、大猾張汎等、肆に貪虐を行ひ、左右に姦媚す。前の太原の太守劉瑱、南陽の太守成瑨、糾して之を戮す。赦の後にして當に誅殺すべからずと言ふと雖も、其の誠心を原ぬるに、惡を去るに在り。陛下に至りては、何の愴悃たる有らん。而るに小人の道長じ、聖聽を熒惑し、遂に天威をして之が爲めに怒を發せしめ、必ず刑誼を加へんとす。已に過甚と爲す。況んや乃ち重く罰して、歐刀に伏せしめんや。又、前の山陽の太守翟超、東海の相黃浮、公に奉すること梟まず、惡を疾むこと讎の如く、超は侯覽の財物を没し、浮は徐宣の罪を誅し、竝に刑坐を蒙り、赦恕に逢はず。覽の從横なる、財を没するは已だ幸なり。宣の疊過を犯せる、死して餘辜有り。昔、丞相 申屠嘉、鄧通を召責し、雒陽の令 董宣、公主を折辱し、而して文帝從つて之を請ひ、光武加ふるに重賞を以てせり。未だ二臣に命を専らにするの誅有りしを聞かず。而るに今、左右の羣豎、黨類を傷はれしを惡み、妄に相交構し、此の刑誼を致せり。臣の是の言を聞かば、當に復た 嗾訴すべし。陛下、深く宜しく近習の政に與るの源を割塞し、尙書朝省

【三一】 梁氏の五侯。胤・讓・淑・忠・執をいふ。
【三二】 陛下云云は、陛下に對しては、何等の不平あるにあらずとの意。悃悃は悲愴の貌。
【三三】 申屠嘉云云。十四卷文帝後の二年に見ゆ。
【三四】 董宣。四十三卷光武建武十九年に見ゆ。
【三五】 嗾。帝と同じ。

の士を引納し、清高を簡練し、佞邪を斥黜すべし。是の如くせば、天、上に和ぎ、地、下に洽ぎ、体禎符瑞、豈に遠からんや」と。帝納れず。宦官、此に由りて、蕃を疾むこと彌甚たしく、選舉奏議をば、輒ち中詔を以て譴卻し、長史以下、多く罪に抵るに至る。猶ほ蕃が名臣なるを以て、敢て害を加へず。平原の襄楷、闕に詣りて上疏して曰はく、「臣聞く、皇天は言はず、【三六】 文象を以て教を設く」と。臣竊に見るに、【三七】 太微は天廷、五帝の座にして、【三八】 金・火の罰星、光を其の中に揚ぐ。占に於て、天子・凶なり。又、【三九】 俱に房・心に入る。法に、繼嗣無しとす。前年の冬、大に寒く、鳥獸を殺し、魚鼈を害し、城傍の竹【四〇】 柏の葉に、傷枯せる者有り。臣、師に聞く、曰はく、「柏傷はれ竹枯るるときは、二年を出でずして、天子、之に當らん」と。今、春夏より以來、連に霜雹及び大雨雷電有り。臣、威を作し福を作し、刑罰急刻なるの感ずる所なり。太原の太守劉瓛・南陽の太守成瑨、姦邪を除かんと志し、其の誅剪する所、皆、人望に合へり。而るに陛下、【四一】 闕豎の譖を受け、乃ち遠く考逮を加ふ。三公・上書し、瑣等を哀れまんとを乞へども、採察せられず、而して嚴しく譴讓を被る。憂國の臣、將に遂に口を杜ちんとす。臣聞く、「無罪を殺し、賢者を誅すれば、禍、三世に及ぶ」と。陛下位に即きてより以來、頻に誅罰を行ひ、【四二】 梁・寇・孫・鄧、竝に族滅せられ、其

の從坐する者、又、其の數に非ず。【四三】 李雲が上書せるは、明主の當に諱むべからざる所、杜衆が死を乞ひしは、諒に以て聖朝を感悟せんとせしなり。曾ち赦宥無くして、竝に殘戮せられき。天下の人、咸其の冤を知る。漢興りて以來、未だ諫を拒ぎ賢を誅し、刑を用ふる太だ深きこと今の如き者有らざるなり。昔、【四四】 文王は一妻にして、誕まるること十子に至れり。今、【四五】 宮女數千にして、未だ慶育を聞かず。宜しく徳を修め刑を省き、以て【四六】 蠡斯の祚を廣くすべし。案するに春秋以來、及び古の帝王には、未だ【四七】 河の清める有らず。臣以爲へらく、河は諸侯の位なり。清は陽に屬し、濁は陰に屬す。河は當に濁るべくして反つて清めるは、陰、陽と爲らんと欲し、諸侯、帝と爲らんと欲するなり。京房の易傳に曰はく、「河水清めば、天下平かなり」と。今、天は異を垂れ、地は妖を吐き、人は癘疫し、三つの者時を竝べ、而も河清有るは、猶ほ春秋に麟當に見はるべからざるに見はれ、【四八】 孔子之を書して以て異と爲せるがごときなり。願はくは清間を賜はりて、言ふ所を極盡せんことを」と。書・奏す。省せられず。【四九】 十餘日にして、復た上書して曰はく、「臣聞く、殷紂、色を好みて、妲己是れ

【四三】 李雲・杜衆の事、前卷二年に見ゆ。
 【四四】 文王云云。周の文王の正妃は大嫔にして、長子伯邑考、武王、管叔、周公、蔡叔、曹叔、成叔、霍叔、康叔、聃季等の十子は同母兄弟なり。
 【四五】 蠡斯。詩經の篇名、后妃、妬忌せずして子孫衆多なるをいふ。
 【四六】 河清云云。河は黄河、水は常に黄濁なり。この自然現象を政治の上に應用して、河清は卻つて社會的變調を示すものなりと論するなり。
 【四七】 孔子云云。公羊傳に、西に狩して麟を得たり、以て告ぐる者あり、孔子曰はく、執が爲めに來れるや、孰が爲めに來れるやと。

出づ。葉公、龍を好みて、眞龍、廷に遊ぶ。今、黃門・常侍は、天刑の人なるに、陛下、愛待すること、常龍に兼倍す。係嗣未だ兆さざるは、豈に此が爲めにあらずや。又聞く、宮中に黃老・浮屠の祠を立つと。此の道は清虚にして、無爲を貴尚し、生を好み殺を惡み、慾を省き奢を去る。今、陛下、奢欲去らず、殺罰、理に過ぎ、既に其の道に乖く。豈に其の祚を獲んや。浮屠は桑下に三宿せず。久しくして恩愛(心)を生ずるを欲せず。精の至なり。其の守、一なること此の如く、乃ち能く道を成す。今、陛下は、淫女艶婦、天下の麗を極め、甘肥飲美、天下の味を單す。柰何ぞ黃老の如くならんと欲せんや」と。書上る。即ち召し入れ、尙書に詔して狀を問はしむ。楛言はく、「古は本宦官無し。武帝の末、數後宮に遊び、始めて之を置けるのみ」と。尙書(宦官)旨を承けて楛を奏す、「辭理を正しくせずして、經裁に違背し、星宿を假借し、私意を造合し、上を誣ひ事を罔ふ。請ふ司隸に下し、楛の罪法を正さん」と。收へて雒陽の獄に送る。帝、楛が言は激切なりと雖も、然も皆天文恆象の數なるを以て、故に誅せず。猶は司寇として刑を論ず。永平より以來、臣民、浮屠の術を習ふ者有りと雖も、而も天子は未だ之を好まず。帝に至りて、始めて篤く之を好み、常に躬自ら禱祠す。是に由りて、其の法浸く盛なり。故

- 【四八】葉公云云。葉公子高、龍を好む。天龍これを聞きて降り、頭を觸に窺ふ。
- 【四九】天刑の人。已に熏腐の刑を受け、罪を天に得る者なり。
- 【五〇】保嗣。繼嗣に同じ。
- 【五一】浮屠。佛陀なり。
- 【五二】者。嗜と通ず。
- 【五三】一。專一なり。
- 【五四】造合。造作率合なり。こじつけること。
- 【五五】司寇。二歳の刑なり。

に楛の言、之に及ぶ。符節令汝南の蔡衍・議郎劉瑜、表して成瑨・劉瑱を救はんとして、言甚だ切厲なり。亦坐して官を免せらる。瑨・瑱、竟に獄中に死す。瑨・瑱は素より剛直にして、經術有り。名を當時に知らる。故に天下、之を惜む。岑陞・張牧は、逃竄して免るるを獲たり。陞の亡ぐるや、親友競うて之を匿す。賈彪獨り門を閉ぢて納れず。時の人、之を望む。彪曰はく、「時を相て動き、後人を累はす無し」と。公孝は、君を要するを以て釁を致し、自ら其の咎を遺れり。吾、已に戈を奮うて相待つ能はずとも、反つて之を容隱す可けんや」と。是に於て、咸其の裁正に服す。彪、嘗て新息の長たり。小民・困貧にして、多く子を養はず。彪、嚴に其の制を爲り、人を殺すと罪を同じくす。城南に、盜の・人を劫害する者有り、北に婦人の・子を殺す者有り。彪出でて案驗す。掾吏、(車)引きて南せんと欲す。彪怒りて曰はく、「賊、人を寇害するは、此れ則ち常理なり。母子相殘ふは、天に逆ひ道に違ふ」と。遂に車を驅りて北に行き、案じて其を罪に致す。城南の賊、之を聞き、亦、面縛して自首す。數年の間に、人、子を養ふ者、千を以て數ふ。曰はく、「此れ賈父の生ずる所なり」と。皆、之を名づけて賈と爲す。河南の張成、風角を善くし、當に赦せらるべしと推占し、子に教へて人を殺さしむ。司隸李膺、督促して收捕す。既にして宥に逢ひ、免るるを獲たり。膺、愈々憤疾を懷き、竟に案じて之を殺す。成素

- 【五六】符節令。少府に屬し、符節の事を主る。秩六百石。
- 【五七】傳云云。左傳に見ゆ。
- 【五八】新息。縣の名、汝南郡に屬す。故城は今の河南省汝陽道息縣の東に在り。
- 【五九】風角。風の方向を以て吉凶を占ふ也。

より方伎を以て宦官に交通す。帝も亦頗る其の占を訊ふ。宦官、成の弟子牟修に教へて、上書して膺等を告げしむ、『太學の游士を養ひ、諸郡の生徒に交結し、更に相驅馳し、共に部黨を爲し、朝廷を誹訕し、風俗を疑亂す』と。是に於て、天子震怒し、郡國に班下して、黨人を逮捕せしめ、天下に布告して、同じく(黨人)忿疾せしむ。案、三府を經。太尉陳蕃、之を卻けて曰はく、『今、案する所の者は、皆、海内の人譽、國を憂へ公に忠なるの臣、此等は猶ほ將に十世まで宥さんとする』ものなり。豈に罪名章かならざるに收掠を致す者有らんや』と。平署するを肯せず。帝、愈々怒り、遂に膺等を黃門の北寺の獄に下す。其の辭の連及する所、太僕潁川の杜密、御史中丞陳翔及び陳寔、范滂の徒、二百餘人。或は逃遁して獲られざるなり。皆、金を懸けて購募し、使者四もに出で(道)相望む。陳寔曰はく、『吾、獄に就かずんば、衆、恃む所無からん』と。乃ち自ら往き、囚はれんと請ふ。范滂、獄に至る。獄吏、謂つて曰はく、『凡そ坐して繋がるる者は、皆、阜陶を祭る』と。滂曰はく、『阜陶は古の直臣なり。滂が罪無きを知らば、將に之を帝に理せんとす。如し其れ罪有らば、之を祭るとも何の益あらん』と。衆人、此に由りて亦止む。陳蕃復た上書して極諫す。帝、其の言の切なるを

【六〇】 班下。命令を頒布するなり。

【六一】 案。考驗する案文。

【六二】 猶云云。左傳に曰はく、晉の范宣子、叔向を囚ふ。祁奚、宣子に見えて曰はく、謀りて過鮮く、惠訓して倦まざる者は、叔向有り、猶ほ十世までこれを宥して以て能者を勸めんとす云云と。

【六三】 平署。連署する也。

【六四】 時に宦官、權を専らにし、黃門北寺獄を置く。武帝より以來、中都官の詔獄に未だ有らざる所なり。

【六五】 帝。天帝なり。

諱み、託するに蕃の辟召、其の人に非ざるを以てし、之を策免す。時に黨人の獄の。染逮する所の者は、皆、天下の名賢なり。度遼將軍皇甫規、自ら以へらく、西州の豪傑、與るを得ざるを恥づと。乃ち自ら上言す、『臣、前に故の大司農張奐を薦めしは、是れ附黨なり。又、臣、昔、論せられて左校に輸せし時、太學生張鳳等、上書して臣(枉)を訟へしは、是れ黨人の附く所と爲るなり。臣宜しく之に坐すべし』と。朝廷知りて而も問はず。杜密は、素より李膺と名行相次ぐ。時の人、之を李・杜と謂ふ。故に同時に繋がる。密嘗て北海の相と爲り、春を行きて高密に到り、鄭玄が郷の畜夫と爲れるを見、其の異器なるを知り、即ち召して郡職に署し、遂に遣りて學に就かしむ。卒に大儒と成る。後、密、官を去りて家に還るや、毎に守令に謁し、陳託する所多し。同郡の劉勝、亦、蜀郡より郷里に告歸し、門を閉ち、軌を掃ひ、干及する所無し。太守王昱、密に謂つて曰はく、『劉季陵は清高の士にして、公卿、之を擧ぐる者多し』と。密、昱が以て己を激するを知り、對へて曰はく、『劉勝は、位、大夫と爲り、上賓に禮せらる。而も善を知れども薦めず、惡を聞

【六六】 染逮。汚染連及なり。

【六七】 張奐を薦めしこと前卷六年に見ゆ。

【六八】 張鳳上書すること前卷五年に見ゆ。

【六九】 春を行く。郡國の守相、春を以て、主る所の縣を巡行し、民に農桑を勸め、乏絶を振救す。

【七〇】 高密。縣の名、北海郡に屬す。今、山東省膠東道に屬す。

【七一】 鄭玄。漢代の名儒。詩書易禮孝經論語等の註百餘萬言を作る。その註は鄭註とて一權威たり。

【七二】 軌を掃ふ。軌は車の跡なり。人事を絶つをいふ。

【七三】 劉季陵。劉勝、字は季陵。

【七四】 位云云。朝列に在るをいふ。

【七五】 上賓云云。郡守のこれを接遇するをいふ。

けども言ふ無く、情を隠し己を惜み、自ら寒蟬に同じうす。此れ罪人なり。今、義に志し行を力むるの賢ければ、密、之を達し、道に違ひ節を失ふの士あれば、密、之を糾し、明府をして賞刑中を得、令問休揚せしむ。亦萬分の一ならずや』と。昱、慙服し、之を待つこと彌厚し。

九月、光祿勳周景を以て太尉と爲す。

司空劉茂・免せらる。

冬十二月、光祿勳汝南の宣酈を以て司空と爲す。

越騎校尉竇武を以て城門校尉と爲す。武、位に在るや、多く名士を辟し、身を清くし惡を疾み、禮賂、通せず、妻子の衣食、裁に充足するのみ。

兩宮の賞賜を得れば、悉く散じて太學の諸生に與へ、及び貧民に句施す。是に由りて、衆譽、之に歸す。

匈奴・烏桓、張奐至ると聞き、皆、相率ゐて還り降る。凡そ二十萬口。

奐、但だ其の首惡を誅し、餘は皆之を慰納す。唯だ鮮卑のみ塞を出でて去る。朝廷、檀石槐を患ふれども、制する能はず、使を遣はし、印綬を持し、封じて王と爲し、與に和親せんと欲す。檀石槐、受くるを肯せず、而して寇抄すること滋甚だし。

自ら其の地を分ちて三部と爲し、右北平より以東、遼東に至り、夫餘・濊貊に接するまでの、二十餘邑を東部と爲し、右北平より以西、上谷に至るまでの、十餘邑を中部と爲し、上谷より以西、敦煌・烏孫に至るまでの、二十餘邑を西部と爲し、各、大

人を置きて之を領せしむ。

の、十餘邑を中部と爲し、上谷より以西、敦煌・烏孫に至るまでの、二十餘邑を西部と爲し、各、大

人を置きて之を領せしむ。

の、十餘邑を中部と爲し、上谷より以西、敦煌・烏孫に至るまでの、二十餘邑を西部と爲し、各、大

人を置きて之を領せしむ。

の、十餘邑を中部と爲し、上谷より以西、敦煌・烏孫に至るまでの、二十餘邑を西部と爲し、各、大

人を置きて之を領せしむ。

【七六】寒蟬。寂黙するをいふ。楚辭に曰はく、悲しいかな秋の氣たるや、蟬寂寞として聲無しと。

【七七】令問。令問に同じ。

【七八】兩宮。太子及び皇后。

【七九】句施。與へ施す也。

【八〇】檀石槐は蓋し盡く匈奴の故地を有つなり。

國譯資治通鑑第三終

資治通鑑卷第三十七

漢紀二十九

王莽中

始建國元年春正月朔莽帥公侯卿士奉皇太后璽韞上太皇太后順符命去漢號焉初莽娶故丞相王歆孫宜春侯咸女爲妻立以爲皇后生四男宇獲前誅死安頗荒忽乃以臨爲皇太子安爲新嘉辟封字子六人皆爲公大赦天下莽乃策命孺子爲定安公封以萬戶地方百里立漢祖宗之廟於其國與周後竝行其正朔服色以孝平皇后爲定安太后讀策畢莽親執孺子手流涕歔歔曰昔周公攝位終得復子明辟今予獨迫皇天威命不得如意哀嘆良久中傅將孺子下殿北面而稱臣百僚陪位莫不感動又按金匱封拜輔臣以太傅左輔王舜爲太師封安新公大司徒平晏爲太傅就新公少阿羲和劉秀爲國師嘉新公廣漢梓潼哀章爲國將美新公是爲四輔位上公太保後承甄邯爲大司馬承新公丕進侯王尋爲大司徒章新公步兵將軍王邑爲大司空隆新公是爲三公太阿右拂大司空甄豐爲更始將軍廣新公京兆王興爲衛將軍奉新公輕車將軍孫建爲立國將軍成新公京兆王盛爲前將軍崇新公是爲四將凡十一公王興者故城門令史王盛者賣餅莽按符命求得此姓名十餘人兩人容貌應卜相徑從布衣登用以示神焉是日封拜卿大夫侍中尚書官凡數百人諸劉爲郡守者皆徙爲諫大夫改明光宮爲定安館定安太后居之以大鴻臚府爲定安公第皆置門衛使者監領勅阿乳母不得與嬰語常在四壁中至於長大不能名六畜後

莽以女孫宇子妻之。莽策命羣司各以其職。如典誥之文。置大司馬。司允。大司徒。司直。大司空。若位皆孤卿。更名大司農曰羲和。後更為納言。大理曰作士。太常曰秩宗。大鴻臚曰典樂。少府曰共工。水衡都尉曰予虞。與三公。司卿。分屬三公。置二十七大夫。八十一元士。分主中都官諸職。又更光祿勳等名為六監。皆上卿。改郡太守曰大尹。都尉曰大尉。縣令長曰宰。長樂宮曰常樂室。長安曰常安。其餘百官宮室郡縣。盡易其名。不可勝紀。封王氏齊縗之屬。為侯。大功為伯。小功為子。總麻為男。其女皆為任。男以睦。女以隆。為號焉。又曰。漢氏諸侯。或稱王。至於四夷。亦如之。違於古典。繆於一統。其定諸侯王之號。皆稱公。及四夷僭號稱王者。皆更為侯。於是漢諸侯王。二十二人。皆降為公。王子侯者。百八十一人。皆降為子。其後。皆奪爵焉。○莽又封黃帝。少昊。顓頊。帝嚳。堯。舜。夏。商。周。及皐陶。伊尹。之後。皆為公侯。使各奉其祭祀。○莽因漢承平之業。府庫百官之富。百蠻賓服。天下晏然。莽一朝有之。其心意未滿。陘小漢家制度。欲更為疏闊。乃自謂黃帝虞舜之後。至齊王建孫濟北王安。失國。齊人謂之王家。因以為氏。故以黃帝為始祖。虞舜為始祖。追尊陳胡公為陳胡王。田敬仲為田敬王。濟北王安為濟北愍王。立祖廟五。親廟四。天下姚媯。陳田王五姓。皆為宗室。世世復無所與。封陳崇田豐為侯。以奉胡王敬王後。天下牧守。皆以前有翟義趙朋等作亂。領州郡。懷忠孝。封收為男。守為附城。以漢高廟為文祖廟。漢氏園寢廟。在京師者。勿罷。祠薦如故。諸劉勿解其復。各終厥身。州牧數在問。勿令有侵冤。○莽以劉之為字。卯金刀也。詔正月剛卯。金刀之利。皆不得行。乃罷錯刀契刀。及五銖錢。更作小錢。徑六分。重一銖。文曰小錢直一。與前大錢五十者。為二品。竝行。欲防民盜鑄。乃禁不得挾銅炭。○夏四月。徐鄉侯劉快。結黨數千人。起兵於其國。快見殷。故漢膠東王。時為扶崇公。快舉兵。攻即墨。殷閉城門。自繫獄。吏民距快。快敗。走至長廣。死。莽赦殷。益其國。滿萬戶。地方百里。○莽曰。古者一夫田百畝。什一而稅。則國給民富。

而頌聲作。秦壞聖制。廢井田。是以兼并起。貪鄙生。疆者規田。以千數。弱者曾無立錫之居。又置奴婢之市。與牛馬同關。制於民臣。顛斷其命。繆於天地之性。人為貴之義。減輕田租。三十而稅一。常有更賦。罷癘咸出。而豪民侵陵。分田劫假。厥名三十。稅一。實什稅五也。故富者犬馬餘菽粟。驕而為邪。貧者不厭糟糠。窮而為姦。俱陷于辜。刑用不錯。今更名天下田曰王田。奴婢曰私屬。皆不得買賣。其男口不滿八。而田過一井者。分餘田予九族鄰里鄉黨。故無田。今當受田者。如制度。敢有非井田聖制。無法惑眾者。投諸四裔。以禦魍魎。如皇始祖考。虞帝故事。○秋。遣五威將王奇等十二人。班符命四十二篇於天下。德祥五事。符命二十五。福應十二。五威將奉符命。齎印綬。王侯以下。及吏官名更者。外及匈奴西域。徼外蠻夷。皆即授新室印綬。因收故漢印綬。大赦天下。五威將乘乾文車。駕坤六馬。背負鸞鳥之毛。服飾甚偉。每一將。各置五帥。將持節。帥持幢。其東出者。至玄菟。樂浪。高句麗。夫餘。南出者。除徼外。歷益州。改句町王為侯。西出。至西域。盡改其王為侯。北出。至匈奴庭。授單于印。改漢印文。去璽言。章。冬。雷桐華。○以統陸侯陳崇為司命。主司察。上公以下。又以說符侯崔發等為中城四關將軍。主十二城門。及繞雷羊頭。肴。鼉。汧。隴之固。皆以五威冠其號。○又遣諫大夫五十人。分鑄錢於郡國。○是歲。真定。常山大雨雹。

二年春。二月。赦天下。○五威將帥七十二人。還奏事。漢諸侯王為公者。悉上璽綬。為民。無違命者。獨故廣陽王嘉。以獻符命。魯王閔。以獻神書。中山王成都。以獻書言莽德。皆封列侯。班固論曰。昔周封國八百。同姓五十有餘。所以親親賢賢。關諸盛衰。深根固本。為不可拔者也。故盛則周召相其治。致刑錯衰。則五伯扶其弱。與共守。天下謂之共主。疆大弗之敢傾。歷載八百餘年。數極德盡。降為庶人。用天年終。秦訕笑三代。竊自號為皇帝。而子弟為匹夫。內無骨肉本根之輔。外無尺土藩翼之衛。陳吳奮其白挺。劉項隨而斃之。故曰。周過

其歷秦不及期。國執然也。漢興之初，懲戒亡秦孤立之敗，於是尊王子弟，大啓九國，自鴈門以東，盡遼陽，爲燕代。常山以南，太行左轉，度河濟，漸于海，爲齊趙。穀泗以往，奄有龜蒙，爲梁楚。東帶江湖，薄會稽，爲荆吳。北界淮瀕，略廬衡，爲淮南。波漢之陽，互九嶷，爲長沙。諸侯比境，周匝三垂，外接胡越。天子自有三河，東郡、潁川、南陽，自江陵以西，至巴蜀，北自雲中，至隴西，與京師內史凡十五郡。公主列侯，頗邑其中。而藩國大者，夸州兼郡，連城數十。宮室百官，同制京師。可謂矯枉過其正矣。雖然，高祖創業，日不暇給，孝惠享國，又淺。高后女主攝位，而海內晏如。亡狂狡之憂，卒折諸呂之難，成太宗之業，亦賴之於諸侯也。然諸侯原本以大，末流濫以致溢。小者淫荒越法，大者睽孤橫逆，以害身喪國。故文帝分齊趙，景帝削吳楚，武帝下推恩之令，而藩國自析。此以來，齊分爲七，趙分爲六，梁分爲五，淮南分爲三。皇子始立者，大國不過十餘城，長沙、燕代雖有舊名，皆亡。南北邊矣。景遭七國之難，抑損諸侯，滅黜其官，武有衡山、淮南之謀，作左官之律，設附益之法，諸侯惟得衣食稅租，不與政事。至於哀平之際，皆繼體苗裔，親屬疎遠，生於帷牆之中，不爲士民所尊。執與富室亡異，而本朝短祚，國統三絕，是故王莽知漢中外殫微，本末俱弱，無所忌憚，生其姦心，因母后之權，假伊周之稱，顛作威福，廟堂之上，不降階序，而運天下，詐謀既成，遂據南面之尊，分遣五威之吏，馳傳天下，班行符命。漢諸侯王，厥角稽首，奉上璽，執惟恐在後，或乃稱美頌德，以求容媚，豈不哀哉。

國師公劉秀言：周有泉府之官，收不售與欲得，即易所謂理財正辭，禁民爲非者也。莽乃下詔曰：周禮有賒貸樂語，有五均傳記，各有筦焉。今開除貸，張五均，設諸筦者，所以齊衆庶，抑并兼也。遂於長安及洛陽、邯鄲、臨菑、宛、成都立五均司市錢府官。司市常以四時仲月定物上中下之賈，各爲其市平。民賣五穀布帛絲綿之物，不售者，均官者檢厥實用，其本買取之。

物貴過平一錢，則以平買賣，與民賤減平者，聽民自相與市。又民有乏絕，欲除貸者，錢府予之。每月百錢收息三錢。又以周官稅民，凡田不耕爲不殖，出三夫之稅。城郭中宅不樹藝者，爲不毛。出三夫之布。民浮游無事，出夫布一疋。其不能出布者，冗作縣官衣食之。諸取金銀連錫鳥獸魚鱉於山林水澤，及畜牧者，嬖婦桑蠶織紉，紡績補縫，工匠醫巫卜祝，及他方技，商販賈人，皆各自占所爲，於其所之。縣官除其本，計其利十分之，而以其一爲貢。敢不自占，自占不以實者，盡沒入所采取，而作縣官一歲。義和魯匡復奏請權酒酤，莽從之。又禁民不得挾弩鎧，犯者徙西海。○初，莽既班四條於匈奴，後護烏桓使者告烏桓民，毋得復與匈奴皮布稅。匈奴遣使者責稅，收烏桓會豪，縛倒懸之。會豪兄弟怒，共殺匈奴使。單于聞之，發左賢王兵入烏桓，攻擊之。頗殺人民，毆婦女弱小，且千人。去置左地，告烏桓曰：持馬畜皮布來贖之。烏桓持財畜往贖，匈奴受留不遣。及五威將王駿等六人至匈奴，重遣單于金帛，諭曉以受命代漢狀。因易單于故印，故印文曰：匈奴單于璽。莽更曰：新匈奴單于章。將率既至，授單于印，單于曰：未見新印文，宜且勿與。單于不肯與，請使者坐穹廬。單于欲前爲壽，五威從旁謂單于曰：未見新印文，宜且勿與。單于曰：印文何由將曰：故印，當以時上。單于曰：諾。復舉掖授譯，蘇復曰：未見印文，且勿與。單于曰：印文何由變更，遂解故印，奉新印，上將帥受著新印，不視印，飲食至夜乃罷。右帥陳饒謂將帥曰：蘇者姑夕侯，疑印文，幾令單于不與人。如令視印，見其變改，必求故印。此非辭說所能距也。既得而復失之，辱命莫大焉。不如椎破故印，以絕禍根。將帥猶與，莫有應者。饒、燕士果悍，即引斧椎壞之。明日，單于果遣右骨都侯當白將帥曰：漢單于印，言璽不言章，又無漢字。諸王已下，乃有漢言章。今去璽，加新與，臣下無別願，得故印，將帥示以故印，謂曰：新室順天制作，故印隨將帥所自爲，破壞單于宜承天命，奉新室之制，當還白。單于知已無可奈何，又多得賂

遺即遣弟右賢王興奉馬牛隨將帥入謝。因上書求故印。將帥還左犁汗王咸所居地。見烏桓民多。以問咸。咸具言狀。將帥曰。前封四條。不得受。烏桓降者。亟還之。咸曰。請密與單于相聞。得語歸之。單于使咸報曰。當從塞內還之邪。從塞外還之邪。將帥不敢顯決。以聞。詔報從塞外還之。莽悉封五威將爲子。帥爲男。獨陳饒以破璽之功。封威德子。單于始用夏侯藩求地。有拒漢語。後以求稅烏桓不得。因寇掠其人民。覺由是生。重以印文改易。故怨恨。乃遣右大且渠蒲呼盧訾等十餘人。將兵衆萬騎。以護送烏桓爲名。勒兵朔方塞下。朔方太守以聞。莽以廣新公甄豐爲右伯當出西域。車師後王須置離聞之。憚於供給煩費。謀亡入匈奴。都護但欽召置離斬之。置離兄輔國侯狐蘭支將置離衆二千餘人。亡降匈奴。單于受之。遣兵與狐蘭支共入寇。擊車師。殺後城長。傷都護司馬及狐蘭兵。復還入匈奴。時戊己校尉刁護病。史陳良終帶司馬丞韓玄。右曲候任商。相與謀曰。西域諸國頗背叛。匈奴大侵。要死。可殺校尉。帥人衆降匈奴。遂殺護。及其子男昆弟。盡脅略。戊己校尉吏士男女二千餘人。入匈奴。單于號良帶曰烏賁都尉。○冬十一月。立國將軍孫建奏。九月辛巳。陳良終帶自稱廢漢大將軍。亡入匈奴。又今月癸酉。不知何一男子。遮臣建車前。自稱漢氏劉子興。成帝下妻子也。劉氏當復趣空宮。收繫男子。即常安。姓武。字仲。皆逆天違命。大逆無道。漢氏宗廟不當在常安城中。及諸劉當與漢俱廢。陛下至仁。久未定。前故安衆侯劉崇等。更聚衆謀反。今狂狡之虜復依託亡漢。至犯夷滅。連未止者。此聖恩不蚤絕其萌芽故也。臣請漢氏諸廟在京師者。皆罷。諸劉爲吏者。皆待除於家。莽曰。可。嘉新公國師。以符命爲予四輔。明德侯劉龔。率禮侯劉嘉等。凡三十二人。皆知天命。或獻天符。或貢昌言。或捕告反虜。厥功茂焉。諸劉與三十二人同宗共祖者。勿罷。賜姓曰王。唯國師公。以女配莽子。故不賜姓。定安公太后。自劉氏之廢。常稱疾不朝會。時年未二十。莽敬憚傷哀。欲嫁之。乃更號曰黃皇室主。欲絕之於漢。令孫建

世子盛飾。將醫往問疾。后大怒。鞭答其傍侍御。因發病。不肯起。莽遂不復彊也。○十二月。雷。○莽恃府庫之富。欲立威匈奴。乃更名匈奴單于曰降奴服子。下詔遣立國將軍孫建等。率十二將分道竝出。五威將軍苗詵。虎賁將軍王況。出五原。厭難將軍陳欽。震狄將軍王巡。出雲中。振武將軍王嘉。平狄將軍王萌。出代郡。相威將軍李琴。鎮遠將軍李翁。出西河。誅貉將軍楊俊。討濊將軍嚴尤。出漁陽。奮武將軍王駿。定胡將軍王晏。出張掖。及偏裨以下百八十人。募天下囚徒丁男甲卒三十萬人。轉輸衣裘兵器糧食。自負海江淮。至北邊。使者馳傳督趣。以軍興法從事。先至者屯邊郡。須畢具。乃同時出。窮追匈奴。內之丁令。分其國土人民。以爲十五。立呼韓邪子孫十五人。皆爲單于。○莽以錢幣訖不行。復下書曰。寶貨皆重。則小用不給。皆輕。則儻載煩費。輕重大小。各有差品。則用便而民樂。於是更作金銀龜貝。錢布之品。名曰寶貨。錢貨六品。金貨一品。銀貨二品。龜貨四品。貝貨五品。布貨十品。凡寶貨五物。六名。二十八品。鑄作錢布。皆用銅。殺以連錫。百姓潰亂。其貨不行。莽知民愁。乃但行小錢。直一。與大錢五十。二品竝行。龜貝布屬。且寢盜鑄錢者。不可禁。乃重其法。一家鑄錢。五家坐之。沒入爲奴婢。吏民出入持錢。以副符傳。不持者。厨傳勿舍。關津苛留。公卿皆持以入宮殿門。欲以重而行之。是時百姓便安漢五銖錢。以莽錢大小兩行難知。又數變改不信。皆私以五銖錢市買。訛言大錢當罷。莫肯挾。莽患之。復下書。諸挾五銖錢。言大錢當罷者。比非井田制。投四裔。及坐賣買田宅奴婢鑄錢。自諸侯卿大夫。至于庶民。抵罪者。不可勝數。於是農商失業。食貨俱廢。民人至涕泣於市道。○莽之謀篡也。吏民爭爲符命。皆得封侯。其不爲者。相戲曰。獨無天帝除書乎。司命陳崇。白莽曰。此開姦臣作福之路。而亂天命。宜絕其原。莽亦厭之。遂使尚書大夫趙竝。驗治非五威將帥所班。皆下獄。初甄豐。劉秀。王舜。爲莽腹心。唱導在位。褒揚功德。安漢宰衡之號。及封莽母兩子兄弟。皆豐等所共謀。而豐舜秀亦受其賜。竝富貴矣。非

復欲令莽居攝也。居攝之萌，出於泉陵侯劉慶。前輝光謝譚，長安令田終術，莽羽翼已成，意欲稱攝，豐等承順其意，莽輒復封舜、秀、豐等子孫，以報之。豐等爵位已盛，心意既滿，又實畏漢宗室，天下豪桀而疏遠，欲進者，竝作符命，莽遂據以即真。舜、秀內懼而已，豐素剛彊，莽覺其不說，故託符命文，徙豐為更始將軍，與賣餅兒王盛同列。豐父子默然，時子尋為侍中，京兆大尹茂德侯，即作符命，新室當分陝，立二伯，以豐為右伯，太傅平晏為左伯，如周召故事，莽即從之。拜豐為右伯，當述職，西出未行，尋復作符命言，故漢氏平帝后黃皇室主，為尋之妻，莽以詐立，心疑大臣，怨謗欲震威以懼下，因是發怒，曰：黃皇室主，天下母，此何謂也？收捕尋，尋亡，豐自殺。尋隨方士入華山，歲餘，捕得，辭連國師公、秀子隆威侯、棻、棻弟右曹長水校尉伐虜侯泳、大司空邑弟左關將軍掌威侯奇及秀門人侍中騎都尉丁隆等，牽引公卿黨親列侯以下死者數百人，乃流棻于幽州，放尋于三危，殛隆于羽山，皆驛車傳致其屍云。○是歲，莽始興神仙事，以方士蘇樂言起八風臺，臺成，萬金。又種五梁禾於殿中，先以寶玉漬種，計粟斛成一金。

三年，遣田禾將軍趙竝發戍卒屯田五原北假，以助軍糧。○莽遣中郎將藺苞副校尉戴級將兵萬騎，多齎珍寶，至雲中塞下，招誘呼韓邪諸子，欲以次拜為十五單于，苞級使譯出塞，誘呼左犁汗王咸、咸子登助三人至，至則脅拜咸為孝單于，助為順單于，皆厚加賞賜，傳送助登長安，莽封苞為宣威公，拜為虎牙將軍，封級為揚威公，拜為虎賁將軍。單于聞之，怒曰：先單于受漢宣帝恩，不可負也。今天子非宣帝子孫，何以得立？遣左骨都侯右伊秩訾王呼盧訾及左賢王樂將兵入雲中，益壽塞大殺吏民，是後單于歷告左右部都尉諸邊王，入塞寇盜，大輩萬餘，中輩數千，少者數百，殺鴈門朔方太守都尉，略吏民畜產，不可勝數。緣邊虛耗，是時諸將，在邊以大衆未集，未敢出擊匈奴，討滅將軍嚴尤諫曰：臣聞匈奴為害，所從來

久矣，未聞上世有必征之者也。後世三家周秦漢征之，然皆未有得上策者也。周得中策，漢得下策，秦無策焉。當周宣王時，獫狁內侵，至于涇陽，命將征之，盡境而還，其視戎狄之侵，譬猶蟲蝨，毆之而已。故天下稱明，是為中策。漢武帝選將練兵，約齎糧，深入遠戍，雖有克獲之功，胡輒報之，兵連禍結三十餘年，中國罷耗，匈奴亦創艾，而天下稱武，是為下策。秦始皇不忍小恥，而輕民力，築長城之固，延袤萬里，轉輸之行，起於負海，疆境既完，中國內竭，以喪社稷，是為無策。今天下遭陽九之厄，比年饑饉，西北邊尤甚，發三十萬衆，具三百日糧，東援海代，南取江淮，然後乃備，計其道里，一年尚未集合，兵先至者，聚居暴露，師老械弊，執不可用，此一難也。邊既空虛，不能奉軍糧，內調郡國，不相及，屬此二難也。計一人三百日食，用糒十八斛，非牛力不能勝，牛又自當齎食，加二十斛，重矣。胡地沙鹵多，乏水草，以往事揆之，軍出未滿百日，牛必物故，且盡，餘糧尚多，人不能負，此三難也。胡地秋冬甚寒，春夏甚風，多齎釜鍬薪炭，重不可勝，食糒飲水，以歷四時，師有疾疫之憂，是故前世伐胡，不過百日，非不欲久，執力不能，此四難也。輜重自隨，則輕銳者少，不得疾行，虜徐遁逃，執不能及，幸而逢虜，又累輜重，如遇險阻，銜尾相隨，虜要遮前後，危殆不測，此五難也。大用民力，功不可必立，臣伏憂之。今既發兵，宜縱先至者，令臣尤等深入靈擊，且以創艾胡虜，莽不聽，尤言轉兵穀如故，天下騷動，咸既受莽孝單于之號，馳出塞歸庭，具以見脅狀，白單于，單于更以為於栗置支侯，匈奴賤官也，後助病死，莽以登代助為順單于，吏士屯邊者，所在放縱，而內郡愁於徵發，民棄城郭，始流亡為盜賊，并州平州尤甚，莽令七公六卿，號皆兼稱將軍，遣著武將軍，遠竝等鎮名都，中郎將繡衣執法，各五十五人，分鎮緣邊大郡，督大姦猾，擅弄兵者，皆乘便為姦，於外撓亂州郡，貨賂為市，侵漁百姓，莽下書切責之曰：自今以來，敢犯此者，輒捕繫，以名聞，然猶放縱自若，北邊自宣帝以來，數世不見煙火之警，人民熾盛，牛馬布野，及莽撓亂匈奴，

與之構難。邊民死亡係獲。數年之間。北邊虛空。野有暴骨矣。太師王舜。自莽篡位後。病悸寢劇。死。○莽爲太子。置師友各四人。秩以大夫。以故大司徒馬宮等爲師。疑傅丞阿輔。保拂。是爲四師。故尙書令唐林等爲胥附。犇走。先後禦侮。是爲四友。又置師友侍中。諫議。六經祭酒。各一人。凡九祭酒。秩皆上卿。遣使者奉璽書印綬。安車駟馬。迎龔勝。卽拜爲師友祭酒。使者與郡太守。縣長吏。三老官屬。行義諸生千人以上。入勝里。致詔。使者欲令勝起迎。久立門外。勝稱病篤。爲牀室中。戶西南牖。下東首。加朝服。拖紳。使者付璽書。奉印綬。內安車駟馬。進謂勝曰。聖朝未嘗忘君。制作未定。待君爲政。思聞所欲施行。以安海內。勝對曰。素愚。加以年老。被病。命在朝夕。隨使君上道。必死道路。無益萬分。使者要說。至以印綬就加勝身。勝輒推不受。使者上言。方盛夏暑熱。勝病少氣。可須秋涼。乃發。有詔許之。使者五日壹與太守俱問起居。爲勝兩子及門人高暉等言。朝廷虛心待君。以茅土之封。雖疾病。宜移動。至傳舍。示有行意。必爲子孫遺大業。暉等白。使者語勝。自知不見聽。卽謂暉等。吾受漢家厚恩。無以報。今年老矣。且暮入地。誼豈以一身事二姓。下見故主哉。勝因敕以棺斂喪事。衣周於身。棺周於衣。勿隨俗動。吾冢種柏作祠堂。語畢。遂不復開口飲食。積十四日。死。死時七十九矣。是時清名之士。又有琅邪紀遵。齊薛方。太原郇越。郇相。沛唐林。唐尊。皆以明經飭行。顯名於世。紀遵。兩唐。皆仕莽。封侯貴重。歷公卿位。唐林。數上疏諫正。有忠直節。唐尊。衣敝履空。被虛僞名。郇相。爲莽太子四友。病死。莽太子遣使祝以衣衾。其子攀棺不聽。曰。死父遺言。師友之送。勿有所受。今於皇太子得託友官。故不受也。京師稱之。莽以安車迎薛方。方因使者辭謝。曰。堯舜在上下。有巢由。今明主方隆唐虞之德。小臣欲守箕山之節。使者以聞。莽說其言。不彊致。初隄。麋郭欽。爲南郡太守。杜陵蔣詡。爲兖州刺史。亦以廉直爲名。莽居攝。欽詡皆以病免官。歸鄉里。臥不出戶。卒於家。哀平之際。沛國陳咸。以律令爲尙書。莽輔政。多改漢制。咸心非之。及何

武鮑宣死。咸歎曰。易稱見幾而作。不俟終日。吾可以逝矣。卽乞骸骨去。職及莽篡位。召咸爲掌寇大夫。咸謝病。不肯應。時三子參。欽。豐。皆在位。咸悉令解官。歸鄉里。閉門不出。猶用漢家祖臘。人問其故。咸曰。我先入豈知王氏臘乎。悉收斂其家律令書文。壁藏之。又齊栗融。北海禽慶。蘇章。山陽曹竟。皆儒生。去官不仕於莽。

班固贊曰。春秋列國卿大夫。及至漢興。將相名臣。耽寵以失其世者。多矣。是故清節之士。於是爲貴。然大率多能自治。而不能治人。王貢之材。優於龔鮑。守死善道。勝實蹈焉。貞而不諂。薛方近之。郭欽蔣詡好。遜不汗。絕紀唐矣。

是歲。灑河郡蝗生。○河決魏郡。泛清河以東數郡。先是。莽恐河決爲元城冢墓害。及決。東去元城不憂水。故遂不堤塞。

四年春。二月。赦天下。○厭難將軍陳欽。震狄將軍王巡。上言。捕得虜生口。驗問。言虜犯邊者。皆孝單于咸子角所爲。莽乃會諸夷。斬咸子登於長安市。○大司馬甄邯死。○莽至明堂。下書。以洛陽爲東都。常安爲西都。邦畿連體。各有采任。州從禹貢。爲九。爵從周氏。爲五。諸侯之員。千有八百。附城之數。亦如之。以俟有功諸公。一同有衆萬戶。其餘。以是爲差。今已受封者。公侯以下。凡七百九十六人。附城千五百五十一人。以圖簿未定。未授國邑。且令受奉都內。月錢數千。諸侯皆困乏。至有傭作者。○莽性躁擾。不能無爲。每有所興造。動欲慕古。不度時宜。制度又不定。吏緣爲姦。天下謦謦。陷刑者衆。莽知民愁怨。乃下詔。諸食王田。皆得賣之。勿拘以法。犯私買賣。庶人者。且一切勿治。然他政詩亂。刑罰深刻。賦斂重數。猶如故焉。○初。五威將帥出西南夷。改句町王爲侯。王邯怨怒。不附。莽諷牂柯大尹周歆。詐殺邯。邯弟承起兵。殺歆。州郡擊之。不能服。莽又發高句驪兵。擊匈奴。高句驪不欲行。郡彊迫。皆亡出塞。因犯法爲寇。遼西大尹田譚。追擊之。爲所殺。州郡歸咎於高句驪侯。嚴尤奏言。貉人犯法。不從驪

起正有他心。宜令州郡且慰安之。今猥被以大罪。恐其遂畔。夫餘之屬。必有和者。匈奴未克。夫餘。濊貉復起。此大憂也。莽不尉安。濊貉遂反。詔尤擊之。尤誘高句驪侯騶至而斬焉。傳首長安。莽大說。更名高句驪為下句驪。於是貉人愈犯邊。東北與西南夷皆亂。莽志方盛。以為四夷不足吞滅。專念稽古之事。復下書。以此年二月東巡狩。具禮儀調度。既而以文母太后體不安。且止待後。○初莽為安漢公時。欲諂太皇太后。以斬郅支功。奏尊元帝廟為高宗。太后晏駕後。當以禮配食。云及莽改號太后為新室文母。絕之於漢。不令得體。元帝廟為高宗。太廟更為文母。太后起廟。獨置孝元廟故殿。以為文母。嘗食堂。既成名曰長壽宮。以太后在故。未謂之廟。莽置酒長壽宮。請太后。既至。見孝元廟廢。徹塗地。太后驚泣曰。此漢家宗廟。皆有神靈。與何治而壞之。且使鬼神無知。又何用廟為。如令有知。我乃人之妃妾。豈宜辱帝之堂。以陳饋食哉。私謂左右曰。此人慢神多矣。能久得祐乎。飲酒不樂。而罷。自莽篡位後。知太后怨恨。求所以媚太后者。無不為。然愈不說。莽更漢家黑貂。著黃貂。又改漢正朔伏臘日。太后令其官屬黑貂。至漢家正臘日。獨與其左右相對飲食。

五年春二月。文母皇太后崩。年八十四。葬渭陵。與元帝合。而溝絕之。新室世世獻祭其廟。元帝配食。坐於牀下。莽為太后服喪三年。○烏孫大小昆彌遣使貢獻。莽以烏孫國人多親附小昆彌。見匈奴諸邊竝侵。意欲得烏孫心。乃遣使者引小昆彌使。坐大昆彌使上。師友祭酒滿昌劾奏使者曰。夷狄以中國有禮誼。故調而服從。大昆彌君也。今序臣使於君使之上。非所以有夷狄也。奉使大不敬。莽怒。免昌官。○西域諸國以莽積失恩信。焉耆先叛。殺都護但欽。西域遂瓦解。○十一月。彗星出。二十餘日不見。○是歲。以挾銅炭者多。除其法。○匈奴烏珠留單于死。用事大臣右骨都侯須卜當。即王昭君女伊墨居次云之婿也。云常欲與中國和親。又素與伊栗置支侯咸厚善。見咸前後為莽所拜。故遂立咸為烏累若鞮單于。烏累單于咸立。以弟輿為右谷蠡王。烏珠留單于子蘇屠胡本為左賢王。後更謂之護于。欲傳以國。咸怨烏珠留單于。已號乃貶護于為左屠者王。

天鳳元年春正月。赦天下。○莽下詔。將以是歲四仲月。徧行巡狩之禮。太官齎糒乾肉。內者行張坐臥。所過毋得有所給。俟畢。北巡狩之禮。即于土中。居洛陽之都。羣公奏言。皇帝至孝。新遭文母之喪。顏色未復。飲食損少。今一歲四巡。道路萬里。春秋尊。非糒乾肉之所能堪。且無巡狩。須闋大服。以安聖體。莽從之。要期以天鳳七年巡狩。厥明年。即土之中。遣太傅平晏。大司空王邑。之洛陽。營相宅兆。圖起宗廟社稷。郊兆云。○三月。壬申晦。日有食之。大赦天下。以災異策。大司馬遂竝。就侯氏朝位。太傅平晏。勿領尚書事。以利苗男。新為大司馬。莽即真。尤備大臣。抑奪下權。朝臣有言其過失者。輒拔擢。孔仁。趙博。費興等。以敢擊大臣。故見信任。擇名官而居之。國將哀章。頗不清。莽為選置和叔。敕曰。非但保國將閨門。當保親屬。在西州者。諸公皆輕賤。而章尤甚。○夏四月。隕霜殺草木。海瀕尤甚。六月。黃霧四塞。秋七月。大風拔樹。飛北闕直城門屋瓦。雨雹。殺牛羊。○莽以周官王制之文。置卒正。連率。大尹。職如太守。又置州牧。部監二十五人。分長安城旁六鄉。置帥各一人。分三輔為六尉。郡河內。河東。弘農。河南。潁川。南陽。為六隊。郡更名河南大尹。曰保忠信。卿益河南屬縣。滿三十。置六郊。州長各一人。入主五縣。及他官名。悉改。大郡至分為五。合百二十有五郡。九州之內。縣二千二百有三。又倣古六服。為惟城。惟寧。惟翰。惟屏。惟垣。惟藩。各以其方為稱。總為萬國焉。其後歲復變更。一郡至五易名。而還復其故。吏民不能紀。每下詔書。輒繫其故名云。○匈奴右骨都侯須卜當。伊墨居次云。勸單于和親。遣人之西。虎猛制虜塞下。告塞吏云。欲見和親侯。和親侯者。王昭君兄子歙也。中部都尉以聞。莽遣歙。歙弟騎都尉展德侯颯。使匈奴。賀單于初立。賜黃金衣被繒帛。給言侍子登在。因購求陳良終帶等。單于盡收陳良等二十七人。皆械檻付使者。

遣尉唯姑夕王富等四十人送歛。莽作焚如之刑，燒殺陳良等。○緣邊大饑，人相食，諫大夫如普行邊兵，還言軍士久屯，寒苦，邊郡無以相贍。今單于新和，宜因是罷兵，校尉韓威進曰：「以新室之威，而吞胡虜，無異口中蚤蝨。」臣願得勇敢之士五千人，不齎斗糧，飢食虜肉，渴飲其血，可以橫行。莽壯其言，以威為將軍。然采普言，徵還諸將在邊者，免陳欽等十八人，又罷四關鎮都尉屯兵，單于貪莽賂遺，故外不失漢故事，然內利寇掠。又使還，知子登前死，怨恨寇虜從左地入，不絕。使者問單于，輒曰：「烏桓與匈奴無狀，黠民共為寇，入塞，譬如中國有盜賊耳。」咸初立持國，威信尚淺，盡力禁止，不敢有二心。莽復發軍屯。○益州蠻夷愁擾，盡反，復殺益州大尹程隆。莽遣平蠻將軍馮茂、發巴蜀犍為吏士，賦斂取足於民，以擊之。○莽復申下金銀龜貝之貨，頗增減其賈，直而罷大小錢，改作貨布、貨泉二品，竝行。又以大錢行久，罷之，恐民挾不止，乃令民且獨行大錢，盡六年，毋得復挾大錢矣。每一易錢，民用破業，而大陷刑。

資治通鑑卷第三十七

資治通鑑卷第三十八

漢紀三十一

王莽下

天鳳二年春二月，大赦天下。○民訛言黃龍墮死黃山宮中，百姓奔走往觀者有萬數。莽惡之，捕繫問所從起，不能得。○單于咸既和親，求其子登屍，莽欲遣使送致，恐咸怨恨，害使者，乃收前言當誅侍子者，故將軍陳欽以他辜殺之。莽選辯士濟南王咸為大使。夏五月，莽復遣和親侯歙與咸等送右厨唯姑夕王，因奉歸前所斬侍子登，及諸貴人從者喪。單于遣云當子男大且渠奢等至塞迎之，咸到單于庭，陳莽威德，莽亦多遺單于金珍。因論說改其號，號匈奴曰恭奴。單于曰：「善子，賜印綬，封骨都侯，當為後安公。當子男奢為後安侯。單于貪莽金幣，故曲聽之。然寇盜如故。」○莽意以為制定，則天下自平。故銳思於地理，制禮作樂，講合六經之說。公卿旦入暮出，論議連年不決。不暇省獄訟冤結，民之急務。縣宰缺者，數年守兼。一切貪殘日甚。中郎將繡衣執法在郡國者，竝乘權勢，傳相舉奏。又十一公士分布勸農桑。班時令按諸章，冠蓋相望，交錯道路。召會吏民，逮捕證左。郡縣賦斂，遞相賂賂，白黑紛然。守闕告訴者多。莽自見前顛權，以得漢政，故務自攬衆事，有司受成苟免。諸寶物名帑，藏錢穀官皆宦者領之。吏民上封事，宦官左右開發，尚書不得知。其畏備臣下如此，又好變改制度，政令煩多。當奉行，輒質問，乃以從事。前後相乘，慣眊不深。莽常御燈火，至明猶不能勝，尚書因是為寢事。上書待報者，連年不得去。拘繫郡縣者，逢赦而後出，衛卒不交代者，至三

歲穀糴常貴。邊兵二十餘萬人。仰衣食縣官。五原代郡尤被其毒。起為盜賊。數千人為輩。轉入旁郡。莽遣捕盜將軍孔仁。將兵與郡縣合擊。歲餘乃定。○邯鄲以北。大雨。水出。深者數丈。流殺數千人。

三年春二月乙酉。地震。大雨雪。關東尤甚。深者一丈。竹柏或枯。大司空王邑上書。以地震乞骸骨。莽不許。曰。夫地有動有震。震者有害。動者不害。春秋記地震。易繫坤動。動靜辟翁。萬物生焉。其好自誣飾。皆此類也。○先是。莽以制作未定。自上公侯。下至小吏。皆不得俸祿。夏五月。莽下書曰。予遭陽九之厄。百六之會。國用不足。民人騷動。自公卿以下。一月之祿。十縷布二匹。或帛一匹。予每念之。未嘗不戚焉。今厄會已度。府帑雖未能充。略頗稍給。其以六月朔庚寅。始賦吏祿。皆如制度。四輔公卿大夫士。下至輿僚。凡十五等。僚祿一歲六十六斛。稍以差稱。上至四輔。而為萬斛。云。莽又曰。古者歲豐穰。則充其禮。有災害。則有所損。與百姓同憂喜也。其用上計時通計。天下幸無災害者。太官膳羞。備其品矣。即有災害。以什率多少。而損膳焉。自十一公六司六卿以下。各分州郡國邑。保其災害。亦以十率多少。而損其祿。郎從官中都官吏。食祿都內之委者。以太官膳羞。備損而為節。冀上下同心。勸進農業。安元元焉。莽之制度。煩碎如此。課計不可理。吏終不得祿。各因官職為姦。受取賂賂。以自共給焉。○戊辰。長平館西岸崩。壅涇水不流。毀而北行。羣臣上壽。以為河圖所謂以土填水。匈奴滅亡之祥也。莽乃遣并州牧宋弘。游擊都尉任萌等。將兵擊匈奴。至邊止屯。○秋七月辛酉。霸城門災。○戊子晦。日有食之。大赦天下。○平蠻將軍馮茂。擊句町。士卒疾疫。死者什六七。賦斂民財。什取五。益州虛耗而不克徵。還下獄死。冬。更遣寧始將軍廉丹。與庸部牧史熊。大發天水隴西騎士。廣漢巴蜀健為吏民十萬人。轉輸者合二十萬人。擊之。始至。頗斬首數千。其後軍糧前後不相及。士卒飢疫。莽徵丹熊。丹熊願益調度。必克乃還。復大賦斂。就都大尹馮英。不肯給。

上言。自西南夷反叛以來。積且十年。郡縣距擊不已。續用馮茂。苟施一切之政。樊道以南。山險高深。茂多。歐衆遠居。費以億計。吏士罹毒氣。死者什七。今丹熊懼於自詭。期會調發。諸郡兵穀。復警民。取其什四。空破梁州。功終不遂。宜罷兵屯田。明設購賞。莽怒。免英官。後頗覺寤。曰。英亦未可厚非。復以英為長沙連率。粵犒蠻夷。任貴。亦殺太守枚根。○翟義黨王孫慶。捕得莽使太醫尚方。與巧屠。共刳剝之。量度五臧。以竹筵導其脈。知所終始。云可以治病。○是歲遣大使五威將王駿。西域都護李崇。戊己校尉郭欽。出西域。諸國皆郊迎。送兵穀。駿欲襲擊之。焉者詐降。而聚兵自備。駿等將莎車龜茲兵七千餘人。分為數部。命郭欽及佐帥何封。別將居後。駿等入焉者。焉者伏兵要遮。駿及姑墨。封犂。危須。國兵。為反間。還共襲駿。皆殺之。欽後至焉者。焉者兵未還。欽襲擊。殺其老弱。從車師還入塞。莽拜欽為填外將軍。封剽胡子。何封為集胡男。李崇收餘士。還保龜茲。及莽敗崇沒。西域遂絕。四年夏六月。莽更授諸侯王。茅土於明堂。親設文石之平。陳菁茅。四色之土。告於岱宗。泰社。后土。先祖。先妣。以班授之。莽好空言。慕古法。多封爵人。性實吝嗇。託以地理未定。故且先賦茅土。用慰喜封者。○秋八月。莽親之南郊。鑄作威斗。以五石銅為之。若北斗。長二尺五寸。欲以厭勝衆兵。既成。令司命負之。莽出在前。入在御旁。○莽置義和命士。以督五均六筦。郡有數人。皆用富賈為之。乘傳求利。交錯天下。因與郡縣通姦。多張空簿。府藏不實。百姓愈病。是歲。莽復下詔。申明六筦。每一筦。為設科條防禁。犯者罪至死。姦民猾吏。竝侵衆庶。各不安生。又一切調上公以下。諸有奴婢者。率一口出錢三千六百。天下愈愁。納言馮常。以六筦諫。莽大怒。免常官。法令煩苛。民搖手觸禁。不得耕桑。絲役煩劇。而枯旱蝗蟲相因。獄訟不決。吏用苛暴。立威。旁緣莽禁。侵刻小民。富者不能自別。貧者無以自存。於是竝起為盜賊。依阻山澤。吏不能禽。而覆蔽之。浸淫日廣。臨淮瓜田儀。依阻會稽長州。琅邪呂母。聚黨數千人。殺海曲。

宰入海中爲盜。其衆浸多。至萬數。荊州饑饉。民衆入野澤。掘鳧茈而食之。更相侵奪。新市人王匡。王鳳。爲平理。諍訟。遂推爲渠帥。衆數百人。於是諸亡命者。南陽馬武。潁川王常。成丹等。皆往從之。共攻離鄉聚。賊於綠林山中。數月間。至七八千人。又有南郡張霸。江夏羊牧等。與王匡俱起。衆皆萬人。莽遣使者。即赦盜賊。還言盜賊解。輒復合。問其故。皆曰。愁法禁煩苛。不得舉手。力作所得。不足以給貢稅。閉門自守。又坐鄰伍。鑄錢挾銅。姦吏因以愁民。民窮。悉起爲盜賊。莽大怒。免之。其或順指。言民驕黠。當誅。及言時。運適然。且滅不久。莽說。輒遷官。五年春。正月朔。北軍南門災。○以大司馬司允費興。爲荊州牧。見問到部。方略。興對曰。荆揚之民。率依阻山澤。以漁采爲業。間者。國張六筭。稅山澤。妨奪民之利。連年久旱。百姓饑窮。故爲盜賊。興到部。欲令明曉。告盜賊歸田里。假貸犂牛。種食。濶其租賦。冀可以解釋。安集。莽怒。免興官。○天下吏以不得俸祿。竝爲姦利。郡尹縣宰。家累千金。莽乃考始建國二年。胡虜猾。夏以來。諸軍吏及緣邊吏大夫以上。爲姦利。增產致富者。收其家所有財產五分之二。以助邊急。公府士。馳傳天下。考覆貪饜。開吏告其將。奴婢告其主。冀以禁姦。而姦愈甚。○莽孫功。崇公宗。坐自畫容貌。被服天子衣冠。刻三印。發覺自殺。宗姊妨。爲衛將軍王興夫人。坐祝詛。姑殺婢。以絕口。與興皆自殺。○是歲。楊雄卒。初成帝之世。雄爲郎。給事黃門。與莽及劉秀竝列。哀帝之初。又與董賢同官。莽賢爲三公。權傾人主。所薦莫不拔擢。而雄三世不徙官。及莽篡位。雄以耆老。久次。轉爲大夫。恬於勢利。好古樂道。欲以文章成名於後世。乃作太玄。以綜天地人之道。又見諸子。各以其智。舛馳。大抵詆訾聖人。卽爲怪迂。析辯詭辭。以撓世事。雖小辯。終破大道。而惑衆。使溺於所聞。而不自知其非也。故人時有問雄者。常用法應之。號曰法言。用心於內。不求於外。於時人皆忽之。唯劉秀及范滂敬焉。而桓譚以爲絕倫。鉅鹿侯芭師事焉。大司空王邑。納言嚴尤。聞雄死。謂桓譚曰。子常稱楊雄書。豈能傳於後世乎。譚曰。必傳。

願君與譚不及見也。凡人賤近而貴遠。親見楊子雲。祿位容貌。不能動人。故輕其書。昔老聃著虛無之言。兩篇薄仁義。非禮學。然後好之者。尙以爲過於五經。自漢文景之君。及司馬遷。皆有是言。今楊子之書。文義至深。而論不詭於聖人。則必度越諸子矣。○琅邪樊崇。起兵於莒。衆百餘人。轉入太山。羣盜以崇勇猛。皆附之。一歲間。至萬餘人。崇同郡人逢安。東海人徐宣。謝祿。楊音。各起兵。合數萬人。復引從崇。共還攻莒。不能下。轉掠青徐間。又有東海刁子都。左賢王興。亦起兵。鈔擊徐兗。莽遣使者。發郡國兵擊之。不能克。○烏累單于死。弟立。爲呼都而尸道。阜若鞮。單于興。旣立。貪利賞賜。遣大且渠奢。與伊墨居次。云女弟之子醯。積王。俱奉獻。至長安。莽遣和親侯歙。與奢等。俱至制虜塞下。與云及須卜當會。因以兵迫脅云。當將至。長安。云當小男。從塞下。得脫歸。匈奴當至長安。莽拜爲須卜單于。欲出大兵。以輔立之。兵調度亦不合。而匈奴愈怒。竝入北邊爲寇。六年春。莽見盜賊多。乃令太史推三萬六千歲歷紀。六歲一改元。布天下。下書自言。己當如黃帝。僊升天。欲以誑耀百姓。銷解盜賊。衆皆笑之。○初。獻新樂於明堂太廟。○更始將軍廉丹。擊益州。不能克。益州夷棟。蠶若豆等。起兵。殺郡守。越雋夷人。大牟亦叛。殺略吏人。莽召丹還。更遣大司馬護軍郭興。庸部牧李犂。擊蠻夷。若豆等。太傅羲叔。士孫喜。清潔江湖之盜賊。而匈奴寇邊甚。莽乃大募天下丁男。及死罪囚。吏民奴。名曰豬突。豨勇。以爲銳卒。一切稅天下吏民。訾三十取一。縑帛皆輸長安。令公卿以下。至郡縣。黃綬。皆保養軍馬。多少各以秩爲差。吏盡復以與民。又博募有奇技術。可以攻匈奴者。將待以不次之位。言便宜者。以萬數。或言能度水。不用舟楫。連馬接騎。濟百萬師。或言不持斗糧。服食藥物。三軍不饑。或言能飛一日千里。可窺匈奴。莽輒試之。取大鳥翮。爲兩翼。頭與身皆著毛。通引環紐。飛數百步墮。莽知其不可用。苟欲獲其名。皆拜爲理軍。賜以車馬。待發。初。莽之欲誘。迎須卜當也。大司馬嚴尤。

諫曰。當在匈奴右部。兵不侵邊。單于動靜。輒語中國。此方面之大助也。于今迎當。置長安稟街。一胡人耳。不如在匈奴。有益。莽不聽。既得當。欲遣尤與廉丹擊匈奴。皆賜姓徵氏。號二徵將軍。令誅單于。輿而立。當代之。出車城西橫廐。未發。尤素有智略。非莽攻伐四夷。數諫不從。及當出廷議。尤固言。匈奴可且以爲後。先憂山東盜賊。莽大怒。策免尤。○大司空議。曹史代郡范升。奏記王邑曰。升聞子以人不聞於其父母。爲孝。臣以下不非其君上。爲忠。今衆人咸稱朝聖。皆曰公明。蓋明者無不見。聖者無不聞。今天下之事。昭昭於日月。震震於雷霆。而朝云不見。公云不聞。則元元焉所呼天。公以爲是。而不言。則過小矣。知而從令。則過大矣。二者於公。無可以免。宜乎天下歸怨於公矣。朝以遠者不服。爲至念。升以近者不悅。爲重憂。今動與時戾。事與道反。馳騫覆車之轍。踵循敗事之後。後出益可怪。晚發愈可懼耳。方春歲首。而動發遠役。藜藿不充。田荒不耕。穀價騰躍。斛至數千。吏民陷於湯火中。非國家之民也。如此則胡貊守闕。青徐之寇。在於帷帳矣。升有一言。可以解天下倒懸。免元元之急。不可書傳。願蒙引見。極陳所懷。邑不聽。○翼平連率田況。奏郡縣警民不實。莽復三十取一。以況忠言憂國。進爵爲伯。賜錢二百萬。衆庶皆晉之。青徐民多棄鄉里流亡。老弱死道路。壯者入賊中。○夙夜連率韓博。上言。有奇士長丈。大十圍。來至臣府。欲奮擊胡虜。自謂巨母霸。出於蓬萊。東南五城西北。昭如海瀕。輶車不能載。三馬不能勝。即日以大車四馬。建虎旗。載霸詣闕。霸臥則枕鼓。以鐵箸食。此皇天所以輔新室也。願陛下作大甲高車。賁育之衣。遣大將一人。與虎賁百人。迎之於道。京師門戶不容者。開高大之。以示百蠻。鎮安天下。博意欲以風莽。莽聞惡之。留霸在所。新豐更其姓曰巨母氏。謂因文母太后而霸王符也。徵博下獄。以非所宜言。棄市。○關東饑旱連年。刁子都等黨衆寔多。至六七萬。地皇元年春正月乙未。赦天下。改元曰地皇。從三萬六千歲。歷號也。○莽下書曰。方出軍行。

師敢有趨謹犯法者。輒論斬。毋須時。於是春夏斬人都市。百姓震懼。道路以目。○莽見四方盜賊多。復欲厭之。又下書曰。予之皇初祖考黃帝。定天下。將兵爲大將軍。內設大將。外置大司馬五人。大將軍至。士吏凡七十三萬八千九百人。士千三百五十萬人。予受符命之文。稽前人將條備焉。於是置前後左右中大司馬之位。賜諸州牧至縣宰。皆有。大將軍偏裨校尉之號焉。乘傳使者。經歷郡國。日且十輩。倉無見穀。以給傳車馬。不能足。賦取道中車馬。取辦於民。○秋七月。大風毀王路堂。莽下書曰。乃壬午舖時。有烈風。雷雨發屋折木之變。予甚恐焉。伏念一句。迷乃解矣。昔符命立安爲新遷王。臨國洛陽。爲統義陽王。議者皆曰。臨國洛陽。爲統。謂據土中。爲新室統也。宜爲皇太子。自此後。臨久病。雖瘳不平。臨有兒。而稱太子。名不正。惟卽位以來。陰陽未和。穀稼鮮耗。蠻夷猾夏。寇賊姦宄。人民征營。無所錯手足。深惟厥咎。在名不正焉。其立安爲新遷王。臨爲統義陽王。○莽又下書曰。寶黃廝赤。其令郎從官。皆衣絳。○望氣爲數者。多言有土功象。九月甲申。莽起九廟於長安城南。黃帝廟。方四十丈。高十七丈。餘廟半之。制度甚盛。博徵天下工匠。及吏民。以義入錢穀助作者。駱驛道路。窮極百工之巧。功費數百餘萬。卒徒死者萬數。○是月大雨六十餘日。○鉅鹿男子馬適求等。謀舉燕趙兵。以誅莽。大司空士王丹發覺。以聞。莽遣三公大夫。逮治黨與。連及郡國豪桀數千人。皆誅死。封丹爲輔國侯。○莽以私鑄錢死。及非沮寶貨。投四裔。犯法者多。不可勝行。乃更輕其法。私鑄作泉布者。與妻子沒入。爲官奴婢。吏及比伍。知而不舉。告與同罪。非沮寶貨。民罰作一歲。吏免官。○太傅平晏死。以予虞唐尊。爲太傅。尊曰。國虛民貧。咎在奢泰。乃身短衣小襖。乘牝馬柴車。藉藁以瓦器飲食。又以歷遣公卿。出見男女。不異路者。尊自下車。以象刑赭幘。汚染其衣。莽聞而說之。下詔申。敕公卿。思與厥齊。封尊爲平化侯。○汝南郵暉。明天文。歷數。以爲漢必再受命。上書說莽曰。上天垂戒。欲悟陛下。令就臣位。取之以天。還之以天。可謂知

命矣。莽大怒，繫惲詔獄，冬會赦得出。

二年春正月，莽妻死，諡曰孝睦皇后。初，莽妻以莽數殺其子，涕泣失明。莽令太子臨，居中養焉。莽妻旁侍者原碧，莽幸之，臨亦通焉，恐事泄，謀共殺莽。臨妻愜，國師公女，能為星，語臨宮中，且有白衣會，臨喜，以為所謀且成。後貶為統義陽王，出在外第，愈憂恐，會莽妻病困，臨予書曰：上於子孫至嚴，前長孫中孫，年俱三十而死，今臣臨復適三十，誠恐一旦不保，中室則不知死命所在。莽候妻疾，見其書，大怒，疑臨有惡意，不令得會喪。既葬，收原碧等考問，具服姦謀殺狀。莽欲祕之，使殺案事使者，司命從事埋獄中，家不知所在。賜臨藥，臨不肯飲，自刺死。又詔國師公臨本不知星，事從愜起，愜亦自殺。○是月，新遷王安病死，初莽為侯，就國時，幸侍者增秩，懷能生子興，匡皆留新都國，以其不明故也。及安死，莽乃以王車遣使者迎興，匡封興為功脩公，匡為功建公。○卜者王況謂魏成大尹李焉曰：漢家當復興，李氏為輔，因為焉作讖書，合十餘萬言，事發莽皆殺之。○莽遣太師義仲景尚，更始將軍護軍王黨，將兵擊青徐賊，國師和仲曹放助郭興擊句町，皆不能克。軍師放縱百姓重困。○莽又轉天下穀帛詣西河五原朔方漁陽，每一郡以百萬數，欲以擊匈奴，須卜當病死，莽以庶女妻其子後安公奢，所以尊寵之甚厚，終欲為出兵立之者。會莽敗，云奢亦死。○秋，隕霜殺菽，關東大饑，蝗。○莽既輕私鑄錢之法，犯者愈衆，及伍人相坐，沒入為官奴婢，其男子檻車，女子步，以鐵瑣琅當其頸，傳詣鍾官，以十萬數，到者易其夫婦，愁苦死者什六七。○上谷儲夏自請說瓜田儀降之，儀未出而死。莽求其尸葬之，為起冢祠室，諡曰瓜寧殤男。○閏月丙辰，大赦。○郎陽成脩獻符命言，繼立民母，又曰黃帝以百二十女致神僊，莽於是遣中散大夫謁者各四十五人分行天下，博采鄉里所高有淑女者，上名。○莽惡漢高廟神靈，遣虎賁武士入高廟，四面提擊斧壞戶牖，桃湯赭鞭，灑屋壁，令輕車校尉居其中。○是歲，南郡秦豐聚衆，且萬

人，平原女子遲昭平亦聚數千人，在河阻中。莽召問羣臣，禽賊方略，皆曰：此天囚行，命在漏刻，故左將軍公孫祿徵來與議。祿曰：太史令宗宣典星歷，候氣變，以凶為吉，亂天文，誤朝廷。太傅平化侯尊飾虛僞，以媮名位，賊夫人之子，國師嘉信公秀顛倒五經，毀師法，令學士疑惑，明學男張邯地理侯孫陽造井田，使民棄土業，羲和魯匡設六筮，以窮工商，說符侯崔發阿諛取容，令下情不上通，宜誅此數子，以慰天下。又言匈奴不可攻，當與和親。臣恐新室憂不在匈奴，而在封域之中也。莽怒，使虎賁扶祿出，然頗采其言。左遷魯匡為五原卒正，以百姓怨誹故也。六筮非匡所獨造，莽厭衆意而出之。○初，四方皆以饑寒窮愁起為盜賊，稍羣聚，常思歲熟得歸鄉里，衆雖萬數，不敢略有城邑，日閱而已。諸長吏牧守皆自亂鬪，中兵而死，賊非敢欲殺之也，而莽終不論其故。是歲，荊州牧發犇命二萬人討綠林賊，賊師王匡等相率迎擊於雲杜，大破收軍，殺數千人，盡獲輜重，收欲北歸，馬武等復遮擊之，鈎收車屏泥刺殺其驂乘，然終不敢殺收。賊遂攻拔竟陵，轉擊雲杜安陸，多略婦女，還入綠林中，至有五萬餘口，州郡不能制。又大司馬士按章豫州為賊所獲，賊送付縣，士還上書具言狀。莽大怒，以為誣罔，因下書責七公曰：夫吏者理也，宣德明恩，以收養民，仁之道也。抑疆督姦，捕誅盜賊，義之節也。今則不然，盜發不輒得，至成羣黨，遮略乘傳宰士，士得脫者，又妄自言我責數賊，何為如是。賊曰：以貧窮故耳。賊護出我，今俗人議者，率多若此，惟貧困饑寒，犯法為非，大者羣盜，少者偷穴，不過二科，今乃結謀連黨，以千百數，是逆亂之大者，豈饑寒之謂邪。七公其嚴敕卿大夫卒，正連率庶尹，謹收養善民，急捕殄盜賊，有不同心，并力疾惡黠賊，而妄曰饑寒所為，輒捕繫請其罪，於是羣下愈恐，莫敢言賊情者。州郡又不得擅發兵，賊由是遂不制，唯翼平連率田況素果敢，發民年十八以上四萬餘人，授以庫兵，與刻石為約，樊崇等聞之，不敢入界，況自劾奏，莽讓況未賜虎符，而擅發兵，此弄兵也，厥罪乏與，以況自詭必禽滅賊。

故且勿治。後況自請出界擊賊。所嚮皆破。莽以璽書令況領青徐二州牧事。況上言盜賊始發。其原甚微。部吏伍人所能禽也。咎在長吏不爲意。縣欺其郡。郡欺朝廷。實百言十。實千言百。朝廷忽略。不輒督責。遂至延蔓連州。乃遣將帥多發使者。傳相監趣。郡縣力事。上官應塞詰對。共酒食。具資用。以救斷斬。不暇復憂盜賊。治官事。將帥又不能躬率吏士。戰則爲賊所破。吏氣寢傷。徒費百姓。所幸蒙赦。令賊欲解散。或反遮擊。恐入山谷。轉相告語。故郡縣降賊。皆更驚駭。恐見詐滅。因饑饉易動。旬日之間。更十餘萬人。此盜賊所以多之故也。今洛陽以東。米石二千。竊見詔書。欲遣太師更始將軍二人。爪牙重臣。多從入衆。道上空竭。少則無以威示遠方。宜地選牧尹以下。明其賞罰。收合離鄉小國無城郭者。徙其老弱。置大城中。積臧穀食。并力固守。賊來攻城。則不能下。所過無食。執不得羣聚。如此。招之必降。擊之則滅。今空復多出將帥。郡縣苦之。反甚於賊。宜盡徵還乘傳諸使者。以休息郡縣。委任臣況。以二州盜賊。必平定之。莽畏惡況。陰爲發代。遣使者賜況璽書。使者至。見況。因令代監其兵。遣況西詣長安。拜爲師尉大夫。況去。齊地遂敗。

三年春正月。九廟成。納神主。莽謁見。大駕乘六馬。以五采毛爲龍文衣。著角長三尺。又造華蓋九重。高八丈一尺。載以四輪車。輓者皆呼登仙。莽出令在前。百官竊言。此似輜車。非仙物也。○二月。樊崇等殺景尚。○關東人相食。○夏四月。遣太師王匡。更始將軍廉丹。東討衆賊。初。樊崇等衆既寢盛。乃相與爲約。殺人者死。傷人者償創。其中最尊號三老。次從事。次卒史。及聞太師更始將討之。恐其衆與莽兵亂。乃皆朱其眉。以相識別。由是號曰赤眉。匡丹合將銳士十餘萬人。所過放縱。東方爲之語曰。寧逢赤眉。不逢太師。太師尙可。更始殺我。卒如田況之言。○莽又多遣大夫謁者。分教民煮草木爲酪。酪不可食。重爲煩費。○綠林賊遇疾疫。死者且半。乃各分散引去。王常成丹。西入南郡。號下江兵。王鳳。王匡。馬武。及其支黨朱鮪。張

卬等。北入南陽。號新市兵。皆自稱將軍。莽遣司命大將軍孔仁。部豫州。納言大將軍嚴尤。秩宗。大將軍陳茂。擊荊州。各從吏士百餘人。乘傳到部募士。尤謂茂曰。遣將不與兵符。必先請而後動。是猶繼韓盧而責之獲也。○蝗從東方來。飛蔽天。○流民入關者數十萬人。乃置養贍官。稟食之。使者監領。與小吏共盜其稟。餓死者什七八。先是。莽使中黃門王業。領長安市。賤取於民。民甚患之。業以省費爲功。賜爵附城。莽聞城中饑饉。以問業。業曰。皆流民也。乃市所賣梁飯肉羹。持入示莽。曰。居民食咸如此。莽信之。○秋七月。新市賊王匡等進攻隨。平林人陳牧。廖湛。復聚衆千餘人。號平林兵。以應之。○莽詔書讓廉丹曰。倉廩盡矣。府庫空矣。可以怒矣。可以戰矣。將軍受國重任。不捐身於中野。無以報恩塞責。丹惶恐。夜召其掾馮衍。以書示之。衍因說丹曰。張良以五世相韓。推秦始皇博浪之中。將軍之先。爲漢信臣。新室之興。英俊不附。今海內潰亂。人懷漢德。甚於周人。思召公也。人所歌舞。天必從之。今方爲將軍計。莫若屯據大郡。鎮撫吏士。砥厲其節。納雄桀之士。詢忠智之謀。興社稷之利。除萬人之害。則福祿流于無窮。功烈著於不滅。何與軍覆於中原。身膏於草野。功敗名喪。恥及先祖哉。丹不聽。衍左將軍奉世曾孫也。冬。無鹽索盧恢等舉兵。反城附賊。廉丹王匡攻拔之。斬首萬餘級。莽遣中郎將奉璽書。勞丹匡。進爵爲公。封吏士有功者十餘人。赤眉別校董憲等衆數萬人。在梁郡。王匡欲進擊之。廉丹以爲新拔城。罷勞當且休。士養威。匡不聽。引兵獨進。丹隨之。合戰。成昌。兵敗。匡走。丹使吏持其印。執節付匡。曰。小兒可走。吾不可。遂止戰死。校尉汝雲。王隆等二十餘人。別鬪。聞之。皆曰。廉公已死。吾誰爲生。馳奔賊。皆戰死。國將哀章。自請願平山東。莽遣章馳東。與太師匡并力。又遣大將軍楊浚。守敖倉。司徒王尋。將十餘萬屯洛陽。鎮南宮。大司馬董忠。養士習射中軍北壘。大司空王邑。兼三公之職。○初。長沙定王發。生春陵節侯買。買生戴侯熊渠。熊渠生考侯仁。仁以南方卑濕。徙封南陽之白水鄉。與宗族往家焉。仁卒。

子敞嗣值莽篡位。國除節侯少子外。爲鬱林太守。外生鉅鹿都尉回。回生南頓令欽。欽娶湖陽樊重女。生三男。績、仲、秀。兄弟早孤。養於叔父良。績性剛毅。慷慨有大節。自莽篡漢。常憤憤懷復社稷之慮。不事家人居業。傾身破產。交結天下雄俊。秀隆準日角。性勤稼穡。績常非笑之。比於高祖。兄仲、秀姊元。爲新野鄧晨妻。秀嘗與晨俱。過穰人蔡少公。少公頗學圖讖。言劉秀當爲天子。或曰。是國師公劉秀乎。秀戲曰。何用知非僕邪。坐者皆大笑。晨心獨喜。宛人李守。好星歷讖記。爲莽宗卿師。嘗謂其子通曰。劉氏當興。李氏爲輔。及新市平林兵起。南陽騷動。通從弟軼。謂通曰。今四方擾亂。漢當復興。南陽宗室。獨劉伯升兄弟。汎愛容衆。可與謀大事。通笑曰。吾意也。會秀賣穀於宛。通遣軼往迎秀。與相見。因具言讖文事。與相約結定計議。通欲以立秋材官都試騎士。日劫前隊大夫甄阜。及屬正梁丘賜。因以號令大衆。使軼與秀歸春陵。舉兵以相應。於是績召諸豪桀。計議曰。王莽暴虐。百姓分崩。今枯旱連年。兵革竝起。此亦天亡之時。復高祖之業。定萬世之秋也。衆皆然之。於是分遣親客於諸縣。起兵。績自發春陵子弟。諸家子弟。恐懼皆亡匿。曰。伯升殺我。及見秀。絳衣大冠。皆驚曰。謹厚者亦復爲之。乃稍自安。凡得子弟七八千人。部署賓客。自稱柱天都部。秀時年二十八。李通未發。事覺。亡走。父守及家屬。坐死者六十四人。績使族人嘉。招說新市平林兵。與其帥王鳳陳牧。西擊長聚。進屠唐子鄉。又殺湖陽尉。軍中分財物不均。衆恚恨欲反攻。劉秀斂宗人所得物。悉以與之。衆乃悅。進拔棘陽。李軼、鄧晨皆將賓客來會。○嚴尤陳茂破下江兵。成丹、王常、張卬等收散卒。入萇谿。略鍾龍間。衆復振。引軍與荊州牧戰于上唐。大破之。○十一月。有星孛于張。○劉績欲進攻宛。至小長安聚。與甄阜、梁丘賜戰。時天密霧。漢軍大敗。秀單馬走。遇女弟伯姬。與共騎而奔。前行復見姊元。趣令上馬。元以手揮曰。行矣。不能相救。無爲兩沒也。會追兵至。元及三女皆死。績弟仲及宗從死者數十人。績復收會兵衆。還保棘陽。阜賜乘勝留輜

重於藍鄉。引精兵十萬。南度潢淠。臨泚水。阻兩川。爲營絕後橋。示無還心。新市平林。見漢兵數敗。阜賜軍大至。各欲解去。績甚患之。會下江兵五千餘人。至宜秋。績卽與秀及李通。造其壁。曰。願見下江一賢將。議大事。衆推王常。績見常。說以合從之利。常大悟曰。王莽殘虐。百姓思漢。今劉氏復興。卽眞主也。誠思出身爲用。輔成大功。績曰。如事成。豈敢獨饗之哉。遂與常深相結而去。常還。具爲餘將成丹、張卬言之。丹卬負其衆曰。大丈夫既起。當各自爲主。何故受人制乎。常乃徐曉說其將帥曰。王莽苛酷。積失百姓之心。民之謳吟思漢。非一日也。故使吾屬因此得起。夫民所怨者。天所去也。民所思者。天所與也。舉大事。必當下順民心。上合天意。功乃可成。若負強恃勇。觸情恣欲。雖得天下。必復失之。以秦項之勢。尙至夷覆。況今布衣相聚草澤。以此行之。滅亡之道也。今南陽諸劉舉兵。觀其來議者。皆有深計大慮。王公之才。與之并合。必成大功。此天所以祐吾屬也。下江諸將。雖屈彊少識。然素敬常。乃皆謝曰。無王將軍。吾屬幾陷於不義。卽引兵與漢軍及新市平林合。於是諸部齊心同力。銳氣益壯。績大饗軍士。設盟約。休卒三日。分爲六部。十二月。晦。潛師夜起。襲取藍鄉。盡獲其輜重。

資治通鑑卷第三十八

漢紀 王莽下地皇三年

資治通鑑卷第三十九

漢紀三十一

淮陽王

更始元年春正月甲子朔漢兵與下江兵共攻甄阜梁丘賜斬之殺士卒二萬餘人王莽納言將軍嚴尤秩宗將軍陳茂引兵欲據宛劉縯與戰于清陽下大破之遂圍宛先是青徐賊衆雖數十萬人訖無文書號令旌旗部曲及漢兵起皆稱將軍攻城略地移書稱說莽聞之始懼春陵戴侯曾孫玄在平林兵中號更始將軍時漢兵已十餘萬諸將議以兵多而無所統一欲立劉氏以從人望南陽豪桀及王常等皆欲立劉縯而新市平林將帥樂放縱憚縯威明貪玄懦弱先共定策立之然後召縯示其議縯曰諸將軍幸欲尊立宗室甚厚然今赤眉起青徐衆數十萬聞南陽立宗室恐赤眉復有所立王莽未滅而宗室相攻是疑天下而自損權非所以破莽也春陵去宛三百里耳遽自尊立爲天下準的使後人得承吾敝非計之善者也不如且稱王以號令王勢亦足以斬諸將若赤眉所立者賢相率而往從之必不奪吾爵位若無所立破莽降赤眉然後舉尊號亦未晚也諸將多曰善張卬拔劍擊地曰疑事無功今日之議不得有二衆皆從之二月辛巳朔設壇場於清水上沙中玄卽皇帝位南面立朝羣臣羞愧流汗舉手不能言於是大赦改元以族父良爲國三老王匡爲定國上公王鳳爲成國上公朱鮪爲大司馬劉縯爲大司徒陳牧爲大司空餘皆九卿將軍由是豪桀失望多不服○王莽欲外示自安乃染其須髮立杜陵史諶女爲皇后置後宮位號視公卿

大夫元士者凡百二十人○莽赦天下詔王匡哀章等討青徐盜賊嚴尤陳茂等討前隊虜虜明告以生活丹青之信復迷惑不解散將遣大司空隆新公將百萬之師剽絕之矣○三月王鳳與太常偏將軍劉秀等徇昆陽定陵鄧皆下之○王莽聞嚴尤陳茂敗乃遣司空王邑馳傳與司徒王尋發兵平定山東徵諸明兵法六十三家以備軍吏以長人巨毋霸爲壘尉又驅諸猛獸虎豹犀象之屬以助威武邑至洛陽州郡各選精兵牧守自將定會者四十餘萬人號百萬餘在道者旌旗輜重千里不絕夏五月尋邑南出潁川與嚴尤陳茂合諸將見尋邑兵盛皆反走入昆陽惶怖憂念妻孥欲散歸諸城劉秀曰今兵穀既少而外寇強大并力禦之功庶可立如欲分散勢無俱全且宛城未拔不能相救昆陽卽拔一日之間諸部亦滅矣今不同心膽共舉功名反欲守妻子財物邪諸將怒曰劉將軍何敢如是秀笑而起會候騎還言大兵且至城北軍陳數百里不見其後諸將素輕秀及迫急乃相謂曰更請劉將軍計之秀復爲圖畫成敗諸將皆曰諾時城中唯有八九千人秀使王鳳與廷尉大將軍王常守昆陽夜與五威將軍李軼等十三騎出城南門于外收兵時莽兵到城下者且十萬秀等幾不得出尋邑縱兵圍昆陽嚴尤說邑曰昆陽城小而堅今假號者在宛亟進大兵彼必奔走宛敗昆陽自服邑曰吾昔圍翟義坐不生得以見責讓今將百萬之衆遇城而不能下非所以示威也當先屠此城蹀血而進前歌後舞顧不快邪遂圍之數十重列營百數鉦鼓之聲聞數十里或爲地道衝輻撞城積弩亂發矢下如雨城中負戶而汲王鳳等乞降不許尋邑自以爲功在漏刻不以軍事爲憂嚴尤曰兵法圍城爲之闕宜使得逸出以怖宛下邑又不聽○棘陽守長岑彭與前隊貳嚴說共守宛城漢兵攻之數月城中人相食乃舉城降更始入都之諸將欲殺彭劉縯曰彭郡之大吏執心固守是其節也今舉大事當表義士不如封之更始乃封彭爲歸德侯○劉秀至鄧定陵悉發諸營兵諸將貪惜財物欲分兵守

之。秀曰：今若破敵，珍寶萬倍，大功可成。如爲所敗，首領無餘，何財物之有？乃悉發之。六月，己卯朔，秀與諸營俱進。自將步騎千餘爲前鋒，去大軍四五里而陳。尋邑亦遣兵數千合戰。秀奔之，斬首數十級。諸將喜曰：劉將軍平生見小敵怯，今見大敵勇，甚可怪也。且復居前，請助將軍。秀復進，尋邑兵卻。諸部共乘之，斬首數百千級。連勝遂前，諸將膽氣益壯，無不一當百。秀乃與敢死者三千人從城西水上衝其中堅，尋邑易之。自將萬餘人行陳，敕諸營皆按部毋得動，獨迎與漢兵戰。不利，大軍不敢擅相救。尋邑陳亂，漢兵乘銳崩之，遂殺王尋。城中亦鼓譟而出，中外合勢，震呼動天地。莽兵大潰，走者相騰踐，伏尸百餘里。會大雷風，屋瓦皆飛，雨下如注。潁川盛溢，虎豹皆股戰。士卒赴水溺死者以萬數，水爲不流。王邑嚴尤、陳茂、輕騎乘死人度水逃去，盡獲其軍實輜重，不可勝算。舉之連月不盛，或燔燒其餘。士卒奔走各還其郡。王邑獨與所將長安勇敢數千人還洛陽。關中聞之震恐，於是海內豪桀翕然響應，皆殺其牧守，自稱將軍。用漢年號，以待詔命。旬月之間，徧于天下。○莽聞漢兵言莽鴆殺孝平皇帝，乃會公卿於玉露堂，開所爲平帝請命金膝之策，泣以示羣臣。○劉秀復徇潁川，攻父城，不下。屯兵巾車鄉。潁川郡掾馮異、監五縣爲漢兵所獲，異曰：異有老母在父城，願歸據五城，以效功報德。秀許之。異歸，謂父城長苗萌曰：諸將多暴橫，獨劉將軍所到不虜略，觀其言語舉止，非庸人也。遂與萌率五縣以降。○新市平林諸將以劉縯兄弟威名益盛，陰勸更始除之。秀謂縯曰：事欲不善，縯笑曰：常如是耳。更始大會諸將，取縯寶劍視之，繡衣御史申徒建隨獻玉玦，更始不敢發。縯舅樊宏謂縯曰：建得無有范增之意乎？縯不應。李軼初與縯兄弟善，後更諂事新貴。秀戒縯曰：此人不可復信。縯不從。縯部將劉稷勇冠三軍，聞更始立，怒曰：本起兵圖大事者，伯升兄弟也。今更始何爲者邪？更始以稷爲抗威將軍，稷不肯拜。更始乃與諸將陳兵數千人，先收稷，將誅之。縯固爭，李軼、朱鮪因勸更始并執縯，即日殺之，以族

兄光祿勳賜爲大司徒。秀聞之，自父城馳詣宛謝。司徒官屬迎弔，秀不與交，私語惟深引過而已。未嘗自伐昆陽之功，又不敢爲縯服喪。飲食言笑如平常。更始以是慙，拜秀爲破虜大將軍，封武信侯。○道士西門君惠謂王莽衛將軍王涉曰：讖文劉氏當復興，國師公姓名是也。涉遂與國師公劉秀、大司馬董忠、司中大費孫伋謀以所部兵劫莽降漢，以全宗族。秋七月，伋以其謀告莽。莽召忠詰責，因格殺之。使虎賁以斬馬劍劉忠，收其宗族，以醇醢毒藥白刃叢棘，并一坎而埋之。秀涉皆自殺。莽以其骨肉舊臣，惡其內潰，故隱其誅。莽以軍師外破，大臣內畔，左右亡所信，不能復遠念郡國，乃召王邑還爲大司馬，以大長秋張邯爲大司徒。崔發爲大司空，司中壽容苗訢爲國師。莽憂懣不能食，但飲酒啗鰾魚，讀軍書，倦因馮几寐，不復就枕矣。○成紀隗崔、隗義、上邽楊廣、冀人周宗同起兵以應漢，攻平襄，殺莽鎮戎大尹李育。崔兄子囂素有名，好經書。崔等共推爲上將軍。崔爲白虎將軍，義爲左將軍。囂遣使聘平陵方望以爲軍師。望說囂立高廟于邑東，已巳祠高祖、太宗。囂等皆稱臣，執事殺馬同盟。以興輔劉宗，移檄郡國，數莽罪惡，勒兵十萬，擊殺雍州牧陳慶。安定大尹王向分遣諸將，狗隴西武都金城武威張掖酒泉燉煌皆下之。○初，茂陵公孫述爲清水長，有能名。遷導江卒正，治臨邛。漢兵起，南陽宗成、商人王岑起兵狗漢中，以應漢。殺王莽庸部牧宋遵，衆合數萬人。述遣使迎成等，成等至成都，虜掠暴橫。述召郡中豪桀，謂曰：天下同苦新室，思劉氏久矣。故聞漢將軍到，馳迎道路，今百姓無辜而婦子係獲，此寇賊非義兵也。乃使人詐稱漢使者，假述輔漢將軍蜀郡太守兼益州牧印綬，選精兵西擊成等，殺之，并其衆。○王莽使太師王匡、國將哀章守洛陽，更始遣定國上公王匡攻洛陽。西屏大將軍申屠建、丞相司直李松、攻武關，三輔震動。析人鄧曄、子匡起兵南鄉，以應漢。攻武關都尉朱萌，萌降。進攻右隊大

夫宋綱殺之。西拔湖。莽愈憂。不知所出。崔發言。古者國有大災。則哭以厭之。宜告天以求救。莽乃率羣臣。至南郊。陳其符命本末。仰天大哭。氣盡伏而叩頭。諸生小民。旦夕會哭。為設殮粥。甚悲哀者。除以為郎。郎至五千餘人。莽拜將軍九人。皆以虎為號。將北軍精兵數萬人。以東內其妻子宮中。以為質。時省中黃金。尚六十餘萬斤。它財物稱是。莽愈愛之。賜九虎士。人四千錢。衆重怨無鬪意。九虎至華陰。回谿距隘。自守。于匡鄧曄擊之。六虎敗走。二虎詣闕歸死。莽使使責死者。安在。皆自殺。其四虎亡。三虎收散卒。保渭口。京師倉。鄧曄開武關。迎漢兵。李松將三千餘人。至湖。與曄等共攻京師倉。未下。曄以弘農掾王憲為校尉。將數百人。北度渭。入左馮翊界。李松遣偏將軍韓臣等。徑西至新豐。擊莽波水將軍。追奔至長門宮。王憲北至頻陽。所過迎降。諸縣大姓。各起兵。稱漢將軍。率衆隨憲。李松鄧曄引軍至華陰。而長安旁兵。四會城下。又聞天水隗氏方到。皆爭欲入城。貪立大功。鹵掠之利。莽赦城中囚徒。皆授兵。殺豨。飲其血。與誓曰。有不為新室者。社鬼記之。使更始將軍史。謀將之。度渭橋。皆散走。謀空還。衆兵發掘莽妻子。父祖冢。燒其棺槨。及九廟。明堂辟雍。火照城中。九月。戊申朔。兵從宣平城門入。張邯逢兵。見殺。王邑。王林。王巡。豐暉等。分將兵。距擊北闕下。會日暮。官府邸第盡奔亡。已酉。城中少年朱弟。張魚等。恐見鹵掠。趨籬竝和。燒作室門。莽敬法。闔呼曰。反虜王莽。何不出降。火及掖庭。承明。黃皇室主所居。黃皇室主曰。何面目以見漢家。自投火中而死。莽避火宣室前殿。火輒隨之。莽紺袍服。持虞帝匕首。天文郎按式於前。莽旋席。隨斗柄而坐。曰。天生德於予。漢兵其如予何。庚戌。旦明。羣臣扶掖莽。自前殿之漸臺。公卿從官。尚千餘人。隨之。王邑。晝夜戰罷。極士死傷略盡。馳入宮。間關至漸臺。見其子侍中。陸解衣冠欲逃。邑叱之。令還。父子共守莽。軍人入殿中。聞莽在。漸臺。衆共圍之。數百重。臺上猶與相射。矢盡。短兵接。王邑父子。豐暉。王巡。戰死。莽入室。下舖時。衆兵上臺。苗。唐尊。王盛等皆死。商人杜吳殺莽。校尉東海公賓就。斬莽首。軍人分莽身。節解鬻分。爭相殺者數十人。公賓就持莽首詣王憲。憲自稱漢大將軍。城中兵數十萬。皆屬焉。舍東宮。妻莽後宮。乘其車服。癸丑。李松鄧曄入長安。將軍趙萌申屠建亦至。以王憲得璽。綬不上。多挾宮女。建天子鼓旗。收斬之。傳莽首詣宛。縣于市。百姓共提擊之。或切食其舌。

班固贊曰。王莽始起外戚。折節力行。以要名譽。及居位輔政。勤勞國家。直道而行。豈所謂色取仁而行違者邪。莽既不仁。而有佞邪之材。又乘四父歷世之權。遭漢中微。國統三絕。而太后壽考。為之宗主。故得肆其姦慝。以成篡盜之禍。推是言之。亦天時非人力之致矣。及其竊位南面。顛覆之勢。險於桀紂。而莽晏然。自以黃虞復出也。乃始恣睢。奮其威詐。毒流諸夏。亂延蠻貉。猶未足以逞其欲焉。是以四海之內。囂然喪其樂生之心。中外憤怨。遠近俱發。城池不守。支體分裂。遂令天下城邑。為虛。害徧生民。自書傳所載。亂臣賊子。考其禍敗。未有如莽之甚者也。昔秦燔詩書。以立私議。莽誦六藝。以文姦言。同歸殊塗。俱用滅亡。皆聖王之驅除云爾。

定國上公王匡。拔洛陽。生縛莽太師王匡哀章。皆斬之。○冬十月。奮威大將軍劉信。擊殺劉望於汝南。并誅嚴尤。陳茂。郡縣皆降。○更始將都洛陽。以劉秀行司隸校尉。使前整修宮府。秀乃置僚屬。作文移。從事司察。一如舊章。時三輔吏士。東迎更始。見諸將過。皆冠幘而服。婦人衣。莫不笑之。及見司隸僚屬。皆歡喜不自勝。老吏或垂涕曰。不圖今日復見漢官威儀。由是識者皆屬心焉。更始遂北都洛陽。分遣使者。徇郡國曰。先降者復爵位。使者至上谷。上谷太守扶風耿況。迎上印綬。使者納之。一宿無還意。功曹寇恂。勒兵入見使者。請之。使者不與。曰。天王使者。功曹欲脅之邪。恂曰。非敢脅使君。竊傷計之不詳也。今天下初定。使君建節銜命。郡國莫不延頸傾耳。今始至上谷。而先墮大信。將復何以號令它郡乎。使者不應。恂叱左右。

以使者命召況。況至，恂進取印綬，帶況。使者不得已，乃承制詔之。況受而歸。宛人彭寵、吳漢亡命在漁陽，鄉人韓鴻爲更始使，徇北州，承制拜寵偏將軍，行漁陽太守事。以漢爲安樂令，更始遣使降赤眉。樊崇等聞漢室復興，卽留其兵，將渠帥二十餘人隨使者至洛陽。更始皆封爲列侯。崇等既未有國邑，而留衆稍有離叛者，乃復亡歸其營。○王莽廬江連率潁川李憲，據郡自守，稱淮南王。○故梁王立之子永詣洛陽，更始封爲梁王。都睢陽。○更始欲令親近大將徇河北，大司徒賜言：諸家子，獨有文叔可用。朱鮪等以爲不可。更始狐疑，賜深勸之。更始乃以劉秀行大司馬事，持節北度河，鎮慰州郡。○以大司徒賜爲丞相，令先入關，修宗廟宮室。○大司馬秀至河北，所過郡縣，考察官吏，黜陟能否，平遣囚徒，除王莽苛政，復漢官名。吏民喜悅，爭持牛酒迎勞。秀皆不受。南陽鄧禹杖策追秀，及於鄴。秀曰：我得專封拜，生遠來，寧欲仕乎？禹曰：不願也。秀曰：卽如是，何欲爲？禹曰：但願明公威德加于四海，禹得效其尺寸，垂功名于竹帛耳。秀笑，因留宿問語。禹進說曰：今山東未安，赤眉青犢之屬，動以萬數，更始既是常才，而不自聽斷，諸將皆庸人屈起，志在財幣，爭用威力，朝夕自快而已，非有忠良明智，深慮遠圖，欲尊安民者也。歷觀往古，聖人之興，二科而已。天時與人事也。今以天時觀之，更始既立，而災變方興，以人事觀之，帝王大業，非凡夫所任，分崩離析，形執可見。明公雖建藩輔之功，猶恐無所成立也。況明公素有盛德大功，爲天下所嚮服，軍政齊肅，賞罰明信，爲今之計，莫如延攬英雄，務悅民心，立高祖之業，救萬民之命，以公而慮，天下不足定也。秀大悅，因令禹常宿止於中，與定計議。每任使諸將，多訪於禹，皆當其才。秀自兄續之死，每獨居，輒不御酒肉，枕席有涕泣處。主簿馮異獨叩頭寬譬，秀止之曰：卿勿妄言，異因進說曰：更始政亂，百姓無所依戴，夫人久飢渴，易爲充飽。今公專命方面，宜分遣官屬，徇行郡縣，宣布惠澤，秀納之。騎都尉宋子耿純，謁秀於邯鄲，退見官屬，將兵法度，不與他將同，遂自結納。

○故趙繆王子林，說秀決列人河水，以灌赤眉。秀不從，去之真定。林素任俠，於趙魏間，王莽時，長安中有自稱成帝子者，莽殺之。邯鄲卜者王郎，緣是詐稱真子，與云：母故成帝，謳者嘗見黃氣從上下，遂任身。趙后欲害之，僞易它人子，以故得全。林等信之，與趙國大豪李育、張參等謀共立郎。會民間傳赤眉將度河，林等因此宣言，赤眉當立劉子與，以觀衆心。百姓多信之。十二月，林等率車騎數百，晨入邯鄲城，止于王宮，立郎爲天子，分遣將帥，徇下幽冀，移檄州郡，趙國以北，遼東以西，皆望風響應。○申屠建、李松自長安迎更始，遷都。二月，更始二年春正月，大司馬秀以王郎新盛，乃北徇薊。○申屠建、李松自長安迎更始，遷都。二月，更始發洛陽，初三輔豪桀假號誅莽者，人人皆望封侯。申屠建既斬王憲，又揚言：三輔兒大黠，共殺其主，吏民惶恐，屬縣屯聚，建等不能下。更始至長安，乃下詔大赦，非王莽子，他皆除其罪。於是三輔悉平。時長安唯未央宮被焚，其餘宮室供帳倉庫官府皆安堵如故。市里不改，於舊更始居長樂宮，升前殿，郎吏以次列庭中。更始羞作，俛首刮席，不敢視。諸將後至者，更始問虜掠得幾何。左右侍官皆宮省久吏，驚愕相視。李松與棘陽趙萌說更始：宜悉王諸功臣。朱鮪爭之，以爲高祖約，非劉氏不王。更始乃先封諸宗室。社爲定陶王，慶爲燕王，欽爲元氏王，嘉爲漢中王，賜爲宛王，信爲汝陰王，然後立王匡爲沘陽王，王鳳爲宜城王，朱鮪爲膠東王，王常爲鄧王，申屠建爲平氏王，陳牧爲陰平王，衛尉大將軍張卬爲淮陽王，執金吾大將軍廖湛爲穰王，尚書胡殷爲隨王，柱天大將軍李通爲西平王，五威中郎將李軼爲舞陰王，水衡大將軍成丹爲襄邑王，驃騎大將軍宗佻爲潁陰王，尹尊爲郾王，唯朱鮪辭不受，乃以鮪爲左大司馬，宛王賜爲前大司馬，使與李軼等鎮撫關東。又使李通鎮荊州，王常行南陽太守事，以李松爲丞相，趙萌爲右大司馬，共秉內任。更始納趙萌女爲夫人，故委政於萌。日夜飲讌後庭，羣臣欲言事，輒醉不能見，時不得已，乃令侍中坐帷內，與語。韓夫人尤嗜酒。

每侍飲見常侍奏事輒怒曰帝方對我飲正用此時持事來邪起抵破書案趙萌專權生殺自恣郎吏有說萌放縱者更始怒拔劍斬之自是無敢復言以至羣小膳夫皆濫授官爵長安爲之語曰竈下養中郎將爛羊胃騎都尉爛羊頭關內侯軍師將軍李淑上書諫曰陛下定業雖因下江平林之執斯蓋臨時濟用不可施之既安唯名與器聖人所重今加非其人望其裨益萬分猶緣木求魚升山采珠海內望此有以窺度漢祚更始怒囚之諸將在外者皆專行誅賞各置牧守州郡交錯不知所從由是關中離心四海怨叛○更始徵隗囂及其叔父崔義等囂將行方望以更始成敗未可知固止之囂不聽望以書辭謝而去囂等至長安更始以囂爲右將軍崔義皆即舊號○耿況遣其子弇奉奏詣長安弇時年二十一行至宋子會王郎起弇從吏孫倉衛包曰劉子輿成帝正統捨此不歸遠行安之弇按劍曰子輿弊賊卒爲降虜耳我至長安與國家陳上谷漁陽兵馬歸發突騎以麟烏合之衆如摧枯折腐耳觀公等不識去就族滅不久也倉包遂亡降王郎弇聞大司馬秀在盧奴乃馳北上謁秀留署長史與俱北至薊王郎移檄購秀十萬戶秀令功曹令史潁川王霸至市中募人擊陽太守彭寵公之邑人上谷太守卽弇父也發此兩郡控弦萬騎邯鄲不足慮也秀官屬腹心皆不肯曰死尙南首奈何北行入囊中秀指弇曰是我北道主人也會故廣陽王子接起兵薊中以應郎城內擾亂言邯鄲使者方到二千石以下皆出迎於是秀趣駕而出至南城門門已閉攻之得出遂晨夜南馳不敢入城邑舍食道傍至蕪婁亭時天寒烈馮異上豆粥乃推鼓數十通給言邯鄲將軍至官屬皆失色秀升車欲馳既而懼不免徐還坐曰請邯鄲將軍入久乃駕去晨夜兼行蒙犯霜雪面皆破裂至下曲陽傳聞王郎兵在後從者皆恐至

噉沱河候吏還白河水流漸無船不可濟秀使王霸往視之霸恐驚衆欲且前阻水還卽詭曰水堅可度官屬皆喜秀笑曰候吏果妄語也遂前比至河河水亦合乃令王霸護度未畢數騎而冰解至南宮遇大風雨秀引車入道傍空舍馮異抱薪鄧禹爇火秀對竈燎衣馮異復進麥飯進至下博城西惶惑不知所之有白衣老父在道旁指曰努力信都郡爲長安城守去此八十里秀卽馳赴之是時邯鄲皆已降王郎獨信都太守南陽任光和戎太守信都守邳彤不肯從光自以孤城獨守不能全聞秀至大喜吏民皆稱萬歲邳彤亦自和戎來會議者多言可因信都兵自送西還長安邳彤曰吏民歌吟思漢久矣故更始舉尊號而天下響應三輔清宮除道以迎之今卜者王郎假名因執驅集烏合之衆遂振燕趙之地無有根本之固明公奮二郡之兵以討之何患不克今釋此而歸豈徒空失河北必更驚動三輔墮損威重非計之得者也若明公無復征伐之意則雖信都之兵猶難會也何者明公旣西則邯鄲執成民不肯捐父母背成主而千里送公其離散亡逃可必也秀乃止秀以二郡兵弱欲入城頭子路刁子都軍中任光以爲不可乃發滎陽得精兵四千人拜任光爲左大將軍信都都尉李忠爲右大將軍邳彤爲後大將軍和戎太守如故信都令萬修爲偏將軍皆封列侯留南陽宗廣領信都太守事使任光李忠萬修將兵以從邳彤將兵居前任光乃多作檄文曰大司馬劉公將城頭子路刁子都兵百萬衆從東方來擊諸反虜遣騎馳至鉅鹿界中吏民得檄傳相告語秀投幕入堂陽界多張騎火彌滿澤中堂陽卽降又擊貫縣降之城頭子路者東平爰曾也寇掠河濟間有衆二十餘萬刁子都有衆六七萬故秀欲依之昌城人劉植聚兵數千人據昌城迎秀秀以植爲驍騎將軍耿純率宗族賓客二千餘人老病者皆載木自隨迎秀於育拜純爲前將軍進攻下曲陽降之衆稍合至數萬人復北擊中山耿純恐宗家懷異心乃使從弟訢宿歸燒廬舍以絕其反顧之望秀進拔盧奴所過發奔命兵移檄邊

郡共擊邯鄲。邯鄲縣還復響應。時真定王楊起兵附王郎。衆十餘萬。秀遣劉植說楊。楊乃降。秀因留真定。納楊甥郭氏爲夫人。以結之。進擊元氏。防子皆下之。至鄆。擊斬王郎將李暉。至柏人。復破邯鄲。李育。育還保城。攻之不下。○南鄭人延岑起兵。據漢中。漢中王嘉擊降之。有衆數十萬。校尉南陽賈復見更始政亂。乃說嘉曰。今天下未定。而大王安守所保。所保得無不可保乎。嘉曰。卿言大非吾任也。大司馬在河北。必能相用。乃爲書薦復。及長史南陽陳俊於劉秀。復等見秀於柏人。秀以復爲破虜將軍。俊爲安集掾。秀舍中兒犯法。軍市令潁川祭遵格殺之。秀怒。命收遵。主簿陳副諫曰。明公常欲衆軍整齊。今遵奉法不避。是教令所行也。乃貫之。以爲刺姦將軍。謂諸將曰。當備祭遵。吾舍中兒犯法。尙殺之。必不私諸卿也。○初王莽既殺鮑宣。上黨都尉路平欲殺其子永。太守苟諫保護之。永由是得全。更始徵永爲尙書僕射。行大將軍事。將兵安東河東并州。得自置偏裨。永至河東。擊青犢。大破之。以馮衍爲立漢將軍。屯太原。與上黨太守田邑等繕甲養士。以扞衛并土。○或說大司馬秀以守柏人。不如定鉅鹿。秀乃引兵東北。拔廣阿。秀披輿地圖。指示鄧禹曰。天下郡國如是。今始乃得其一。子在德薄厚。不以大小也。○薊中之亂。耿弇與劉秀相失。北走昌平。就其父況。因說況擊邯鄲。時王郎遣將徇漁陽上谷。急發其兵。北州疑惑。多欲從之。上谷功曹寇恂門下掾閔業說。況曰。邯鄲拔起。難可信。向大司馬劉伯升母弟。尊賢下士。可以歸之。況曰。邯鄲方盛。力不能獨拒。如何。對曰。今上谷完實。控弦萬騎。可以詳擇去就。恂請東約漁陽。齊心合衆。邯鄲不足圖也。況然之。遣恂東約彭寵。欲各發突騎二千。步兵千人。詣大司馬秀。安樂令吳漢護軍。蓋延。狐奴令王梁。亦勸寵從秀。寵以爲然。而官屬皆欲附王郎。寵不能奪。漢出止外亭。遇一儒生。召而食之。問以所聞。生言大司馬劉公所過。爲郡縣所稱。邯鄲舉尊號者。實非劉氏。漢大

喜。卽詐爲秀書。移檄漁陽。使生齎以詣寵。令具以所聞說之。會寇恂至。寵乃發步騎三千人。以吳漢行長史。與蓋延。王梁將之。南攻薊。殺王郎大將趙闕。寇恂還。遂與上谷長史景丹。及耿弇將兵俱南。與漁陽軍合。所過擊斬王郎大將九卿校尉以下。凡斬首三萬級。定涿郡。中山。鉅鹿。清河。河間。凡二十二縣。前及廣阿。聞城中車騎甚衆。丹等勒兵問曰。此何兵。曰。大司馬劉公也。諸將喜。卽進至城下。城中初傳言二郡兵爲邯鄲來。衆皆恐。劉秀自登西城樓。勒兵問之。耿弇拜于城下。卽召入。具言發兵狀。秀乃悉召景丹等入。笑曰。邯鄲將帥數言我發。漁陽上谷兵。吾聊應言。我亦發之。何意。二郡良爲吾來。方與士大夫共此功名耳。乃以景丹寇恂。耿弇。蓋延。吳漢。王梁。皆爲偏將軍。使還領其兵。加耿況。彭寵。大將軍。封況。寵。丹。延。皆爲列侯。吳漢。爲人質。厚少文。造次不能以辭自達。然沈厚有智略。鄧禹數薦之於秀。秀漸親重之。更始遣尙書令謝躬。率六將軍討王郎。不能下。秀至。與之合軍。東圍鉅鹿。月餘未下。王郎遣將攻信都。大姓馬寵等開門內之。更始遣兵攻破信都。秀使李忠還行太守事。王郎遣將倪宏。劉奉。率數萬人救鉅鹿。秀逆戰於南。不利。景丹等縱突騎擊之。宏等大敗。秀曰。吾聞突騎天下精兵。今見其戰。樂可言邪。耿純言於秀曰。久守鉅鹿。士衆疲弊。不如及大兵精銳。進攻邯鄲。若王郎已誅。鉅鹿不戰自服矣。秀從之。夏四月。留將軍鄧滿守鉅鹿。進軍邯鄲。連戰破之。卽乃使其諫大夫杜威請降。威雅稱。卽實成帝遺體。秀曰。設使成帝復生。天下不可得。況詐子輿者乎。威請求萬戶侯。秀曰。願得全身可矣。威怒而去。秀急攻之。二十餘日。五月甲辰。卽少傅李立開門內漢兵。遂拔邯鄲。卽夜亡走。王霸追斬之。秀收卽文書。得吏民與卽交關。謗毀者數千章。秀不省。會諸將軍。燒之曰。令反側子自安。秀部分吏卒各隸諸軍。士皆言。願屬大樹將軍。大樹將軍者。偏將軍馮異也。爲人謙退不伐。敕吏士非交戰受敵。常行諸營之後。每所止舍。諸將竝坐論功。異常獨屏樹下。故軍中號曰。大樹將軍。護軍宛人朱祐言。

于秀曰：長安政亂，公有日角之相，此天命也。秀曰：召刺姦，收護軍，祐乃不敢復言。更始遣使立秀爲蕭王，悉令罷兵。與諸將有功者詣行在所，遣苗曾爲幽州牧，韋順爲上谷太守。蔡充爲漁陽太守，竝北之部。蕭王居邯鄲宮，晝臥溫明殿，耿弇入造牀下，請問。因說曰：吏士死傷者多，請歸上谷益兵。蕭王曰：王郎已破，河北略平，復用兵何爲？弇曰：王郎雖破，天下兵革乃始耳。今使者從西方來，欲罷兵，不可聽也。銅馬赤眉之屬數十輩，輩數十百萬人，所向無前，聖公不能辦也，敗必不久。蕭王起坐曰：卿失言，我斬卿。弇曰：大王哀厚，如父子，故敢披赤心。蕭王曰：我戲卿耳，何以言之？弇曰：百姓患苦王莽，復思劉氏，聞漢兵起，莫不歡喜。如去虎口得歸慈母，今更始爲天子，而諸將擅命於山東，貴戚縱橫於都內，虜掠自恣，元元叩心，更思莽朝，是以知其必敗也。公功名已著，以義征伐，天下可傳檄而定也。天下至重，公可自取，毋令它姓得之。蕭王乃辭以河北未平，不就徵。始貳於更始，是時諸賊銅馬、大彤、高湖、重連、鐵脛、大槍、尤來、上江、青犢、五校、五幡、五樓、富平、獲索等，各領部曲，衆合數百萬人，所在寇掠。蕭王欲擊之，乃拜吳漢、耿弇俱爲大將軍，持節北發幽州十郡突騎，苗曾聞之，陰救諸郡，不得應調。吳漢將二十騎先馳至，無終，曾出迎於路，漢即收會斬之。耿弇到上谷，亦收韋順、蔡充，斬之。北州震駭，於是悉發其兵。秋，蕭王擊銅馬於豐，吳漢將突騎來會清陽，士馬甚盛。漢悉上兵簿於莫府，請所付與，不敢自私。王益重之，王以偏將軍沛國朱浮爲大將軍，幽州牧使治薊城，銅馬食盡，夜遁。蕭王追擊於館陶，大破之，受降未盡，而高湖、重連從東南來，與銅馬餘衆合。蕭王復與大戰於蒲陽，悉破降之，封其渠帥爲列侯。諸將未能信，賊降者亦不自安。王知其意，敕令降者各歸營，勒兵自乘輕騎，按行部陳，降者更相語曰：蕭王推赤心置人腹中，安得不投死乎？由是皆服。悉以降人分配諸將，衆遂數十萬。赤眉別帥與青犢、上江、大彤、鐵脛、五幡十餘萬衆，在射犬。蕭王引兵進擊，大破之。南徇河內，河內大守韓歆降。○初，謝

躬與蕭王共滅王郎，數與蕭王違，常欲襲蕭王，畏其兵彊而止。雖俱在邯鄲，遂分城而處，然蕭王有以慰安之。躬勤於吏職，蕭王常稱之曰：謝尙書真吏也。故不自疑，其妻知之，常戒之曰：君與劉公積不相能，而信其虛談，終受制矣。躬不納。既而躬率其兵數萬還屯于鄴，及蕭王南擊青犢，使躬邀擊尤來於隆慮山，躬兵大敗。蕭王因躬在外，使吳漢與刺豨大將軍岑彭襲據鄴城，躬不知，輕騎還鄴。漢等收斬之，其衆悉降。○更始遣柱功侯李寶益州刺史張忠，將兵萬餘人徇蜀漢。公孫述遣其弟恢擊寶，忠於綿竹大破走之。述遂自立爲蜀王，都成都，民夷皆附之。○冬，更始遣中郎將歸德侯颯、大司馬護軍陳遵使匈奴，授單于漢舊制璽綬。因送云：當餘親屬貴人從者，還匈奴，單于與驕謂遵颯曰：匈奴本與漢爲兄弟，匈奴中亂，孝宣皇帝輔立呼韓邪單于，故稱臣以尊漢。今漢亦大亂，爲王莽所篡，匈奴亦出兵擊莽，空其邊境，令天下騷動，思漢莽卒以敗，而漢復興，亦我力也。當復尊我，遵與相掌拒，單于終持此言。○赤眉樊崇等將兵入潁川，分其衆爲二部，崇與逢安爲一部，徐宣、謝祿、楊音爲一部。赤眉雖數戰勝，而疲弊厭兵，皆日夜愁泣，思欲東歸。崇等計議慮衆東向必散，不如西攻長安。於是崇安自武關，宣等從陸渾關，兩道俱入。更始使王匡成丹與抗威將軍劉均等分據河東弘農以拒之。○蕭王將北徇燕趙，度赤眉必破長安，又欲乘釁并關中，而未知所寄。乃拜鄧禹爲前將軍，中分麾下精兵二萬人，遣西入關，令自選偏裨以下可與俱者。時朱鮪、李軼、田立、陳僑將兵號三十萬，與河南大守武勃共守洛陽。鮑永、田邑在并州，蕭王以河內險要富實，欲擇諸將守河內者而難其人，問於鄧禹。鄧禹曰：寇恂、文武備足，有牧民御衆之才，非此子莫可使也。乃拜恂河內太守，行大將軍事。蕭王謂恂曰：昔高祖留蕭何關中，吾今委公以河內，當給足軍糧，率厲士馬，防遏它兵，勿令北度而已。拜馮異爲孟津將軍，統魏郡河內兵於河上，以拒洛陽。蕭王親送鄧禹至野王，禹即西。蕭王乃復引兵而北，寇恂調糒糧。

治器械以供軍。軍雖遠征，未嘗乏絕。○隗崔隗義謀叛歸天水，隗囂恐并及，乃告之。更始誅崔義，以囂為御史大夫。○梁王永據國起兵，招諸郡豪桀。沛人周建等竝署為將帥，攻下濟陰、山陽、沛、楚、淮陽、汝南，凡得二十八城。又遣使拜西防賊帥山陽佼彊為橫行將軍，東海賊帥董憲為翼漢大將軍，琅邪賊帥張步為輔漢大將軍，督青徐二州。與之連兵，遂專據東方。○邳人秦豐起兵于黎丘，攻得邳、宜城等十餘縣，有眾萬人。自號楚黎王。○汝南田戎攻陷夷陵，自稱掃地大將軍，轉寇郡縣，眾數萬人。

資治通鑑卷第三十九

資治通鑑卷第四十

漢紀三十二

世祖光武皇帝上之上

建武元年春正月，方望與安陵人弓林共立前定安公嬰為天子，聚黨數千人，居臨涇，更始遣丞相松等擊破皆斬之。○鄧禹至箕關，擊破河東都尉進圍安邑，赤眉二部俱會弘農，更始遣討難將軍蘇茂拒之，茂軍大敗，赤眉眾遂大集，乃分萬人為一營，凡三十營。三月，更始遣丞相松與赤眉戰於莠卿，松等大敗，死者三萬餘人。赤眉遂轉北至湖。○蜀郡功曹李熊說公孫述宜稱天子。夏四月，述即帝位，號成家，改元龍興，以李熊為大司徒，述弟光為大司馬，恢為大司空。越嵩任貴，據郡降述。○蕭王北擊尤來大槍五幡於元氏，追至北平，連破之。又戰於順水北，乘勝輕進，反為所敗。王自投高岸，突騎王豐下馬授王，王僅而得免，散兵歸保范陽軍中，不見王。或云已歿。諸將不知所為，吳漢曰：「卿曹努力，王兄子在南陽，何憂無主！」眾恐懼，數日乃定。賊雖戰勝而憚王威名，夜遂引去。大軍復進，至安次，連戰破之。賊退入漁陽，所過虜掠，彊弩將軍陳俊言於王曰：「賊無輜重，宜令輕騎出賊前，使百姓各自堅壁，以絕其食，可不戰而殄也。」王然之。遣俊將輕騎馳出賊前，視人保壁堅完者，敕令固守，放散在野者，因掠取之。賊至無所得，遂散敗。王謂俊曰：「因此虜者，將軍策也。」○馮異遣李軼書為陳禍，勸令歸附。蕭王軼知長安已危，而以伯升之死，心不自安，乃報書曰：「軼本與蕭王首謀造漢，今軼守洛陽，將軍鎮孟津，俱據機軸，千載一會，思成斷金，唯深達蕭王願進愚策，以佐國安。」

民軼自通書之後。不復與異爭鋒。故異得北攻天井關。拔上黨兩城。又南下河南成臯。以東十三縣降者十餘萬。武勃將萬餘人攻諸畔者。異與戰於士鄉下。大破斬勃。軼閉門不救。異見其信效。具以白王。王報異曰。季文多詐。人不能得其要領。今移其書。告守尉。當警備者。衆皆怪王。宜露軼書。朱鮪聞之。使人刺殺軼。由是城中乖離。多有降者。○朱鮪聞王北征。而河內孤。乃遣其將蘇茂。賈彊。將兵三萬餘人。度鞏河。攻溫。鮪自將數萬人。攻平陰。以綴異。檄書至河內。寇恂即勒軍馳出。竝移告屬縣。發兵會溫。下軍吏皆諫曰。今洛陽兵度河。前後不絕。宜待衆軍畢集。乃可出也。恂曰。溫郡之藩蔽。失溫則郡不可守。遂馳赴之。旦日合戰。而馮異遣救。及諸縣兵適至。恂令士卒乘城鼓譟。大呼言曰。劉公兵到。蘇茂軍聞之。陳動。恂因奔擊。大破之。馮異亦渡河。擊朱鮪。鮪走。異與恂追至洛陽。環城一市而歸。自是洛陽震恐。城門晝閉。異恂移檄上。狀諸將入賀。因上尊號。將軍南陽馬武。先進曰。大王雖執謙退。奈宗廟社稷。何。宜先即尊位。乃議征伐。今此誰賊。而馳驚擊之乎。王驚曰。何將軍出此言。可斬也。乃引軍還。薊復遣吳漢。率耿种。景丹等十三將軍。追尤來等。斬首萬三千餘級。遂窮追。至浚靡而還。賊散入遼西。遼東爲烏桓。緡人所鈔。擊略盡。都護將軍賈復。與五校戰於真定。復傷創甚。王大驚曰。我所以不令賈復別將者。爲其輕敵也。果然。失吾名將。聞其婦有孕。生女邪。我子娶之。生男邪。我女嫁之。不令其憂妻子也。復病尋愈。追及王於薊。相見甚驩。還至中山。諸將復上尊號。王又不聽。行到南平棘。諸將復固請之。王不許。諸將且出。耿純進曰。天下士大夫。捐親戚。棄土壤。從大王於矢石之間者。其計固望攀龍鱗。附鳳翼。以成其所志耳。今大王留時。逆衆不正號位。純恐士大夫望絕。計窮。則有去歸之思。無爲久自苦也。大衆一散。難可復合。純言甚誠切。王深感曰。吾將思之。行至鄆。召馮異。問四方動靜。異曰。更始必敗。宗廟之憂。在於大王。宜從衆議。會儒生彊華。自關中奉赤伏符來詣王。曰。劉秀發兵。捕不道。四夷雲集。龍

鬪野。四七之際。火爲主。羣臣因復奏請。六月己未。王卽皇帝位。于鄆南。改元大赦。○鄧禹圍安邑。數月未下。更始大將軍樊參。將數萬人。度大陽。欲攻禹。禹逆擊於解南。斬之。王匡成丹。劉均。合軍十餘萬。復共擊禹。禹軍不利。明日癸亥。匡等以六甲窮日不出。禹因得更治兵。甲子。匡悉軍出攻禹。禹令軍中毋得妄動。既至營下。因傳發諸將。鼓而竝進。大破之。匡等皆走。禹追斬均。及河東太守楊寶。遂定河東。匡等奔還長安。○張卬與諸將議曰。赤眉且暮。且至。見滅不久。不如掠長安。東歸南陽。事若不集。復入湖池中。爲盜耳。乃共入說更始。更始怒。不應。莫敢復言。更始使王匡。陳牧。成丹。趙萌。屯新豐。李松軍。振以拒赤眉。張卬。廖湛。胡殷。申屠建。與隗囂合謀。欲以立秋日。驅樓時。共劫更始。俱成前計。更始知之。託病不出。召張卬等。入將悉誅之。唯隗囂稱疾不入。會客王遵。周宗等。勒兵自守。更始狐疑不決。卬湛殷疑有變。遂突出。獨申屠建在。更始斬建。使執金吾鄧舉。將兵圍隗囂第。卬湛殷勒兵燒門。入戰宮中。更始大敗。囂亦潰圍走歸天水。明日。更始東奔趙萌於新豐。更始復疑王匡。陳牧。成丹。與張卬等同謀。乃竝召入。成丹先至。卬斬之。王匡懼。將兵入長安。與張卬等合。○赤眉進至華陰。軍中有齊巫。常鼓舞祠城陽景王。巫狂言。景王大怒曰。當爲縣官。何故爲賊。有笑。巫者輒病。軍中驚動。方望弟陽。說樊崇等曰。今將軍擁百萬之衆。西向帝城。而無稱號。名爲羣賊。不可以久。不如立宗室。挾義誅伐。以此號令。誰敢不從。崇等以爲然。而巫言益甚。前至鄆。乃相與議曰。今迫近長安。而鬼神若此。當求劉氏。共尊立之。先是。赤眉過式掠故式侯萌之子恭。茂。盆子三人。自隨。恭。少習尚書。隨樊崇等降。更始於洛陽。復封式侯。爲侍中。在長安。茂與盆子。留軍中。屬右校卒吏劉俠卿。主牧牛。及崇等欲立帝。求軍中景王後。得七十餘人。唯茂。盆子。及前西安侯孝。最爲近屬。崇等曰。聞古者天子將兵。稱上將軍。乃書札爲符。曰。上將軍。又以兩空札。置箚中。於鄆北。設壇場。祠城陽景王。諸三老從事。皆大會。列盆子等三人。居中。立以年

次探札。盆子最幼。後探得符。諸將皆稱臣拜。盆子時年十五。被髮徒跣。敝衣赭汗。見衆拜。恐畏欲啼。茂謂曰。善。賊符。盆子即齧折棄之。以徐宣爲丞相。樊崇爲御史大夫。逢安爲左大司馬。謝祿爲右大司馬。其餘皆列卿將軍。盆子雖立。猶朝夕拜劉俠卿。時欲出從。牧兒戲。俠卿怒止之。崇等亦不復候視也。○秋七月辛未。帝使使持節。拜鄧禹爲大司徒。封鄼侯。食邑萬戶。禹時年二十四。又議選大司空。帝以赤伏符曰。王梁主衛。作玄武。丁丑。以野王令王梁爲大司空。又欲以讖文。用平狄將軍孫咸。行大司馬。衆咸不悅。壬午。以吳漢爲大司馬。初。更始以琅邪伏湛爲平原太守。時天下兵起。湛獨晏然。撫循百姓。門下督謀爲湛起兵。湛收斬之。於是吏民信向。平原一境。賴湛以全。帝徵湛爲尚書。使典定舊制。又以鄧禹西征。拜湛爲司直。行大司徒事。車駕每出征伐。常留鎮守。○鄧禹自汾陰渡河。入夏陽。更始左輔都尉公乘欽。引其衆十萬。與左馮翊兵共拒禹於衙。禹復破走之。○宗室劉茂聚衆京密間。自稱厭新將軍。攻下潁川汝南。衆十餘萬人。帝使驃騎大將軍景丹。建威大將軍耿弇。彊弩將軍陳俊。攻之。茂來降。封爲中山王。○己亥。帝幸懷。遣耿弇陳俊。軍五社津。備滎陽。以東。使吳漢率建義大將軍朱祐等十一將軍。圍朱鮪於洛陽。八月。進幸河陽。○李松自振引兵還。從更始。與趙萌共攻王匡。張卬於長安。連戰月餘。匡等敗走。更始徙居長信宮。赤眉至高陵。王匡張卬等迎降之。遂共連兵。進攻東都門。李松出戰。赤眉生得松。松弟況爲城門校尉。開門納之。九月。赤眉入長安。更始單騎走。從厨城門出。式侯恭以赤眉立其弟。自繫詔獄。聞更始敗走。乃出見定陶王祉。祉爲之除械。相與從更始於渭濱。右輔都尉嚴本恐失更始。爲赤眉所誅。即將更始至高陵。本將兵宿衛。其實圍之。更始將相皆降。赤眉獨丞相曹竟不降。手劍格死。○辛未。詔封更始爲淮陽王。吏民敢有賊害者。罪同大逆。其送詣更者。封列侯。○初。宛人卓茂寬仁恭愛。恬蕩樂道。雅實不爲華貌。行己在於清濁之間。自束髮至白首。未嘗與人有所競。

鄉黨故舊。雖行能與茂不同。而皆愛慕欣欣焉。哀平間。爲密令。視民如子。舉善而教。口無惡言。吏民親愛。不忍欺之。民嘗有言部亭長受其米肉遺者。茂曰。亭長爲從汝求乎。爲汝有事囑之而受乎。將平居自以恩意遺之乎。民曰。往遺之耳。茂曰。遺之而受。何故言邪。民曰。竊聞賢明之君。使民不畏吏。吏不取民。今我畏吏。是以遺之。吏既卒受。故來言耳。茂曰。汝爲敝民矣。凡人所以羣居不亂。異於禽獸者。以有仁愛禮義。知相敬事也。汝獨不欲修之。寧能高飛遠走。不在人間邪。吏顧不當乘威力。彊請求耳。亭長素善吏。歲時遺之。禮也。民曰。苟如此。律何故禁之。茂笑曰。律設大法。禮順人情。今我以禮教汝。汝必無怨惡。以律治汝。汝何所措其手足乎。一門之內。小者可論。大者可殺也。且歸念之。初。茂到縣。有所廢置。吏民笑之。鄰城聞者。皆嗤其不能。河南郡爲置守令。茂不爲嫌。治事自若。數年。教化大行。道不拾遺。遷京部丞。密人老少。皆涕泣隨送。及王莽居攝。以病免歸。上即位。先訪求茂。茂時年七十餘。甲申。詔曰。夫名冠天下。當受天下重賞。今以茂爲太傅。封襄德侯。臣光曰。孔子稱。舉善而教不能。則勸是以舜舉臯陶。湯舉伊尹。而不仁者遠。有德故也。光武即位之初。羣雄競逐。四海鼎沸。彼摧堅陷敵之人。權略詭辯之士。方見重於世。而獨能取忠厚之臣。旌循良之吏。拔於草萊之中。實諸羣公之首。宜其光復舊物。享祚久長。蓋由知所先務。而得其本原故也。

諸將圍洛陽數月。朱鮪堅守不下。帝以廷尉岑彭嘗爲鮪校尉。令往說之。鮪在城上。彭在城下。爲陳成敗。鮪曰。大司徒被害時。鮪與其謀。又諫更始。無遣蕭王北伐。誠自知罪深。不敢降。彭還。具言於帝。帝曰。舉大事者。不忌小怨。鮪今若降。官爵可保。況誅罰乎。河水在此。吾不食言。彭復往告鮪。鮪從城上下。索曰。必信。可乘此上。彭趣索欲上。鮪見其誠。即許降。辛卯。朱鮪面縛與岑彭俱詣河陽。帝解其縛。召見之。復令彭夜送鮪歸城。明旦。與蘇茂等悉其衆出降。

拜縮爲平狄將軍。封扶溝侯。後爲少府。傳封累世。帝使侍御史河內杜詩。安集洛陽。將軍蕭廣。縱兵士暴橫。詩敕曉不改。遂格殺廣。還以狀聞。上召見。賜以棨戟。遂擢任之。○冬十月。癸丑。車駕入洛陽。幸南宮。遂定都焉。○赤眉下書曰。聖公降者。封爲長沙王。過二十日。勿受。更始遣劉恭請降。赤眉使其將謝祿往受之。更始隨祿。肉袒。上璽綬於盆子。赤眉坐更始。置庭中。將殺之。劉恭謝祿爲請。不能得。遂引更始出。劉恭追呼曰。臣誠力極。請得先死。拔劍欲自刎。樊崇等遽共救止之。乃赦更始。封爲畏威侯。劉恭復爲固請。竟得封長沙王。更始常依謝祿居。劉恭亦擁護之。○劉盆子居長樂宮。三輔郡縣營長。遣使貢獻。兵士輒剽奪之。又數暴掠吏民。由是皆復固守。百姓不知所歸。聞鄧禹乘勝獨克。而師行有紀。皆望風相攜負以迎軍。降者日以千數。衆號百萬。禹所止。輒停車挂節。以勞來之父老童穉。垂髮戴白。滿其車下。莫不感悅。於是名震關西。諸將豪桀。皆勸禹徑攻長安。禹曰。不然。今吾衆雖多。能戰者少。前無可仰之積。後無轉饋之資。赤眉新拔長安。財穀充實。鋒銳未可當也。夫盜賊羣居。無終日之計。財穀雖多。變故萬端。寧能堅守者也。上郡北地安定三郡。土廣人稀。饒穀多畜。吾且休兵北道。就糧養士。以觀其敝。乃可圖也。於是引軍北至枸邑。所到諸營保郡邑。皆開門歸附。○上遣岑彭擊荊州羣賊。下犍葉等十餘城。○十一月甲午。上幸懷。○梁王永稱帝於睢陽。○十二月丙戌。上還洛陽。○三輔苦赤眉暴虐。皆憐更始。欲盜出之。張卬等深以爲慮。使謝祿縊殺之。劉恭夜往收藏其尸。帝詔鄧禹葬之於霸陵。中郎將宛人趙熹將出武門。道遇更始親屬。皆裸跣飢困。熹竭其資糧以與之。將護而前。宛王賜聞之。迎還鄉里。○隗囂歸天水。復招聚其衆。興修故業。自稱西州上將軍。三輔士大夫避亂者。多歸囂。囂傾身引接。爲布衣交。以平陵范遂爲師友。前涼州刺史河內鄭興爲祭酒。茂陵申屠剛。杜林爲治書。馬援爲綵德將軍。楊廣。王遵。周宗。及平襄行巡。阿陽王捷。長陵王元。爲大將軍。安陵班彪之屬。爲賓客。由

此名震西州。聞於山東。馬援少時。以家用不足。辭其兄況。欲就邊郡田牧。況曰。汝大才。當晚成。良工不示人以朴。且從所好。遂之北地。田牧常謂賓客曰。丈夫爲志。窮當益堅。老當益壯。後有畜數千頭。穀數萬斛。既而歎曰。凡殖財產。貴其能賑施也。否則守錢虜耳。乃盡散於親舊。聞隗囂好士。往從之。囂甚敬重。與決籌策。班彪稱之子也。○初平陵寶融。累世仕宦河西。知其土俗。與更始右大司馬趙萌善。私謂兄以曰。天下安危。未可知。河西殷富。帶河爲固。張掖屬國。精兵萬騎。一旦緩急。杜絕河津。足以自守。此遺種處也。乃因萌求往河西。萌薦融於更始。以爲張掖屬國都尉。融既到。撫結雄桀。懷輯羌虜。甚得其歡心。是時。酒泉太守安定梁統。金城太守庫鈞。張掖都尉茂陵史苞。酒泉都尉竺曾。敦煌都尉辛彤。並州郡英俊。融皆與厚善。及更始敗。融與梁統等計議曰。今天下擾亂。未知所歸。河西斗絕。在羌胡中。不同心戮力。則不能自守。權鈞力齊。復無以相率。當推一人爲大將軍。共全五郡。觀時變動。議既定。而各謙讓。以位次。咸共推梁統。統固辭。乃推融。行河西五郡大將軍事。武威太守馬期。張掖太守任仲。並孤立無黨。乃共移書告示之。二人卽解印綬去。於是梁統爲武威太守。史苞爲張掖太守。竺曾爲酒泉太守。辛彤爲敦煌太守。融居屬國。領都尉職。如故。置從事。監察五郡。河西民俗質樸。而融等政亦寬和。上下相親。晏然富殖。脩兵馬。習戰射。明烽燧。羌胡犯塞。融輒自將。與諸郡相救。皆如符要。每輒破之。其後羌胡皆震服親附。內郡流民避凶饑者。歸之不絕。○王莽之世。天下咸思漢德。安定三水盧芳居左谷中。詐稱武帝曾孫劉文伯。云曾祖母。匈奴渾邪王之姊也。常以是言誑惑安定間。王莽末。乃與三水屬國羌胡起兵。更始至長安。徵芳爲騎都尉。使鎮撫安定以西。更始敗。三水豪桀共立芳爲上將軍。西平王使使與西羌匈奴結和親。單于以爲漢氏中絕。劉氏來歸。我亦當如呼韓邪立之。令尊事我。乃使句林王將數千騎迎芳兄弟入匈奴。立芳爲漢帝。以芳弟程爲中郎將。將胡騎還入安定。○帝以關中

未定而鄧禹久不進兵。賜書責之曰：司徒堯也，亡賊桀也。長安吏民遑遑，無所依歸，宜以時進討。鎮慰西京，繫百姓之心。禹猶執前意，別攻上郡諸縣，更徵兵引穀，歸至大要，積弩將軍馮愔、車騎將軍宗歆、守枸邑二人爭權相攻，愔遂殺歆。因反擊禹，禹遣使以聞。帝問使人愔所親愛為誰，對曰：護軍黃防。帝度愔防不能久和，執必相忤。因報禹曰：縛馮愔者，必黃防也。乃遣尚書宗廣持節往降之。後月餘，防果執愔，將其衆歸罪。更始諸將王匡、胡殷、成丹等皆詣廣降。廣與東歸。至安邑，道欲亡，廣悉斬之。愔之叛也，引兵西向天水。隗囂逆擊破之於高平，盡獲其輜重。於是禹承制，遣使持節命囂為西州大將軍，得專制涼州朔方事。○臘日，赤眉設樂大會，酒未行，羣臣更相辯鬪。而兵衆遂各踰宮，斬關入掠酒肉，互相殺傷。衛尉諸葛穉聞之，勒兵入，格殺百餘人。乃定。劉盆子惶恐，日夜啼泣，從官皆憐之。○帝遣宗正劉延、攻天井關，與田邑連戰十餘合，延不得進，及更始敗，邑遣使請降。即拜為上黨太守。帝又遣諫議大夫儲大伯持節徵鮑永，永未知更始存亡，疑不肯從。收繫大伯，遣使馳至長安，詢問虛實。○初，帝從更始在宛，納新野陰氏之女麗華，是歲遣使迎麗華，與帝姊湖陽公主、妹寧平公主俱到洛陽。以麗華為貴人，更始西平王李通先娶寧平公主，上徵通為衛尉。○初，更始以王閔為琅邪太守，張步據郡拒之。閔諭降，得贛榆等六縣，收兵與步戰，不勝。步既受劉永官號，治兵於劇，遣將徇泰山、東萊、城陽、膠東、北海、濟南、齊郡，皆下之。閔力不敵，乃詣步相見。步大陳兵而見之，怒曰：步有何罪，君前見攻之甚，閔按劍曰：太守奉朝命，而文公擁兵相拒，閔攻賊耳。何謂甚邪？步起跪謝，與之宴飲，待為上賓，令閔關掌郡事。二年春正月甲子朔日，有食之。○劉恭知赤眉必敗，密教弟盆子歸璽綬，習為辭讓之言。及正旦大會，恭先曰：諸君共立恭弟為帝，德誠深厚，立且一年，殺亂日甚，誠不足以相成，恐死而無益，願得退為庶人，更求賢知，唯諸君省察。樊崇等謝曰：此皆崇等罪也。恭復固請，或曰：

此寧式侯事邪？恭惶恐起去。盆子乃下牀解璽綬叩頭曰：今設置縣官而為賊如故，四方怨恨不復信向，此皆立非其人所致。願乞骸骨，避賢聖路，必欲殺盆子以塞責者，無所難死。因涕泣嘘唏，崇等及會者數百人莫不哀憐之。乃皆避席頓首曰：臣無狀，負陛下請，自今已後不敢復放縱。因共抱持盆子，帶以璽綬。盆子號呼不得已，既罷出，各閉營自守。三輔翕然稱天子聰明，百姓爭還長安市，且滿。後二十餘日，復出大掠如故。○力子都為其部曲所殺，餘黨與諸賊會檀鄉，號檀鄉賊。寇魏郡清河，魏郡大吏李熊弟陸謀反，城迎檀鄉，或以告魏郡太守潁川鮑期，期召問熊，熊叩頭首服，願與老母俱就死。期曰：為吏儻不若為賊樂者，可歸與老母往就陸也。使吏送出城，熊行求得陸，將詣鄴城西門，陸不勝愧感，自殺。以謝期，期嗟歎，以禮葬之，而還熊故職。於是郡中服其威信。帝遣吳漢、王梁等九將軍擊檀鄉於鄴，東漳水上，大破之，十餘萬衆皆降。又使梁與大將軍杜茂將兵安輯魏郡、清河、東郡，悉平諸營保。三郡清靜，邊路流通。○庚辰，悉封諸功臣為列侯。梁侯鄧禹、廣平侯吳漢、皆食四縣，博士丁恭議曰：古者封諸侯，不過百里，強幹弱枝，所以為治也。今封四縣，不合法制。帝曰：古之亡國，皆以無道，未嘗聞功臣地多而滅亡者也。陰鄉侯陰識，貴人之兄也，以軍功當增封，識叩頭讓曰：天下初定，將帥有功者衆，臣託屬掖庭，仍加爵邑，不可以示天下。此為親戚受賞，國人計功也。帝從之。帝令諸將各言所樂，皆占美縣。河南太守潁川丁綝獨求封本鄉，或問其故，綝曰：綝能薄功微，得鄉亭厚矣。帝從其志，封新安鄉侯。帝使郎中魏郡馮勤、典諸侯封事，勤差量功次輕重，國土遠近，地執豐薄，不相踰越。莫不厭服焉。帝以為能，尚書衆事皆令總錄之。故事，尚書郎以令史久次補之。帝始用孝廉為尚書郎。○起高廟於洛陽，四時合祀。高祖太宗世宗，建社稷于宗廟之右，立郊兆于城南。○長安城中糧盡，赤眉收載珍寶，大縱火燒宮室市里，恣行殺掠。長安城中無復人行，乃引兵而西，衆號百萬，自南山轉掠城邑，遂

入安定北地鄧禹引兵南至長安軍昆明池謁祠高廟收十一帝神主送詣洛陽因巡行園陵爲置吏士奉守焉。○真定王楊造識記曰赤九之後瘞楊爲主楊病瘵欲以惑衆與綿曼賊交通帝遣騎都尉陳副游擊將軍鄧隆徵之楊閉城門不內帝復遣前將軍耿純持節行幽冀所過勞慰王侯密敕收楊純至真定止傳舍邀楊相見純真定宗室之出也故楊不以爲疑且自恃衆強而純意安靜即從官屬詣之楊兄弟並將輕兵在門外楊入見純純接以禮敬因延請其兄弟皆入乃閉閣悉誅之因勒兵而出真定震怖無敢動者帝憐楊謀未發而誅復封其子爲真定王。○二月己酉車駕幸脩武。○鮑永馮衍審知更始已亡乃發喪出儲大伯等封上印綬悉罷兵幅巾詣河內帝見永問曰卿衆安在永離席叩頭曰臣事更始不能令全誠慙以其衆幸富貴故悉罷之帝曰卿言大而意不悅既而永以立功見用衍遂廢棄永謂衍曰昔高祖賞季布之罪誅丁固之功今遭明主亦何憂哉衍曰人有挑其鄰人之妻者其長者罵而少者報之後其夫死取其長者或謂之曰夫非罵爾者邪曰在人欲其報我在我欲其罵人也夫天命難知人道易守守道之臣何患死亡。○大司空王梁屢違詔命帝怒遣尚書宗廣持節即軍中斬梁廣檻車送京師既至赦之以爲中郎將北守箕關。○壬子以太中大夫京兆宋弘爲大司空弘薦沛國桓譚爲議郎給事中帝令譚鼓琴愛其繁聲弘聞之不悅伺譚內出正朝服坐府上遣吏召之譚至不與席而讓之且曰能自改邪將令相舉以法乎譚頓首辭謝良久乃遣之後大會羣臣帝使譚鼓琴譚見弘失其常度帝怪而問之弘乃離席免冠謝曰臣所以薦桓譚者望能以忠正導主而令朝廷耽悅鄭聲臣之罪也帝改容謝之湖陽公主新寡帝與共論朝臣微觀其意主曰宋公威容德器羣臣莫及帝曰方且圖之後弘被引見帝令主坐屏風後因謂弘曰諺言貴易交富易妻人情乎弘曰臣聞貧賤之知不可忘糟糠之妻不下堂帝顧謂主曰事不諧矣。○帝之討王郎也彭寵發

突騎以助軍轉糧食前後不絕及帝追銅馬至薊寵自負其功意望甚高帝接之不能滿以此懷不平及即位吳漢王梁寵之所遣竝爲三公而寵獨無所加愈怏怏不得志歎曰如此我當爲王但爾者陛下忘我邪是時北州破散而漁陽差完有舊鐵官寵轉以質穀積珍寶益富彊幽州牧朱浮年少有俊才欲厲風述收士心辟召州中名宿及王莽時故吏二千石皆引置幕府多發諸郡倉穀稟贍其妻子寵以爲天下未定師旅方起不宜多置官屬以損軍實不從其令浮性矜急自多寵亦狠彊嫌怨轉積浮數譖構之密奏寵多聚兵穀意計難量上輒漏泄令寵聞以脅恐之至是有詔徵寵寵上疏願與浮俱徵帝不許寵益以自疑其妻素剛不堪抑屈固勸無受徵曰天下未定四方各自爲雄漁陽大郡兵馬最精何故爲人所奏而棄此去乎寵又與所親信吏計議皆懷怨於浮莫有勸行者帝遣寵從弟子后蘭卿喻之寵因留子后蘭卿遂發兵反拜署將帥自將二萬餘人攻朱浮於薊又以與耿況俱有重功而恩賞竝薄數遣使要誘況況不受斬其使。○延岑復反圍南鄭漢中王嘉兵敗走岑遂據漢中進兵武都爲更始柱功侯李寶所破岑走天水公孫述遣將侯丹取南鄭嘉收散卒得數萬人以李寶爲相從武都南擊侯丹不利還軍河池下辨復與延岑連戰岑引北入散關至陳倉嘉追擊破之公孫述又遣將軍任滿從閬中下江州東據扞關於是盡有益州之地。○辛卯上還洛陽。○三月乙未大赦。○更始諸大將在南方未降者尙多帝召諸將議兵事以檄叩地曰郾最彊宛爲次誰當擊之賈復率然對曰臣請擊郾帝笑曰執金吾擊郾吾復何憂大司馬當擊宛遂遣復擊郾破之尹尊降又東擊更始淮陽太守暴汜汜降。○夏四月虎牙大將軍蓋延督駙馬都尉馬武等四將軍擊劉永破之遂圍永於睢陽故更始將蘇茂反殺淮陽太守潘蹇據廣樂而臣於永永以茂爲大司馬淮陽王。○吳漢擊宛宛王賜奉更始妻子詣洛陽降帝封賜爲慎侯叔父良族父欽族兄祉皆自長安來甲午封良爲廣

陽王社為城陽王。又封兄縝子章為太原王，與為魯王，更始三子求、鯉，皆為列侯。○鄧王王常降，帝見之甚歡，曰：「吾見王廷尉，不憂南方矣。」拜為左曹，封山桑侯。○五月庚辰，封族父歙為泗水王。○帝以陰貴人雅性寬仁，欲立以為后，貴人以郭貴人有子，終不肯當。六月，戊戌，立貴人郭氏為皇后，立其子彊為皇太子，大赦。○丙午，封泗水王子終為淄川王。○秋，賈復、南擊召陵，新息平之。復部將殺人於潁川，潁川太守寇恂捕得繫獄，時尙草創，軍營犯法，率多相容，恂戮之於市。復以為恥，還過潁川，謂左右曰：「吾與寇恂並列將帥，而為其所陷，今見恂必手劍之，恂知其謀，不欲與相見。」姊子谷崇曰：「崇將也，得帶劍侍側，卒有變，足以相當。」恂曰：「不然，昔蘭相如，不畏秦王，而屈於廉頗者，為國也，乃敕屬縣，盛供具，儲酒醪，執金吾軍入界，一人皆兼二人之饌，恂出迎於道，稱疾而還，復勒兵欲追之，而吏士皆醉，遂過去。恂遣谷崇以狀聞，帝乃徵恂，恂至，引見，時賈復先在坐，欲起相避，帝曰：「天下未定，兩虎安得私鬪？」今日朕分之，於是並坐極歡，遂共車同出，結友而去。○八月，帝自率諸將征五校，丙辰，幸內黃，大破五校於蕘陽，降其衆五萬人。○帝遣游擊將軍鄧隆助朱浮討彭寵，隆軍潞南，浮軍雍奴，遣吏奏狀，帝讀檄，怒，謂使吏曰：「營相去百里，其執豈可得相及？比若還，北軍必敗矣。」彭寵果遣輕兵擊隆軍，大破之，浮遠遂不能救。○蓋延圍睢陽數月，克之，劉永走至虞虞，人反殺其母妻，永與麾下數十人奔譙，蘇茂、佼彊、周建合軍三萬餘人救永，延與戰於沛西，大破之。永、彊、建走保湖陵，茂、犇還廣樂，延遂定沛、楚、臨淮。○帝使太中大夫伏隆持節使青徐二州，招降郡國，青徐羣盜聞劉永破敗，皆惶怖請降，張步遣其掾孫昱隨隆詣闕，上書獻鰓魚，隆湛之子也。○堵鄉人董訢反，宛城執南陽太守劉麟，揚化將軍堅鐔攻宛，拔之，訢走還堵鄉。○吳漢徇南陽諸縣，所過多侵暴，破虜將軍鄧奉謁歸新野，怒漢掠其鄉里，遂反，擊破漢軍，屯據滎陽，與諸賊合從。○九月壬戌，帝自內黃還。○陝賊蘇況攻破弘農，帝使景丹討之。

會丹薨，征虜將軍祭遵擊弘農，柏華蠻中賊皆平之。○赤眉引兵欲西上隴，隴郡將軍楊廣迎擊破之，又追敗之於烏氏，涇陽間赤眉至陽城，番須中逢大雪，坑谷皆滿，士多凍死，乃復還，發掘諸陵，取其寶貨，凡有玉匣殮者，率皆如生，賊遂汙辱呂后尸，鄧禹遣兵擊之於郁夷，反為所敗，禹乃出之雲陽，赤眉復入長安，延岑屯杜陵，赤眉將逢安擊之，鄧禹以安精兵在外，引兵襲長安，會謝祿救至，禹兵敗走，延岑擊逢安，大破之，死者十餘萬人，廖湛將赤眉十八萬攻漢中，王嘉、嘉與戰於谷口，大破之，嘉自殺，遂到雲陽，就穀，嘉妻兄新野來歙，帝之姑子也，帝令鄧禹招嘉，嘉因歙詣禹降，李寶倨慢，禹斬之。○冬十一月，以廷尉岑彭為征南大將軍，帝於大會中指王常謂羣臣曰：「此家率下江諸將，輔翼漢室，心如金石，真忠臣也。」即日拜常為漢中將軍，使與岑彭、建義大將軍朱祐等七將軍討鄧奉，董訢、彭等先擊堵鄉，鄧奉救之，朱祐軍敗，為奉所獲。○銅馬、青犢尤來餘賊共立孫登為天子，登將樂玄殺登，以其衆五萬餘人降。○鄧禹自馮愷叛後，威名稍損，又乏糧食，戰數不利，歸附者日益離散，赤眉延岑暴亂，三輔郡縣大姓各擁兵衆，禹不能定，帝乃遣偏將軍馮異代禹討之，車駕送至河南，敕異曰：「三輔遭王莽更始之亂，重以赤眉延岑之醜，元元塗炭，無所依訴，將軍今奉辭討諸不軌，營保降者，遣其渠帥詣京師，散其小民，令就農桑，壞其營壁，無使復聚，征伐非必略地屠城，要在平定安集之耳。」諸將非不健鬪，然好虜掠，卿本能御吏士，念自修敕，無為郡縣所苦，異頓首受命，引而西，所至布威信，羣盜多降。臣光曰：昔周人頌武王之德曰：「敷時繹思，我徂惟求定。」言王者之兵志在布陳威德安民而已。觀光武之所以取關中，用是道也，豈不美哉。又詔徵鄧禹還曰：「慎毋與窮寇爭鋒，赤眉無穀，自當來東，吾以飽待飢，以逸待勞，折箠答之，非諸將憂也，無得復妄進兵。」○以伏隆為光祿大夫，復使於張步，拜步東萊太守，并與新除

青州牧守都尉俱東。詔隆輒拜令長以下。○十二月戊午。詔宗室列侯。為王莽所絕者。皆復故國。○三輔大饑。人相食。城郭皆空。白骨蔽野。遺民往往聚為營保。各堅壁清野。赤眉虜掠無所得。乃引而東歸。眾尚二十餘萬。隨道復散。帝遣破姦將軍侯進等屯新安。建威大將軍耿弇等屯宜陽。以要其還路。敕諸將曰。賊若東走。可引宜陽兵。會新安。賊若南走。可引新安兵。會宜陽。馮異與赤眉遇於華陰。相距六十餘日。戰數十合。降其將卒五千餘人。

資治通鑑卷第四十

資治通鑑卷第四十一

漢紀三十三

世祖光武皇帝上之下

建武三年春正月甲子。以馮異為征西大將軍。鄧禹慙於受任無功。數以飢卒微。赤眉戰輒不利。乃率車騎將軍鄧弘等。自河北度至湖。要馮異。共攻赤眉。異曰。異與賊相拒數十日。雖虜獲雄將。餘眾尚多。可稍以恩信。傾誘難卒。用兵破也。上今使諸將屯澠池。要其東。而異擊其西。一舉取之。此萬成計也。禹弘不從。弘遂大戰。移日。赤眉陽敗。棄輜重走。車皆載土。以豆覆其上。兵士飢。爭取之。赤眉引還擊弘。弘軍潰亂。異與禹合兵救之。赤眉小卻。異以士卒飢。倦。可且休。禹不聽。復戰。大為所敗。死傷者三千餘人。禹以二十四騎脫歸宜陽。異棄馬奔走。上回谿阪。與麾下數人歸營。收其散卒。復壁自守。○辛巳。立四親廟於雒陽。祀父南頓君。以上至春陵節侯。○壬午。大赦。○閏月乙巳。鄧禹上大司徒梁侯印綬。詔還梁侯印綬。以為右將軍。○馮異與赤眉約期會戰。使壯士變服。與赤眉同。伏於道側。旦日。赤眉使萬人攻異。前部異少出兵。以救之。賊見執弱。遂悉眾攻異。異乃縱兵大戰。日昃。賊氣衰。伏兵卒起。衣服相亂。赤眉不復識別。眾遂驚潰。追擊。大破之於崤底。降男女八萬人。帝降璽書。勞異曰。始雖垂翅回谿。終能奮翼澠池。可謂失之東隅。收之桑榆。方論功賞。以答大勳。赤眉餘眾。東向宜陽。甲辰。帝親勒六軍。嚴陳以待之。赤眉忽遇大軍。驚震不知所為。乃遣劉恭乞降。曰。盆子將百萬眾降。陛下何以待之。帝曰。待汝以不死耳。丙午。盆子及丞相徐宣以下三十餘人。肉袒

漢紀 世祖光武皇帝上之下建武三年

降。上所得傳國璽綬，積兵甲宜陽城西，與熊耳山齊，赤眉衆尚十餘萬人。帝令縣厨皆賜食，明旦大陳兵馬，臨雒水，令盆子君臣列而觀之。帝謂樊崇等曰：「得無悔降乎？」朕今遣卿歸營，勒兵鳴鼓相攻，決其勝負，不欲疆相服也。徐宣等叩頭曰：「臣等出長安東都門，君臣計議，歸命聖德，百姓可與樂成，難與圖始，故不告衆耳。今日得降，猶去虎口，歸慈母，誠歡誠喜，無所恨也。」帝曰：「卿所謂鐵中錚錚，備中佼佼者也。」戊申，還自宜陽。帝令樊崇等各與妻子居雒陽，賜之田宅。其後樊崇逢安反，誅楊音、徐宣卒於鄉里。帝憐盆子以爲趙王郎中，後病失明，賜榮陽均輸官地，使食其稅終身。劉恭爲更始報仇，殺謝祿，自擊獄。帝赦不誅。○二月，劉永立董憲爲海西王，永聞伏隆至，劇亦遣使立張步爲齊王，步貪王爵，猶豫未決。隆曉譬曰：「高祖與天下約，非劉氏不王，今可得爲十萬戶侯耳。步欲留隆與共守二州，隆不聽，求得反命，步遂執隆，而受永封。隆遣間使上書曰：『臣隆奉使無狀，受執凶逆，雖在困阨，授命不顧，又吏民知步反畔，心不附之，願以時進兵，無以臣隆爲念。』臣隆得生到闕，廷受誅有司，此其大願。若令沒身寇手，以父母昆弟長累陛下，陛下與皇后、太子永享萬國，與天無極，帝得隆奏，召其父湛，流涕示之曰：『恨不且許，而遽求還也。』其後步遂殺之。帝方北憂漁陽，南事梁楚，故張步得專集齊地，據郡十二焉。」○帝幸懷○吳漢率耿弇，蓋延擊青犢於軹西，大破降之。○三月，壬寅，以司直伏湛爲大司徒。○涿郡太守張豐反，自稱無上大將軍，與彭寵連兵。朱浮以帝不自征，彭寵上疏求救，詔報曰：「往年赤眉跋扈，長安吾策其無穀，必東果來歸附，今度此反虜，救無久全，其中必有內相斬者。今軍資未充，故須後麥耳。浮城中糧盡，人相食，會耿況遣騎來救，浮乃得脫身走薊，城遂降於彭寵。寵自稱燕王，攻拔右北平上谷數縣，賂遺匈奴，借兵爲助。又南結張步及富平，獲索諸賊，皆與交通。」○帝自將征鄧奉，至堵陽，奉逃歸清陽，董訢降。夏四月，帝追奉至小長安，與戰，大破之，奉肉袒，因朱祐降。帝憐奉舊功臣，且覺起吳漢，

欲全宥之。岑彭耿弇諫曰：「鄧奉背恩反逆，暴師經年，陛下既至，不知悔善，而親在行陳，兵敗乃降，若不誅奉，無以懲惡，於是斬之。」復朱祐位。○延岑既破赤眉，卽拜置牧守，欲據關中，時關中衆寇猶盛。岑據藍田，王歆據下邳，芳丹據新豐，蔣震據霸陵，張邯據長安，公孫守據長陵，楊周據谷口，呂鮪據陳倉，角閔據汧，駱延據盩厔，任良據鄠，汝章據槐里，各稱將軍，擁兵多者萬餘人，少者數千人，轉相攻擊。馮異且戰且行，屯軍上林苑中。延岑引張邯、任良共攻異，異擊大破之。諸營保附岑者皆來降。岑遂自武關走南陽，時百姓饑餓，黃金一斤，易豆五升，道路斷隔，委輸不至。馮異軍士悉以果實爲糧，詔拜南陽趙匡爲右扶風，將兵助異，并送縑穀，異兵穀漸盛，乃稍誅擊豪傑不從令者，褒賞降附有功勞者，悉遣諸營渠帥詣京師，散其衆歸本業。威行關中，唯呂鮪、張邯、蔣震遣使降蜀，其餘悉平。○吳漢率驃騎大將軍杜茂等七將軍圍蘇茂於廣樂，周建招集得十餘萬人，救之，漢迎與之戰，不利，墮馬傷，郤還營，建等遂連兵入城，諸將謂漢曰：「大敵在前，而公傷臥，衆心懼矣。」漢乃勃然，裹創而起，椎牛饗士，慰勉之，士氣自倍。旦日，蘇茂、周建出兵圍漢，漢奮擊，大破之，茂走還湖陵，睢陽人反城迎劉永，蓋延率諸將圍之。吳漢留杜茂、陳俊守廣樂，自將兵助延圍睢陽。○車駕自小長安引還，令岑彭、傅俊、臧宮、劉宏等三萬餘人南擊秦豐。五月己酉，車駕還宮。○乙卯晦，日有食之。○六月壬戌，大赦。○延岑攻南陽，得數城，建威大將軍耿弇與戰于穰，大破之。岑與數騎走東陽，與秦豐合，豐以女妻之。建威大將軍朱祐率祭遵等與岑戰於東陽，破之。岑走歸秦豐，祐遂南與岑彭等軍合。延岑護軍鄧仲況擁兵據陰縣，而劉歆、孫冀爲其謀主。前侍中扶風蘇竟以書說之，仲況與冀降，竟終不伐其功，隱身樂道，壽終於家。秦豐拒岑彭於鄧，秋七月，彭擊破之，進圍豐於黎丘，別遣積弩將軍傅俊將兵徇江東，揚州悉定。○蓋延圍睢陽百日，劉永、蘇茂、周建突出，將走鄧，延追擊之急，永將慶吾斬永首降。蘇茂、周建犇垂惠，共立永子

紆爲梁王。佼彊犇保西防。○冬十月壬申，上幸春陵祠園廟，耿弇從容言於帝，自請北收上谷兵未發者，定彭寵於漁陽，取張豐於涿郡，還收富平，獲索東攻張步，以平齊地。帝壯其意，許之。○十一月乙未，帝還自春陵。○是歲李憲稱帝，置百官，擁九城，衆十餘萬。○帝謂太中大夫來歙曰：「今西州未附，子陽稱帝，道里阻遠，諸將方務關東，思西州方略未可知所在。」歙曰：「臣嘗與隗囂相遇，長安其人始起，以漢爲名，臣願得奉威命，開以丹青之信，囂必束手自歸。則述自亡之執不足圖也。」帝然之，始令歙使於囂。囂既有功於漢，又受鄧禹爵署，其腹心議者多勸通使京師。囂乃奉奏詣闕，帝報以殊禮，言稱字，用敵國之儀，所以慰藉之甚厚。四年正月甲申，大赦。○二月壬子，上行幸懷王申，還雒陽。○延岑復寇順陽，遣鄧禹將兵擊破之。岑犇漢中，公孫述以岑爲大司馬，封汝寧王。○田戎聞秦豐破，恐懼欲降，其妻兄辛臣圖以秦王之彊，猶爲征南所圍，吾降決矣，乃留辛臣使守夷陵，自將兵沿江沂沔，上黎丘，辛臣於後，盜戎珍寶，從間道先降于岑。彭而書招戎曰：「宜以時降，無拘前計。」戎疑臣賣己，灼龜卜降。兆中拆遂復反，與秦豐合，岑擊破之，戎亡歸夷陵。○夏四月丁巳，上行幸鄴，己巳幸臨平，遣吳漢、陳俊、王梁擊破五校於臨平，鬲縣五姓共逐守長，據城而反，諸將爭欲攻之。吳漢曰：「使鬲反者，守長罪也，敢輕冒進兵者，斬。」乃移檄告郡，使收守長，而使人謝城中五姓大喜，即相率降。諸將乃服曰：「不戰而下城，非衆所及也。」五月，上幸元氏，辛巳，幸盧奴，將親征彭寵，伏湛諫曰：「今兗豫青冀中國之都，而寇賊從橫，未及從化，漁陽邊外荒耗，豈足先圖陛下捨近務遠，棄易求難，誠臣之所惑也。」上乃還。○帝遣建義大將軍朱祐、建威大將軍耿弇、征虜將軍祭遵、驍騎將軍劉喜討張豐於涿郡，祭遵先至，急攻豐，禽之。初，豐好方術，有道士言豐當爲天子，以五綵囊裹石繫豐肘，云石中有玉，豐信之，遂反。既執，當斬，猶曰：「肘石有玉。」

璽傍人爲椎破之，豐乃知被詐，仰天歎曰：「當死無恨。」○上詔耿弇進擊彭寵，弇以父況與寵同功，又兄弟無在京師者，不敢獨進，求詣雒陽，詔報曰：「將軍舉宗爲國，功效尤著，何嫌何疑而欲求徵，況聞之，更遣弟國入侍，時祭遵屯良鄉，劉喜屯陽鄉，彭寵引匈奴兵欲擊之，耿況使其子舒襲破匈奴兵，斬兩王，寵乃退走。」○六月辛亥，車駕還宮。○秋七月丁亥，上幸譙，遣捕虜將軍馬武、騎都尉王霸、霸劉紆、周建於垂惠。○董憲將賁休以蘭陵降，憲聞之，自鄒圍之，蓋延及平狄將軍山陽龐萌在楚，請往救之，帝敕曰：「可直往，擣鄒，則蘭陵自解。」延等懼，遂出賁休城，危遂先赴之，憲逆戰而陽敗退，延等因拔圍入城，明日憲大出兵合圍，延等懼，遂出突走，因往攻鄒，帝讓之曰：「間欲先赴鄒者，以其不意故耳，今既犇走，賊計已立，圍豈可解乎？」延等至鄒，果不能克，而董憲遂拔蘭陵，殺賁休。○八月戊午，上幸壽春，遣揚武將軍南陽馬成、率誅虜將軍南陽劉隆等三將軍發會稽、丹陽、九江、六安四郡兵擊李憲，九月圍憲於舒。○王莽末天下亂，臨淮大尹河南侯霸獨能保全其郡，帝徵霸，會壽春，拜尚書令，時朝廷無典故，又少舊臣，霸明習故事，收錄遺文，條奏前世善政法度，施行之。○冬十月甲寅，車駕還宮。○隗囂使馬援往觀，公孫述援素與述同里閭，相善，以爲既至，當握手歡如平生，而述盛陳陛衛，以延援入，交拜禮畢，使出就館，更爲援制都布單衣，交讓冠，會百官於宗廟中，立舊交之位，述鸞旗旄騎警蹕就車，磬折而入，禮饗官屬甚盛，欲授援以封侯大將軍位，賓客皆樂留，援曉之曰：「天下雄雌未定，公孫不吐哺，走迎國士，與圖成敗，反修飾邊幅，如偶人形，此子何足久稽天下士乎？」因辭歸，謂囂曰：「子陽、井底蛙耳，而妄自尊大，不如專意東方，囂乃使援奉書雒陽，援初到，良久中黃門引入，帝在宣德殿南廡下，但幘坐迎，笑謂援曰：「卿遊遊二帝間，今見卿，使人大慙，援頓首辭謝，因曰：「當今之世，非但君擇臣，臣亦擇君矣。」臣與公孫述同縣，少相善，臣前至蜀，述陛戟而後進，臣今遠來，陛下何知非刺客姦人而簡易若是？」帝

復笑曰。卿非刺客。願說客耳。援曰。天下反覆。盜名字者。不可勝數。今見陛下。恢廓大度。同符高祖。乃知帝王自有真也。○太傅卓茂薨。○十一月。丙申。上行幸宛。岑彭攻秦豐。三歲。斬首九萬餘級。豐餘兵裁千人。食且盡。十二月。丙寅。帝幸黎丘。遣使招豐。豐不肯降。乃使朱祐等代岑彭圍黎丘。使岑彭傳俊南擊田戎。○公孫述聚兵數十萬人。積糧漢中。又造十層樓船。多刻天下牧守印章。遣將軍李育。程焉。將數萬衆。出屯陳倉。就呂鮪將徇三輔。馮異迎擊。大破之。育焉俱奔漢中。異還擊。破呂鮪營。保降者甚衆。是時。隗囂遣兵佐異。有功。遣使上狀。帝報以手書曰。慕樂德義。思相結納。昔文王三分。猶服事殷。但駑馬鉛刀。不可強扶。數蒙伯樂一顧之價。將軍南拒公孫之兵。北御羌胡之亂。是以馮異西征。得以數千百人。躑躅三輔。微將軍之助。則咸陽已爲他人禽矣。如令子陽到漢中。三輔願因將軍兵馬。鼓旗相當。儻肯如言。卽智士計功。割地之秋也。管仲曰。生我者父母。成我者鮑子。自今以後。手書相聞。勿用傍人間構之言。其後。公孫述數遣將間出。囂輒與馮異合勢。共摧挫之。述遣使以大司空扶安王印綬授囂。囂斬其使。出兵擊之。以故。蜀兵不復北出。○泰山豪傑。多與張步連兵。吳漢薦強弩大將軍陳俊爲泰山太守。擊破步兵。遂定泰山。

五年春正月癸巳。車駕還宮。○帝使來歙持節。送馬援歸隴右。隗囂與援共臥起。問以東方事。曰。前到朝廷。上引見數十。每接燕語。自夕至旦。才明勇略。非人敵也。且開心見誠。無所隱伏。闕達多大節。略與高帝同。經學博覽。政事文辯。前世無比。囂曰。卿謂何如。高帝援曰。不如也。高帝無不可。今上好吏事。動如節度。又不喜飲酒。囂意不懌。曰。如卿言。反復勝邪。○二月丙午。大赦。○蘇茂將五校兵。救周建於垂惠。馬武爲茂建所敗。奔過王霸營。大呼求救。霸曰。賊兵盛。出必兩敗。努力而已。乃閉營堅壁。軍吏皆爭之。霸曰。茂兵精銳。其衆又多。吾吏士心恐。而捕虜與吾相恃。兩軍不一。此敗道也。今閉營固守。示不相援。賊必乘勝輕進。捕虜

無救。其戰自倍。如此。茂衆疲勞。吾承其敝。乃可克也。茂建果悉出攻武。合戰良久。霸軍中壯士數十人。斷髮請戰。霸乃開營後。出精騎襲其背。茂建前後受敵。驚亂敗走。霸武各歸營。茂建復聚兵。挑戰。霸堅臥不出。方饗士。作倡樂。茂雨射營中。中霸前酒樽。霸安坐不動。軍吏皆曰。茂前日已破。今易擊也。霸曰。不然。蘇茂客兵遠來。糧食不足。故數挑戰。以徼一時之勝。今閉營休士。所謂不戰而屈人兵者也。茂建既不得戰。乃引還營。其夜。周建兄子誦反。閉城拒之。建於道死。茂奔下邳。與董憲合。劉紆奔佼彊。○乙丑。上行幸魏郡。○彭寵妻數爲惡夢。又多見怪變。卜筮望氣者。皆言兵當從中起。寵以子后蘭卿質漢歸。不信之。使將兵居外。無親於中。寵齋在便室。蒼頭子密等三人。因寵臥寐。共縛著牀。告外吏云。大王齋禁。皆使吏休。僞稱寵命。收縛奴婢。各置一處。又以寵命呼其妻。妻入驚曰。奴反。奴乃摔其頭。擊其頰。寵急呼曰。趣爲諸將軍辦裝。於是兩奴將妻入取寶物。留一奴守寵。寵謂守奴曰。若小兒。吾素所愛也。今爲子密所迫劫耳。解我縛。當以女珠妻汝。家中財物。皆以與若。小奴意欲解之。視戶外見子密聽其語。遂不敢解。於是收金玉衣物。至寵所裝之。被馬六匹。使妻縫兩縑囊。昏夜後解寵手。令作記。告城門將軍云。今遣子密等。至子后蘭卿所。勿稽留之。書成。斬寵及妻頭。置囊中。便持記。馳出城。因以詣闕。明旦。閣門不開。官屬踰牆而入。見寵尸。驚怖。其尙書韓立等共立寵子午爲王。國師韓利。斬午首。詣祭壇降。夷其宗族。帝封子密爲不義侯。權德輿議曰。伯通之叛命。子密之戕君。同歸于亂。罪不相蔽。宜各致於法。昭示王度。反乃爵于五等。又以不義爲名。且舉以不義。莫可侯也。此而可侯。漢爵爲不足勸矣。春秋書齊豹盜。三叛人名之。義無乃異於此乎。

師賜甲第奉朝請封平侯。○吳漢率耿弇王常擊富平獲索賊于平原大破之追討餘黨至勃海降者四萬餘人上因詔弇進討張步。○平敵將軍龐萌為人遜順帝信愛之常稱曰可以託六尺之孤寄百里之命者龐萌是也使與蓋延共擊董憲時詔書獨下延而不及萌萌以為延譖己自疑遂反襲延軍破之與董憲連和自號東平王屯桃鄉之北帝聞之大怒自將討萌與諸將書曰吾常以龐萌為社稷之臣將軍得無笑其言乎老賊當族其各厲兵馬會睢陽龐萌攻破彭城將殺楚郡太守孫萌郡吏劉平伏太守身上號泣請代其死身被七創龐萌義而捨之太守已絕復蘇渴求飲平傾創血以飲之。○岑彭攻拔夷陵田戎亡入蜀盡獲其妻子士衆數萬人公孫述以戎為翼江王岑彭謀伐蜀以夾川穀少水險難漕留威虜將軍馮駿軍江州都尉田鴻軍夷陵領軍李玄軍夷道自引兵還屯津鄉當荊州要會喻告諸蠻夷降者奏封其君長。○夏四月旱蝗。○隗囂問於班彪曰往者周亡戰國竝爭數世然後定意者從橫之事將復起于今乎將承運迭興在于一人也彪曰周之廢興與漢殊異昔周爵五等諸侯從政本根既微枝葉彊大故其末流有從橫之事執數然也漢承秦制改立郡縣主有專己之威臣無百年之柄至于成帝假借外家哀平短祚國嗣三絕故王氏擅朝能竊號位危自上起傷不及下是以即真之後天下莫不引領而歎十餘年間中外騷擾遠近俱發假號雲合咸稱劉氏不謀同辭方今雄桀帶州域者皆無六國世業之資而百姓謳吟思仰漢必復興已可知矣囂曰生言周漢之執可也至于但見愚民習識劉氏姓號之故而謂漢復興疎矣昔秦失其鹿劉季逐而拊之時民復知漢乎彪乃為之著王命論以風切之曰昔堯之禪舜曰天之歷數在爾躬舜亦以命禹洎于稷契咸佐唐虞至湯武而有天下劉氏承堯之禪堯據火德而漢紹之有赤帝子之符故為鬼神所福饗天下所歸往由是言之未見運世無本功德不紀而得屈起在此位者也俗見高祖與子布衣達其故不至比天

下於逐鹿幸捷而得之不知神器有命不可以智力求也悲夫此世所以多亂臣賊子者也夫餓饑流隸飢寒道路所願不過一金然終轉死溝壑何則貧窮亦有命也況乎天子之貴四海之富神明之祚可得而妄處哉故雖遭權阬會竊其權柄勇如信布彊如梁籍成如王莽然卒潤饒伏質亨醢分裂又況么麼尙不及數子而欲闢奸天位者乎昔陳嬰之母以嬰家世貧賤卒富貴不祥止嬰勿王王陵之母知漢王必得天下伏劍而死以固勉陵夫以匹婦之明猶能推事理之致探禍福之機而全宗祀於無窮垂策書於春秋而況大丈夫之事乎是故窮達有命吉凶由人嬰母知廢陵母知興審此二者帝王之分決矣加之高祖寬明而仁恕知人善任使當食吐哺納子房之策拔足揮洗揖酈生之說舉韓信於行陳收陳平於亡命英雄陳力羣策畢舉此高祖之大略所以成帝業也若乃靈瑞符應其事甚衆故淮陰留侯謂之天授非人力也英雄誠知覺寤超然遠覽淵然深識收陵嬰之明分絕信布之覬覦距逐鹿之瞽說審神器之有授母貪不可冀為二母之所笑則福祚流于子孫天祿其永終矣豈不聽彪遂避地河西寶融以為從事甚禮重之彪遂為融畫策使之專意事漢焉。○初寶融等聞帝威德心欲東向以河西隔遠未能自通乃從隗囂受建武正朔囂皆假其將軍印綬置外順人望內懷異心使辯士張玄說融等曰更始事已成尋復亡滅此一姓不再興之效也今即有所主便相係屬一旦拘制自令失柄後有危敗雖悔無及方今豪桀競逐雌雄未決當各據土宇與隴蜀合從高可為六國下不失尉佗融等召豪桀議之其中識者皆曰今皇帝姓名見於圖書自前世博物道術之士谷子雲夏賀良等皆言漢有再受命之符故劉子駿改易名字冀應其占及莽末西門君惠謀立子駿事覺被殺出謂觀者曰識文不誤劉秀真汝主也此皆近事暴著衆所共見者也況今稱帝者數人而雒陽土地最廣甲兵最強號令最明觀符命而察人事它姓殆未能當也衆議或同或異融遂決策東向遣

長史劉鈞等奉書詣雒陽。先是帝亦發使遣融書以招之。遇鈞於道，即與俱還。帝見鈞，歡甚。禮饗畢，乃遣令還。賜融璽書曰：今益州有公孫子陽，天水有隗將軍，方蜀漢相攻，權在將軍。舉足左右，便有輕重。以此言之，欲相厚，豈有量哉？欲遂立桓文，輔微國，當勉卒功業。欲三分鼎足，連衡合從，亦宜以時定。天下未并，吾與爾絕域，非相吞之國。今之議者，必有任囂、教尉佗、制七郡之計。王者有分土，無分民，自適己事而已。因授融為涼州牧，璽書至，河西、河東皆驚。以為天子明見萬里之外。○朱祐急攻黎丘。六月，秦豐窮困，出降。輜車送雒陽。吳漢劾祐廢詔命，受豐降，上誅豐，不罪祐。○董憲與劉紆、蘇茂、佼彊去，下邳還。蘭陵使茂、彊助龐萌圍桃城。帝時幸蒙，聞之，乃留輜重，自將輕兵晨夜馳赴。至亢父，或言百官疲倦，可且止宿。上不聽。復行十里，宿任城。去桃城六十里。旦日，諸將請進。龐萌等亦勒兵挑戰。帝令諸將不得出。休士養銳，以挫其鋒。時吳漢等在東郡，馳使召之。萌等驚曰：數百里晨夜行，以為至當戰，而堅坐任城，致人城下，真不可往也。乃悉兵攻桃城。城中聞車駕至，衆心益固。萌等攻二十餘日，衆疲困，不能下。吳漢、王常、蓋延、王梁、馬武、王霸等皆至。帝乃率衆軍進救桃城。親自搏戰，大破之。龐萌、蘇茂、佼彊夜走從董憲。秋七月丁丑，帝幸沛，進幸湖陵。董憲與劉紆悉其兵數萬人屯昌慮，憲招誘五校餘賊與之拒守建陽。帝至，奮去憲所百餘里。諸將請進，帝不聽。知五校乏食，當退，敕各堅壁以待其敵。頃之，五校果引去。帝乃親臨四面攻憲。三日，大破之。佼彊將其衆降。蘇茂、張步、憲及龐萌走保鄒。八月己酉，帝幸鄒，留吳漢攻之。車駕轉徇彭城。下邳吳漢拔鄒，董憲龐萌走保胸。紆不知所歸。其軍士高扈斬之以降。吳漢進圍胸。○冬十月，帝幸魯。○張步聞耿弇將至，使其大將軍費邑軍歷下。又令兵屯祝阿，別於泰山鍾城。列營數十以待之。弇渡河，先擊祝阿。自旦攻城，日未中而拔之。故開圍一角，令其衆得奔歸。鍾城、鍾城人聞祝阿已潰，大恐懼，遂空壁亡去。費邑分遣弟敢守巨里，弇進兵先脅巨里。嚴

令軍中趣修攻具，宣敕諸部。後三日，當悉力攻巨里城。陰緩生口，令得亡歸。以弇期告邑。邑至日，果自將精兵三萬餘人來救之。弇喜，謂諸將曰：吾所以修攻具者，欲誘致之耳。野兵不擊，何以城為？即分三千人守巨里，自引精兵上岡阪，乘高合戰，大破之。臨陳斬邑。既而收首級，以示城中。城中兇懼，費敢悉衆亡歸。張步、弇復收其積聚，縱兵擊諸未下者，平四十餘營。遂定濟南。時張步都劇，使其弟藍將精兵二萬守西安。諸郡太守合萬餘人守臨菑，相去四十里。弇進軍畫中，居二城之間。弇視西安城小而堅，且藍兵又精。臨菑名雖大而實易攻。乃敕諸校後五日會攻西安。藍聞之，晨夜警守。至期夜半，弇敕諸將皆蓐食，會明至臨菑城。護軍荀梁等爭之，以為攻臨菑，西安必救之。攻西安，臨菑不能救。不如攻西安。弇曰：不然。西安聞吾欲攻之，日夜為備。方自憂何暇救人。臨菑出不意而至，必驚擾。吾攻之一日，必拔。拔臨菑，即西安孤，與劇隔絕，必復亡去。所謂擊一而得二者也。若先攻西安，不能卒下，頓兵堅城，死傷必多。縱能拔之，藍引軍還奔臨菑，并兵合執，觀人虛實，吾深入敵地，後無轉輸。旬月之間，不戰而困矣。遂攻臨菑。半日拔之。入據其城。張藍聞之懼，遂將其衆亡歸劇。弇乃令軍中無得虜掠。須張步至，乃取之。以激怒步。步聞大笑曰：以尤來大形師十餘萬衆，吾皆即其營而破之。今大耿兵少於彼，又皆疲勞，何足懼乎？乃與三弟藍、弘、壽及故大形渠帥重異等兵號二十萬，至臨菑大城東，將攻弇。弇上書曰：臣據臨菑，深塹高壘，張步從劇縣來攻，疲勞飢渴，欲進誘而攻之。欲去隨而擊之。臣依營而戰，精銳百倍，以逸待勞，以實擊虛。旬日之間，步首可獲。於是弇先出淄水上，與重異遇，突騎欲縱，弇恐挫其鋒，令步不敢進。故示弱，以盛其氣。乃引歸小城。陳兵于內，使都尉劉歆、泰山太守陳俊分陳于城下。步氣盛，直攻弇營。與劉歆等合戰。弇升王宮壞臺望之，視歆等鋒交，乃自引精兵以橫突步。陳于東城下。大破之。飛矢中弇股，以佩刀截之。左右無知者。至暮罷，弇明旦復勒兵出。是時帝在魯，聞弇為步所攻，

自往救之。未至。陳俊謂弇曰：劇虜兵盛，可且閉營休士，以須上來。弇曰：乘輿且到，臣子當擊牛醞酒以待百官。反欲以賊虜遺君父邪？乃出兵大戰，自旦及昏，復大破之，殺傷無數，溝塹皆滿。弇知步困，將退。豫置左右翼為伏以待之。人定時，步果引去。伏公起縱擊，追至鉅昧水上。八九十里，僵尸相屬，收得輜重二千餘兩。步還劇，兄弟各分兵散去。後數日，車駕至臨菑，自勞軍。羣臣大會，帝謂弇曰：昔韓信破歷下以開基，今將軍攻祝阿以發迹，此皆齊之西界，功足相方。而韓信襲擊已降，將軍獨拔勅敵，其功又難於信也。又田橫亨鄒生，及田橫降，高帝詔衛尉不聽為仇。張步前亦殺伏隆，若步來歸命，吾當詔大司徒釋其怨。又事尤相類也。將軍前在南陽，建此大策，常以為落落難合，有志者事竟成也。帝進幸劇，耿弇復追張步，步犇平壽。蘇茂將萬餘人來救之，茂讓步曰：以南陽兵精，延岑善戰，而耿弇走之，大王奈何就攻其營？既呼茂，不能待邪？步曰：負負，無可言者。帝遣使告步，茂能相斬降者，封為列侯。步遂斬茂，請耿弇軍門肉袒降。弇傳詣行在所，而勒兵入據其城。樹十二郡旗鼓，令步兵各以郡人詣旗下。衆尚十餘萬，輜重七千餘兩，皆罷遣歸鄉里。張步三弟各自繫所在，詔皆赦之。封步為安丘侯，與妻子居雒陽。於是琅邪未平，上徙陳俊為琅邪太守，始入境，盜賊皆散。耿弇復引兵至城陽，降五校餘黨，齊地悉平。振旅還京師，弇為將，凡所平郡四十六，屠城三百，未嘗挫折焉。○初起太學，車駕還宮，幸太學，稽式古典，修明禮樂，煥然文物可觀矣。○十一月，大司徒伏湛免，以侯霸為大司徒。霸聞太原閔仲叔之名而辟之，既至，霸不及政事，徒勞苦而已。仲叔恨曰：始蒙嘉命，且喜且懼。今見明公，喜懼皆去，以仲叔為不足問邪？不當辟也。辟而不問，是失人也。遂辭出，投劾而去。○初，五原人李興隨昱朔方人，田颯代郡人，石鮪閔瑛，各起兵，自稱將軍。匈奴單于遣使與興等和親，欲令盧芳還漢地為帝，興等引兵至單于庭，迎芳。十二月，興俱入塞，都九原縣，掠有五原、朔方、雲中、定襄、鴈門五郡，並置守令，與胡兵

侵苦北邊。○馮異治關中，出入三歲，上林成都，人有上章言異威權至重，百姓歸心，號為威陽王。帝以章示異，異惶懼，上書陳謝，詔報曰：將軍之於國家，義為君臣，猶父子，何嫌何疑而有懼意？○隗囂矜己飾智，每自比西伯，與諸將議，欲稱王。鄭興曰：昔文王三分天下有其二，尚服事殷。武王八百諸侯不謀同會，猶還兵待時。高祖征伐累年，猶以沛公行師，今令德雖明，世無宗周之祚，威略雖振，未有高祖之功，而欲舉未可之事，昭速禍患，無乃不可乎？囂乃止。後又廣置職位，以自尊高。鄭興曰：夫中郎將、太中大夫，使持節、節官，皆王者之器，非人臣所當制也。無益於實，有損於名，非尊上之意也。囂病之而止。時關中將帥數上書言蜀可擊之狀，帝以書示囂，因使擊蜀，以效其信。囂上書盛言三輔單弱，劉文伯在邊，未宜謀蜀。帝知囂欲持兩端，不願天下統一。於是稍黜其禮，正君臣之儀。帝以囂與馬援來款，相善，數使款援奉使往來，勸令入朝。許以重爵，囂連遣使深持謙辭，言無功德，須四方平定，退伏閭里。帝復遣來款說囂，遣子入侍。囂聞劉永、彭寵皆已破滅，乃遣長子恂詣闕。帝以為胡騎校尉，封鐃羌侯。鄭興因恂求歸葬父母，囂不聽。而徙興舍，益其秩禮，興入見曰：今為父母未葬，乞骸骨，若以增秩徙舍，中更停留，是以親為餌也。無禮甚矣。將軍焉用之？願留妻子，獨歸葬。將軍又何猜焉？囂乃令與妻子俱東。馬援亦將家屬隨恂歸雒陽，以所將賓客猥多，求屯田上林苑中。帝許之。囂將王元以為天下成敗未可知，不願專心內事，說囂曰：昔更始西都，四方響應，天下喁喁，謂之太平。一旦壞敗，將軍幾無所厝。今南有子陽，北有文伯，江湖海岱，王公十數，而欲牽儒生之說，棄千乘之基，羈旅危國，以求萬全，此循覆車之軌者也。今天水完富，士馬最彊，元請以一丸泥為大王東封函谷關，此萬世一時也。若計不及此，且畜養士馬，據隘自守，曠日持久，以待四方之變，圖王不成，其敝猶足以霸要之。魚不可脫于淵，神龍失執，與蚯蚓同。囂心然元計。雖遣子入質，猶負其險阨，欲專制方面。申屠剛諫曰：愚聞人所歸

者。天所與。人所畔者。天所去也。本朝誠天之所福。非人力也。今璽書數到。委國歸信。欲與將軍共同吉凶。布衣相與。尚有沒身不負。然諾之信。況於萬乘者哉。今何畏何利。而久疑若是。卒有非常之變。上負忠孝。下愧當世。夫未至豫言。固常爲虛。及其已至。又無所及。是以忠言至諫。希得爲用。誠願反覆。愚老之言。豈不納。於是游士長者。稍稍去之。○王莽末。交趾諸郡閉境自守。岑彭素與交趾牧鄧讓厚善。與讓書。陳國家威德。又遣偏將軍屈充。移檄江南。班行詔命。於是讓與江夏太守侯登。武陵太守王堂。長沙相韓福。桂陽太守張隆。零陵太守田翁。蒼梧太守杜穆。交趾太守錫光等。相率遣使貢獻。悉封爲列侯。錫光者。漢中人在交趾。教民夷。以禮義。帝復以宛人任延爲九真太守。延教民耕種嫁娶。故嶺南華風。始于二守焉。○是歲。詔徵處士太原周黨。會稽嚴光等。至京師。黨入見。伏而不謁。自陳願守所志。博士范升奏曰。伏見太原周黨。東海王良。山陽王成等。蒙受厚恩。使者三聘。乃肯就車。及陛見。帝廷黨不以禮屈。伏而不謁。偃蹇驕悍。同時俱逝。黨等文不能演義。武不能死君。釣采華名。庶幾三公之位。臣願與坐雲臺之下。考試圖國之道。不如臣言。伏虛妄之罪。而敢私竊虛名。誇上求高。皆大不敬。書奏。詔曰。自古明王聖主。必有不賓之士。伯夷。叔齊。不食周粟。太原周黨。不受朕祿。亦各有志焉。其賜帛四十匹。罷之。帝少與嚴光同遊學。及卽位。以物色訪之。得于齊國。累徵乃至。拜諫議大夫。不肯受。去耕釣於富春山中。以壽終於家。王良。後歷沛郡太守。大司徒司直。在位恭儉。布被瓦器。妻子不入官舍。後以病歸。一歲復徵。至滎陽。疾篤。不任進道。過其友人。友人不肯見。曰。不有忠言奇謀。而取大位。何其往來屑屑不憚煩也。遂拒之。良慙。自後。連徵不應。卒于家。○元帝之世。莎車王延。嘗爲侍子。京師慕樂中國。及王莽之亂。匈奴略有西域。唯延不肯附屬。常救諸子。當世奉漢家。不可負也。延卒。子康立。康率旁國。拒匈奴擁衛故都。護吏士妻子千餘口。檄書河西。問中國動靜。竇融乃承制。立康爲漢莎車建功懷德。

王西域大都尉五十五國皆屬焉。

資治通鑑卷第四十一

漢紀 世祖光武皇帝上之下建武五年

資治通鑑卷第四十二

漢紀三十四

世祖光武皇帝中之上

建武六年春正月丙辰以春陵鄉爲章陵縣世世復徭役比豐沛○吳漢等拔胸斬董憲隴
 萌江淮山東悉平諸將還京師置酒賞賜帝積苦兵間以隗囂遣子內侍公孫述遠據邊垂乃
 謂諸將曰且當置此兩子於度外耳因休諸將於雒陽分軍士於河內數騰書隴蜀告示禍
 福公孫述屢移書中國自陳符命冀以惑衆帝與述書曰圖讖言公孫即宣帝也代漢者姓
 當塗其名高君豈高之身邪乃復以掌文爲瑞王莽何足效乎君非吾賊臣亂子倉卒時人
 皆欲爲君事耳君日月已逝妻子弱小當早爲定計天下神器不可力爭宜留三思署曰公
 孫皇帝述不答其騎都尉平陵荆邯說述曰漢高祖起於行陳之中兵破身困者數矣然軍
 敗復合瘡愈復戰何則前死而成功愈於卻就於滅亡也隗囂遭遇運會割有雍州兵彊士
 附威加山東遇更始政亂復失天下衆庶引領四方瓦解囂不及此時推危乘勝以爭天命
 而退欲爲西伯之事尊師章句賓友處士偃武息戈卑辭事漢喟然自以文王復出也令漢
 帝釋關隴之憂專精東伐四分天下而有其三發間使召馮異使西州豪桀咸居心於山東
 則五分而有其四若舉兵天水必至沮潰天水既定則九分而有其八陛下以梁州之地內
 奉萬乘外給三軍百姓愁困不堪上命將有王氏自潰之變矣臣之愚計以爲宜及天下之
 望未絕豪桀尙可招誘急以此時發國內精兵令田戎據江陵臨江南之會倚巫山之固築

壘堅守傳檄吳楚長沙以南必隨風而靡令延岑出漢中定三輔天水隴西拱手自服如此
 海內震搖冀有大利述以問羣臣博士吳柱曰武王伐殷八百諸侯不期同辭然猶還師以
 待天命未聞無左右之助而欲出師千里之外者也邯曰今東帝無尺土之柄驅烏合之衆
 跨馬陷敵所向輒平不亟乘時與之分功而坐談武王之說是復效隗囂欲爲西伯也述然
 邯言欲悉發北軍屯士及山東客兵使延岑田戎分出兩道與漢中諸將合兵并執蜀人及
 其弟光以爲不宜空國千里之外決成敗於一舉固爭之述乃止延岑田戎亦數請兵立功
 述終疑不聽唯公孫氏得任事述廢銅錢置鐵錢貨幣不行百姓苦之爲政苛細察於小事
 如爲清水令時而已好改易郡縣官名少嘗爲郎習漢家故事出入法駕鸞旗旄騎又立其
 兩子爲王食糠爲廣漢各數縣或諫曰成敗未可知戎士暴露而先王愛子示無大志也述
 不從由此大臣皆怨○馮異自長安入朝帝謂公卿曰是我起兵時主簿也爲吾披荆棘定
 關中既罷賜珍寶錢帛詔曰倉卒蕪蕪享豆粥噉沱河麥飯厚意久不報異稽首謝曰臣聞
 管仲謂桓公曰願君無忘射鉤臣無忘檻車齊國賴之臣今亦願國家無忘河北之難小臣
 不敢忘巾車之恩留十餘日令與妻子還西○申屠剛杜林自隗囂所來帝皆拜侍御史以
 鄭興爲太中大夫○三月公孫述使田戎出江關招其故衆欲以取荊州不克帝乃詔隗囂
 欲從天水伐蜀囂上言白水險阻棧閣敗絕述性嚴酷上下相患須其罪惡執著而攻之此
 大呼響應之執也帝知其終不爲用乃謀討之○夏四月丙子上行幸長安謁園陵遣耿弇
 蓋延等七將軍從隴道伐蜀先使中郎將來歙奉璽書賜囂諭旨囂復多設疑故事久允豫
 不決歙遂發憤責囂曰國家以君知臧否曉廢興故以手書暢意足下推忠誠既遣伯春
 委質而反欲用佞惑之言爲族滅之計邪因欲前刺囂囂起入部勒兵將殺歙歙徐杖節就
 車而去囂使牛邯將兵圍守之囂將王遵諫曰君叔雖單車遠使而陛下之外兄也殺之無

損於漢而隨以族滅。昔宋執楚使，遂有析骸易子之禍。小國猶不可辱，況於萬乘之主，重以伯春之命哉！歎爲人，有信義，言行不違，及往來游說，皆可按覆。西州士大夫，皆信重之，多爲其言，故得免而東歸。○五月己未，車駕至自長安。○隗囂遂發兵反，使王元據隴坻，伐木塞道，諸將因與囂戰，大敗，各引兵下隴。囂追之急，馬武選精騎爲後拒，殺數千人。諸軍乃得還。○六月辛卯，詔曰：夫張官置吏，所以爲民也。今百姓遭難，戶口耗少，而縣官吏職，所置尙繁，其令司隸州牧，各實所部，省減吏員。縣國不足，置長吏者，并之。於是并省四百餘縣，吏職減損，十置其一。○九月丙寅晦，日有食之。執金吾朱浮上疏曰：昔堯舜之盛，猶加三考，大漢之興，亦累功效，吏皆積久，至長子孫。當時吏職，何能悉治，論議之徒，豈不喧譁，蓋以爲天地之功，不可倉卒，艱難之業，當累日也。而間者守宰，數見換易，迎新相代，疲勞道路，尋其視事日淺，未足昭見其職，既加嚴切，人不自保，迫於舉劾，懼於刺譏，故爭飾詐僞，以希虛譽。斯所以致日月失行之應也。夫物暴長者必夭折，功卒成者必亟壞，如摧長久之業，而造速成之功，非陛下之福也。願陛下遊意於經年之外，望治於一世之後。天下幸甚。帝采其言，自是牧守代易頗簡。○十二月壬辰，大司空宋弘免。○癸巳，詔曰：頃者師旅未解，用度不足，故行十一之稅，今糧儲差積，其令郡國收見田租三十稅一，如舊制。○諸將之下隴也，帝詔耿弇、漆、馮異軍，拘邑祭遵軍，泝吳漢等還屯長安。馮異引軍未至，拘邑、隗囂乘勝使王元、行巡將二萬餘人下隴，分遣巡取拘邑，異即馳兵欲先據之。諸將曰：虜兵盛而乘勝，不可與爭鋒，宜止軍便地。徐思方略，異曰：虜兵臨境，怛小利，遂欲深入，若得拘邑，三輔動搖，夫攻者不足，守者有餘，今先據城，以逸待勞，非所以爭也。潛往閉城，偃旗鼓，行巡不知，馳赴之，異乘其不意，卒擊鼓建旗而出，巡軍驚亂奔走，追擊大破之。祭遵亦破王元於泝，於是北地諸豪長耿定等悉畔隗囂降，詔異進軍義渠，擊破盧芳將賈覽、匈奴奧鞬，日逐王、北地、上郡安定皆降。○

竇融復遣其弟友，上書曰：臣幸得託先后末屬，累世二千石，臣復假歷將帥，守持一隅，故遣劉鈞、口陳肝膽，自以底裏上露，長無纖介，而璽書盛稱蜀漢二主三分鼎足之權，任囂尉佗之謀，竊自痛傷，臣融雖無識，猶知利害之際，順逆之分，豈可背真舊之主，事姦僞之人，廢忠貞之節，爲傾覆之事，棄已成之基，求無冀之利，此三者雖問狂夫，猶知去就，而臣獨何以用心，謹遣弟友詣闕，口陳至誠，友至高平，會隗囂反，道不通，乃遣司馬席封，間道通書，帝復遣封，賜融友書，所以尉藉之甚厚，融乃與隗囂書曰：將軍親遇厄會之際，國家不利之時，守節不回，承事本朝，融等所以欣服高義，願從役於將軍者，良爲此也。而忿悁之間，改節易圖，委成功，造難就，百年累之，一朝毀之，豈不惜乎？殆執事者貪功建謀，以至於此。當今西州地勢局迫，民兵離散，易以輔人，難以自建，計若失路不反，聞道猶迷，不南合子陽，則北入文伯耳，夫負虛交而易疆禦，恃遠救而輕近敵，未見其利也。自兵起以來，城郭皆爲丘墟，生民轉於溝壑，幸賴天運少還，而將軍復重其難，是使積痼不得遂瘳，幼孤將復流離，言之可爲酸鼻，庸人且猶不忍，況仁者乎？融聞爲忠甚易，得宜實難，憂人太過，以德取怨，知且以言獲罪也。囂不納，融乃與五郡太守共砥厲兵馬，上疏請師期，帝深嘉美之。融即與諸郡守將兵入金城，擊囂黨，先零羌封何等，大破之。因並河揚威武，伺候車駕，時大兵未進，融乃引還。帝以融信效著明，益嘉之，脩理融父墳墓，祠以太牢，數馳輕使，致遺四方珍羞，梁統猶恐衆心疑惑，乃使人刺殺張玄，遂與隗囂絕，皆解將軍印綬。先是，馬援聞隗囂欲貳於漢，數以書責譬之，囂得書，增怒，及囂發兵反，援乃上書曰：臣與隗囂本實交友，初遣臣東，謂臣曰：本欲爲漢，願足下往觀之。於汝意可，卽專心矣。及臣還，反報以赤心，實欲導之於善，非敢譎以非義，而囂自挾姦心，盜憎主人，怨毒之情，遂歸於臣。臣欲不言，則無以上聞，願聽詣行在所，極陳滅囂之術。帝乃召之，援具言謀畫，帝因使援將突騎五千往來游說，囂將高峻任禹之屬，下

及羌豪爲陳禍福以離羣支黨援又爲書與羣將楊廣使曉勸於羣曰援竊見四海已定兆民同情而季孟閉拒背畔爲天下表的常懼海內切齒思相屠裂故遣書戀戀以致惻隱之計乃聞季孟歸罪於援而納王游翁諂邪之說因自謂函谷以西舉足可定以今而觀竟何如邪援問至河內過存伯春見其奴吉從西方還說伯春小弟仲舒望見吉欲問伯春無它否竟不能言曉夕號泣又說其家悲愁之狀不可言也夫怨讎可刺不可毀援謂之不自知泣下也援素知季孟孝愛曾閔不過夫孝於其親豈不慈於其子可有子抱三木而跳梁妄作自同分羹之事乎季孟平生自言所以擁兵衆者欲以保全父母之國而完墳墓也又言苟厚士大夫而已而今所欲全者將破亡之所欲完者將傷毀之所欲厚者將反薄之季孟嘗折愧子陽而不受其爵今更共陸陸往附之將難爲顏乎若復責以重質當安從得子主給是哉往時子陽獨欲以王相待而春卿意深宜使牛孺卿與諸耆老大人共說季孟若計併肩側身於怨家之朝乎今國家待春卿意深宜使牛孺卿與諸耆老大人共說季孟若計畫不從真可引領去矣前披輿地圖見天下郡國百有六所奈何欲以區區二邦以當諸夏百有四乎春卿事季孟外有君臣之義內有朋友之道言君臣邪固當諫爭語朋友邪應有切磋豈有知其無成而但萎腰咋舌又手從族矣及今成計殊尚善也過是欲少味矣且來君叔天下信士朝廷重之其意依依常獨爲西州言援商朝廷尤欲立信於此必不負約援不得久留願急賜報廣竟不答諸將每有疑議更請呼援咸敬重焉隗囂上疏謝曰吏民間大兵卒至驚恐自救臣雖不能禁止兵有大利不敢廢臣子之節親自追還昔虞舜事父大杖則走小杖則受臣雖不敏敢忘斯義今臣之事在於本朝賜死則死加刑則刑如更得洗心死骨不朽有司以羣言慢請誅其子帝不忍復使來欵至汧賜羣書曰昔柴將軍云陛下寬仁諸侯雖有亡叛而後歸輒復位號不誅也今若束手復遣恂弟歸闕庭者則爵祿獲全

有浩大之福矣吾年垂四十在兵中十歲厭浮語虛辭即不欲勿報羣知帝審其詐遂遣使稱臣於公孫述○匈奴與盧芳爲寇不息帝令歸德侯颯使匈奴以脩舊好單于驕倨雖遣使報命而寇暴如故

七年春三月罷郡國輕車騎士材官令還復民伍○公孫述立隗囂爲朔寧王遣兵往來爲之援執○癸亥晦日有食之詔百僚各上封事其上書者不得言聖太中大夫鄭興上疏曰夫國無善政則謫見日月要在因人之心擇人處位今公卿大夫多舉漁陽太守郭伋可大司空者而不以時定道路流言咸曰朝廷欲用功臣功臣用則人位謬矣願陛下屈己從衆以濟羣臣讓善之功頃年日食多在晦先時而合皆月行疾也日君象而月臣象君亢急而臣下促迫故月行疾今陛下高明而羣臣惶促宜留思柔克之政垂意洪範之法帝躬勤政事頗傷嚴急故興奏及之○夏四月壬午大赦○五月戊戌以前將軍李通爲大司空○大司農江馮上言宜令司隸校尉督察三公司空掾陳元上疏曰臣聞師臣者帝賓臣者霸故武王以太公爲師齊桓以夷吾爲仲父近則高帝優相國之禮太宗假宰相之權及亡新王莽遭漢中衰專操國柄以偷天下況已自喻不信羣臣奪公輔之任損宰相之威以刺舉爲明激訐爲直至乃陪僕告其君長子弟變其父兄罔密法峻大臣無所措手足然不能禁董忠之謀身爲世戮方今四方尚擾天下未一百姓觀聽咸張耳目陛下宜修文武之聖典襲祖宗之遺德勞心下士屈節待賢誠不宜使有司察公輔之名帝從之○酒泉太守竺曾以弟報怨殺人自免去郡竇融承制拜曾武鋒將軍更以辛彤爲酒泉太守○秋隗囂將步騎三萬侵安定至陰槃馮異率諸將拒之囂又令別將下隴攻祭遵於汧竝無利而還帝將自征隗囂先戒竇融師期會遇雨道斷且囂兵已退乃止帝令來欵以書招王遵遵來降拜太中大夫封向義侯○冬盧芳以事誅其五原太守李興兄弟其朔方太守田颯雲中太守喬扈

各舉郡降。帝令領職如故。○帝好圖讖，與鄭興議郊祀事，曰：「吾欲以讖斷之，何如？」對曰：「臣不為讖，帝怒曰：『卿不為讖，非之邪？』興惶恐曰：『臣於書有所未學，而無所非也。』帝意乃解。○南陽太守杜詩，政治清平，興利除害，百姓便之。又修治陂池，廣拓土田，郡內比室殷足。時人方於召信臣、南陽為之語，曰：『前有召父，後有杜母。』

八年春，來歙將二千餘人伐山開道，從番須回中徑襲略陽，斬隗囂守將金梁。囂大驚曰：「何其神也。」帝聞得畧陽甚喜，曰：「略陽，囂所依阻，心腹已壞，則制其支體易矣。」吳漢等諸將聞歙據略陽，爭馳赴之，上以為囂失所恃，亡其要城，執必悉以精銳來攻。曠日久圍，而城不拔。士卒頓敝，乃可乘危而進，皆追漢等還。隗囂果使王元拒隴坻，行巡守，番須口王孟塞雞頭道，牛邯軍瓦亭。囂自悉其大眾數萬人圍略陽，公孫述遣將李育田弇助之，斬山築堤，激水灌城。來歙與將士固死堅守，矢盡，發屋斷木，以為兵。囂盡銳攻之，累月不能下。夏，閏四月，帝自將征隗囂。光祿勳汝南郭憲諫曰：「東方初定，車駕未可遠征，乃當車拔佩刀以斷車鞅，帝不從。西至漆，諸將多以王師之重不宜遠入險阻，計尤豫未決。帝召馬援問之，援因說隗囂將帥有土崩之執，兵進有必破之狀。又於帝前聚米為山谷，指畫形勢，開示衆軍所從道徑，往來分析，照然可曉。帝曰：『虜在吾目中矣。』明旦遂進軍，至高平第一。竇融率五郡太守及羌虜小月氏等步騎數萬，輜重五千餘兩，與大軍會。是時軍旅草創，諸將朝會，禮容多不肅。融先遣從事問會見儀適，帝聞而善之，以宣告百僚，乃置酒高會，待融等以殊禮。遂共進軍，數道上隴，使王遵以書招牛邯下之，拜邯太中大夫。於是囂大將十三人屬縣十六衆十餘萬皆降。囂將妻子奔西城，從楊廣而田弇李育保上邽。略陽圍解，帝勞賜來歙班坐絕席，在諸將之右，賜歙妻縑千匹，進幸上邽。詔告隗囂曰：「若束手自詣，父子相見，保無他也。若遂欲為隸布者，亦自任也。」囂終不降，於是誅其子恂，使吳漢岑彭圍西城。耿弇蓋延圍上邽，以四縣封

竇融為安豐侯，弟友為顯親侯，及五郡太守皆封列侯。遣西還所鎮，融以入事方面，懼不自安，數上書求代。詔報曰：「吾與將軍如左右手耳，數執謙退，何不曉人意，勉循士民，無擅離部曲。潁川盜賊羣起，寇沒屬縣，河東守兵亦叛，京師騷動，帝聞之曰：『吾悔不用郭子橫之言。』秋八月，帝自上邽晨夜東馳，賜岑彭等書曰：『兩城若下，便可將兵南擊蜀虜，人苦不知足，既平隴復望蜀，每一發兵，頭須為白。』九月乙卯，車駕還宮，帝謂執金吾寇恂曰：『潁川迫近京師，當以時定，惟念獨卿能平之耳。』從九卿復出，以憂國可也。對曰：『潁川聞陛下有事隴蜀，故狂狡乘間，相誣誤耳。如聞乘輿南向，賊必惶怖歸死。』臣願執銳前驅，帝從之。庚申，車駕南征，潁川盜賊悉降。寇恂竟不拜郡，百姓遮道曰：『願從陛下。』復借寇君一年，乃留恂長社，鎮撫吏民，受納餘降。東郡濟陰盜賊亦起，帝遣李通王常擊之，以東光侯耿純營為東郡太守，威信著於衛地。遣使拜太中大夫，使與大兵會東郡。東郡聞純入界，盜賊九千餘人皆詣純降。大兵不戰而還。璽書復以純為東郡太守，戊寅，車駕還自潁川。○安丘侯張步將妻子逃奔臨淮，弟與弘藍欲招其故衆乘船入海，琅邪太守陳俊追討斬之。○冬十月丙午，上行幸懷。十一月乙丑，還雒陽。○楊廣死，隗囂窮困，其大將王捷別在戎丘登城呼漢軍曰：『為隗王城守者皆必死，無二心。願諸軍亟罷，請自殺以明之。』遂自刎死。初，帝敕吳漢曰：『諸郡甲卒但坐費糧食，若有逃亡，則沮敗衆心，宜悉罷之。』漢等貪并力攻囂，遂不能遣糧食，日少，吏士疲役，逃亡者多。岑彭壅谷水灌西城，城未沒，丈餘。會王元行巡，周宗將蜀救兵五千餘人乘高卒至，鼓譟大呼曰：『百萬之衆方至，漢軍大驚，未及成。』陳元等決圍殊死戰，遂得入城，迎囂歸冀。吳漢軍食盡，乃燒輜重，引兵下隴，蓋延耿弇亦相隨而退。囂出兵尾擊諸營，岑彭為後拒，諸將乃得全軍東歸。唯祭遵屯汧不退，吳漢等復屯長安。岑彭還津鄉，於是安定北地天水隴西復反，為囂校尉太原溫序為囂將苟宇所獲，宇曉譬數四，欲降之，序大怒，叱宇等曰：『虜何敢迫脅漢』

將因以節搃殺數人。宇衆爭欲殺之。宇止之曰：「此義士死節，可賜以劍，序受劍，銜須於口。」顧左右曰：「既爲賊所殺，無令須汗土。」遂伏劍而死。從事王忠持其喪歸雒陽，詔賜以冢地，拜三子爲郎。○十二月，高句麗王遣使朝貢，帝復其王號，是歲大水。九年春正月，潁陽成侯祭遵薨於軍，詔馮異并將其營，遵爲人廉約小心，克己奉公，賞賜盡與士卒，約束嚴整，所在吏民不知有軍，取士皆用儒術，對酒設樂，必雅歌投壺，臨終遺戒，薄葬，問以家事終無所言，帝愍悼之尤甚，遵喪至，河南車駕素服臨之，望哭哀慟，還幸城門，閱過喪車，涕泣不能已，喪禮成，復親祠以太牢，詔大長秋謁者河南尹護喪事，大司農給費，至葬，車駕復臨之，既葬，又臨其墳，存見夫人室家，其後朝會，帝每歎曰：「安得憂國奉公如祭遵者乎？」衛尉銚期曰：「陛下至仁，哀念祭遵不已，羣臣各懷慚懼，帝乃止。」○隗囂病且餓，餐糗糲，悲憤而卒。王元、周宗立囂少子純爲王，總兵據冀，公孫述遣將趙匡田弇助純，帝使馮異擊之。○公孫述遣其翼江王田戎、大司徒任滿、南郡太守程汎將數萬人下江關，擊破馮駿等軍，遂拔巫及夷道、夷陵，因據荆門、虎牙、橫江水，起浮橋關樓，立欂柱以絕水道，結營跨山，以塞陸路，拒漢兵。夏六月丙戌，帝幸緱氏，登轅轅，○吳漢率王常等四將軍兵五萬餘人擊盧芳將賈覽，闕堪於高柳，匈奴救之，漢軍不利，於是匈奴轉盛，鈔暴日增，詔朱祐屯常山，王常屯涿郡，破姦將軍侯進屯漁陽，以討虜將軍王霸爲上谷太守，以備匈奴。○帝使來歙悉監護諸將屯長安，太中大夫馬援爲之副，歙上書曰：「公孫述以隴西天水爲藩蔽，故得延命假息，今二郡平蕩，則述智計窮矣，宜益選兵馬，儲積資糧，今西州新破，兵人疲饑，若招以財穀，則其衆可集，臣知國家所給非一，用度不足，然有不得已也，帝然之，於是詔於汧積穀六萬斛，秋八月來歙率馮異等五將軍討隗純於天水。○驃騎將軍杜茂與賈覽戰於繁時，茂軍敗績。○諸羌自王莽末入居塞內，金城屬縣多爲所有，隗囂不能討，因就慰納發其衆。

與漢相拒，司徒掾班彪上言：「今涼州部皆有降羌，羌胡被髮左衽，而與漢人雜處，習俗既異，言語不通，數爲小吏黠民所見，侵奪窮乏，無聊，故致反叛，夫蠻夷寇亂，皆爲此也。」舊制益州部置蠻夷騎都尉，幽州部置領烏桓校尉，涼州部置護羌校尉，皆持節領護，治其怨結，歲時巡行，問所疾苦，又數遣使譯，通導動靜，使塞外羌夷爲吏耳目，州郡因此可得警備，今宜復如舊，以明威防，帝從之。以牛邯爲護羌校尉。○盜殺陰貴人母鄧氏及弟訢，帝甚傷之，封貴人弟就爲宣恩侯，復召就兄侍中興，欲封之，置印綬於前，興固讓曰：「臣未有先登陷陳之功，而一家數人竝蒙爵土，令天下歆望，誠所不願，帝嘉之，不奪其志，貴人問其故，興曰：「夫外戚家苦不知謙退，嫁女欲配侯王，取婦盼視公主，愚心實不安也，富貴有極，人當知足，夸奢益爲觀聽所譏，貴人感其言，深自降挹，卒不爲宗親求位。」○帝召寇恂還，以漁陽太守郭伋爲潁川太守，伋招降山賊趙宏，召吳等數百人，皆遣歸附農，因自劾，專命，帝不以咎之，後宏吳等黨與聞伋威信，遠自江南或從幽冀，不期俱降，駱驛不絕。○莎車王康卒，弟賢立，攻殺拘彌西夜王，而使康兩子王之。十年春正月，吳漢復率捕虜將軍王霸等四將軍六萬人出高柳，擊賈覽，匈奴數千騎救之，連戰於平城下，破走之。○夏，陽節侯馮異等與趙匡田弇戰，且一年皆斬之，隗純未下，諸將欲且還休兵，異固持不動，共攻落門，未拔，夏，異薨於軍。○秋八月己亥，上幸長安。○初，隗囂將安定高峻擁兵據高平第一，建威大將軍耿弇等圍之，一歲不拔，帝自將征之，寇恂諫曰：「長安道里居中，應接近便，安定隴西，必懷震懼，此從容一處，可以制四方也，今士馬疲倦，方履險阻，非萬乘之固也，前年潁川可爲至戒，帝不從，進幸汧，峻猶不下，帝遣寇恂往降之，恂奉璽書至第一，峻遣軍師皇甫文出文謁，辭禮不屈，恂怒，將誅之，諸將諫曰：「高峻精兵萬人，率多彊弩，西遮隴道，連年不下，今欲降之，而反戮其使，無乃不可乎？」恂不應，遂斬之，遣其副歸。

告峻曰：軍師無禮，已戮之矣。欲降急降，不欲固守。峻惶恐，即日開城門降。諸將皆賀，因曰：「敢問殺其使而降其城，何也？」峻曰：「皇甫文，峻之腹心，其所取計者也。今來辭意不順，必無降心。全之則文得其計，殺之亡其膽，是以降耳。」諸將皆曰：「非所及也。」○冬十月，來歙與諸將攻破落門。周宗行巡，苟宇、趙恢等將隗純降。王元犇蜀，徙諸隗於京師。以東後，隗純與賓客亡入胡，至武威，捕得誅之。○先零羌與諸種寇金城隴西，來歙率蓋延等進擊，大破之，斬首虜數千人。於是開倉廩以賑飢乏。隴右遂安。而涼州流通焉。○庚寅，車駕還宮。

十一年春三月己酉，帝幸南陽，還幸章陵。庚午，車駕還宮。○岑彭屯津鄉，數攻田戎等，不克。帝遣吳漢、率誅虜將軍劉隆等三將發荊州兵，凡六萬餘人，騎五千匹，與彭會荊門。彭裝戰船數千艘，吳漢以諸郡棹卒多費糧穀，欲罷之。彭以為蜀兵盛，不可遣，上書言狀。帝報彭曰：「大司馬習用步騎，不曉水戰，荊門之事，一由征南公為重而已。閏月，岑彭令軍中募攻浮橋，先登者上賞。於是偏將軍魯奇應募而前，時東風狂急，魯奇船逆流而上，直衝浮橋，而橫柱有反把鉤，奇船不得去，奇等乘執，殊死戰，因飛炬焚之，風怒火盛，橋樓崩燒。岑彭悉軍順風竝進，所向無前。蜀兵大亂，溺死者數千人，斬任滿，生獲程汎，而田戎走保江州。彭上劉隆為南郡太守，自率輔威將軍臧宮、驍騎將軍劉歆、長驅入江關，令軍中無得虜掠。所過百姓皆奉牛酒迎勞，彭復讓不受。百姓大喜，爭開門降。詔彭守益州牧，所下郡輒行太守事。彭若出界，即以太守號。付後將軍選官屬守州中長吏。彭到江州，以其城固糧多，難卒拔，留馮駿守之，自引兵乘利直指墊江，攻破平曲，收其米數十萬石。吳漢留夷陵裝露橈，繼進。○夏，先零羌寇臨洮，來歙薦馬援為隴西太守，擊先零羌，大破之。○公孫述以王元為將軍，使與領軍環安拒河池。六月，來歙與蓋延等進攻元安，大破之，遂克下辨。乘勝遂進，蜀人大懼，使刺客刺歙，未殊，馳召蓋延。延見歙，因伏悲哀，不能仰視。歙叱延曰：「虎牙何敢然！今使者中刺客，無

以報國，故呼巨卿，欲相屬以軍事，而反效兒女子涕泣乎！刃雖在身，不能動兵，斬公邪！延收淚強起，受所誡。歙自書表曰：「臣夜人定後，為何人所賊傷，中臣要害，臣不敢自惜，誠恨奉職不稱，以為朝廷羞。夫理國，以得賢為本。太中大夫段襄，骨鯁可任，願陛下裁察。又臣兄弟不肖，終恐被罪，陛下哀憐，數賜教督，投筆抽刃而絕。帝聞大驚，省書攬涕，以揚武將軍馬成守中郎將代之。歙喪還洛陽，乘輿縞素，臨弔送葬。趙王良從，帝送歙喪，還入夏城門，與中郎將張邯爭道，叱邯旋車。又詰責門候，使前走數十步。司隸校尉鮑永劾奏良無藩臣禮，大不敬。良尊戚貴重，而永劾之，朝廷肅然。永辟扶風鮑恢為都官從事，恢亦抗直，不避疆禦。帝嘗曰：「貴戚且斂手，以避二鮑。」永行縣，到霸陵，路經更始墓下，拜哭盡哀而去。西至扶風，椎牛上荀諫冢，帝聞之，意不平。問公卿曰：「奉使如此，何如？」太中大夫張湛對曰：「仁者行之宗，忠者義之主也。仁不遺舊，忠不忘君，行之高者也。帝意乃釋。○帝自將征公孫述。秋七月，次長安。○公孫述使其將延岑、呂鮪、王元、公孫恢、悉兵拒廣漢。及資中，又遣將侯丹率二萬餘人，拒黃石。岑彭使臧宮將降卒五萬從涪水，上平曲，拒延岑。自分兵浮江下，還江州，泝都江而上，襲擊侯丹，大破之。因晨夜倍道，兼行二千餘里，徑拔武陽，使精騎馳擊廣都，去成都數十里。執若風雨所至，皆犇散。初，述聞漢兵在平曲，故遣大兵逆之。及彭至武陽，繞出延岑軍後，蜀地震駭，述大驚，以杖擊地曰：「是何神也！」延岑盛兵於沅水，臧宮衆多，食少，轉輸不至，降者皆欲散畔。郡邑復更保聚，觀望成敗。宮欲引還，恐為所反。會帝遣謁者將兵詣岑，彭有馬七百匹，宮矯制，取以自益。晨夜進兵，多張旗幟，登山鼓譟，右步左騎，挾船而引，呼聲動山谷。岑不意，漢軍卒至，登山望之，大震恐。宮因縱擊，大破之，斬首溺死者萬餘人。水為之濁。延岑犇成都，其衆悉降。盡獲其兵馬珍寶，自是乘勝追北，降者以十萬數。軍至陽鄉，王元舉衆降。帝與公孫述書，陳言禍福，示以丹青之信。述省書太息，以示所親。太常常少光祿勳張隆皆勸述降。述

曰廢與命也。豈有降天子哉。左右莫敢復言。少隆皆以憂死。○帝還自長安。○冬十月。公孫述使刺客詐爲亡奴。降岑彭。夜刺殺彭。太中大夫監軍鄒興領其營。以俟吳漢至。而授之。彭持軍整齊。秋。豪無犯。邛穀王任貴聞彭威信。數千里遣使迎降。會彭已被害。帝盡以任貴所獻賜彭妻子。蜀人爲立廟祠之。○馬成等破河池。遂平武都。先零諸種羌數萬人屯聚寇鈔。拒浩亶隘。成與馬援深入討擊。大破之。徙降羌置天水。隴西。扶風。是時朝臣以金城破羌之西塗遠多寇。議欲棄之。馬援上言。破羌以西城多堅牢。易可依固。其田土肥壤。灌溉流通。如令羌在湟中。則爲害不休。不可棄也。帝從之。民歸者三千餘口。援爲置長吏。繕城郭。起塢候。開溝洫。勸以耕牧。郡中樂業。又招撫塞外氐羌。皆來降附。援奏復其侯王君長。帝悉從之。乃罷馬成軍。○十二月。吳漢自夷陵將三萬人。泝江而上。伐公孫述。○郭伋爲并州牧。過京師。帝問以得失。伋曰。選補衆職。當簡天下賢俊。不宜專用南陽人。是時在位多鄉曲故舊。故伋言及之。

資治通鑑卷第四十二

資治通鑑卷第四十三

漢紀三十五

世祖光武皇帝中之下

建武十二年春正月。吳漢破公孫述將魏黨公孫永於魚涪津。遂圍武陽。述遣子婿史興救之。漢迎擊破之。因入犍爲界。諸縣皆城守。詔漢直取廣都。據其心腹。漢乃進軍。攻廣都。拔之。遣輕騎燒成都市橋。公孫述將帥恐懼。日夜離叛。述雖誅滅其家。猶不能禁。帝必欲降之。又下詔諭述曰。勿以來歛岑彭受害自疑。今以時自詣。則宗族完全。詔書手記。不可數得。述終無降意。○秋七月。馮駿拔江州。獲田戎。○帝戒吳漢曰。成都十餘萬衆。不可輕也。但堅據廣都。待其來攻。勿與爭鋒。若不敢來。公轉營迫之。須其力疲。乃可擊也。漢乘利。遂自將步騎二萬。進逼成都。去城十餘里。阻江北營。作浮橋。使副將武威將軍劉尚將萬餘人屯於江南。爲營。相去二十餘里。帝聞之大驚。讓漢曰。比敕公千條萬端。何意臨事勃亂。既輕敵深入。又與尚別營。事有緩急。不復相及。賊若出兵綴公。以大衆攻尚。尚破公即敗矣。幸無它者。急引兵還廣都。詔書未到。九月。述果使其大司徒謝豐執金吾袁吉將衆十許萬。分爲二十餘營。出攻漢。使別將將萬餘人劫劉尚。令不得相救。漢與大戰一日。兵敗。走入壁。豐因圍之。漢乃召諸將厲之曰。吾與諸君踰越險阻。轉戰千里。遂深入敵地。至其城下。而今與劉尚二處受圍。執既不接。其禍難量。欲潛師就尚於江南。并兵禦之。若能同心一力。人自爲戰。大功可立。如其不然。敗必無餘。成敗之機在此一舉。諸將皆曰。諾。於是饗士秣馬。閉營三日不出。乃多樹旛

旗使煙火不絕。夜銜枚引兵，與劉尚合軍。豐等不覺，明日乃分兵拒水北，自將攻江南。漢悉兵迎戰，自旦至晡，遂大破之，斬豐吉。於是引還廣都，留劉尚拒述，具以狀上。而深自譴責，帝報曰：公還廣都，甚得其宜。述必不敢略，尚而擊公也。若先攻尚，公從廣都五十里，悉步騎赴之，適當值其危困，破之必矣。自是漢與述戰於廣都成都之間，八戰八克。遂軍于其郭中，臧宮拔繇竹，破涪城，斬公孫恢，復攻繁郫，與吳漢會於成都。○李通欲避權，執乞骸骨，積二歲，帝乃聽。上大司空印綬，以特進奉朝請。後有司奏封皇子，帝感通首創大謀，即日封通少子雄為召陵侯。○公孫述困急，謂延岑曰：事當奈何？岑曰：男兒當死中求生，可坐窮乎？財物易聚耳，不宜有愛。述乃悉散金帛，募敢死士五千餘人，以配岑。岑於市橋僞建旗幟，鳴鼓挑戰，而潛遣奇兵出。吳漢軍後，襲擊破漢，漢墮水，緣馬尾得出。漢軍餘七日糧，陰具船欲遁去。蜀郡太守南陽張堪聞之，馳往見漢，說述必敗，不宜退師之策。漢從之，乃示弱以挑敵。冬，十一月，臧宮軍咸陽門，戊寅，述自將數萬人攻漢，使延岑拒宮。大戰，岑三合三勝，自旦及日中，軍士不得食，竝疲。漢因使護軍高午、唐邯將銳卒數萬擊之，述兵大亂。高午犇陳刺述，洞胷墮馬。左右與入城，述以兵屬延岑。其夜死，明日延岑以城降。辛巳，吳漢夷述妻子，盡滅公孫氏并族。延岑遂放兵大掠，焚述宮室，帝聞之，怒以譴漢。又讓劉尚曰：城降三日，吏民從服，孩兒老母，口以萬數，一旦放兵縱火，聞之可為酸鼻。尚宗室子孫，嘗更吏職，何忍行此！仰視天俯視地，觀放鹿啜羹，二者孰仁？良失斬將弔民之義也。初，述徵廣漢李業為博士，業固稱疾不起，述羞不能致，使大鴻臚尹融奉詔命以劫業。若起則受公侯之位，不起則賜以毒酒。融譬旨曰：方今天下分崩，孰知是非，而以區區之身試於不測之淵乎？朝廷貪慕名德，曠官缺位，于今七年，四時珍御，不以忘君，宜上奉知己，下為子孫，身名俱全，不亦優乎？業乃歎曰：古人危邦不入，亂邦不居，為此故也。君子見危授命，何乃誘以高位重餌哉！融曰：宜呼室家計之。

業曰：丈夫斷之於心久矣，何妻子之為？遂飲毒而死。述恥有殺賢之名，遣使弔，賜贈百匹，業子輦逃，辭不受。述又聘巴郡譙玄，玄不詣，亦遣使者以毒藥劫之。太守自詣玄，慮勸之行。玄曰：保志全高，死亦奚恨？遂受毒藥。玄子瑛泣血叩頭於太守，願奉家錢千萬以贖父死。太守為請，述許之。述又徵蜀郡王皓，王皓先自刎，以首付使者。述怒，遂誅皓家屬。王嘉聞而嘆曰：後對曰：大馬猶識主，況於人乎？王皓先自刎，以首付使者。述怒，遂誅皓家屬。王嘉聞而嘆曰：後之哉！乃對使者伏劍而死。韃為費貽，不肯仕。述漆身為癩，陽狂以避之。同郡任永、馮信皆託青盲以辭徵命。帝既平蜀，詔贈常少為太常，張隆為光祿勳。譙玄已卒，祠以中牢。勅所在還其家錢，而表李業之閭，徵費貽。任永、馮信會永信病卒，獨貽仕。至合浦太守，上以述將程焉，李育有才幹，皆擢用之。於是西土咸悅，莫不歸心焉。初，王莽以廣漢文齊為益州太守，訓齊農治兵，降集羣夷，甚得其和。公孫述時，齊固守拒險，述拘其妻子，許以封侯，齊不降。聞上即位，間道遣使自聞。蜀平，徵為鎮遠將軍，封成義侯。○十二月辛卯，揚武將軍馬成行大司空事。○是歲，參狼羌與諸種寇武都，隴西太守馬援擊破之，降者萬餘人。於是隴右清靜，援務開恩信，寬以待下。任吏以職，但總大體，而賓客故人日滿其門，諸曹時白外事，援輒曰：此丞掾之任，何足相煩？頗哀老子，使得遨遊。若大姓侵小民，黠吏不從令，此乃太守事耳。傍縣嘗有報讐者，吏民驚言，羌反，百姓奔入城。狄道長詣門請閉城發兵，援時與賓客飲，大笑曰：虜何敢復犯我？曉狄道長歸守寺舍，良怖急者，可牀下伏。後稍定，郡中服之。○詔邊吏力不足戰，則守，追虜料敵，不拘以逗留法。○山桑節侯王常，卒，平烈侯耿況，東光成侯耿純，皆薨。況疾病，乘輿數自臨，幸復以弇弟廣舉，竝為中郎將，弇兄弟六人皆垂青紫。省侍醫藥，當世以為榮。○盧芳與匈奴烏桓連兵數寇邊，帝遣驃騎大將軍杜茂等將兵鎮守北邊，治飛狐道，築亭障，修烽燧，凡與匈奴烏桓大小數十百戰，終不能克。○上詔寶融與五郡太守入朝，融

等奉詔而行。官屬賓客相隨。駕乘千餘兩。馬牛羊被野。既至。詣城門。上印綬。詔遣使者。還侯
印綬。引見賞賜。恩寵傾動京師。尋拜融冀州牧。又以梁統為太中大夫。姑臧長孔奮為武都
郡丞。姑臧在河西。最為富饒。天下未定。士多不脩檢操。居縣者不盈數月。輒致豐積。奮在職
四年。力行清潔。為衆人所笑。以為身處脂膏。不能自潤。及從融入朝。諸守令財貨連載。彌竟
川澤。唯奮無資。單車就路。帝以是賞之。○以睢陽令任延為武威太守。帝親見。戒之曰。善事
上官。無失名譽。延對曰。臣聞忠臣不和。和臣不忠。履正奉公。臣子之節。上下雷同。非陛下之
福。善事上官。臣不敢奉詔。帝歎息曰。卿言是也。

十三年春正月庚申。大司徒侯霸薨。○戊子。詔曰。郡國獻異味。其令太官勿復受。遠方口實。
所以薦宗廟。自如舊制。時異國有獻名馬者。日行千里。又進寶劍。價直百金。詔以劍賜騎士。
馬駕鼓車。上雅不喜聽音樂。手不持珠玉。嘗出獵。車駕夜還。上東門侯汝南鄧暉拒關不開。
上令從者見。面於門問。暉曰。火明遠遠。遂不受詔。上乃回。從東中門入。明日。暉上書諫曰。昔
文王不敢繫于遊田。以萬民惟正之供。而陛下遠獵山林。夜以繼晝。其如社稷宗廟何。書奏。
賜暉布百匹。貶東中門侯。為參封尉。○二月。遣捕虜將軍馬武屯滹沱河。以備匈奴。○盧芳
攻雲中。久不下。其將隨昱留守九原。欲脅芳來降。芳知之。與十餘騎亡入匈奴。其衆盡歸隨
昱。昱乃詣闕降。詔拜昱五原太守。封鑄胡侯。○朱祐奏。古者人臣受封。不加王爵。丙辰。詔長
沙王興。真定王得。河間王邵。中山王茂。皆降爵為侯。丁巳。以趙王良為趙公。太原王章為齊
公。魯王興為魯公。是時宗室及絕國封侯者。凡一百三十七人。富平侯張純。安世之四世孫
也。歷王莽世。以敦謹守約。保全前封。建武初。先來詣闕。為侯如故。於是。有司奏。列侯非宗室。
不宜復國。上曰。張純宿衛十有餘年。其勿廢。更封武始侯。食富平之半。○戊午。以紹嘉公孔
安為宋公。承休公姬常為衛公。○三月辛未。以沛郡太守韓歆為大司徒。○丙子。行大司空

馬成復為揚武將軍。○吳漢自蜀振旅而還。至宛。詔過家上。家賜穀二萬斛。夏四月。至京師。
於是大饗將士。功臣增邑更封。凡三百六十五人。其外戚恩澤封者四十五人。定封鄧禹為
高密侯。食四縣。李通為固始侯。賈復為膠東侯。食六縣。餘各有差。已歿者。益封其子孫。或更
封支庶。帝在兵間。厭武事。且知天下疲耗。思樂息肩。自隴蜀平後。非警急。未嘗復言軍旅。
皇太子嘗問攻戰之事。帝曰。昔衛靈公問陳。孔子不對。此非爾所及。鄧禹復知帝偃干戈。
修文德。不欲功臣擁衆京師。乃去甲兵。敦儒學。帝亦思念。欲完功臣爵土。不令以吏職為過。
遂罷左右將軍官。耿弇等亦上大將軍將軍印綬。皆以列侯就第。加位特進。奉朝請。鄧禹內
行淳備。有子十三人。各使守一藝。修整閨門。教養子孫。皆可以為後世法。資用國邑。不修產
利。賈復為人剛毅。方直。多大節。既還私第。闔門養威重。朱祐等薦復。宜為宰相。帝方以吏事
責三公。故功臣竝不用。是時列侯唯高密固始膠東三侯。與公卿參議國家大事。恩遇甚厚。
帝雖制御功臣。而每能回容。宥其小失。遠方貢珍。必先徧賜諸侯。而太官無餘。故皆保其
福祿。無誅譴者。○益州傳。送公孫述警師。郊廟樂器。葆車輿輦。於是法物始備。時兵革既息。
天下少事。文書調役。務從簡寡。至乃十存一焉。○甲寅。以冀州牧竇融為大司空。融自以非
舊臣。一旦入朝。在功臣之右。每朝會。進見。容貌辭氣。卑恭已甚。帝以此愈親厚之。融小心。久
不自安。數辭爵位。上疏曰。臣融有子。朝夕教導。以連城廣土。享故諸侯王國。因復請問。求見。帝
事。恂恂守道。不願其有才能。何況乃當傳以連城廣土。享故諸侯王國哉。因復請問。求見。帝
不許。後朝罷。遂巡席後。帝知欲有讓。遂使左右傳出。它日會見。迎詔。融曰。日者。知公欲讓。職
還土。故命公。暑熱且自便。今相見。宜論它事。勿得復言。融不敢重陳。請。○五月。匈奴寇河東。
十四年夏。邛穀王任貴遣使。上三年計。即授越嵩太守。○秋。會稽大疫。○莎車王賢。鄯善王
安。皆遣使奉獻。西域苦匈奴重斂。皆願屬漢。復置都護。上以中國新定。不許。○太中大夫梁

統上疏曰。臣竊見元帝初元五年。輕殊死刑三十四事。哀帝建平元年。輕殊死刑八十一事。其四十二事。手殺人者。減死一等。自是之後。著為常準。故人輕犯法。吏易殺人。臣聞立君之道。仁義為主。仁者愛人。義者正理。愛人以除殘。為務。正理以去亂。為心。刑罰在衷。無取於輕。高帝受命。約令定律。誠得其宜。文帝唯除省肉刑相坐之法。自餘皆率由舊章。至哀平繼體。即位。日淺。聽斷尚寡。丞相王嘉。輕為穿鑿。虧除先帝舊約成律。數年之間。百有餘事。或不便於理。或不厭民心。謹表其尤害於體者。傳奏於左。願陛下宣詔有司。詳擇其善。定不易之典。事下公卿。光祿勳杜林。奏曰。大漢初興。蠲除苛政。海內歡欣。及至其後。漸以滋章。果桃李茹之饋。集以成賊。小事無妨於義。以為大戮。至於法不能禁。令不能止。上下相遁。為敝彌深。臣愚以為宜如舊制。不合翻移。統復上言曰。臣之所奏。非曰嚴刑。經曰。爰制百姓。于刑之衷。衷之為言。不輕不重之謂也。自高祖至于孝宣。海內稱治。至初元建平。而盜賊浸多。皆刑罰不衷。愚人易犯之所致也。由此觀之。則刑輕之作。反生大患。惠加姦軌。而害及良善也。事寢不報。

十五年春。正月。辛丑。大司徒韓歆免。歆好直言。無隱諱。帝每不能容。歆於上前。證歲將饑。凶指天畫地。言甚剛切。故坐免歸田里。帝猶不釋。復遣使宣詔責之。歆及子嬰。皆自殺。歆素有重名。死非其罪。衆多不厭。帝乃追賜錢穀。以成禮葬之。

臣光曰。昔高宗命說曰。若藥弗瞑眩。厥疾弗瘳。夫切直之言。非人臣之利。乃國家之福也。是以人君。日夜求之。唯懼弗得。聞惜乎。以光武之世。而韓歆用直諫死。豈不為仁明之累哉。

丁未。有星孛於昴。○以汝南太守歐陽歆為大司徒。○匈奴寇鈔日盛。州郡不能禁。二月。遣吳漢。率馬成。馬武等。北擊匈奴。徙雁門代郡。上谷吏民六萬餘口。置居庸常山關。以東。以避

胡寇。匈奴左部。遂復轉居塞內。朝廷患之。增緣邊兵。部數千人。○夏。四月。丁巳。封皇子輔為右翊公。英為楚公。陽為東海公。康為濟南公。蒼為東平公。延為淮陽公。荆為山陽公。衡為臨淮公。焉為左翊公。京為琅邪公。癸丑。追諡兄續為齊武公。兄仲為魯哀公。帝感續功業不就。撫育二子。章與恩愛甚篤。以其少貴。欲令親吏事。使章試守平陰令。與緱氏令。其後。章遷梁郡太守。與遷弘農太守。○帝以天下墾田。多不以實自占。又戶口年紀。互有增減。乃詔下州郡。檢覈。於是刺史太守。多為詐巧。苟以度田為名。聚民田中。并度廬屋里落。民遮道啼呼。或優饒豪右。侵刻羸弱。時諸郡各遣使奏事。帝見陳留吏牘。上有書視之。云。潁川弘農可問。河南南陽不可問。帝詰吏。吏不肯服。抵言。於長壽街上得之。帝怒。時東海公陽。年十二。在幄後。言曰。吏受郡敕。當欲以墾田相方耳。帝曰。即如此。何故言河南南陽不可問。對曰。河南帝城。多近臣。南陽帝鄉。多近親。田宅踰制。不可為準。帝令虎賁將。詰問吏。吏乃實首服。如東海公對。上由是益奇愛陽。遣謁者。考實二千石長吏。阿枉不平者。冬。十一月。甲戌。大司徒歆坐前為汝南太守。度田不實。贓罪千餘萬。下獄。歆世授尚書。八世為博士。諸生守闕。為歆求哀者千餘人。至有自髡剔者。平原禮震。年十七。求代歆死。帝竟不赦。歆死獄中。○十二月。庚午。以關內侯戴涉為大司徒。○盧芳自匈奴復入居高柳。○是歲。驃騎大將軍杜茂。坐使軍吏殺人。免。使揚武將軍馬成。代茂繕治障塞。十里一候。以備匈奴。使騎都尉張堪。領杜茂營。擊破匈奴於高柳。拜堪漁陽太守。堪視事八年。匈奴不敢犯塞。勸民耕稼。以致殷富。百姓歌曰。桑無附枝。麥秀兩岐。張君為政。樂不可支。○安平侯蓋延薨。○交趾麓冷縣雒將女子徵側。甚雄勇。交趾太守蘇定。以法繩之。徵側忿怨。十六年春。二月。徵側與其妹徵貳反。九真日南合浦蠻俚。皆應之。凡略六十五城。自立為王。都麓冷。交趾刺史及諸太守。僅得自守。○三月。辛丑晦。日有食之。○秋。九月。河南尹張伋及